

白狼の舞

大空飛男

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

人里では妖怪退治の専門家が住んでいる。彼等は里を愛し、守り、自らの使命を果たしてきた。

だが、彼らの利用価値は失われつつあった。無類の強さを誇る幻想郷最強と言われた博麗の巫女。その正当なる後継者が現れたのだ。

それから五年。人里で一昔に名を響かせた専門家の一人、松木聡士郎は仕事にありつけず、何のために剣を振るうのか、分からなくなっていた。

そんな時、聡士郎は妖怪の山にできた神社の事を知る。そこには「軍神」が祀ってあると聞き、山に向かう事にしたがその途中、黒装束を着た白狼天狗に襲われたのだった。

東方projectの二次創作です。

※シリーズの時系列は風神録後。霊夢の出現は紅魔郷が始まりとします。旧作は修行中と言うわけです。

※完結作品ではありませんが、H27 6/1に番外編を投稿しました。そのため、一時的に連載中にしました。

評価の方もありがとうございます。

皆様の評価、お気に入り、感想は心の支えです。

目次

天狗の社会	1
出会い	18
権現村	35
文屋、射命丸文。	46
成敗	60
動きだす黒雲	74
侵入者	88
白鞘の白狼	104
靈魂修行	120
渦巻く思惑	138
鎖鎌の陰爪	154
白狼の舞	167
別離	182
信頼と代償	195
駆け引き	212
過ちの記憶	234
密告	250
決着	
番外編	
贈物・上	
贈物・下	

天狗の社会 出会い

秋の終わりの空に、ひらひらと落ち葉が宙を舞っていた。

地に落ちた葉は一面に広がり、赤と黄色の絨毯に変わっていた。

そんな中、男は紅葉の絨毯を踏みしめて、前に進んでいた。

やっとの思いで追いつめた大鹿。ここで、逃がすわけにはいかなかったのだ。

山に籠ってから、既に四日が立っている。持ってきた食料はどうに尽きて、弾薬も残り少ない。

そもそも 山鳥を獲るはずであったのだが、思いもよらぬ大物が現れた事で、男の持つ猟師魂に火が付いた。今まで見たことも無いその獲物を、見過ごす訳にはいかなかった。

「いた」と、男は喜びを交えた声で言う。

不思議なことに、大鹿は黙って男に視線を向けていた。それは見方を変えれば誘っているようにも思えるが、気持ちが高ぶっている今の男は、対して気にならなかった。

男は猟銃に火をつけて、何時でも撃てるように身構えた。

ゆっくりと、またゆっくりと大鹿に歩み寄る。いつ逃げてでも弾丸を直撃させると、男は息を飲んだ。

だが、鹿は一向に動かなかった。ただ、男を眺めている。

「なんだ？」

流石に男も不審に思ったのか、猟銃を下ろした。

すると、大鹿は軽やかな足取りで、さらに山の奥に進んでいった。

「くそっ」

遊ばれている。男は毒つくことやけになり、猟銃を胸に抱えて、思い切り後を追った。

逃がすものかと目を送らせて、男は長く続いている絨毯を踏みしめる。

総重量およそ十キロの装備をガチャガチャと揺らして男がたどり

着いたのは、見るも美しい小さな池であった。奥には湧き水が漏れる岩壁がそびえ立っていて、漏れた水が徐々にこの窪地に溜まり、この池ができたようだ。

「美しいな……」

男が無意識に呟くと、同時にハッと我に返った。

大鹿は何処だ。奴は何処に消えた。男は心の中で、迂闊だったと悔やんだ。

慌ただしく辺りを見渡すが、大鹿らしき生き物は見えず、ただその風が草花が揺れているだけである。

男は逃したと思うと、悔しさを押し殺して来た道に戻ろうとした。

その時。ふと、何か水が弾むような音が男の耳に入った。男は猟銃を素早く向け、その音に感応する。

「あつ」

思わず、男は間拔けた声を出した。そこに立っていたのは、短い白髪をした女性であったからだ。

女性は足を池に付けて、男を無表情で見ている。

だが、男は背筋が凍るような感覚を覚えた。

その女性には人間の耳ではなく、イヌ科の耳が生えていたのだ。

それによく見ると、美しい毛並みをした尻尾も生えている。無表情思えたその眼光は、男をどこか見下している様であった。

そう、この生き物は人ではない。

「白狼……天狗……!?!」

男が消えそうな声で呟いた突如、遠吠えが聞こえてきた。それも一匹の声ではない。数匹の規模である。

「な、なんだあ!?!」

男は悲鳴のような声を上げた。

周りを見渡すと、草むらから出てきたのか白き毛皮の狼たちが唸り声を上げ、男を睨んでいた。その数はおよそ七匹。

連射が出来ない猟銃にとってこの数は太刀打ちが出来ない。もつとも、この数では連射式の銃でも辛いかもしれない。

「馬鹿な……こころは狩猟区域だぞ……何故白狼たちが……」

男は近づいてくる白狼たちに向け、あたふた銃を構える。じりじりと距離を詰めてくるにつれて、男は体をがたがたと震わせていた。

そして、一匹の白狼が疾風のように男に飛び掛かった。

「く、くるなあー！」

男の叫び声が山に響く。そして、その声は二度と聞こえなくなつた。

*

人里は相変らず活気に満ちていた。

女子が道端で立ち止まって他愛もない話をしており、子供たちが無邪気に走っている。昼間から呑んでいるのか肩を組んで笑い合う中年も居れば、団子屋の座椅子に座りひと息を付く老婆もいた。

「異常はない…か」

そんな中、妖怪退治の専門家である松木聡士郎はキセルを吹かしながら、ゆっくりと歩いていた。

髪を掻き上げ鬚を結っているが、前頭部から頂頭部は剃っていない。淡い藍色の着流しはわざと崩して、太刀と小太刀を二本ぶら下げている。そして鈍く鉄色に光る十手を帯に刺していた。

その姿は、例えるならば町役人と浪人を足して二で割つたような恰好であろうか。

歳は今年で三十路を迎えるが、もともと顔が老け顔で顎鬚が生えている為、その年齢はもう二、三上にも見える。

聡士郎が十手を持っている理由は、彼が妖怪退治の専門家の中でも主に治安維持に努めていたからであった。

ほぼ私欲や権力。名誉の為を求め私的理由が多い妖怪退治の専門家の中では珍しく、純粹に里の治安を守る為に活動している。幻想郷ではかなりのお人好しであろう。

そんな彼らの事を人々親しみを込め、『十手持ち』と呼んでいた。故に里の住民からの信頼は厚く、それぞれの村にいる権力者からも一目置かれている存在である。

因みに東西南北中央の村で構成されている人里で、十手持ちは各地に一名ずつしかいない。彼らは皆、それぞれ生まれた村を愛している

からこそその、行動であったのだ。

「しかし。昔に比べ里もずいぶん安全になったものだ」

キセルを胸元にしまうと、聡士郎は嬉しそうに、しかしどこか寂しそうな声で呟いた。

博麗神社に新たな巫女が置かれてから、もう五年になる。最初の方は仕事にぎこちなかったのだが、時が立つにつれ、彼女は小さな異変ですら完璧に熟すようになっていた。そして今では、幻想郷の危機であった異変も易々解決をしたと言う。それは鮮やかで見惚れる物であったそうだ。

この事から十手持ちは現在、自分たちの時代は終わりであると薄々勘付いていた。つまり、この重い十手を手放したい考えを持つ様になっていた。

つい最近、聡士郎は里の守護者である上白沢慧音に十手を返そうと決意して寺子屋に押し込んだ。しかし彼女は何を言うかと困った顔を見ると、突き返されてしまっていた。

彼らは今、何のために義を振るうかわからなくなっていたのだ。

聡士郎は、西村と中央村をつなぐ赤く塗られた橋に寄りかかり、空を眺めた。

空にはゆったりとした雲が流れてて行き、平穏な気分にも包まれる。

「生きもせず、死にもせず。ワシらはこの先どこに向かうのだろうか」
仕事ができない妖怪退治の専門家は食っていけない。それを副業としてしているのならまだしも、本業としてしている物には、博麗の巫女の出現は迷惑極まりなかった。だが、博麗の巫女は妖怪退治の専門家の中でも超一流であるため、強く言えないのが専門家達すべての現状であるのだ。

古き時代縛られた人間は今について行けない。まさに、老兵死せず、ただ去るのみであろうか。

「もし・・・」

そんな思いを胸に秘め、何気なく聡士郎は空を眺めていると、後ろから誰かに声を掛けられた。

視線を戻し、聡士郎は声の主を確認すると、その顔には見覚えが

あった。

「おう。鍛冶屋のボウズか。名は何と言ったか…」

「政吉です」

「そうだったな。思い出した。政吉だ」

聡士郎は拳を叩いて閃いた様に言う。本心では忘れていたが、それは両者にとつてどうでも良い事であった。

「それで、ワシに何か用か？」

「いえ、見かけたので挨拶をしようと思ひまして」

「そうか…」

少し寂しそうな表情をして聡士郎は呟いた。

もしや依頼かと思つてしまった為、どうしても顔に出てしまったのだ。それを見た政吉は察すると、申し訳なさそうな表情をしてぺこりと頭を下げた。

「岩男のオヤジは元気にしているか？」

「はい。あの時の傷も癒えました。オヤジも松木様の持つその刀なら、無償で鍛えなおしても良いと言つておりました」

政吉が言う「あの時」とは、以前聡士郎が退治した妖怪が、鍛冶屋の岩男に斬撃を与えた事である。

人に化けたその妖怪は属に言う「かまいたち」と呼ばれる妖怪で、岩男の元で刀を鍛えてもらったことが始まりであった。

岩男は鍛えている途中、その刀に違和感を覚え、人の血を吸っている事に気が付いた。

人を殺すことは勿論、ここ人里の中では許されていない。火付けよりは罪は軽いが、それでも大罪である。

火付けより軽い理由としては、自己防衛の為に行った時、誤って殺してしまった時などの「仕方がなかった」とされる場合は免除にされる事が稀にある為である。しかし火付けは木造建築の多い人里では大量虐殺になりかねない。良くても処刑、悪くても処刑である。

話しを戻すが、大罪である人の血を吸っている刀を見て岩男はかまいたちに問うと、正体がばれたと勘違いしたかまいたちは岩男に斬り

掛かり、鍛え終わったその刀を奪うと逃げ去ったのだ。

だが逃走中、見回りをしていた聡士郎とすれ違った際、かまいたちの着ていた服に血が付着していることに聡士郎は気がつく、問答無用で現行犯逮捕ならぬ、現行犯退治されたのだった。

その後、かまいたちは罪を改め、農作業をしている住民達に度々手を貸していると言う。自慢の速さで鎌を操り、稲を刈る。外の世界で言う草刈機の様だった。そして愛くるしい少女の姿である為、住民たちからも娘の様に可愛がられていた。

かまいたちの持っていた刀、『追風』は謝罪と更生の印として岩男に渡されたが、逆に岩男は感謝の気持ちでそれを聡士郎に渡した。

聡士郎は恐れ多いと断ったが、「刀は剣士が持つ物であり、鍛冶屋はそれを鍛えるためにある。その為それは、お前が持っているべきだ」と無理やり押し付けたのだった。

「懐かしいな…。この『追風』。確かに良い刀だ。ワシが持つには惜しい」

帯刀している追風をそつと撫でて、聡士郎は言う。

「そんな。お似合いじゃないですか。追風は正に異刀。絶対に折れぬ不屈の刀でしょう?」

「だからこそだ。ワシの流派は殺法剣ではない。身を守る流派だ。それゆえ『追風』には、ワシの流派では失礼なのだ」

「へえ・・・」

聡士郎の鋭い眼光に一瞬にらまれた政吉は、一步下がると、「そういうば」と話題を変えた。

「最近。妖怪の山に神社ができたのを知っています?」

「ん?ああ、だが行くこうにもいけぬではないか」

妖怪の山。そこは名前の通り、妖怪が数多く住み着いている山である。昔には鬼も住んでいたと言われていたが、今では天狗たちが主に山を切り盛りしている。閉鎖社会である天狗たちは独自の決まりを持っており、他の妖怪たちもそれになんとなく従っていた。

最近では天狗達との交渉の末、狩猟区域を設ける事に成功したらしく、魔法の森で猟師をしていた物が度々通うようになったと、聡士郎

は耳に入れていた。

「しかしですね、山の神社の神様たちは天狗達に交渉して参拝道を設けることに成功したそうですよ。狩猟区域の交渉は三年もかかったと言うのに。なんとというかあつと言う間ですよ。狩猟組合の方々がかわいそうです」

「ははは、確かに。だが神なのだろうか？それくらい容易いのももしれぬぞ」

「ああ、なるほど。そうですね、なんとたつて神様ですから」

政吉がそう言うと、聡士郎は大きく笑った。彼の気持ちの良い笑いに、政吉もつられて笑う。

「それで、その神社は何を祀っているのだ？博麗神社の様にわからない訳ではあるまい」

「私も詳しくは知りません。ですが風の噂では、軍神がどうかと」

「なに、軍神とな？」

その言葉に聡士郎は興味を持った。

「すいません。これは噂なので・・・信憑性は薄いです」

「いや、良い事を聞いた。今度行ってみるとしよう。なあに、ワシが居なくなつたとて、見回りはまだ各村に四人いる。どうせ奴らの事だ、異変があればこの中央村にも喜んで駆けつけるだろう。それにな、今は博麗の巫女もおる。一日くらいワシが休んでも、誰も文句は言いません」

人里から妖怪の山まで、徒歩だと半日は掛かる。魔法の森を抜けて、霧の湖の横を沿って歩くと、やつとの思いで麓まで到着するのだが、参拝道の入口は玄武の沢からであり、正確にはその沢も超えなければならなかった。

因みに沢には河童が棲んでいる。仮に出合ってしまった場合は、こちらは手を出さず、軽く挨拶をする程度であれば攻撃をしない。向こうの気分が良いと返事を返してくれるとも言う。昔は人々を水害で苦しめていたとされているが、現在は河童も温厚になったのだ。

「いや、むしろ松木さんは休暇を取るべきだと思います。夜も見回っているのでしょうか？」

「ああ、それは」

聡士郎は少し間をあけると、照れくさそうな表情をした。

「見回りと言いつつ、飲みに行っておるからな」

「えっ」

政吉は思わず声を出して驚いてしまった。

*

それから三日後の事、聡士郎は参拝に出かけることにした。実は参拝以前に、神頼みなど生まれて初めて行う事である。

聡士郎は『十手持ち』の四人に挨拶を交わすと、朝早くから山へと向かっていった。暫く田園地帯を歩き、魔法の森に入って行く。そして森を抜け、霧の湖沿いを歩き、ちようど太陽が真上に来たころ、玄武の沢にまでたどり着くことができたのだった。

「ふう．．．流石にこの距離はしんどいな。年は取りたくないわい」
聡士郎は座るのに丁度いい石に腰を掛けると、竹の水筒で水を口に含む。渴いた喉を潤す水の味は最高であり、そのままごくごくと飲み干してしまった。

「おっと。これでは昼食の分と、帰りの分が足りなくなるではないか」

考えなしの行動に聡士郎は悔いると、竹の水筒で沢の水をくみ上げる。

程よく冷えたこの水は、自然の水は山からじつくりと濾過された水であり、里に通っている小川や井戸水とはまるで違う。つまり、味が少し変わっているのだ。

ここ玄武の沢ではその濾過された水が行きつく終着点の一つでもあり、水質も透き通っていて美しい。だからこそ河童の住処となっているのだ。

「さて、昼時だ。メシを食うとしよう」

座っていた石に聡士郎は戻ると、竹の葉の包みを解き、握り飯を一つ手に取った。

「うむ。我ながらうまい。絶妙な塩加減だ」

聡士郎は満足に頷きながら、ぱくぱくと握り飯を口に運ぶ。現在、

彼は一人身であった。

彼は職業柄、いつ死んでもおかしくない。そのため嫁を取らないことにしているのが、理由であった。

また、彼は他の『十手持ち』とは違い、率直に言うた女性に人気が無かった。しかし妖怪から何かと慕われており、「聡士郎が嫁を取らない理由は、雌の妖怪とデキているから」と、噂が立ったことがあった。もちろん、デキている訳が無かったのだが。

「自給自足。これも修行だ。ほかの十手持ち共は、それがわかって無い。あまえとる」

空しいと思いつつも、自分に言い聞かせながら、聡士郎は旨いという握り飯をほおばっていた。

「そんなところで何してるの?」

不意に声を掛けられた。聡士郎は気を抜いていたため驚き、思わず喉に飯を詰まらせてせき込む。

「ごほつごほつ・・・。あーなんだ。お前は」

「河童だよ?」

「そうか。ごほつー」

胸を叩いて、無理やり飯を喉に通す。それを見ていた河童の少女は何処か楽しそうに笑うと、水辺から出てきて竹の水筒を聡士郎に手渡した。

「おえっ・・・気が利くな」

「そりやどうも」

「さて、何の用だ? すまぬがワシはきゆうりを持っていないぞ」

水を飲んで喉の調子を整えると、聡士郎はいつもの口調で、河童に問う。すると、河童は苦笑いをした。

「いや、キュウリはどうでも良いんだけどさ。山に向かうのかい?」

「ん? ああ、そうだ。それが?」

「うーんと、しばらくはやめておいた方がいいかも」

「なぜだ?」

聡士郎は不思議そうな顔をして、河童に問う。すると河童はすこし

待っているように言うと、何かを持ってきた。

「これ、人間の武器、銃だろ？」

「そうだが…まさか…お前」

嫌な予感をして、聡士郎は追風に手を伸ばすと、睨み付けた。しかし河童は慌てたように訳を話した。

「違うよ！上の方から流れてきたんだ。死体と一緒に！」

「死体…だと？」

「そう。死体。毛皮とか着てたし、おそらくは猟師じゃないのかな？」

その訳に聡士郎は納得した。おそらくこの猟師は、狩猟区域から外れてしまい、山の治安を守る狼たちに殺されてしまった。そして、川に突き落とされ、ここに流れ付いたのだろう。

「莫迦な奴め…死体はどうした？」

「埋めておいた。上に石乗っけて」

「ふふっ。墓石のつもりか。河童もずいぶん人間らしくなったものだ」

何処かおかしくなり、聡士郎は思わず笑った。

河童はそれを見ると少し照れたような表情をして、言い返した。

「気まぐれさ。私のテリトリーに入って邪魔だったからだよ。それに今でも人間は嫌いだ。でもさ、なんか放置するのも嫌だったからだよ」

「…知り合いではないが、人間として礼を言っておく」

「ふん。そもそも沢にだって来てほしくないさ。もう一度だけ言うよ、今は山に入らないほうが良い」

そう言い残して、河童の少女は、流れる河の中に飛び込んでいった。

*

忠告を聞かず、聡士郎は何事もなかったかのように、山の中に入っていた。

仮に襲われても返り討ちにできる自信があり、何より許可区域外に出なければ襲われる心配も無いと思っていた。

だが、そんな聡士郎が山の中腹にある、小さな橋を渡る最中であつ

た。

「……この空気は」

先程からピリピリとした空気が、森の中に漂っていた。この雰囲気は、妖怪が殺意を向けている時と大きく似ている。

場所が場所であるため、このような物だろうと聡士郎は思っていたが、次第にその思いは間違っていると気付いたのだ。

聡士郎は歩みを止めると、辺りを軽く見渡した。小川から流れるせせらぎの音、風で揺れる木の葉、この何事もなさそうな情景こそが、聡士郎の危機感を高めていた。

誰かに見られている。

そう考えが行きついた聡士郎は、ゆっくりと『追風』に手を添えて鯉口を切った。

「出でいこ」

強張った声で、聡士郎は呟く。すると、何処からか唸り声が聞こえてきた。

「狼か……」

草むらが揺れると、いつの間にか聡士郎は狼に囲まれていた。白銀の毛皮をした狼たちは、牙をむき出し、敵意を込めた眼光で睨み付けている。

「ふむ……。白狼か。と、言う事は」

聡士郎が冷静に呟いたと同時に、風を切る音が聞こえたと思うと、聡士郎の前に人影が現れた。

白き髪、人間では考えられないイヌ科の耳。黒装束を羽織ったその正体は――。

「白狼天狗か？」

「いかにも。手前の名は秋山剛牙と申す」

そう、白狼天狗は強い口調で名乗りを上げた。良い体格をしている雄の白狼天狗は、ギロリと睨み付け、黙って大剣を聡士郎に向けた。

「ここは聖域。妖怪たちが住まう場所。貴様ら人間が来る場所ではない。いまずぐ去ぬか、死ぬ」

「何を言う。ここは参拝道。立ち去るのは貴様ではないのか？許可

も出ていよう」

少しだけ態勢を落とすと、聡士郎は剛牙に言う。

「ぬかせ。太古からこの山は人が入ってはならぬ。おぬしも幻想郷に住んでいるのであれば知っているはずだ。許可など、村に住む穏健派の阿呆共が決めただけだ」

そう言い捨てると、剛牙は大剣を振りかざした。聡士郎は後方に地を蹴ってそれを、ひらりと交わす。

「奴をかみ殺せ！」

剛牙は言い放つと、一斉に狼が飛び掛かってくる。

「所詮は狼だ」

『追風』を瞬時に抜いて流れるような剣捌きより、率先して前に出た三匹の狼達は斬撃を受けると、悲鳴を上げ地に倒れた。そして短く息をしたと思うと、二度と動かなくなった。

その三匹を見て他の狼たちは畏怖したのか、飛び掛かるのを踏みとどまると、吠えながら後ずさりをした。

「ぬう！見事！」

「伊達にこれで飯を食ってはおらんからな」

「手前と戦うのにはふさわしいと見た」

剛牙は少しだけ笑うと、大剣を振りかざして、再び聡士郎に襲い掛かる。

冷静に体を動かして聡士郎は避けると、反撃すべく袈裟切りで斬り掛かった。しかし、剛牙は力任せで無理やり大剣をねじ込ませると、その白刃を打ち消した。

キーンと高い音が響く。両者は磁石が反発するかの如く後方に下がると間合いを取り、構えなおした。

「荒い剣技をしおる」

「だからどうした」

次に、剛牙は大剣を正眼で構えた。

岩を切り出し、そのまま剣に加工したと思えるほど巨大であるが、剛牙はふら付かずがっしりと構えている。天狗の馬鹿力とそれに釣り合う足腰の強さは伊達でないと、聡士郎は関心をした。

対して唥士郎の構えはだらりと腕を下げ、片手で『追風』を構えていた。不気味なほどに殺意のないその構えに剛牙は眉をひそめた。

「貴様、この俺を莫迦にしているのか」

「いや、これこそが構え。我が流派、『不盾流』だ」

そうは言うが、唥士郎の構える『不盾流』を見れば、戦う意思が無いと見える。命のやり取りに力なく構えれば、誰もがそう感じるだろう。

しかし、唥士郎は本気そのものである。その意図は強い眼力が語っていた。一切目をそらさず、剛牙を探るよういらんでいるのだ。剛牙はそれが、全てを見抜かれているようで気に入らなかった。

「ふん。何が不盾だ。天狗を侮辱するとは浅はかな！ここで散れい！」

大剣を振り下ろし、剛牙は吠えるように叫んだ。大剣の重量と剛牙の振りの速さで、風が舞い上がる。

唥士郎は左の足を一步斜めに下げると、剛牙の斬撃に合わせ、追風を片手で振り上げた。

しかし、その斬撃は剛牙ではなく、彼の持つ大剣の鑢に当たった。大剣の軌道は逸らし、唥士郎の真横の空を切った。

「むっ！なんだと!？」

剛牙は意表を突かれたのか、横目で唥士郎を見た。

そして、今度こそは逃がすまいと、大剣を振り上げようとする。しかし、それはできなかった。

「なっ……」

突如、まるで固い物を叩いたかのように剛牙の手首に電流が走り、無意識に大剣を滑り落としたのだ。

何が起きたのかと、思わず剛牙は掌を見る。すると、掌は小刻みに震え、力が入らなかった。

「さすがは馬鹿力。その分衝撃も強いか」

「何をやった!？」

焦りと困惑を秘めた問いを剛牙は唥士郎にする。すると、困った顔をして口を開いた。

「むう。うまくは言えぬが、強いて言うなら貴様に力を、そのまま返したただけだ」

「何をバカな!？」

奥歯をかみしめ、剛牙は思い切り聡士郎に飛び掛かろうとする。

だが、追風は無機質な光を放ち、剛牙の首元を捉えていた。

「ワシの勝ちだ」

がくりと剛牙が膝を着くのを見ると、聡士郎は深く息を吐いた。そして構えを解くと、ゆつくりと追風を鞘へと戻し、帯刀した。

戦う気力が失せたのか、剛牙は落胆をしていた。人間に天狗が負けることなど想像していなかったのだろう。

聡士郎はそんな剛牙から目を背けると、先へ進もうと前に出る。

しかし、ふと剛牙は体を震わせ、突然笑い出した。

「されど、牙は落ちぬぞ」

「なっ!？」

思わず振り返り、聡士郎は声を荒げた。

同時に剛牙は勢いよく手を上げたと思うと、突如何処からか矢が飛んできて、聡士郎の肩を射抜いた。

「ぐっ・・・貴様!」

聡士郎が言い切る前に、剛牙は丸太の様に太い足で、聡士郎を蹴り飛ばした。その威力は重く、聡士郎は思い切り吹き飛ぶと、針葉樹の幹に体を打ち付けた。

「うぐっ☒」

「何がワシの勝ちだだと?笑わせるな。殺すまでが勝負だ若造!」

掌のしびれが取れたのか、剛牙は聡士郎の首元を掴み上げると、そのまま幹に押さえつけた。

徐々に力を強めていき、その巨腕で首を絞めていく。

「ツ・・・!」

聡士郎は必死にもがくが、天狗の力に勝てるわけが無く、力が抜けていった。

このまま死ぬのだろうか。

ふと、脳裏に言葉が走った。こんな汚い手を使う雄天狗によって、

自分の命が潰えてしまうのだろうか。一瞬の迷いが死につながる。それはわかっていたはずであったのに、なぜ慢心したのだろうか。

しかし、なんとあつけない幕引きの三十年間なのだろう。

鍛練を怠らず、毎日剣を磨き続けてきた。

青春をドブ川に捨て、妖怪に剣を振り続けてきた。

そんな自分に、聡士郎は改めて問う。

剣を振るのに正義はあったのか。

本心は自己満足や傲慢があったのか。

戦うことに快楽を感じていたのか。

そのすべてか。

ともかく、それも今日で終わってしまう。考えてみれば命をかけて戦うのに、卑怯も糞もない。何をして勝つなど関係ないのだ。

生き残った者が正義であり、真の勝者である。

聡士郎は静かに目をつぶり、死を覚悟した。

だが、その刹那の事だった。

朦朧とする意識の中、どこからか遠吠えが聞こえた。

勝利の雄叫びかだろうか、聡士郎は思った。しかしその予想は外れた。

「待て！秋山剛牙！」

「な．．．貴様は！」

剛牙は聡士郎から手を離すと、その声の方角に振り向き、驚いた顔をした。

せき込みながら聡士郎はその声に主を見ると、そこに立っていたのは剛牙とは比べ物にならない程華奢で、小さく、幼さを残す顔立ちの白狼天狗であった。

「い、犬走権か！」

「剛牙．．．！先ほどの勝負。すべて見させて頂きました！」

凜とした口調で、権と呼ばれた雌の白狼天狗は言い放った。

「貴方は負けた！だが未練たらしく貴方はその人間を襲った！白狼天狗の名に泥を塗るつもりですか!？」

「いや！それは違う。殺すまでが勝負。この男は中途半端に私を活

かしたのが敗因だ！」

堂々として剛牙は言う。彼の言い分は間違っていない。むしろ的を射ている事は、聡士郎でも分かる。だが権は背負っている大剣を、剛牙に向けた。

「ではその運よく拾った命。私が頂きましょう」

「なっ！何!?!?」

「黙れ！殺されたくなければ、今すぐ立ち去ってください。私は同朋を殺したくはありません！」

権の威勢に気圧されたのか、少しの間彼女を睨み付ける。そして小声で「穏健派の犬が……」と小声で呟き、そのままどこかに飛び立ってしまった。

「何故助けた」

息を整え、肩の矢を抜きながら聡士郎は権に問う。すると彼女は聡士郎の前に立つと、膝を着いた。

「私は犬走権と申します。先ほどの戦いお見事でした。良く人間が、白狼天狗にあそこまで太刀打ちを……」

素直に感心したような声で権は言う。どうやら本心から言っているようで、聡士郎は驚いた。

「まさか、白狼天狗にそんなことを言われるとは……」

すると権は立ち上がり、聡士郎を見つめた。そのまっすぐな瞳に、聡士郎は自分で驚くほど、何故か心拍数が上がっていた。

「もっ……申し遅れた。ワシは松木聡士郎。人里で妖怪退治の専門家をやっておる」

「はい、存じております。『不盾流』の使い手であり、『不落の松』と言う通り名を持つ。そう聞いております」

「聞いている……?何時のまにワシはそんなに有名になったのか……。何とも恥ずかしい」

頭を搔いて聡士郎は照れ臭そうに言う。権はそんな聡士郎を見て、少しだけ微笑んだ。

「さて……ワシに何の用だ?まさかお命頂戴とは言わないだろうな?」

聡士郎は一つ息を付くと緩んでいた顔を引き締めて、いつもの妖怪を威圧する調子に戻る。すると権は両手を振って、否定した。

「いえ、そんなめっそもない。私は只の使いです」

「使い？」

「はい。白狼天狗統領から、あなたを連れてくるように言われました」

権現村

射抜かれた肩の治療を軽く行うと、聡士郎は椀の後を着いて行く事となった。参拝道を大きく外れ、山奥へと足を運んでいく。無尽蔵に伸びた落葉樹などの枝が行く手を阻み、徒歩で歩くのには少しばかりしんどい。だが椀は顔色一つ変えず、どんどん前へと進んで行く。

この時、何故自分が呼ばれたのか、聡士郎は考え込んで歩いていた。天狗が意味も無く、人をもてなすのは考えにくい。それに白狼天狗の統領とあれば、それは尚の事である。どう考えても理解ができなかった。

民間伝承で天狗は人間を誘拐すると言われている。しかし、それはあくまでも子供限定であり、聡士郎は間違いない対象外であった。では何故か。その理由を求め聡士郎の頭は混乱していた。

椀に尋ねようと聡士郎は思いたったが、彼女は話そうとせず、先ほどこからずつと無言である。時々後ろを振り向くのだが、それはコミュニケーションを取ろうとしておらず、ただ着いてきているかどうかを確認している様子であった。

「もう少しです」

椀は地面からはみ出ている大樹の根に立ち、少し傾きつつある太陽の光を背に受けながら、優しい口調で言った。

その彼女の立ち姿は凜としておりとても美しかった。

正直、聡士郎にとって彼女は、大変好みである。彼女の容姿は凜とした顔立ちをしているのに、どこか優しさを感じることができる。しかし、幼さを感じると言ってもどこか大人びた雰囲気を持ち、人の年齢で言うところ二十歳になり立てのような顔をしていた。

あくまでも妖怪であるが、好みに関しては種族など関係の無い事である。実際聡士郎は里で数人、容姿が好みの妖怪と出会っていた。

しかし、好みだからと言って行って行っていない訳ではない。ついて行かないと、何をされるかわからないのだ。下手に手を打とうとすれば、死が待っているかもしれない。天狗は其れ程、付き合にくい性格をしている者が多いのだ。

何とか権の横まで着くと、聡士郎は頭を下げ深く息を付いた。

権はそれを見て、だらしないと言わんばかりの顔をして、苦笑いをする。聡士郎は若干情けないと思いつつも、大きく深呼吸をして息を整えて、顔を上げた。

刹那、日差しが目に入り、まぶしさの余り瞼を閉じる。

そして目を開くと、聡士郎は驚いた。山に沿って立ち並ぶ古風な村があったのだ。

「ようこそ、天狗の集落。『権現村』へ」

権はそう言つて、村へと続く階段を下りて行く。聡士郎も驚きを隠しきれない表情で辺りを見渡しつつ、それに続いた。

村の様子は割とのんびりとしており、天狗たちが言葉を交わしている。幼い天狗の子供達が走り回っていて、噂で聞いていたような近代的な華やかさは無かった。

「人里と、変わりはないのだな」

「そうですね。私たちはあくまで山の治安を守ることが任務です。ですから優れた技術を持つていても、その恩恵は必要な時にしか受けられないようにしているのです」

「なるほど…」

聡士郎は感心すると、街並みを再度眺めた。ほとんどが木造建築に土壁が張られている、いたって普通の建物ばかりであった。

人里では近年、物好きの金持ちが煉瓦の建築に手を出し始めているのだが、ここにはそのようなハイカラな建物は見えない。例えるとすれば、江戸時代中期ごろの村と言えよう。

「さあこちらです。ついてきてください」

「ん、わかった」

聡士郎は返事を返すと、二人は集落の中央にある道を進みながら、上へと昇っていく。

道行くと出会う白狼天狗達は、権に頭を下げ軽く挨拶をした。どうやら権の位は高いらしく、普通の白狼天狗とは少し違う様子だった。天狗はその上下関係がしっかりしているのだ。

しかし、鴉天狗と呼ばれる天狗の大半は、聡士郎を連れている権を

白い目で見ていた。なにやらヒソヒソと噂話を立てており、友好的に見えない。聡士郎はその訳を知っていた。

鴉天狗と白狼天狗は合間見えないのだ。両者はいがみ合い、犬猿の仲である。これは、太古から続く関係であると言う。

聡士郎は白狼天狗が連れてきた客人であり、あまつさえ人間であるため、彼等は見下しているのだ。それで怒鳴ったり喚いたりはしないが、気分が悪いのは確かであった。

「……すいません。嫌な思いをさせましたね」

鴉天狗達を通り過ぎると、椀は唐突に謝った。客である為気を使ったのだらうと、聡士郎は納得するように頷く。

「なに、お主達の仲は知っておる。仕方のないことだらう」

「そう言ってくれると、助かります。古い考えの天狗は山ほどいるので」

椀は何処か意味深な発言をすると、何事もなかったかのように歩き始めた。

「どういう意味だらうか……」

聡士郎は首をかしげて、椀の後を追った。

*

「そろそろですよ」

先程の意味深な発言から暫く沈黙が続いて数分、椀はようやく口を開いた。どうやら目的地が見えてきたようだ。

聡士郎はその建物を見て、これまた目を丸くした。

岩肌が見えたと思うとそれに隣接して、装飾が施してある寺が建っていたのだ。周りを有刺鉄線の着いた塀で囲んでいて、門の前には白狼天狗の門番が二人、厳つい表情をしながら立っている。土地面積は人里で最も大きいとされている稗田家の二倍近くはがあると容易に推測できて、城と言うより要塞に近かった。

「……」

聡士郎は息を洩らすように呟いた。すると椀は少しだけ得意げな顔をして、説明を始める。

「天来寺です。村の人々からは城や本殿と言われています。寺として

の機能はありませんが、代わりに我々天狗たちが根城として使用しています。一番上にある本堂は大天狗様が居て、私達白狼天狗の主は左側にある、閃牙殿にいます。あ、因みに右側は鴉天狗様が居る、烏羽殿があります」

「それでワシたちは、閃牙殿に行くこと？」

「はい。本来ならば人間は絶対に踏み込めない所ですけど」

権はそう言うときさっさと歩き始め、遅れる聡士郎に手招きをした。聡士郎はぎこちなく門の前で一礼し、門番の白狼天狗達に挨拶をして門をくぐる。

寺の敷地に入ると武装した天狗達が徘徊していた。目をギラギラと光らせており、異常がないかを見ている様子は最前線の兵士のものであった。特に白狼天狗の衛兵は聡士郎を睨み付けるように見ており、威圧しているようだった。

しかし権はそんな衛兵たちに目もくれず、閃牙殿に向かっていく。聡士郎も敵意を飛ばされ不快になったが、問題を起こしては生きて帰れまいと思い、権について行く。

「言っておきますけど」

暫く歩き、閃牙殿の前に立つと、権はふと思い出したように口を開いた。

「む、どうしたのだ」

「統領の前で、粗相のないようお願いします」

「・・・命は惜しい。どんな奴かは知らんが、無礼は起こささん」

「分かっていけばいいのです」

権は聡士郎の答えに満足したのか、一息を吸うと、閃牙殿の扉を叩く。すると扉が開き、中から屈強そうな白狼天狗が姿を見せた。長い髪を後ろで縛っており、狼と言うよりは獅子と呼ぶのにふさわしい風貌をしている。

「お待ちしておりました。権様」

「ご苦労さまです。松木様に例の物をお願いします」

「御意」

屈強そうな白狼天狗はゆっくりと扉をしめて中に戻ると、まだら模

様の風呂敷を取ってきて、それを聡士郎に手渡した。

「これは？」

「客人用の服です。統領に合うにはこれを着なければならぬのですよ」

顔に似合わず小さな声で、屈強そうな白狼天狗は丁寧に話した。それほど恐ろしい奴ではない様だと、聡士郎は感じた。

「そうか。面倒だが…仕方ない。で、何処で着替えればよい？」

「羽織だけです。包みを解けばすぐに」

「あいわかった」

包みを解くと白い羽織が入っていた。背には紅葉の散る模様が描かれており、所々に赤き染色が施されている。

聡士郎は何も言わず、羽織の袖に手を通す。しつかりと着こなせているのかふと疑問が浮かんだが、すぐに打ち消した。誰も、そんなことを教えてくれる者にはここにはいないからだ。

「これでよいのか？」

「はい。では中へ御案内します」

屈強そうな白狼天狗はそう言うと、聡士郎と椀は閃牙殿の中に入っていた。

*

閃牙殿の中は、派手な装飾は行われておらず、静かに廊下が続いていた。いくつもの部屋があり、縁側にある大きな襖を開いて光を取っている。閃牙殿に入っすぐの部屋には、長い机が三つ置かれており、そこに数人の右筆であろう白狼天狗達が巻物に文字を綴っていた。天狗独自の文字を使用しているため、聡士郎には何を書いているのか分からなかったが、それと同時に知りたくもないし、知っても得はしないだろうと、聡士郎は思った。

その後、長い廊下を歩き、案内された部屋は広い板の間だった。部屋の奥には床の間があり、左右には刀や甲冑などが置いてある。上座には座布団と肘置きが置いてあり、両方とも紫と金の刺繍が施されていた。

「ここ、しばしお待ちください。椀様も」

「分かりました」

屈強そうな白狼天狗の言葉に、権は頷いた。彼はそれを確認すると一礼し、「扉を閉めて、どこかに行ってしまった。」

「・・・時に権よ」

「はい。なんででしょうか」

聡士郎の問いに、権は答えた。どうやら今は喋り掛けても良さそうだと、聡士郎は小さく息を付く。

「その、統領と言う奴はどういう奴なのだ？」

「はい。名前は真神露草様と言います。現白狼天狗の統領ですね」

「なるほど・・・。では、鴉天狗にもそのような者がいるというわけか」

「はい。ですが今は良いでしょうか？露草様に会うのですから」

「うむ、確かに」

納得するように聡士郎はうなずくと、権は一つ、ため息をついた。聡士郎はその行為を少しだけ気になったが、これ以上は詮索すべきでないと思いとどまった。

それから数分後、扉が静かに開いた。そして二人の白狼天狗が入ってきたと思うと、後に続いて、普通とは違う雰囲気を持つ白狼天狗が入ってきた。

部屋の中に風が吹くと、その白狼天狗は白髪をたなびかせ、それを掻き上げる。その堂々とした行為からして、聡士郎は勘付いた。

この女性こそが、白狼天狗の統領。真神露草なのだ。

露草は帯刀していた刀を連れ、白狼天狗に渡すと、肘置きに手を置いて座布団に座り、聡士郎に目をやった。

すると権は深くお辞儀をして、威勢よく口を開いた。

「申し上げます、犬走権。真神露草様の命により、松木聡士郎を連れて参りました！」

「うむ。ご苦労。一度部屋から出ておれ。だが、また呼ぶかもしれぬ」「はい！」

勢いよく返事をした権は、正座から立ち上がり、一礼をすると部屋から出ていった。

「白狼天狗統領。真神露草だ。貴様の實力聞いている。何でも秋山剛

牙を撃退したらしいな」

「はっ。それがし、里では名の知れた妖怪退治の専門家であります。しかしその報告は誤りかと。とどめを刺さず慢心いたしましたゆえ、私は敗北しております」

いつもより丁寧な言葉で、聡士郎は露草に話す。すると、面白いものを見るような目で露草は少し口元を歪ませた。

「慢心？違うだろう？…まあよい。貴様の流派を知っておる。だからこそ貴様を呼んだのだ」

「それはどういう意味でございましょうか？」

「貴様の持つ流派「不盾流」は身を守る流派。ちがうか？」

「はっ、ごもつともで」

「だからこそだ」

聡士郎は自然と、冷や汗が噴き出した。

まったくもって、自分を呼んだ意図が見えない。もしここでいらぬ発言をして下手を打ってしまったら、命は無い。その為、聡士郎は口をつぐんだ。

「分からぬか。まあ良い」

一つ息を付き、露草は話の間をあける。

「私は回り道が好きでは無い。だから単刀直入に言う。貴様は『白狼の舞』という物を知っているか？」

「・・・いえ、それがしは存じておりません」

すると、露草はふふつと小さく笑い。態勢を崩した。

「だろうな。まあ無理も無い。人間は勿論、大半の妖怪も知らぬだろう。ま、簡単に言えば、白狼天狗に古くから伝わる舞だ」

「それとそれがしに何の関係が？」

「最後まで聞け。この白狼の舞は五百年に一度行われる行事だ。この舞は我が聖地、妖怪の山に住む神『岩長姫』を慰め、白狼天狗の繁栄とその感謝、そして同朋との絆を深める為の舞だ」

そう言うのと、露草はため息を着いた。

「つまりな、最後の意味が肝心なのだ。白狼天狗は近年二分されている」

「そうなのですか？」

「ああ、大まかに言うと「穏健派」と「嫌人派」。この二つに分かれてしまった。その中でも得に人間を嫌う「過激派集団」はこの村から抜け、根城を作り上げたと聞く。秋山剛牙も、その一人だ。ちなみに我々は奴らを分断すべく、あの参拝道をもうけたのだよ」

忌々しそうに露草は言うのと、髪をたくし上げた。どうやら新たな山の神達は、白狼天狗達が二分されていることを知っていた。そこであえて分断できるルートを決め、交渉を有利に進めたのだろう。

「なるほど…それがしはその過激派集団に襲われたのですか」

拳を強く握り、聡士郎は剛牙の事を思い出す。あの時自分は人間特有の弱さを出してしまった。だからこそ、奴に敗北したのだ。

「そうだ。黒い装束を着ていただけだろうか？あれは黒狼隊と呼ばれている。それを退けたことは、まさに見込んだと通りであった」

「…謹んで発言いたす。つまり、それがしに…用心棒となれと？」

内容を理解し、導き出した答えを恐る恐る聡士郎は口にした。すると、露草は腕を組み、笑った。

「はははっ！八十点だな。そう言えばそうだが、実際は違う。舞に欠かせない舞姫。その候補者の護衛だ」

「護衛などそれがしがせずとも、他の白狼天狗に任せればよいのでは？」

腕つぶしに自慢のある白狼天狗など、ごまんといえるはずだ。人間に任せるより、同種族に任せた方が閉塞社会である天狗達にとつては得策のはずである。何故人間である自分に頼らねばならないのか、聡士郎は理解ができなかった。

すると、露草は聡士郎の意思を読み取ったのか、補足説明を始めた。「この『白狼の舞』を我々穏健派はなんとしても成功させたい。このまま二分された状態が続けば双方の勢力で小競り合い起き、それが激化する恐れがある。山の平穏を守りたい我々にとってそれはなんとしても避けたい。その為、切り札として貴様を招いた」

文句あるまいと言わんばかりに、露草は勝ち誇った口調で言った。

「まあ、本来。里まで使者を出して呼ぶつもりだったのだが、偶然にも貴様が山に登っていると報告を受けてな。手間が省けた」

「なるほど・・・ゆえに椀殿を仕向けたというわけですか。ですが・・・その件、それがしには荷が重い任かと。未熟者ゆえ、貴方達の力になれそうもない。申し訳ありませんが、丁重にお断りしたいと・・・」

「貴様は嘘を付いている」

聡士郎は自分の評価を下げようと御託を並べたが、言い切る前強い口調で露草は遮った。その言葉の鋭さに、聡士郎は押し黙る。

「私が知らないと思っていたか？貴様は恐ろしいものを持っているだろう？」

「いえ、そんな」

「天狗に嘘は通用しない。貴様の瞳の奥には、殺しを躊躇わない化け物が潜んでいる。貴様の流派は二天流の派生だが、隠しきれていない」

「・・・」

更に押し黙る聡士郎を見て、露草は得意げな顔をした。

「それに、ここまで来て貴様を生きて返すと思うか？それともかの流派で白狼天狗を根絶やしにするか？剣豪はかつて、とある名家を滅ぼしたと言うからな。だが我々も天狗。簡単に負けてやらぬぞ？」

「めっそうもない。我が流派は守りの流派。無意味な殺生はしませぬ」

「ならば交渉成立だな。我々に協力しろ。少なくとも春になるまでだ」

「・・・わかりました。その任、謹んでお受けいたします」

胸の奥から絞り出すような声で聡士郎は小さく返事をした。すると露草はにやりと口を歪ませ、連れの白狼天狗に目をやり、合図を送った。

「まあ貴様にはそれなりの待遇をしてやる。感謝しろ」

「ありがたき幸せ・・・。時に露草殿」

伏せていた顔を少し上げ、聡士郎は露草の顔色を窺いながら訪ねた。すると、露草は勝ち誇っている笑みを崩さず、「何だ？」と答えた。

「その・・・舞姫とはどのような人物・・・いや天狗で？」

この際、もう逃げ場はない。明らかに強引な事ではあるが、聡士郎は受け入れるしかなかった。なれば、その舞姫といち早く顔合わせをしたい。どのような人物かくらひは把握しておきたかったのだ。

聡士郎の問いに露草は鼻で笑うと、連れの白狼天狗に目を配り、扉を開けるように命じた。

「この者が、舞姫候補の一人だ」

露草は扇いでいた扇子をパチリと閉じて、扉に向ける。すると、同時に扉開かれた。

そこに立っていたのは意外にも聡士郎が知っている顔であった。待っている間、暇であったのか人差し指を数回くねくね動かし、遊んでいた。

異変に気が付いたのか、その人物もとい白狼天狗は顔を赤らめると、慌ててこちらを向いた。

「えっと、何でしょうか！」

緩んでいた顔を引き締め、きりつとした表情でその白狼天狗は露草に問う。

あの時、だから露草は待っていると言ったのかと、聡士郎は理解した。

「紹介しよう。舞姫候補の一人、犬走権だ。春までの間護衛を頼むぞ、松木聡士郎！」

「えっ!？」

何が起きたか理解できないのか、権は戸惑いながらきよきよと周りを見た。そして、聡士郎に視点を合わせると、心底驚いたような顔をした。

*

閃牙殿を後にして、聡士郎と権は村の街道を歩いていた。道行く天狗は聡士郎を凝視し、時には見下したような視線を取る者もいた。その大半は鴉天狗であるが。

権は頬を膨らませて、機嫌が悪いことを表していた。ずかずかと前へ行き、まるで子供のようなようである。

もちろん、権は露草に抗議を申し立てた。納得がいかないとか、他の候補者の護衛にしてくれとか、様々な抗議を並び立てた。

しかし、露草は「これは命令だ」と権の申し立てを忌々しい虫を掃う如く、一蹴りしたのだ。これには流石の権も歯向かうことができなかった。

露草は権にいくつかの書類と聡士郎用の天狗衣装を渡して、板の間を去っていった。権は少しの間ぼかんと固まると、ゆっくりと立ち上がり、無言で外へ出ていった。聡士郎はこの時、権は人間をあまり好いていないと、薄々勘付いていた。

それから閃牙殿を出て、権は一言も口をきいていない。どこへ向かうかも、何をしに行くかも聞かされておらず、聡士郎はとりあえず仕事をせねばと黙って権についていった。

「あのっ！」

暫く歩いた後、権は立ち止まり、振りむいた。その場で一礼をする
と、聡士郎を見つめた。

「私は護衛なんていりません。舞姫候補も辞退しようと思つていました。だから松木様は、人里までお帰りください。私がもう一度、露草様を説得しますので」

「いや、それはできぬ相談だ。不本意ながら露草殿と契約をしてしまった以上、ワシにも意地がある。おぬしに煙たがられても、やらねばな」

「そんなの気にしなくていいです。逃げ出して人里に戻れば、安全じゃないですか」

人間だものと、権は内心見下したような言葉を投げかける。その言葉が癪に障ったのか聡士郎は表情を歪め、権を睨んだ。

「見くびるなよ？ワシも筋は通っている。途中で逃げ出すなど、武を重んじる身としては最大の恥だ」

「・・・」

微妙な表情をすると、権はまた無言になり先へ行く。聡士郎も無言でそれに続いた。

*

それから更に歩き住宅通りに入ると、権は一つの住居に足を止めた。その大きさは聡士郎が所有している家より一回り大きかった。表札には「犬走」と書いてあることから、ここは権の家なのかと、聡士郎は感心したように見上げた。

「どうぞ、中にお入りください」

手招きをすると、権は扉を開錠して玄関に入って行って行き、聡士郎もそれに続いた。

玄関の中は小ぎつぱりとしており、唯一壁に箒が立て掛けてあるだけだった。石畳が敷いてあり、そこで権は下駄を脱いで、廊下上がった。聡士郎も続いて草履を脱ぎ綺麗にそろえて上がると、権はそれを見て、どこか感心したような表情をした。

聡士郎は玄関を物珍しく見ていると、部屋の奥から駆け足が聞こえ、誰かが走ってきた。

「お帰り師匠！お勤めご苦労様です！」

「只今戻りました。楓。いい子にしてみましたか？」

「はい！薪割りも済ませておきました！今は夜に備え、晩酌の支度をしようかと迷っていたところですよ！」

楓と呼ばれた童は、心底なついた声で返事を返す。尻尾をふりふりと動かし、まるで忠犬の様であった。

見た目は小柄で児童程だが、白狼天狗であるため正確な年齢はわからない。後ろ髪を結っており、小刀を帯刀していた。

「それで……この人間は？」

先程の表情とは打って変わって、楓は汚いものを見るように聡士郎へ目をやった。

「申し遅れたな、ワシは松木聡士郎と言う。今日から春まで、舞姫候補である権殿の護衛を行うことになった」

楓は聡士郎の挨拶を聞くと、血相を抱えた顔をして権に問いただした。

「なっ！どういふことですか！僕は何も聞かされていません！」

「楓、それは後で説明します。私は着替えますので、松木様を居間に案内してあげてください」

落ち着いた口調で権は言う、楓はしぶしぶ了解した。

しかし楓は横目でにらんでおり、先程から度々見せる不機嫌な表情から、この子も人間を嫌っているのだらうと勘づく、聡士郎は肩身が狭くなった。

権はそのまま奥に行き自室に入っていくと、楓は面倒くさそうな表情で聡士郎を居間へと案内した。先ほど権に見せたような愛くるしさ無く、むしろ敵意をむき出しにしたように睨み付けている。

気まづいと思いつつも、聡士郎は目についた適当な場所に座ろうとした。すると、楓は跳ねるように飛び上がり聡士郎を蹴り飛ばし、罵声を発した。

「莫迦野郎！そこは師匠の場所だ！お前は庭にでも座っておけ！」

腰を抑えつつも、聡士郎は申し訳なさそうに謝罪をする。

「いや失敬。知らなかったのだ。しかし庭だと、居間ではないな」

「うるせえ！人間には土がお似合いなんだよ！」

そう吐き捨てると、楓は座り込み、見下したように聡士郎に目をやった。

「だいたい何なの？護衛？お前強いのか？」

「・・・どうであろうか。自らの腕を語るほど、強くは無いと思っ
ているが」

「はあ？じゃあなんでここにいるんだよ。死ねよ！」

あくまでも罵倒する楓に聡士郎もさすがに気分が悪くなり、少しだけ表情をしかめた。

「まあ、お前に決められるほど、ワシの命は安いと思っておらん」

「はんっ！人間の命なんてごみ屑同然だろうが！」

「ふっっ・・・弱い犬ほど良く吠えるとはよく言ったものよ」

聡士郎の言葉に楓は激昂したのか、顔を真っ赤にして小刀を抜き放つと、畳を一蹴りして聡士郎に飛び掛かった。しかし、聡士郎は瞬時に立ち上がるとそれを危なげに避けて、追風に手を掛けた。

「貴様！殺してやる！」

そう言い放ち楓が再び飛び掛かかってきた。聡士郎は致し方ない

と判断すると腰を落として身構え、手を掛けていた追風の鯉口を切った。

「やめなさい！」

すると、着替え終わったのか、椀は腕を組んで二人に言い放った。羽織と天狗独特の装備を外しており、黒色の肌着一枚で、白狼天狗の基本装束時とは違う軽い格好をしていた。

「も、申し訳ございません！」

楓は顔を青ざめると小刀を投げ捨て膝を着き、深く頭を下げた。先ほどの威勢は無く、おびえた子犬の様にしている。

「まったく、騒がしいと思ったら……。松木様は私の『客人』です。無礼を働いたことに謝罪なさい」

椀はため息をつくくと、呆れた声で言う。楓は何か文句を言いたげな顔をしたが、蚊の鳴くような声で「ゴメン」と早口で言っつて、小さく頭を下げる。

脅威は去ったかと、聡士郎は構えを解いて、鯉口を切った追風を、そつと戻した。

「さてと、一応紹介しておきます。こちらは犬走楓。私の弟分です。最近白狼から転生したので、私の下で教育しています」

「なるほど……。だからか」

ここ幻想郷では、老いた狼が稀に転生をする事がある。それが、白狼天狗なのだ。再び生を受けて天狗になると長い時を重ね成長していき、やがては一人前となって哨戒隊の席に着く。

つまり楓はその一人であり、椀の元へ修行として預けられたのだ。おそらく楓はまだ教養が少なく、子供のような振る舞いをしてしまうのだろう。

「ですが少なくとも、松木様よりは長生きしていますよ。転生前を合わせた場合ですが」

「人生の先輩と言う奴か。見た目は子供だがな」

「なんだとー表にでろー！」

犬の様に吠えて、楓は聡士郎を威嚇する。だが聡士郎にとって、小型犬が吠えているようにしか見えなかった。

「ふふっ・・・なんだかんだ言つて、二人はもう仲がよさそうですね」「それは本気で言っているのか・・・？」

思わず微笑む権を見て、聡士郎はげんなりとした表情をする。

「さて、私はこれから夕飯の支度をします。松木様はくつろいでいてください。楓、行きますよ」

権はそう言うのと、台所へ向かっていった。

*

夕食が終わり暫く経った後、聡士郎と権は縁側に座り晩酌を始めていた。月を肴にして酒を飲む、いわゆる月見酒という物である。

楓は食事が終わると、自らの知識を高めるために、兵法の本を読むと言つて自室に戻つていった。白狼天狗は何も武術だけを極めるだけではないのだ。『ペンは剣よりも強し』と言うように、知識が無ければ強い戦士にはなれない。これは天狗に限らず、人間にでも該当するのだが。

権曰く、白狼天狗には文学を得意とする者もいれば、数学を得意としている者も居ると言う。もつともペン——いわゆる学問に関しては鴉天狗には及ばないのだが、それでもペンに長けている白狼天狗はいるのである。ペンと剣を両立することにより、天狗の社会は大きく発展しているのだろう。

「松木様」

ふと、権は思い出したように口を開いた。

「なんだ？」

「その・・・黄昏時に失礼な事を言つてすいません」

権はそう言つて小さく頭を下げた。

聡士郎は何のことを言っているのかと、黄昏時の事を思い返した。そして自分の護衛から逃げ出しても良いと言つた事だろうと勘付くと、困った顔をした。

「なに、気にしてはおらん。お主は人間が嫌いなのだろう？ ワシも春まで精一杯邪魔立てはせぬようにする。それまで我慢してくれるか？」

「いえ！ 私は人間を嫌つてなどいません！」

「なに？・そうなのか？」

驚いた表情で、聡士郎は言った。

「はい。そもそも私たち白狼天狗は基本人間を嫌っては無いです。むしろ友好的な関係を築いてきました。しかし、人々が度が過ぎた行為した場合、警告してきました。それにより山と、あなた達人間の友好関係を築かせようとしているんです」

それが当たり前のように権は淡々と語った。

彼女の言っている事は、間違いではない。白狼天狗は人と接する事が多かったのだ。

その理由は、人々が太古から狩猟や森林の伐採を行っていたからである。生活に欠かせない物はすべて山にあったのだ。山はそんな人々に衣食住の恩恵をもたらし、友好的な関係を築いてきた。

しかし、人間はそれを良い事に欲を出し、環境を壊すことがある。時には森を焼き払い。またある時には土地を広げる為、無計画に森林を伐採する。

そこで山の守護者である白狼天狗達は遠吠えを行って威嚇したり、木陰から姿を現して追い払ったり、人間の私欲から起こる山の怒りを警告してきた。彼らは人と山とのつながりを守る為、これを太古からこれを行ってきたと言われている。

だが人里では『山に入れば恐ろしい白狼天狗が殺しに掛かる』と間違った解釈で言い伝えられていた。これは白狼天狗に警告された昔の人間が、悪い様に噂を流していらぬ尾鰭がついてしまい、最終的に天狗自体が鬼と同様、恐怖の対象となってしまったのだ。最近では子供が悪さをすれば、妖怪の山に置いて行くと、脅しもあるくらいである。

しかし時が流れると現在の幻想郷の住人達や天狗は、その関係とは別の方向で友好的関係を築こうとしていた。狩猟区域の一部開放や、新しい神社の参拝道が設けられた事、鴉天狗が里に下りて新聞を配るなど、これらの行為はつい最近起きた事であり、人々は驚きを隠せなかったと言う。これも、変わりゆく幻想郷の改革かもしれない。

「むう。そういえば書籍に書いてあったな……。だが、現にワシは何

もしていないのに襲われた。・・・それは警告だったのか？」

聡士郎の言葉に、権は痛いところを付かれたと言った表情をした。「そ、それは・・・主に過激集団が勝手にやっている行為です。彼らは元々、白狼天狗の中で極めて武術に優れた実力者達でしたが、ある日を境に突然行き過ぎた警告をするようになったと言います。天狗の悪い印象をさらに悪くしたのは、彼等ですからね。因みに私はまだその時修行中の身でして、昔何があったのかは詳しくは知りません」曇った表情をしながら、権は静かに言った。

聡士郎はそんな権を見つめた後、目線を外し酒の入ったお猪口を口に運ぶと、権に笑いかけた。

「まあ、お主には嫌われていなくて良かった。これでワシも心置きなくお主の護衛を務められそうだ」

「そうですか」

小さく権は呟くと、立ち上がり庭に下りた。どこかせつなげな表情で月を眺めると、聡士郎に振り向いた。

「これからよろしく願います。私も覚悟を決めました」

「覚悟・・・？まあいい。改めて宜しく。だな」

一つ聡士郎は失笑すると、残りの酒を飲み干した。

文屋、射命丸文。

白狼天狗の朝は早い。

日がま登り始めた頃に起床して、剣や体術の鍛錬を行うか、独学で兵法の知識を深める。その後には朝食を取り、各自仕事の確認の為に閔牙殿へと向かっていく。大まかな任務は夜間哨戒任務を終えた白狼天狗との交代であるが、稀に「待機せよ」と実質的休暇になったり、「本殿へ出頭せよ」と重大な任務を任せられることもあった。

この一連の流れが一般的な白狼天狗の生活であった。先に述べた夜間哨戒任務の場合は変わってくるのが、基本的にはこれである。

これまでといつも通り、椀は小鳥のさえずりを聞いて起きると、布団を畳んで身なりを揃えた。庭から外に出て井戸の水を汲み上げると、それを三度ほど小さくすくい、顔を洗った。

聡士郎はまだ寝ているのだろうか、椀はふと思立った。彼は護衛であるため、椀の生活リズムに合わせなければならぬ。いつ何時もそばにいるわけではないのだが、基本は付き添わなければならない。それが、文書に書いてある露草からの任である。

「・・・走り込みだけは済ませよう」

椀はそう呟いて部屋に戻り、玄関で下駄に履き替えようとした。しかし。

「あれ?」

思わず椀は声を出した。玄関には自分と楓の下駄はあるのだが、聡士郎の履いていた草鞋が無かったのだ。

もしやと椀は思い立ち、急いで聡士郎に与えた部屋に向かうと勢いよく扉を開いた。

部屋の中を見渡すと、聡士郎の姿はおろか、部屋を使った痕跡すら見当たらなかった。厠に行つたのかと一瞬思ったが、刀は持って行かないはずである。それ以前に布団が一寸も動いておらず、支給された天狗装束にも手を付けている様子が無かった。

「くっ!やはり人間は信用できないの?あの言葉は出任せだったの!」

権は玄関で下駄に履き替えると。そのままの勢いで外に出た。

人間の足ならまだ追いつけるかもしれない。追いついた時には叩き斬ってやると権は怒りを抱えた。あんなに大それたことを言うておいて逃げだしたのだ。結局は口だけなのか。人間とはそう言う生き物なのか。少しでも認めたと自分が愚かなのか。権は頭に血が上っていた。

しかし、そんな権の怒りは空を切った。門の柱に誰かがもたれかかっていたのだ。

その誰かとは、言わずと聡士郎であった。

「来たか。ん、どうしたのだ？そんなに慌てて」

聡士郎は気楽な表情で、「おう」と手を上げた。

あまりにも唐突だったので、権は数秒時が止まった。まさか自分より早く起きているとは思わなかったのだ。

「ええ!?あ、あの・・・お早いですね」

自分の勘違いだったので権は無償に恥ずかしくなり、顔を赤く染めた。

「いつも通りだが・・・あ、すまん少し話を盛った。起きるのはもう少し遅いか」

聡士郎は不思議そうに言うと、額の汗を拭った。少し火照っている様子から聡士郎は走り込みを行って、帰ってきたのだと権は勘付いた。

「私は今から、走りこむつもりですけど・・・」

一つ咳払いをして、権はいつも通りの表情を繕う。すると聡士郎は一つ頷いた。

「お、そうなのか。では一緒にどうだ？」

「えっ？」

「不服であったか・・・？」

不思議そうに、聡士郎は言う。

この男は先ほど走ったはずなのに、まだ走ると言うのか。権は何故だか悔しい気持ちがかみ上げてきた。自分より早く起きて、なおかつ走り込みも済ましている。まるで出し抜かれた気分になったのだ。

「行きますよ！莫迦にしないでください！」

「ワシがいつ莫迦にしたのか・・・」

「してませんけど…。ああもう！私についてきてください！」

権は大声で言うとう、聡士郎の返事も聞かずに走り始めたのだった。

*

それから聡士郎と権はしばらく走りこんだ。村を抜け山道、と言うより獣道をひたすら走った。権現村から少し離れた小川で一息つくところから折り返し、犬走家へと戻ってきた。

権は普段より、意気込んで走っていた。聡士郎に出し抜かれた感じが嫌で、その悩みを打ち消そうと無我夢中だった為である。嫌な事があつたり、もやもやしたり、そんな時には体を動かすのが権の性格だった。しゃがみ込んで落ち込むより、動いた方が気持ちも晴れるのだ。

一方、聡士郎は権に着いて行く事が出来なかった。白狼天狗は大地を風のように走ることができ、多少の障害物も難なく飛び超える事が出来る。そんな運動神経に長けた白狼天狗に、人間如きがついて行ける訳が無いのだ。聡士郎は足の速さは人間の中では一般人に毛が生えた程度の実力であつたが、道が完璧に整備されていない悪道であつた為、もはや走ると言うよりもただ追う事しかできなかったのだ。

ふう、いい汗かきましたね。松木様」

さわやかな表情で、権は縁側にくたびれている聡士郎の隣に座ると、同意を求めた。

「こんな事を毎日やるのか・・・春までに身が持たんわい」

聡士郎はげんなりすると、権が座ると同時に置いた握り飯を一口だけ入れた。一般的な三角の形をした握り飯である。具が入っていないが、よく塩加減が効いて味覚を刺激し、動いた後のため大変美味であつた。

「これは旨いな。権、お主が握つたのか？」

食に勢いがついた聡士郎はがつがつと塩むすびを口に運び、あつという間に二つを平らげた。

「えっ？あ、はい。私が握りました。軽い物で申し訳ないんですけど

…」

聡士郎の絶賛に、椀は思わず照れて、頬を人差し指で掻きながら、顔を赤くした。

「そう言えばお主は食べぬのか？」

「はい、食べませんね。天狗は基本、食事と言う概念が薄いですから、朝食や昼食をとることは少ないです。食べると言っても基本はお酒と肴くらいでしょうし。あ、昨日の夕食の様に料理を作る時もありますね」

天狗は基本、酒と肴、稀に菓子しか食べない。その理由の一つとしては、彼らにとって食事と言う概念が、椀も言ったように薄いからである。人の様に必要不可欠であるタンパク質や炭水化物などの栄養素を摂取しなくとも、生きていけるのが妖怪なのだ。勿論、毎日料理を作る天狗はいるのだが、それは一般の天狗から見れば趣味の領域であった。莫迦にされると言うわけではないが暇な奴だとみられ、その趣味を露呈する者は少ない。

因みに大天狗と呼ばれる種族は酒や肴すら口に入れることが少ないと言われている。彼らは酒の代わりに霞を摂取し、肴は美しい風景で事足りるのだ。このような生活が何の支障もなく数百年も続けられるのは、悟りを開いているからであろう。

「そうか・・・ワシだけ食べるのは、申し訳ない気分になるな」

聡士郎は指先に着いた米も残さず食べて、低い声で言った。

「そんな、お気になさらないください。むしろ満足に栄養を取らせないと、怒られるのは私だと思います。客人も持て成せないのかーって」

「何度も言うが、ワシは客人ではない。仕事は果たすつもりだぞ・・・」

あくまでも椀は聡士郎を『客人』と言い、護衛として見ていない様子であった。

聡士郎は若干不快感を覚えたが、ギスギスした空気になるよりはその様に見てもらっていた方が良いと思い、深く言わなかった。別に彼女に護衛として見てもらうことを強調するのに意味も無いし、要する

に彼女を過激派の連中から守ればよいのだろうと、聡士郎も思っていたからである。

「しかし……まあ、あれだ。この先一人だけで食べるのは、ちと寂しいな」

「寂しい……？何故ですか？」

「どういう意味かと権は目をぱちくりさせて、聡士郎に問う。

「人は団欒を好む。一人で食っては飯の旨さも半減するからな。それゆえ寂しいのだ」

天狗にはわからぬかと聡士郎は言葉を付け加えると、最後の塩むすびを手に取ろうとした。

しかし、聡士郎より先に権が塩むすびを手に取ると、笑いかけてきた。

「……人間は時に良い事を思うのですね。私は基本一人で飲むことが多いですが、大勢で飲んだ時を思い返せばたしかに美味でした……。明日からはみんなで食べましょう。私もその方が良い気がしました」

太陽のような笑顔で権は言う、握り飯をおいしそうにほおばった。権は素直に良い考えと思いき口に出したのだが、聡士郎はこの時自分を気遣ってくれたのかと深く考えてしまい、とたんに照れ臭くなつた。脈拍数も上がっており、初心な少年のような気持ちになっていると思うと、さらに恥ずかしくなつた。

「も、権……。その……。だな」

「はい？なんででしょうか」

頬を掻きながら照れ臭そうに、聡士郎は権に礼を言おうとした、その時であつた。

襖が音もなくゆっくり開いたと思うと、楓が目元をこすりながら寝ぼけた表情で出てきたのだ。狙ったかのように絶妙なタイミングで顔を見せたので、聡士郎は言うタイミングを逃し、そのまま口をつぐんでしまった。

「ふああ……。おはようございます……。」

一つ大きな欠伸をして、楓は起きているのか寝ているのか分からないゆるい声で言った。

「・・・楓、顔を洗ってきなさい。私たちは今から天来寺に向かうので、後の事は任せましたよ?」

「ふあい・・・わかりました」

生返事をする、楓は寝ぼけた様子で庭の井戸に向かってゆく。彼はどうやら、白狼天狗らしからぬ、朝が弱いと言う欠点を持っている様であった。

「うおっほん。あー楓よ。おはようさん」

聡士郎は先程の浮いた気持ちを引き締めようと咳払いをし、楓に挨拶を交わそうとする。

「ああ・・・?お前にはいつてねーよ、莫迦」

そう言い残すと楓は何事もなかったように井戸にたどり着き、水をくみ上げ始めた。

「・・・これでも仲が良いと言えるか? 権よ」

「彼は照れ屋さんですからね」

くすつと権は笑う、返事を返した。聡士郎はそれを見ると頭を掻いて、困った顔をしたのだった。

*

食後一息を着くと、聡士郎は支給された天狗装束に着替えて権と共に天来寺に向かった。

天狗装束は普通の服とは違い着にくく、何よりも聡士郎の感覚では動きづらかった。その為聡士郎は嫌がったが、権に着なければ白い目で見られると言われ、しぶしぶ袖を通すことにした。彼女の立場もある、こればかりは仕方ないと納得したのである。

寺の正面門に着くと、権は門の前で待つてほしいと言い、聡士郎を置いて中に入っていた。それほど待たせることも無いだろうし、中に入っても気まずいだけだろうと、権なりの配慮であった。それに加え、天来寺に人間を入れることを極力避けたかったのもある。

聡士郎も権の言った意味に勘付いて、素直に待つことにした。門の近くの壁にもたれ掛って、懐から紙巻煙草を取り出すと、マッチで火を付けてゆつくりと煙を肺に入れた。

紙巻煙草は人里でも普通に売っている。煙管は携帯性に優れず、持

ち運びが困難であるため、近年幻想郷にもその技術が入ってきた。しかしこの世界の紙巻たばこは商品名が掛かれた箱やフィルターなどは無く、たばこの葉を紙で撒いただけの物であった。その為煙管とは対照的に安全性は優れておらず、人里での扱いは、本当の愛煙家が所望するものであると言われていた。まだまだ万人向けではない為、大きく広まっているわけではない。

もともと聡士郎は大の愛煙家と言うわけではない。付き合い上煙草を吸う機会が多い為、持ち運びが苦ではない紙巻煙草を知ると、次第にキセルより多く利用するようになった。特に里の外に出る場合、煙管を吸うために必要である煙草盆を持ち運べないのでこうして紙巻きたばこを持ち歩いてきた。

さて、聡士郎の紙巻煙草が半分ほど燃えた頃であった。

白狼天狗の一団が、天来寺の中に入って行くのが見えた。数からして一個小隊、九人ほどである。彼らは疲れ切った顔をしており、大きな欠伸をする者も居た。

「む？何だろうか…？」

「あれは夜の哨戒から帰ってきたワンころ達ですかねえ？」

ぼそりと聡士郎が独り言をつぶやくと、何処からかその答えが返ってきた。

聡士郎は無意識に、追風を抜いた。いわゆる抜刀術という物で、体をねじりながら風を切る速度で後方に一閃した。

しかし、弱い風が起きたと思うと、それは空振る結果に終わった。聡士郎は反撃を受けないように素早く正眼に構えると敵意を込め、前方を見た。

そこに立っていたのは黒き羽を持つ鴉天狗であった。短く切った黒髪が特徴である彼女は、腰に手を当てて手帳を持ちながらにこにこ和不気味な笑顔をしている。

「どうも！清く正しい射命丸文です！」

陽気な態度を示すと、射命丸文と名乗った鴉天狗は肩に掛けているバックからおもむろに新聞を取り出し、聡士郎に渡そうとする。だが、聡士郎は受け取らず、慎重に『追風』を帯刀すると、構えを解い

て彼女を睨み付けた。

「ほう、天狗はちゃんと名乗るところが素晴らしいな、だがワシの死角を取るのには感心せん」

警戒心を解かず、聡士郎は文を凝視する。彼女は一見好意的な感じに接しているが、どこか只ならぬ雰囲気を醸し出している。聡士郎は直感的に強者であると感づいた。

「あやや・・・そんな警戒しないでほしいですね。私はただ、お話をしに來ただけです」

「話すことはない。とつとと失せろ」

「むーん。これは第一印象悪かったですかね・・・」

腕を組んで考え込むように、射命丸は唸る。

「悪いも何も、ここが権現村ではなかったら深く踏み込み、切り捨てておったぞ。裏を取るとはそういう物だが？」

「おお、怖いこわい。ですが私は戦おうなんてこれっぽっちも、一寸も思っておりませんからご安心を」

「安心できぬな、お主鴉天狗だろう？ワシを白い目でみて莫迦にしておった癖に話そうなどと・・・まったく良く言えたものだな」

あくまでも友好的な態度を見せない聡士郎に、文は思い切りため息を着いた。

「はあ・・・それはきつと無知な莫迦ガラスどもですよ。と、言うか私を見たことないんですか？人里でよく顔を見せていると思えますが」
「・・・ああ、思い出したぞ。お主、文屋の射命丸か」

聡士郎は思い出したような表情をした。かつて、聞いたことがあったのだ。

人里でよく新聞をばらまいて、博麗の巫女やその他を追っている鴉天狗がいるとうわさが広がっていた。そこで十手持ちの一人が情報収集の為、彼女に接触しようと試みたことがあったのだ。

しかし神出鬼没である彼女を捉えることは難しく、その十手持ちは面倒になり諦めたと言っていた。何でもその十手持ち曰く、射命丸は興味を持った者にしか接触せず、それ以外は話すことすらないと酒場で愚痴をこぼしていた。

聡士郎は途中聞くのが面倒になり右から左に言葉が抜けていたの
で、思い出すのに時間が掛かってしまった。もつとも、そんな話題に
興味も無かったし、まさか自分がこんなことになるとも思っていな
かったからである。

「それで、文屋がワシに何か用か？」

ボリボリと頭を掻きながら、面倒くさそうに聡士郎は言った。

「はい、取材させてください」

やはりか、聡士郎は心の中で呟く。

文は好意的な表情を崩さず、笑いかけている。もちろん営業スマイ
ルと言う物だろう。聡士郎はそんな文が気に入らなかつた。媚を
売っているように見苦しいからだ。

「断る。ワシは権を待たなければならぬ」

「ええー！ 権が戻ってくるまでで良いですから！」

「そもそも、何も語る事は無い」

蚊を掃うか如く聡士郎は手を力なく振って、文と話すことを拒否す
る意思を示した。

「あらら・・・これは困りましたねえ・・・」

如何にも困ったような顔を作り、文は考える仕草をする。そして直
ぐに何かをひらめいたのか顔を上げて、再び営業スマイルを作った。

「では、写真だけでいいですかー！ ね？」

そう言う文は、肩から下げている鞆からカメラを取り出し、人差
し指を立てた。さすがに写真くらいは良いかと聡士郎は気を緩めて、
承諾する返事をしようとした。

だが、その刹那。

風を切つて勢いよく何か聡士郎の頬を通り過ぎたと思うと、その
何かは文に向かって飛んでいった。文は慌てて飛び上がると体を一
回転させ、再び地面に着地する。

「危ないじゃないですか！ 権！」

聡士郎は何事かと振り返ると、権が怖い顔をして文をにらんでい
た。両手にはクナイのような投擲用刃物を数本持っていて、唸り声を
上げている。

「今回は諦めますが、今度は独占取材をさせてくださいね。松木さん」
「う、うむ……」

少しばかり照れくさそうな表情をして聡士郎は若干流されたように言った。それを確認した文は満足そうにうなずくと、営業スマイルを崩さずに手を振りながら空へと飛んでいった。

「まったく！あの人は人の話をー!!」

ぶんすかと音を立てて、椀は空へ吠えていた。聡士郎は女性にそのような事を初めてされた為、何とも言えない顔になった。

成敗

さて、二人は文と別れた後、村を歩いていった。

村の中央通りにあるのは、主に鍛冶屋と居酒屋。そして天狗達が座り話し合うために使う茶屋があるだけで、後はほとんど民家しかない。住宅街と言われている場所は主に名家だけが立ならんでいる為。一般的な天狗達はここで住んでいた。堅苦しい雰囲気はせず、住宅地に比べ割とのんびりしたところであるため、ここは何時にもぎわっているのだ。天狗も妖怪だが人と変わらず、にぎやかな所を自然と好むのだった。

「それで、今日の任務はどうなった？ワシが着いて行っても辛くない所が良いが…」

苦い顔をして聡士郎は頭を掻いた。いくらあがいても所詮は人間。その為険しい崖や山道などは出来るだけ避けたいと思うのが普通である。

「いえ・・・その・・・非番でした」

「ほう。それは良いな。今日は早々に家に戻り。日頃の疲れを取り、しっかりと休息をとる方がいいのではないか？」

暢気な表情をする聡士郎を見て、権はため息を着いた。

「それが・・・しばらくは非番だそうで」

「なるほど、舞姫が怪我でもしたら大変だからな・・・。それとも舞の練習の為か？」

「どちらかと言えば後者でしょうね。ですが基本の形は既に教わっていますので、後は本形の稽古ですね」

「ふむ。本形か・・・。先に申した形と何か違う所でもあるのか？」

「簡単に説明しますと・・・本形は舞姫候補に伝承される形です。最初に言った形は幼いころに全て道場で習います。私たち白狼天狗が使う武術の基礎となるからです。本形はいわゆる演武の形であり、女性のみ伝承されます。ちなみに男性はまた別の、戦いに適した形を伝承されるらしいです、ですがかなり実力者でないと伝承されないと聞きますね。」

立ち話も何ですのどと、椀は座ることを提案し、近くの茶屋「双葉庵」に寄ることになった。

それなりに人もとい天狗達が座っており、雑談しながらお茶を楽しんでいる。笑い声を上げるものや、話し合いに熱がこもる者、さらには長椅子で寝ている者もいた。聡士郎はそれを見て、本質的に人里と変わりはないのだと、改めて実感した。

外の長椅子に座るとしばらくして、白狼天狗の店員がメモと鉛筆を持ち注文を取りに来る。この時聡士郎の事を見た店員は苦い顔をしたが、すぐさま愛想笑いを作った。

「ご注文は？」

「団子を二つ。あとお茶をお願いします」

慣れた口調で椀は注文をする。彼女の行きつけの店だろうかと、聡士郎は頷く。

「かしこまりました！あ、あんたが椀様の護衛かい？」

すると店員が珍しいものを見るような目で、聡士郎に声を掛けてきた。

「ああ、如何にも。人間であるが故、店の評判を崩すのであれば立ち去った方が良いか？」

先程の店員の顔を見ていた聡士郎は、迷惑をかけてはなるまいと立ち上がった。しかし店員は首を振ると、聡士郎の肩に手を置いて再び座らせた。

「客を追い出す店がどこにあるんだい？まあ人間でもお金さえ払ってくれば十分だよ！それに椀様の護衛だもの。出て行けなんて言えないわ！」

「しかし他の客の迷惑になるのではないか？人間を毛嫌いする者も居るだろう？」

申し訳なさそうに聡士郎が言うと、店員は大笑いして聡士郎の肩を叩いた。

「少なくともうちの店はそんな事気にしないね。まあ気にせずゆっくりしていきな！」

笑いながら店員は元気よく店の奥に「オヤジ！団子と茶二つね！」

と言って店の中に戻っていった。

「あのような奴も居るのか」

聡士郎は、彼女を感心した目で見た。基本天狗とは人間を莫迦にするばかりだと思っていたが、種族をそこまで気にしない人物も居るとは予想もしていなかったのだ。その為珍しく、思わず感心してしまった。

「そうですね、居酒屋と団子屋は基本あんな感じですよ。みんな商売人ですからね。最近では人間の里にも支店を出したいとか土筆が言っていたなあ……」

「ツクシ?」

「はい、さっきの元気な子ですよ。彼女と私は同期だったんです。ですが団子屋を継ぐ為、哨戒天狗に配属されましたが除隊しました」

「そうか、権と同期だったのか。しかし……組織から除隊ができるのか?」

「はい。ですけど基本は職をなくす為、稀です。主に家が鍛冶屋だったり、居酒屋だったり……店を持つ天狗は家業を継ぐために除隊する方が多いですね。あと、店を開く方も居ます。成功しなくてお店を泣く泣く畳んで、再び復帰する事もできますけど、その場合は数年道場で修行し直さなければいけません」

「なるほど……天狗の社会はどのような感じになっているのか」

「白狼天狗はそうですね。鴉天狗はまた別ですけど」
「そうか……」

天狗の集落もとい、天狗の社会は人里よりも圧倒的に管理されている。

人里は主に職選びを失敗すれば、そこで終わりである。大地主や里の権力者が持つ畑を借りるか、その田畑を耕す仕事を与えられれば良い。しかし悪評を張られて何処の職にもつけず乞食になったり、やさぐれて盗人かやくぎになるなど、多々あるのだ。その者たちがこの先どうなるかはもちろん目に見えている。

強いて人里が管理されている所は、村の自治体が生活するために必要である運河や水路を修繕。各村に掛かっている橋の補強工事。引

き取り手の無い死者を衛生面の為、里の外に捨てるなどである。

十手持ちから巫女が現れるまでにずいぶんと治安が良くなったとはいえ、まだまだ未発達な場所は多くあった。その為に、聡士郎は天狗の社会が羨ましく思えた。失敗しても、心が変わっても、最終的な職があるからだ。

聡士郎は妖怪退治の専門家を辞めたらどうなるかと悩み続けた。剣の道を極め流の人もいるのだが、他事をやる場合はどうなるのだろうか。自分の性格上、盗人ややくざになる事は出来ないだろうし、乞食となつて物乞いすることも自尊心が許さなかった。強いて言うなら道場を開くか、農民になるかのどちらかであろう。

「・・・権。おぬしらが羨ましい。ワシは天狗に生まれたかった・・・。人の余生は、あまりにも短い」

「天狗になつてもいい事なんてないですよ。上司には良くいびられますしね」

乾いた笑いをしながら権は言った。彼女もいろいろと苦勞をしているようであると、聡士郎は悟る。

「それに、松木様。あなたはまだ若いじゃないですか。いくつでし たっけ?」

「三十路だ。確かにまだやりたいことは山ほどできる。しかし、ワシはちと特殊での・・・」

「特殊?それはどういうー」

権が言葉を言い切る前であった。大きな罵声が聞こえたと思うと、店の奥が騒がしくなり、何か割れるような音が聞こえた。

「うるせえ!ツケといってくれていてんだろが!」

「あんた!いい加減にしなさいよ!一体どれだけツケが溜まっていると思うの?いい加減に払つてよね!この貧乏犬が!」

「なにイ?テメエ・・・。いい度胸してるじゃねえか!」

そう声が聞こえると同時に、土筆が店の入り口を突き破り、地面に吹き飛ばされてきた。客の天狗達は驚いたのか一斉に散らばり、何事かと土筆を見た。

土筆は痛々しく肘を抑えてゆつくりと立ち上がると、入口の方をにらみつけた。

すると、その入り口からぬっと、巨漢の男が出てきた。

顔には切り傷が多々あり、手入れをしていないようなボサボサの髪の毛をしている。そして肩には普通の槍とは違い少々短い、手槍を担いでいた。

「あ、あいつは……」

「竹峰だ！衛兵隊の竹峰春吉だよ！」

聡士郎と権の隣に座っていた天狗達がざわつく。どうやら顔の知れた男のようだ。もつとも、この狭い村であるような特徴的な顔を知らない奴は、いなさそうではあるのだが。

「土筆イ……俺は御前の事嫌いじゃないぜ？だからケガしねえうちに店に戻りな。それでもツケを払えってエ言うなら別だが？」

「うるさいわね！あんた臭いのよ！店の迷惑よ！」

肘を抑えながら、威勢よく土筆は啖呵を切った。それに激昂したのか、春吉は槍を構えた。しかし放とうとしたに瞬間に権が立ち上がり、春吉の肩を掴んだ。

「春吉ッ！やめなさい！」

「あん？テメエは哨戒隊の権じゃねえか……？とめるんじゃないよ」「止めます！あなたは何をしているのか分かっていのですか？明らかに貴方が悪いでしょう。それに、権現村で私闘はご法度です！」

「へっ。そうかい。じゃあ、力づくで止めてみたらどうだ。もつとも、あんたにできるんだったらな」

春吉はそう言うのと、権の手を振りほどき、土筆に手槍を再び構えた。薙刀の様に湾曲ではなく、直線に伸びた刃は土筆の首元に突き付けられ、今にも刺し殺しそうな勢いがあった。

「おい……覚悟はできてるか？」

「くっ……私にも誇りがある。間違ったことは言っていない！」

「なるほどな。あくまでも抵抗するか。じゃあ痛い目に会ってもらおうか！」

低く威圧した声で春吉は手槍を引き、放とうとした。

その瞬間。突如、彼の後方から高らかな笑い声が聞こえてきた。

「ふっはははは！実に愉快、実に滑稽よ！金も払えず逆上し女に刃を剥ける。これがあの誇り高いと聞いた衛兵隊所属である白狼天狗の実態なのか！これは笑いが止まらない！」

その笑い声の主は、聡士郎であった。座席をバンバンと叩きながら、心底愉快そうに笑っている。それを見た周りには同調したのかニヤリと口を思わず歪めて、莫迦にするような目で春吉を見た。

「なんだあ？てめえ？」

蟬谷に血管を浮き出し、如何にもブチ切れそうな雰囲気を出して、春吉は聡士郎を見た。

「ま、松木様!?こいつは危険です！挑発するのは……」

慌てふためき権は聡士郎を抑えようとする。しかし大丈夫だと言つて権を押しつけ、聡士郎は春吉の目の前に立った。

「ああ、そう言う事か！どおりでこの店はくせえと思つたぜ！肥溜めの臭いかと思えば人間の臭いだったか！土筆、くせえのはこいつが原因じゃねえのか？」

莫迦にする様に、見下す様に、春吉は笑い出した。しかし、聡士郎は顔色一つ変えず、呆れた表示をしながらため息を着いた。

「衛兵隊を見て恐れていたワシはなんとも情けないな。案外弱そうではないか」

呆れながら聡士郎が呟いたその刹那。鈍い音と共に頬に思い切り春吉の拳が入った。聡士郎はそのまま長椅子まで吹き飛ばされる。

「あつ！松木様！」

聡士郎の元に駆け寄り、権は安否を確認しようとする。周りは、莫迦な奴だと言わんばかりに、冷めた目で見ていた。土筆もどこか戸惑いながら視線を泳がせ、聡士郎が吹き飛ばされた方向を見る。

「人間風情が調子に乗るなよ！」

春吉は煽るような目で、倒れた聡士郎を見た。すると破損した椅子をかき分け、聡士郎はよろめきつつも立ち上がった。足元がおぼつかないのか一瞬倒れそうになるが何とかこらえ、立ち直る。

「うぐ……痛いな。しかし、先に手を出したのはお主だ。これでワシ

は正当防衛をする権利が与えられた」

思いのほか威力が通っていないのか、先程のよろめきは一切見せず、聡士郎はニヤリと口元を歪ませ、春吉に視線を戻した。

「なんだと？」

「椀、権限村では私闘は禁じられているのだな？だが、これが成敗であればどうだろうか？」

口に着いた血を拭くと、聡士郎は首を鳴らした。

「え？あ、はい。そう言う事は聴いておりません」

椀の答えに聡士郎はそうかと頷き、追風に手を掛けた。

「竹峰春吉とか言ったな。椀に危害を与える可能性がある故、護衛の名目上。お主を成敗いたす」

*

春吉はいら立ちを隠せずに行った。

人間如きが、天狗を成敗しようと言うのだ。それも理由が椀に危害を加える恐れがある為だと言う。そのようなつもりは毛頭なかったのだが、椀を守る為と言うその理由が気に入らなかつた。

手槍を構え、春吉は目の前に立つ生意気な人間の男を睨み付けた。それに答えるかのように、聡士郎は刀をゆつくりと抜刀した。日の光に反射してギラリと刃が輝き、正眼を傾けたような構えで春吉を威圧していた。

外野はその二人を、祭りが始まるかのように目を輝かせながら見ていた。

そう。喧嘩が始まるのだ。権限村では私闘を禁じられているので喧嘩もとい決闘を見るのはずいぶんと久しぶりであった。これはあくまで成敗と言う名目であるが、正直なところ喧嘩と変わらない為、外野は胸が躍ったのだ。

「最初に聞いておくが、骨は人里に送り返せばいいのか？」

人間が決闘により死んで、妖怪の山で骨を埋葬することは天狗にとっての良い気分ではない。恐怖により死んだ人間の血肉を山に返すのは山の名目上願ってもない事なのだが、誇りを抱き死んだ者の血肉はこの山に合わない。だからこそ春吉は質問したのだ。

「そうだな。ではこの村に埋めてくれ。」

だが、聡士郎はそれを知っていて、あえてそう言った。

それだけではない。この権現村に埋めてくれと言ったのだ。それを聞いた春吉はさらに怒りを蓄え、顔を真っ赤に染め上げた。

「テメエー！もう容赦はしねえ！串刺しにしてやらあ！」

春吉は殺意を槍の刃に込めて素早く放った。聡士郎は後方に身をよじらせそれを避ける。

しかし春吉は逃がすまいと、続けざまに攻撃を放った。槍は間髪入れず、突くことが可能なのだ。

槍の主な攻撃方法は言わずとも突きである。突きとはかなり厄介であり、攻撃の予備動作が少なく素早い為、見極めるのは大変困難である。刀は振り上げ切る動作をしなければならぬが、槍は引いて突くだけの動作であり、予備動作は少なく有効距離が長い分、引けば威力が乗りやすく、放てば遠くまで届く。銃や弓などの飛び道具を除けば、最も近接戦で有利な武装と言えるだろう。

その強さは歴史が証明している。刀が主に使われていたと描かれることが多い戦国時代であるが、それはまったく違うと言っても良い。刀が使用されることはほとんどなかったのだ。とある文献によると、戦国の世の死傷率は飛び道具の弓、あるいは銃などの飛び道具が圧倒的に多かったが、それを除いて近接戦闘の場合、大半が槍で占めている。あくまで刀は戦国の世が終わり、武士の魂として残っただけなのだ。

故に、春吉は負ける要素が無いと高を括っていた。奴の持っている武器は刀であり、槍とは相性が悪い武装である。手槍ではあるがこの場合はさほど普通の槍とは変わらないはずであろう。

それに、白狼天狗は長い鍛錬を積み、人間とは桁外れの力も持っている。それに槍が加われば、鬼に金棒なのだ。

また外野の誰もが、聡士郎が負けると睨んでいた。春吉は衛兵隊の中でもそれなりに腕が立ち、豪快に振るう槍捌きは衛兵隊の中では上位に入る。なおかつ相手はただの人間であり、実力の差など火を見るよりも明らかであろうと、誰もが思っていた。

「ふう。お主の突きは鋭く、肝が冷えるわい」

聡士郎ははの鋭い突きを危なげに躲しつつ、言葉を洩らした。

「喋る余裕があるのかア！貴様ア！」

その言葉が、さらに竹峰の勘に障り、大声で怒鳴った。

「では、こちらも参ろうかな」

そう言葉を洩らしたと思うと、春吉の目の前から一瞬、聡士郎の姿が消えた。

瞬時に目で追い、春吉はその姿を見つけたが一步遅い。聡士郎はその隙に左足で深く踏み込み、追風の元で、槍の柄を払った。

槍を伸ばしきった直後であった為、春吉の手元は狂い明後日の方向を突いた。反撃しようと槍を引くが、瞬く間に距離を詰められる。

聡士郎は横から弧を描くように斬り掛かった。白刃がきりめき腹部を切断するかに思えたが、それを春吉は辛うじて槍の柄で受け止めた。

「むっ？力の加減を誤ったか？」

「ぬかせッ！」

春吉は叫ぶと、聡士郎を突きとばした。そして後方に地を蹴ると、大きく息を吸い込み深呼吸をして距離を保ち再び槍を構えなおし、聡士郎をにらんだ。

突き飛ばされた聡士郎は緩やかに着地して再び追風を構えると、わずかにはにかんだ。

「未熟ではないか」

「なにイ!？」

「そんな殺気まみれの攻撃など・・・怖くもなんとも無い」

この言葉に春吉はハツとなる。

聡士郎の構えには殺気が全く感じられなかったのだ。

しかし、自分を切ろうとすることだけは感じる事ができた。この絶妙な感覚の違いが春吉を困惑させる。

先程。聡士郎が放った斬撃を、春吉は避けるのが精いっぱいであった。何とか受ける事ができたのは、自分の持つ野生の勘と言う物で、運が良かったと言ってもよかった。

対して、自分はどうかだろうか。聡士郎は自分の攻撃をいとも簡単に避けていた。槍は長い有効距離により絶対的に有利であるのに、それも簡単に詰められ、斬撃を与えられた。

つまり自分の持つ殺気が、相手にとつて攻撃の予備動作を感じるきつかけになっていたのだ。

利があるのはこちらではなく向こうだった。殺気を無茶苦茶に醸し出して攻撃をするなど、このように攻撃しますと宣言しているようなものであり、見破られるのは当然であったのだ。

それに今戦っている男は、妖怪退治の専門家である。威圧するため殺気を放つても、あらゆる妖怪と戦っており肝が据わっている為、意味が無いのだろう。

「クツ・・・クツが！殺気を持たずとして何が戦士だ！」

だが、春吉は納得できなかった。自分は殺気を醸し出し、攻撃することしかできない。白狼天狗の教えはそうであり、何よりこれまでに自分が培ってきたことが、すべて無駄だと言われたように思えたのだ。

「体から醸し出すほどの殺気を持っていたら、それは一人前の戦士と言えるのか？」

「当たり前だろうが！そうでなければ相手を威圧することもできねえ！自分が弱いと言っているようなもんじゃねえか！」

「それは弱さを露呈しているだけの言葉だな」

聡士郎はため息を着いて、呆れた表情をした。

この一言が、春吉の何かが切れる引鉄となった。怒り狂った春吉は言葉にならない叫びを出し、槍を思い切り握りしめて、聡士郎に突きかかった。

目をギラギラと迸らせ、春吉はすさまじい気迫で聡士郎に迫る。

「覚悟しろッ！人間ッ！」

狙うは首元。両手を突き出し、風を裂く速度で槍は放たれた。

あと少し、手を伸ばせば奴に届く。否定されても、春吉は殺気を放つことしかできなかった。自らの意思を突き通したかったのだ。

だがその刹那。春吉の体が切り裂かれ、血しぶきが飛び散った。

いや、そのような感覚に陥った。

春吉は何が起きたのか理解することができず、思わず震え、怯え、剣先が鈍った。

それを容易く避けると、聡士郎は春吉の懐に入り込み追風の峰で横つ腹を強打した。

ごすつ。と、鈍い音が体の中に響き、春吉はその場で跪き腹部を抑えて悶絶した。

「うぐぐつ……がはっ!？」

嫌な汗が、体から噴き出る。胃の中身をぶちまけるような気分が、体中をうねるように駆け巡る。

だが、それを何とか抑え、春吉は目の前の男を見上げた。

いったい自分の体はどうなったのだろうか。切られたと錯覚が起きた部位を触れると、血は愚か、切られた痕跡もまるで無かった。

「なっ……何が起きた……」

呟くように細い声で、春吉は自問自答する。

すると、正面に立っていた聡士郎は追風を春吉に向けた。鈍く光を放つ刃が、春吉の恐怖心をより大きくさせる。

「とどめを刺さねばならぬな」

「……ッ!？」

「貴様らの仲間……ではないか。だが同族には痛い目を見せられてな。殺さなければこちらが殺される……仕方あるまい」

聡士郎は顔色一つ変えず、追風を春吉の首元に当て、刃をゆっくり押し付けた。

血液がにじみ出て、線を描くように滴った。ぽつり、またぽつりと一筋の血液が地面に落ちて、その場に溜まる。

「首を跳ねれば、流石に天狗も死ぬだろう」

追風を天に掲げ、聡士郎が今にも振り下ろす瞬間。それを遮るように声が聞こえた。

「待ってくださいー!」

「…権? どうした?」

「こ、殺すことも無いでしょう!」

「むっ？天狗は生きるか、死か…殺すまでが勝負なのだろう？これは当然の判断ではないのか？」

不思議そうに、聡士郎は権に問う。

秋山剛牙との戦いにより、聡士郎は学んだつもりだった。天狗に慈悲は必要ないのだ。敗北は彼らにとつて屈辱的であり、死んだ方がましなのだ、聡士郎は解釈をしていたのだ。

だが、それを聞いた権はあつけにとられた表情をすると、それを否定するかのようにかんざした。

「そんな決まりはありません！剣を収めてください！もう勝負は…」
「…わかった」

聡士郎はそつげなく返事をする、権から視線を外し追風を両手で持ちなおした。そして、そのまま何事も無かったかのようか春吉の首元に振り下ろした。

「ああっ!？」

権の声と共に風を裂く鋭い音が、周りに響いた。外野は目を覆った、視線を外すものも居る。

しかし、春吉は死んではいなかった。首元寸前で、振り下ろした刃は止まっていたのだ。

「これで、勝負ありだ」

聡士郎は構えを解いて追風を肩に担ぐと、一つ、大きなため息を着いた。

*

「衛兵隊だ！道を開けよッ！」

大声と共に、春吉とは別の衛兵隊たちが姿を現した。ここの騒ぎを聞きつけて、わざわざ来たようである。二名は槍を持っておらず、帯刀している事から春吉とは別の部署だろうか、聡士郎は推察した。

「これはどういうことだ！誰か説明しないか！」

小柄だが勇ましい顔つきの衛兵が叫んだ。すると外野達はみな目を背け、自分たちは何も関係が無いと、その場から散っていった。

聡士郎はそんな衛兵と外野達を何気なく見ていると、衛兵は視線に

気が付いたのかこちらを向いて、刀に手を掛けた。

「人間ツ!? 貴様どういう訳だ!」

衛兵は親の仇かのように、聡士郎を睨み付けた。すると、膝を着いていた春吉がずいっと重くらしく立ち上がり、その衛兵を止めるかのように手を前に出した。

「春吉さん! これはいったい・・・?」

もう一人の長身ではあるが顔がどこか頼りなさそうな衛兵は答えを求める様に事情を聴く。しかし春吉は二人の衛兵に「下がれ」とだけ言うと、椀に視線をやった。

「椀・・・。借りができたな。だがあのまま切られても、俺は何も文句が言えなかつたぞ。むしろ死んだ方が、本望だったかもしれない」

「そんな訳ないです! まったく・・・どうして武芸者はそんなことばかり言うんですか。だから古いと・・・」

「なっ・・・。御前からんなことを言われるとはな。てつきり潔く死ぬとか言うかと思つたぜ。ガチガチの頭じゃなかつた・・・て、訳か」

春吉は心底驚いたような顔で言つた。すると椀はしまつたと口を両手で塞ぐと少し顔を赤く染めた。

「た、確かに私はそのように振舞っています、本心は違ふんです!」
「なにイ? そうだったのかよ」

まだ驚きを隠せないのか、感心したように春吉は椀をまじまじと見る。どうやら椀は、仕事の際には厳しく、厳格にふるまっているのだろう。

春吉は一つ息を吸うと、表情を引きしめ、今度は聡士郎に目をやつた。

「:正直舐めてかかつていた。改めて謝罪するぜ」

「なに?」

「人間だからな、腕に見合わず名ばかり売れた奴だと思つていた。だが、貴様は本当に強い。これなら椀の護衛と言つても、納得せざるをえねえな」

以外にも正直に聡士郎の実力を認めると、春吉は頭を下げた。そして再び顔を上げて、聡士郎に槍の柄を突き出した。

「俺はまだ未熟だと気付かされたぜ。今生きている理由は、それを見直せつてことだろ?」

春吉の目には、どこか精進しようといった意思がにじみ出していた。もう、先ほどのやさぐれた雰囲気は無い。

「…そうだな。そう捉えるのも悪くない」

聡士郎は頷くと、肩に担いでいた追風を器用に回し、鞘へと戻した。もうこの場で気概は加えないだろうと勘付いたからである。

「しかし不思議な奴だ。貴様はよ。まだ若いと見たが…何故そこまで悟りを開いているんだ? あんな境地、人間に到達できるとは思えねえが…」

「むう。強いて言うなら…」

どのように答えれば良いかと、迷うように聡士郎は目をつむり唸った。すると、唐突に閃いたのか目を開いた。

「踏んだ場数が、違うのかもな」

「なに…どういう事だ?」

「そのままの意味だ。ワシはまだ若い、相当長く武術を磨いたからな」

意味が分からないのか、春吉はともかく椀までもが、首を傾げた。

「むう…。まあそんな事はどうでもよい。ほれ、春吉。早く土筆に金を渡さなければならぬだろう? 生かした意味がないではないか」

茫然を見ている土筆を見て、聡士郎は腕を組み笑った。

「ちっ…。わかったよ。今回は潔く払うぜ」

春吉は懐から袋を取り出すと、その場に投げ捨てた。そして槍を肩に担ぎ、二人の衛兵を引き連れて、その場を去っていった。

こうして聡士郎の行った成敗は無事に成功したのだった。

動きだす黒雲

侵入者

数か月が経った。

季節は冬。年越しも終わり、幻想郷は白く雪で覆われていた。

それは勿論、妖怪の山でもある。ほんのり赤と黄色を散りばめた山は既に色あせており、一面は白い雪化粧で染められていた。

「いい加減嫌になるなあ：辺り一面が白いと流石に景色も飽きてきちゃう」

哨戒部隊所属の白狼天狗、犬童杏は物見やぐらでため息を着いた。髪は癖毛が入っており髪先がくるりと巻かれ、彼女も何処か幼さを感じさせる顔立ちをしていた。

それもそうである。彼女は椀より年下であるからだ。

彼女がここにいる理由。それは椀が舞姫候補に選ばれたので、彼女が小隊長を務める第二哨戒隊の副隊長である犬童杏が椀の後任を引き継ぐことになったのだ。椀は哨戒任務ではかなり優秀であったので、その穴埋めをするのにほかの哨戒小隊では役不足であり、椀の持つ能力「千里先を見渡す程度の能力」と似た力を発揮する「広範囲の音を聞き取る程度の能力」を持った彼女が選ばれたのだった。

白狼天狗の中でも、特殊な能力を持つ者はそう多くない。彼等は平均的に嗅覚、聴覚、と言った感覚が優れているので持つ必要が無いのだ。強いて言うなら攻撃的な能力を持つ者が大半である。もともと、能力は自己申告制である為、本当にその能力を持っているのか疑問である者が多いが、それは深く追求するものではないだろう。

因みに椀の持つ「千里先を見渡す程度の能力」や杏の持つ「広範囲の音を聞き取る程度の能力」などの空間把握能力は、白狼天狗達にとっては大変珍しかった。このような特殊能力を覚醒した白狼天狗は将来有望とされ、主に隊長や副隊長に任命されるのだ。

「あっ・・・煙が出てる・・・」

杏は遠くに見える人里を見て、ぽつりと呟いた。

この時期になると、人里はかなり雪が積もる為に変にぎわうことになる。深く積もると男たちは総動員され雪かきを行い、女はその男たちに暖を取らせるため、台所で甘酒や握り飯などを作り配布すると言う。これは人里で古くから行われている風習で、民俗行事の一環であるのだ。そして今まさに、その真つ最中であつた。

「お腹が減つたなあ…」

愚痴を洩らしながら杏は耳を澄ませた。

冬の山風は冷たいが、緩やかに吹く音が心地よいリズムを奏でており、小さく小川の音も聞こえる。そのハーモニーは正に子守唄のようであつた。

「あう・・・眠たいなあ」

杏は大きく体を伸ばし大きな欠伸をすると、ため息を着いた。こののどかな雰囲気を見ていると自然と眠たくなってきてしまうのは、無理も無い事なのだろう。

しかし突如、後方から生物の心拍音が聞こえた。

「えっ?」

後方を振り返ると、杏は思わず言葉が出てしまった。そこには白と黒の塗装がされた服を着た、白狼天狗が短刀を持って立っていたのだ。

「ひっ・・・!?!」

杏が悲鳴を上げる前に、白黒の装束を着た白狼天狗は彼女を背中から突き倒した。

「い、いやだっ!、殺さないで!」

杏の目元から涙がこぼれて、矢倉の床を濡らす。恐怖心の余りか荒い呼吸をして、じたばたと暴れた。しかし、思い切り押さえつけられると、彼女の耳元で黒装束の男は呟く。

「安心しろ。ころしたりはせぬ。眠つて貰うだけだ。だが・・・」

そう、ぼそりと男は言う、短刀の持った手を後ろに回し、彼女の両足の臑を軽く切断した。

「う、うわあああ・・・ふひい・・・ひい・・・」

「これではらくは貴様の村まではたどり着けぬだろう」

男は短刀を大きく振り上げると、杏の背中を思いきり柄で殴りつけた。

急激な衝撃が体に伝わると、杏はそのまま意識が遠のいて行った。

*

「それ故、心配無し。今後も護衛を続ける……と。こんな所か」書いた言葉を復唱すると、聡士郎は机の硯にそつと筆を置いた。久しぶりに字を書いたため肩が凝り首元が重くなったので、こきこきと軽く音を鳴らす。

聡士郎が今、何を書いているのか。それは人里に居る十手持ちの友人に宛てた手紙である。内容は現在の自分は今どのような状態にあるのかを、簡単に知らせるためであった。

では何故、手紙を書いているのか。それは少し時を遡り、春吉を成敗してから数日後の事である。

秋も終わりに近く、何事もなく過ごしていた聡士郎は唐突に、『十手持ち』達と交わした言葉を思い出した。

「二日経ったら戻ってくる」

こう、聡士郎は『十手持ち』達に伝えたのだ。

しかし、椀の護衛に露草の勝手な都合で選ばれてしまい、それから多くの出来事が起こり多忙であった為、聡士郎は長期の間山で過ごす事を彼らに伝えるのをすっかり忘れてしまっていたのだ。

そこで聡士郎は悩んだ挙句、友人であり、十手持ちでもある北上政直に手紙を書くことにした。自分の現状を伝えることができ、尚且つ情報を簡単に洩らさない人物として思い立ったのが、この男であったのだ。

北上政直とは人里の東村を見回りしている十手持ちである。あくまで見回りは副業で、本業は腕の良い指圧師件整体師であり、人里の住人からは何かと評判が良かった。迷いの竹林に居る八意永琳より良心的な値段で治療を行うのが人気の理由の一つでもある。

聡士郎より三つほど年齢が上だが、なにかと馬が合い、夜回りの合間を縫って酒を飲み交わしていた。

因みに、射命丸文と接触しようとして失敗したのは、この男である。

さて、渡す相手が決まったのは良いが、手紙をどのような方法で渡せばよいのかと聡士郎は再び悩んだ。自分は春までこの権現村で軟禁状態であるので、山を下りることはできない。そもそも降りることができれば、手紙など書く必要が無いのだ。

そこで権に何か良い案は無いかと聞いたところ、彼女は迷わずに射命丸文の名前を出した。文は新聞を里に配る為良く山を下りるので、頼めばやってくれるのではないのかと思ったのだろう。

しかし、聡士郎は文に弱みを作りたくはなかった。何故ならば聡士郎にとって、この村一番の脅威は彼女であるからだ。

文屋とは言わずとも情報戦略において優れている。これは幻想郷に限らず何処でも一緒の事で、根も葉もない噂を真実の様に書いてデマを流し、それは炎のように盛り上がると、たちまち周りに広がって行くのだ。いくら聡士郎が実力のある剣豪であっても、こればかりは止める術が無い。その為近い将来、自分を苦しめる危険が無いとは言えないのだ。

だが現状は、彼女に頼る事しかできなかつた。白狼天狗達は諜報隊以外は山に下りる事が無く、頻繁に人里に下りる鴉天狗達も、聡士郎に対する扱いからして信用することができない。だからこそ、顔見知りであり、人里と最も近いとされる彼女の助けを借りずにはいられなかつたのである。

結局文に頼むことになったのだが、彼女は素直に頷かなかつた。自分はいくまで文屋であり、飛脚ではないと言い丁寧に断られてしまったのだ。

しかし聡士郎は藁にもすがる思いで、文に頼み込んだ。正直伝えなくともいいのではないかと文と権は思っていたのだが、聡士郎はそうはいかなかつた。彼は信頼され、十手を預かる身となつたのだ。自ら十手を手放すのはまだ良いが、不手際で返却せざる負えなくなるのは、評判が落ちる以前に、聡士郎の誇りが許さなかつたのである。

余りにも熱心に頼み込む聡士郎を見て、文は渋々納得することにした。見返りとして独占取材の日程を彼女の判断に任せることになつたが、こればかりは仕方がないと聡士郎は了承することにした。むしろ

ろ、それで済むなら良いと、二つ返事で済ましたのだ。

こうして、聡士郎は手紙を出すことに成功したが、返答が帰つてくるとこれまた悩むことになった。その内容は以下に綴る。

——聡士郎。君が大変な事はわかった。使命を果たすが良い。だが、これだけ報告が遅いのはあまり感心しない。君の悪い癖だ。親しい者の事をすぐに棚に上げるのは良くない。そこで君に、我々十手持ちが春までに中央村を見回る代わりに、ある条件を出す。定期的に手紙を寄こしなさい。今度は年を越し、冬の中旬ごろに手紙を出すように。では検討を祈る——

と、記されていた。つまり再び文に頼まなければならぬのである。

このことを文に説明すると、彼女は意外にも引き続き届けると気前よく返事をした。彼女曰く「どうせなら最後までやりますよ」と、仕事にはきちんとしていく心意気を聞いて、聡士郎は彼女に対する見方が良い方向に変わったのだった。

「さて、これを射命丸の奴に届けなければな」

聡士郎は手紙を四つ折りにすると、丸めて紐で軽く縛る。それを懐に入れると、自室から出た。

すると、何処からか香ばしい匂いが漂ってきた。おそらく。椀が朝食の支度をしているのだろう。味噌汁と思わしき匂いが屋敷に広がっているのがわかる。

先ほど椀と一緒に走り込みなどの鍛錬を済ませておいたので、聡士郎の腹の虫が騒ぎ始めていた。

「早めに食事を終わらせて、これを届けなければな」

腹をさすりながら、聡士郎は何処か嬉しげにつぶやいたのだった。

*

さて、朝食を食べると聡士郎と椀とはある場所に向かっていた。

天来寺の正面門から右折し、山道少し歩くと、年期漂う物々しい木造建築が見えてくる。そこは白狼天狗達が武術を身に着ける道場「尖刃館」と呼ばれる場所があった。

椀はここで、舞の本形の練習を行っている。本来は門下生たちが

日々鍛錬を行って経験を積み、衛兵。哨戒。諜報と言った部署に配属が決まるのだ。

道場であるため、当然教えを説く師範がいる。人数は三人でそれぞれ剣術、槍術、体術を専門としていて、その元で天狗達は鍛錬を積むのである。もつともすべての武術を身に付けなければならぬという訳では無く、門下生たちは一度すべての基本鍛錬を行い、その中で自分が最も適していると思われる武術を選び、その師範の下で深く鍛錬を積むのだ。結果、白狼天狗を総体的に見るとそれぞれの武術をバランス良く得意としている。

因みに現在は舞姫候補の稽古がある為、門下生たちの稽古は休みとなっている。正確に言えば休みではなく、各自鍛錬を行う事と言った内容ではあるのだが、長期休暇であるので不抜けている者が多かった。

権は以前に通っていたと言う事もあって、ここに来るたび聡士郎に様々な自分の過去を話していた。最初は聡士郎の事を客人として見ていた権であるのだが、一緒に過ごしていくうちに硬い線が緩み始めたのか、彼女本来の性格をあらわにしていた。

主な話の内容は同期達とここで鎬を削り、腕を磨いてきた事。何故自分が哨戒隊に配属されたのかといった事。それから自分がどれだけ任務を行ってきた事など、さまざまである。

聡士郎はそれを、楽しみながら聞いていた。彼女は自分の事を話すのが誇らしげで嬉しそうであり、それを聞く自分も心が躍っていたのだ。

「——それで、私はいち早くそのことを文さんに伝えたのですよ。あの人は足が速いですから、すぐに権現村に伝わって・・・撃退に成功したのです！」

「ふむ、なるほど。仲が良いではないか」

「でも・・・あの人は鴉天狗ですからね。昔はいろいろやっていたので、白狼天狗からはあまり好かれていません」

しかしこの所、権は文の事をよく話すようになっていた。権は白狼天狗であるのに、文の事を異常な程に慕っているのだ。尻尾を無

意識にぶんぶん振っている所から、聡士郎はその事を容易に感じ取ることができた。

その為内容のほとんどが、種族の違いで仲が良い事をはつきりと表ざたにすることができないので、不満をこぼすと言った話であった。なるほど、だからほかの天狗の事を古いと言っていたのだ。

しかし以前、椀が文に投擲用刃物を投げた時は、あくまでも建前上仕方のない行動であったと言うが、殺す気で投げたように見えたのはおそらく気のせいではなく、聡士郎は何処かおかしくないかと不思議に思っていた。

「なるほどな。お、見えてきたぞ」

他愛ない話をしていくとすぐに「尖刃館」の目の前に到着した。

椀は何処か話し足りない顔をしたが、すぐに笑みを作ると表情を元に戻した。

既に四人の舞姫候補達は集まっており、それぞれ会話などをして時間をつぶしていた。大体は椀より年上であり、すでに女子ではなく、女性と言った顔つきをしている。

「ここまでだな。ワシはやはり入れぬのだろうか？」

「すいません。練習風景を見せたいとは思いますが、師範代以外の白狼天狗すら見ることでできないので、流石に護衛でも見せる事ができないそうです」

椀はそう言うと、申し訳なさそうに俯いた。

護衛は舞姫のそばを離れてはならないと言う決まりがあるのだが、一つ例外の場所がある。それがこの「尖刃館」の中であった。

その理由は簡単で、護衛がいなくとも先も言った通り、腕の立つ道場の師範代達が三人いるので必要がなく、加えて聡士郎に限っては人間であり、一般の白狼天狗すら舞姫の練習風景を見る事が禁止されている為、言語道断であった。つまり椀が中で舞の稽古を行っている最中の間は権限村の中のみ、聡士郎は自由の身となるのだった。

「いやなに、気にはせん。ワシは射命丸の奴にこれを届けなければならぬ」

懐から先程包んだ手紙を取り出すと、聡士郎はそれを椀に見せた。

「ああ、今日でしたか。はい、いつもの時間に終わりますので、それまでには来てくださいね！」

元氣よく権は言う、舞姫候補達の中に紛れていった。そしてすぐに道場の門が開かれると、権を含む舞姫候補達は中へと入っていた。

「ふふ．．．ワシもどこか緩んだかもしれないな」

小さく手を振りながら、聡士郎は笑みを作った。しかし気持ち悪い顔をしていると勘付きすぐに表情を引き締めると、権現村へと歩いて行った。

*

聡士郎はしばらく権現村内をぶらぶらと歩いていると、すっかり昼頃とになっていた。朝食を早く食べたこともあり、昼食をとるために財布の中を確認すると、「双葉庵」へと向かうことにした。

通貨は幻想郷内では共通であり、ここ権現村でもそれは変わらない。そもそも通貨が統一されたのはずいぶんと昔の事であり、幻想郷の歴史では妖怪の賢者たちが取り決めたのだと言われている。しかし、それが本当かどうかはわからない。一説によると、幻想郷が外の世界から博麗大結界により隔離された、明治十六年の政変が終わり暫く経った十八年ごろには、すでに決まっていたと稗田家の書く書籍では推測されていた。

その為権に頼らずとも、聡士郎は金を持っていた。十手持ちの以前に、妖怪退治の専門家である彼はそれなりにお金を所持しており、人里から出る際にある程度持ってきていたのだ。それに、ここ権現村では人里と違い物品が安く、春までに生活してゆく金額は十分に足りていた。

「ふう、だいぶ村の地図は頭に入ったか」

聡士郎は「双葉庵」の長椅子に座ると、一つ息を付いた。

すると奥から土筆がお茶と焼きおにぎりを持ってきて、床几の上こそっと置いた。

「おや、まだ頼んでいないのだが」

あたかも当たり前の様に持ってきたので、聡士郎は戸惑った顔をした。それを見た土筆はからからと笑いかけ、理由を話した。

「どうせこれを注文するつもりだろう？最近はいつもこの時間にくるし、これを頼むし。だからオヤジと相談して、作っておいたのさ！」

「いや、ワシもたまには他の物を頼むつもりだが」

「お？じゃあ何を頼むのさ？」

土筆の問いかけに、以前彼女から聞いた店を出す料理を書き記した紙を聡士郎は懐から取り出して、それを眺めた。

「双葉庵」では品書きを置いていない為、忘れぬようにと聡士郎は書き留めておいたのである。

聡士郎はしばらく唸ると、彼女に視線を戻した。

「やはりこれだ。握り飯は力が出るからな」

思わず表情を崩して、聡士郎は頭を掻きながら言った。

「ほらみろー！まあいいさ。ほかの物を頼んでも、これはオマケってことにするつもりだったから」

「いや、それは申し訳ないだろう。まだまだ金は手元にある。何処かの誰かと違ってツケはせず、ちゃんと払うぞ」

ふふつ。と、軽く笑いながら聡士郎は添え着きの焙じ茶をすする。

しかし、土筆はその誰かの事を意外にも訂正するように再び大笑いをした。

「それがさ、春吉の野郎。おまえさんに成敗された次の日にはツケを全部払ったんだよ。なんでも堕落した生活はもうしないで、鍛錬するんだってさ」

「ほお、口だけではなかったと言う訳か。感心したな」

「まあね、腐っても白狼天狗だし、お前さんに負けたのはいい葉だったんだらうよ」

「むう・・・だが妖怪は自尊心が高い。復讐のために襲ってきたらどうしようか」

「いや、襲わねえよ」

唐突に土筆と聡士郎の会話に割り込むように、野太い声が聞こえた。

二人がその特徴的な声の方に振り向くと、巨漢の男、春吉が居心地悪そうな顔をして立っていた。最初に会った時と変わらず衛兵隊専用の装備をしていることから、仕事の最中であろう。

「おう、久しいな。あの時以来か」

何事も無かったように声を掛ける聡士郎を見て春吉は表情を一瞬歪めたが、すぐにいつも通りの厳つい顔に戻ると、先程の言葉を詳しく話した。

「正々堂々、果たし状を出して挑むからな。まあ、そのころまでにテメエが生きているかどうかだがな」

「どういうことだ?」

「あん? 寿命の事を言ったんだが?」

「なるほど」

聡士郎はぽんと拳で掌を叩き、閃いた様な仕草をした。

「ところでどうしたんだい? またサボりにでもきたのかい?」

意地悪そうに土筆は春吉に言う、春吉は居心地悪そうに頭を掻いて、視線を空へと外した。

「それはもう言うな。俺も反省してんだよ…。ここに来たのは別件だ」

「なにさ?」

「どうやら、侵入者が入り込んだみてえだ」

「侵入者?」

聡士郎と土筆は首をかしげて、春吉の言葉を復唱した。すると春吉は空いている座椅子に座り槍を肩にかけると、口を開いた。

「ああ、犬童杏がやられた」

「え、杏ちゃんが!」

思わず大声を上げて、土筆は驚いた。

周りの客がなんだろうかと一斉に土筆に目をやると、彼女は恥ずかしそうに口を噤んで、春吉に話の続きをしると目で促した。

「…死んではねえ。だが足の腱を切断されていて気絶していた。背中に打撲跡があったことからどうやらそれで気絶したんだろうよ。まあ腱を切られたんだ。しばらくは立ねえな」

重い口調で言う春吉を見て、聡士郎は事の重大さにいち早く勘付いた。

「なるほど足の腱を切るか。殺さなかったのはよくわからぬが、仲間意識の高いおぬしら天狗たちの時間を稼ぐには十分な方法だ。手練れの可能性は十分にある」

「そうだろうか？だがな、これには疑問が残る。犬童杏は『広範囲の音を聞き取る』と言った特殊な能力を持っている。それを掻い潜って接敵したのは、普通じゃあ考えられねえんだよ」

うーむと唸りながら、春吉は首をかしげる。彼の口調からして、犬童杏と言う白狼天狗の能力は相当に強力であったのだろう。

だが、それすらも掻い潜ったと言う事は。

「つまり白狼天狗の持つ特性が、まるで意味をなさなかったのか？」

「そういうことだ。この侵入者には俺らの鼻、耳は役に立たないのかもしれない。今の所よそ者が入った形跡の臭いはまったく感じられなかった。つまり、頼るものが肉眼だけになるんだよ」

苦い顔をして、春吉は舌打ちをした。

「俺たちは目よりも嗅覚と聴覚が優れている。楯に限ってはそれに加え目も優れているが・・・彼奴の能力でも、探し当てるのは難しいかもな」

「なぜだ？楯は『千里先まで見渡す』能力を持っているのだろうか？判別できそうではないか？」

聡士郎の意見に驚いたのか、春吉は思わず「えっ」と言葉を洩らした。

「お前護衛なのに知らねえのか？」

「なに？なんだと？」

「アイツが見えるのは。あくまでも生物の形とその色だ。例えば能力を使えばお前は・・・青色に見えているだろうよ。人間と半妖は青色に見えるらしいぜ。それで俺たち白狼天狗と鴉天狗は朱色、すなわち赤色に見えるそうだ」

そうなのかと聡士郎は頷くことしかできなかった。彼女は昔話をしてくれるのだが、自分はまだ、楯の事を何も知らなかったのだ。そ

う思うと聡士郎は何故か無性に空しい気分になった。

「だから、見分けがつかねエだろうな。そもそも同族に使う能力じゃねエんだよ。権の能力はな」

「じゃあどうするんだい？権様の能力も杏ちゃんの能力も無意味なら、見つけることは困難じゃないか」

「だから忠告をするために村を周っているんだよ。お前らも注意するんだな」

春吉はそう言うと、聡士郎の残していた焼きおにぎりを奪い、何事も無かったように槍を担いで立ち上がった。

「む、お前」

「情報料だ。これくらいいいだろう」

勝ち誇ったように春吉は言うのと、焼き握り飯を口に運びながら歩いて行った。

*

「双葉庵」を後にした聡士郎は文に手紙を渡すために、住宅街を歩いていた。

先程、権限村内を歩いていた時に渡すつもりだったが、彼女は新聞を人里に配りに行った為、家にはいなかったのだ。別に手紙を出すことが急ぎでは無かったので、聡士郎は後回しにしたのだった。

住宅街の入り口から西側にしばらく歩き、大きな梅の木が見えてくる。そこが、射命丸文の家である。彼女の庭の梅の木は、何でも彼女が文屋になってから埋めたものであり、春ごろに美しい花を咲かせることで村の中では有名らしく、ほかの鴉天狗からは評判が良いのだと言う。

聡士郎は文を呼ぼうと玄関の扉を三回ほど叩くが、反応が無かった。まだ帰ってきてないのだろうかと聡士郎は首をかしげると、まるで狙った様なタイミングで突風が吹いた。

「おやあ？夜這いにでも来ましたか？」

からかったように声を色っぽくして、文が聡士郎の横に立っていた。

「今は昼時だぞ」

呆れたように聡士郎は一つ息を付くと、文は体をくねらせる。

「ああくそうですねえ…じゃあ夜に来てください」

「…冗談はそれくらいにしろ」

「つれないですねえ…。私には魅力が無いですか？」

もはや声も出さずに聡士郎は呆れた顔をしていると、流石の文も冗談をやめて、いつも通りの営業スマイルに戻った。

「それで？何の用です？」

やっと聞く気になったのかと、聡士郎は再びため息を着くと、懐から手紙を取り出した。

「ほれ。頼むぞ」

「あやや！恋文ですか！いやーそう来ましたかー。松木さんはロマンチストですね！」

「…」

「はい。冗談です。これをまた北上さんに届ければ良いですね？」

「うむ。昼前に一度訪れたがいなかったからな。再び頼んだ」

聡士郎は軽く頭を下げると、文は「了解しました！」と元気よく返事をして、手紙を彼女の肩に下げてある手提げバッグに入れた。

「あやっ。そういえば」

バックを見て思い出したのか文は唐突に声を上げると、そのバックの中に入っている一冊の新聞を取り出した。

「これ、余ったんですよ。いります？」

「ワシは新聞を読まぬが」

「ほら、先々週の独占取材の内容が書いてありますよ」

先々週に文から独占取材を受けたので、流石の聡士郎も興味を惹かれ、新聞を手にとった。

新聞に書かれていた内容は別に特別おかしいと言う訳でもなく、「十手持ち、天狗の村で年を越す」といった見出しの元に作成されたものであった。年越し時、様々な行事を聡士郎が淡々とこなすと言った事が書かれていた。

「勿論、この内容は村の外には出してません。あくまで権限村で私の新聞を取っている者のみにしかわたってないはずです。人里に

配った新聞は別の物ですね」

「うむ。そうか。まあ正直切り札と言われてもピンと来ないのだがな」

聡士郎はそう言って苦笑いをする、文はいつになく真剣な顔をして、聡士郎に迫ると小さな声で呟いた。

「…自覚を持ってください。権を任せているんですから」

「う、うむ。それはわかっておる。手を抜いたら命に保証はないからな」

威圧する様に言う文に思わず意表を突かれてしまい、聡士郎は身をたじろいで言葉を返す。すると文は何事も無かったように表情を営業スマイルに戻すと、人差し指を立てて忠告するように言った。

「一応、権とは付き合いが長いですから。凶暴なわんころでも飼いならせば可愛いものです」

「むう。そうなのか。正直羨ましいな。彼女の昔話を聞いておると、自然と心が躍るのだ」

何処となく楽しそうに言う聡士郎を見て、文は若干感心したような顔をしたが、何かを察したのか、どこか憐れんだ表情をした。

「ん？どうした？」

不思議そうな表情をする聡士郎を見て、文は顔に出ていたのかと慌てて表情を繕う。

「いや、別に。変な顔してました？」

「うむ。なんというか・・・言葉では説明しにくい顔をしてたぞ」

「あ、権の恥ずかしい話、聞きたいです？」

「いや、遠慮しておく。それはじきに権が自ら話すかもしれないからな。たのしみに取っておく。さて、時間もいい頃合いだ。ワシはそろそろ権を迎えに行くとするかな」

聡士郎は再び文に「では、手紙を頼んだぞ」と言うと、その場を後にした。

「…あの子の本当の過去を知ったら、松木さんはどう思うのでしょうかね」

文はひっそりと、聡士郎の背中を見ながら呟くのがあった。

白鞘の白狼

文に手紙を渡した聡士郎は、何処にもよらずに真っ直ぐ、「尖刃館」へと向かつていた。

稽古で疲れた彼女と共に、帰宅する。すでに日常と化している事だが、聡士郎にとってそれが毎日の楽しみともなっている。

いつも通りに道場の正面に立って、聡士郎は玄関を見つめると、太鼓と笛などの楽器を奏でた音が外に漏れおり、終わる気配を感じる事ができなかつた。

「早く来すぎたか：しまったな。何か団子でも買って来ればよかった」

悔やみながら言葉を洩らすと、聡士郎は玄関の石階段に腰を掛けた。懐から紙巻煙草を取り出すと、慣れた手つきでマツチに火を付ける。ゆつくりと炎は煙草を燃やし、それを吸引して煙を吐いた。

それから退屈な時間がゆつくりと経ち、紙巻煙草の灰がすべて落ちて、一通り舞の練習が終わったのか中から楽器の演奏が聞こえなくなつた時であつた。

普段は人気のない、この尖刃館へと続く道に人影が見えた。

数は一人。白狼天狗であり、正装ともいえる哨戒隊の衣装とは少し違う特殊な装飾を施された衣装を着ており、腰には二本の刀を差していた。俯いて表情を読み取ることが難しいが、椀より少し年齢が上の男だろうかと聡士郎は察した。

「おや…う」

聡士郎は意外そうに呟いた。普段は他の舞姫を迎えに来る者はおらず、何時も聡士郎だけであるからだ。他の舞姫に就く護衛の事は聴いていないので、誰かの友人か、または同じ職場の関係者か、ともかく珍しい事は確かであつた。

その男は聡士郎と同じく道場の玄関を見上げ練習がまだ終わっていない事を悟ると、先客であつた聡士郎を一瞬にらんで、石階段の隣の壁にもたれ掛かつた。

近間でその男を見ると、他の白狼天狗より華奢であることがわかつ

た。顎のラインがはつきりとして整った表情している為に、その姿まさに美青年と呼べるであろう。

しかし剣士として必要である筋肉の付き方から、自分や春吉とは違う何か特殊な兵法を身に着けた者であると聡士郎は睨んだ。それに加え、通常の刀とは大きく違い鞘が無い刀、いわゆる白鞘を帯刀している事から、その考えは確信へと変わった。天狗にはまだ知られていない流派が数多く存在していると聞いていたので、その類であろう。「不思議な刀を持っているな」

思わず、聡士郎は男に視線を向けて声を掛けた。男も視線を向けるがまるで会話に興味が無いと、冷めた表情をして鼻で笑い、うつむいて目をつむった。

「ふむ、まあ良いわ」

面白くない反応をされたため、少しふてくされて聡士郎も視線を元に戻す。どうやら友好的な態度を持っていない様だ。

しかし直ぐに、今度は男の方がそのまま突き放すような態勢で、声を掛けた。

「お前は・・・人間。松木聡士郎。不盾流の使い手・・・」

「いかにも、だからどうした？」

再び聡士郎は懐に手を入れて二本目の煙草を取り出すと、そっけなく返事を返す。

「人間であるのに、護衛に選ばれる。その実力は確かなのだろうか？」

「そうだな。ワシからは何も言えぬが」

「だが：彼女に資格はない」

唐突に、意味深な発言を男は口にした。

「なに？」

急に話が飛んだので、聡士郎は思わず男に視線を向けた。その男は冷ややかな目で聡士郎に視線を合わせ、見下したように聡士郎を見ていた。

「彼女には舞う資格が無いと言う事だ」

「お前は・・・何を言っておるのだ？」

困惑した表情で聡士郎は言うと、男はそれを鼻で笑い、再び口を開

く。

「私の名前は、銀杏木迅兵衛と申す。御前の実力、見せていただきました」

「い」

「む…？」

脈絡のない男の会話に少し戸惑いながらも、聡士郎は立ち上がった。銀杏木迅兵衛と名乗った男の纏う雰囲気が変わったため、自然と『追風』に手を掛ける。

「いやなに、私も剣を使う。ぜひともその実力を知りたいのでな」

「ここ権現村では、私闘は禁じられていると聞くが？」

迅兵衛はそれを聞くと、壁を離れて「尖刃館」の前に出た。

「では、椀を襲うと言ったら、どうする？」

「なっ貴様…。まさか刺客か？いや、だがその服装は…」

「ふん。どうとでも取るが良い。だが、御前が剣を抜かぬと言うなら、私は椀を襲う」

「ふざけるな。ワシと戦うが為に、椀を襲うと申すか？」

男の発言にいら立ちを覚えた聡士郎は思わず追風の刀身を半分抜いた。

「いかにも」

「…あいわかった。お前を敵と判断し、ここで成敗する」

容易な挑発ではあるが、乗らずにはいられなかった。この銀杏木迅兵衛という男は、脈絡のない会話とは言え、椀の事をよく知っていることは感じ取れた。それにこのままやり過ぎたとしても、もしこの男が真つ先に道場から出てきた椀を襲ったら、それは自分の落ち度になつてしまう。

「やっに乗ったか…。かの厄災を退けた十手持ちの一人。全力でなければ、失礼であろう？」

不気味に笑い迅兵衛は俯いた顔を上げた。その表情は如何にも楽しそうな顔をしている。

「あの事も知っておるのか…？里の住人は綺麗さっぱり記憶から消えておるのに…天狗は恐ろしいものだ」

冷静に言葉を返す聡士郎だが、珍しく怒りが少しだけ込み上げてい

た。

かの厄災。聡士郎にとつては嫌な思い出であり、忘れたい過去であった。それを掘り起こされたのだ。普通の人間ならば、良い気はしないだろう

「だから最初に言っておくぞ。自分は居合…銀杏木流居合術を使う。これの意味が分かるか？」

「ワシに…二本抜けと申すか？」

「そうだ。不盾流は二刀剣術であろう？もし一本だけで戦い、それにより真価を発揮できなかったと言いつつ、つまらんからな」

迅兵衛は、得意げな表情で聡士郎を挑発する。

本来、聡士郎の使う不盾流とは、二刀を使う流派であった。権現村に来てから二刀を使わなかった理由は、むやみに自分の流派を露呈するのを嫌がった事もあるが、それ以前に今まで二刀を使うような相手がいなかったのである。

因みに二刀を使う場合、聡士郎は守りに徹して攻める事を行わない。かの劍豪の様に鍛錬の為ではなく、二刀を主にして守りに使う剣術。これが不盾流二刀剣術の真骨頂であり、聡士郎が会得した流派であった。

聡士郎は言われた通りゆっくりと小太刀「衣川」を抜いて、それを左手に持ち替えると今度は追風を抜いた。両刀はギリリと鈍い光を放って、迅兵衛を威圧している。

この小太刀「衣川」はかつて聡士郎に教えを解いた師が免許皆伝時に与えられたものであり、追風より持っていた時期が長かった。この刀は追風よりも多くの修羅場を潜り抜けて思い入れが強く、まさに愛刀と呼べるものである

迅兵衛は聡士郎がやる気になったことを確認すると、姿勢を前傾にして白鞘に手を添えた。

その構えに特徴は無く、居合特有の体勢である。しかしそれ故、隙も無い。名に恥じぬ流派であることを現している。

聡士郎もいつも通り、刀をだらりと下げた。迅兵衛はそれを見て眉を一つ動かしたが、何事も無かったように聡士郎に視線を合わせて、

睨み付ける。

こうして、二人の試合が始まったのだった。

*

両者は黙ったまま、構えを解かなかった。

殺気はない。だが両者の心の内には、燃えたぎる何かがあった。

たった数分しか経っていないが、永遠と思うほど長く感じる。

これこそが、本物の試合。一瞬の気の迷いが死へと導くのだ。ただやみくもに動くのは素人に過ぎず、威勢よく掛け声を出したところでそれは何も変わらない。

百八十度。いや三百六十度に集中と言う線を張り巡らせる。

せめぎ合い、両者の魂は先を取り合う

足の指先で、ジリジリと地面を擦るように詰める。わずか数寸程であるが、両者にとっては一步と変わらない。

守りの流派と待ちの流派とは、こういう物なのだ。

風が吹き落ち葉が舞った。だが、迅兵衛は瞬き一つせず、まっすぐと聡士郎を見ていた。聡士郎は何処を見ているのか分からない目線をしていて、直感的に危険を感じていたのだ。

正面を見ているのだが、それは迅兵衛の事を見ているのか、それとも彼の持つ刀を見ているのか、まったくもってわからない。隙だらけにも見えて、かえって相手を不気味にさせる。

普通、並の剣術家ならここで飛び出してしまおう。集中が途切れているのではないかと思ひ、先を取ろうとする。特に居合は先手を取れば相手に何もさせずに切り捨てることができるのだ。

だが、迅兵衛は視線を外さず、足の指先でじりじりと攻めるだけであつた。

なぜなら、聡士郎は全てを見ていると感じ取っていたからだ。

紅葉を見るときに、一点を見るだけでは美しくない事はわかるだろう。一枚の葉を見るよりその木すべてを見る事で、紅葉は美しさが増すのである。それぞれの葉が持つ特徴的な紅の色合いを、同時に楽しむことができ、それを引き立てる木の幹から枝まで見る。これが紅葉狩りの楽しみ方である。

そう、聡士郎は正にこの視点。紅葉の目付、通称「遠山の目付」と呼ばれる技法を取っていた。

相手の一点を見るのではなく、相手のすべては勿論、その背景をも見通す。そうすることで相手の全身を見る事が出来て、動きをいち早く察知することができるのだ。

それだけではなく、相手のすべてを見通していると心に錯覚させることにより、自らの心に自信を持たせる意味合いもある。

しかし、紅葉の目付を使う聡士郎もまた、心の中では迅兵衛の事を厄介だと呟いた。

それは白狼天狗だからこそできる、超反応と野生の直感である。春吉との戦いで、その事を学んでいた。

動物と言う物は人間に比べていち早く危険や音を感知することができる。それを的確に処理できるほどの脳を持つ白狼天狗は、極めて厄介な相手なのだ。しかも春吉の様に未熟者でもなければ、剛牙の様に慢心しているわけでもない。目の前にいるこの白狼天狗は、先程述べた持ち前の能力に加え、無駄な殺気を控えており、まるで嵐の前の野原ごとく落ち着いている。

だからこそ、聡士郎にとって久しぶりの強豪であった。

——この男出来る。

両者は思わず、心の中で呟いた。

このまま永遠とも呼べる時を過ごす事も良いが、それでは一向に勝負はつかない。

迅兵衛は身を捨てる覚悟をすると、目を見開いた。

白狼天狗の持ち味である脚力を活かし、構えを解かぬまま聡士郎へと一気に距離を詰め、抜刀すると上段から振り下ろす。その白刃は弧を描くように聡士郎の頭上へと襲い掛かった。

聡士郎は瞬時に刀を上げると、鎬同士を合わせ、バツの字を作るようにして白刃を防いだ。甲高く鉄のぶつかり合う音が響き重い衝撃が加わると、同時に両者は視線を合わせた。

鏢迫り合いの中、両者は視線を外さなかった。目線を逸らせば、それだけで勝利への意思もとい執着心が負けている証拠なのだ

力では上から抑え込まれる聡士郎が不利だが、弾かれば迅兵衛が不利である。聡士郎は一般的な長さの追風、そして小太刀の衣川。連続で繰り出される斬撃を避けるのには、さすがに少々骨が折れるのだ。

勿論、聡士郎はそれをわかつている。防ぐために刃で作ったバツの字を崩すように迅兵衛の刀を両刀で滑らせて、上へと弾いた。そして体勢を崩した迅兵衛に追い打ちをかけ、追風を振るった。

迅兵衛は器用にそれを避けると、発想の構えから袈裟から切り返す。

だが、それもすべて見えている。聡士郎は迅兵衛の斬り返しを容易に衣川で弾いた。反撃しようとは半歩前に出て追風に力を込めるが、迅兵衛は持ち前の直感で危険を察知したのか地を蹴って大きく後ろに下がると、自然とは間合いを保った。

「二刀とやり合うのは、やはり戦い辛いか……！」

そうは言いつつも、迅兵衛の表情は笑っていた。その狂気じみた表情はまるで戦争異常者である。

対して聡士郎は苦い顔をして、迅兵衛を黙って見ていた。

居合からの切り替えしがそこまで上手では無い。

おそらくこれは抜刀に命を掛ける流派であり、それ以来のリカバリーを取ることをそこまで深く追求していないのである。つまり一撃必中を目的としているのだ。

だからこそ、こうして間合いを取ることは相手の有利な距離を作ってしまい、不利となる。

「ふっ。まさに不落だ……。いかなる攻撃をも受けても落ちぬ城のようだ……」

笑みを崩さず、迅兵衛は再び刀を帯刀すると居合の構えに戻った。これで、また長いせめぎ合いが始まるだろう。

だが、迅兵衛は帯刀していた白鞘を腰から外して手に持つと、そのまま居合の構えをした。

「もう時間はない……。この技がお前にとって、破城鎚となるだろう」

迅兵衛がそう言うと同時に、突如として風が舞った。

その風は迅兵衛の白鞘に纏うように渦巻いて、音を鳴らす。聡士郎はそれを見て、思わず声を上げた。

「貴様……妖術か！」

「いかにも……行くぞー！」

地を蹴ると同時に、迅兵衛は白鞘から刀身を抜刀した。

すると、それに合わせるかのように纏っていた風は刃の様に鋭くなり、聡士郎へと向かった。

聡士郎は風の刃に合わせ、勢いよく衣川を振り相殺する。しかし、衣川を振りきったその影から、迅兵衛は地を蹴った勢いに乗って、迫っていた。

一閃。

まさにこの言葉通り、迅兵衛は刀を振るった。

風を切り。音を切り。刹那の世界でその刀は聡士郎へと振るわれた。

だが、そのまた刹那。空へも届くかのような激しくひび割れた音が、一帯に響いた。迅兵衛はその音を聞く間も無く、聡士郎を過ぎ去り残心を構える。

何事かと迅兵衛は後方を見た。

そこに立っていたのは、斬撃を防ごうとしたのか追風を頭上へ構え、立ち尽くしている聡士郎であった。

だが、勝った。手ごたえは軽かったが、勢いともに威力も十分であった。

迅兵衛はそう思ったが、突如として両腕が激しく痙攣を起こし始めた。

「なにっ……」

痙攣を起こすだけではなかった。迅兵衛の持つ白鞘「天切」の刀身が、中央からぽつきりと折れていたのだ。

迅兵衛がそれに気が付くと同時に、天切の折れた刀身が、残心の為に彼が膝を着いた手前へと、突き刺さった。

何が起きたのだろうか。迅兵衛が丁度、疑問を持った時であった。後方にいた聡士郎がどきりと追風と衣川を落として、膝を着いた。

「ぐっ…相殺しきれなかったか」

じわりと、聡士郎の胸部から横腹に掛けて、血がにじみ出ていた。そう。風の刃を相殺した聡士郎は一瞬だけ反応が遅れてしまい、迅兵衛の放った白刃の威力を完璧に打ち消す事が出来なかったのだ。

それ故、折れてもなお勢いが続いた天切は聡士郎の胸部から横腹に掛けて、その刀身で切り傷を与えたのである。絶対に折れることは無い追風であっても、威力を吸収することはできなかったのだ。

辛うじて幸いであったのは、体を両断することに至らなかった事であるが、深く切り込まれた傷は人間にとって十分すぎる深手であった。

「…秘儀疾走抜刀。よもや弾かれ様とは…」

自分の奥義に一矢報いられ、驚いた表情をしつつ迅兵衛は落ち着いた声で言うと、残心を解いて立ち上がった。

「不盾流劔崩し…。これ…で、お主は満足に剣をふるえ…まい。もつとも刀を折ったゆえ、無駄であったか…」

青白い表情をして、聡士郎は腹部を抑えつつよろめいて立ち上がった。

「フン。落城せり…か。これでお前はもう不落ではあるまいな。所詮人間が作り出した流派などこんなものだ。天狗の流派には勝てまい」興味が失せたのか、迅兵衛は鼻で笑うと、折れた刀身を拾って、「天切」を鞘へ戻した。

「そう…か。ワシは…負けた…か…」

聡士郎が途切れとぎれに言葉を発すると同時に、「尖刃館」の門が、勢いよく開かれたのだった。

*

開かれた扉から最初に飛び出してきたのは、師範代である薙刀を持った女性の白狼天狗と、舞姫候補の一人だった。その舞姫候補の一人は瞬時に帯刀していた櫛の少ない刀、同田貫を抜き放ち、師範代と共に石階段を下りて聡士郎と迅兵衛に武器を向けた。

「迅兵衛様！お怪我は？」

「ああ、大事ない」

出てきた舞姫候補の一人は、聡士郎よりも明らかに軽傷である迅兵衛に言葉を掛けると、安心したような顔をした。どうやら迅兵衛はそれなりに地位の高い天狗のようである。

師範代は今にも薙刀を振り回しそうな表情をして、出血がひどく、辛うじて立つことのできる聡士郎に問いただした。

「貴様！何をやっていた！」

「成敗を…したのだ。だが…ワシが負けた…」

痛々しく、さらに力なく言う聡士郎を見て、舞姫候補の一人は思わず目をそむけてしまった。だが、師範代は冷徹な表情になると、聡士郎に薙刀を突き付けた。

「ふざけたことを…！これは私闘行為だぞ！」

「何を言うか。ワシは護衛としての務めを…果たしたまでだ。私闘行為ではあるまい」

あくまでも成敗だったと言い張る聡士郎を見て、師範代はいら立ちを覚えた。すると、迅兵衛が二人の間に割って入り、師範代をなだめるように口を開いた。

「自分が唆したのだ。戦わなければ権を襲うとな。その為、この男に罪はあるまい。だが、護衛としての任は果たせなかったようだ。この通り、自分に敗北したのだよ」

迅兵衛は鼻で笑うと、道場の入り口から気配を感じた。振り返るとそこにいたのは言わずとも権と、もう一人の舞姫候補であった。

「松木様!？」

青白い表情で今にも倒れそうな表情をしている聡士郎を見て、権は石階段を駆け下りると聡士郎の元へ向かった。

「そんな…いったい何で…」

あたふたとすると権は周りに視線を配り、聡士郎に肩を貸すように促す。だが、誰も聡士郎には近づかなかった。その表情は聡士郎が人間であるので、関わりたくないといった様子である。

権はそんな天狗達に呆れ、聡士郎の着ていた羽織を破り簡易的な包帯を作ると、急いで止血作業に取り掛かった。聡士郎の体に支障が無いように、かつきつく包帯を縛る。

「椀よ。お主の護衛がこうなってしまった以上。こやつが回復するまでは、うかつに外に出ることはできないな」

止血作業が終わっても、意識がもうろうとしてぐったりとしている唎士郎を抱えた椀を見て、迅兵衛ニヤリと笑いながら言った。

「迅兵衛様…どうしてこんなことを…!」

「お主には才能があっても、血族的に舞姫となりて舞う事は許されるのだ」

「貴様…そういうことか!」

抱える椀を押しつけて、唎士郎は立ち上がると目をガラガラと迸らせ、迅兵衛を睨み付けた。その眼はいつもの様に落ち着いた眼ではなく、今にも襲い掛かりそうな、獣的な目であった。

しかし力尽きたのか、唎士郎はまるで糸の切れたマリオネットの様に、がくりと力を失って、意識を失った。

そのあまりにも恐ろしい唎士郎の顔を見て、迅兵衛は一瞬たじろぐがすぐに涼しい顔を作ると、椀に対して再び口を開いた。

「舞姫候補が稽古を休むと、どうなるかわかるだろう?」

「経験の不足で…舞姫になる事が出来ない…?」

「そう言う事だ」

言葉に異を唱えるように、師範代は迅兵衛向かって薙刀を向けた。

「つまり椀を舞姫候補から外す為に、この人間を切ったと言うのか!」
「ああそうだ。その為これは私闘である。決まりを破り、仕掛けた自分が悪いのだ。だが、舞姫にはふさわしき者になる必要がある。椀は確かに特質的な能力を持ち合わせ、その功績で舞姫の候補となる資格を与えられた。しかし、所詮犬走家は一兵の成り上がり過ぎない。舞姫になる事は無いとしても僅かに可能性があるのなら、その芽は摘み取らなければならぬのだ。故に自分はこの権現村を良き方向へと導く為に、あえてそうした。謹慎なら受け入れよう。それでこの村が良き方向へ向かうのであれば、自分は本望だ」

まるで自分のやった事に非が無いと言わんばかりに、迅兵衛は堂々とやった。しかし、目線は師範代を向いている訳では無く、道場の入り口、その立つ一人の舞姫候補へと、向けられていた。

「しかし、こうしたところで誰が候補になるかは分からぬのだぞ？」

師範代は若干戸惑った顔をして、迅兵衛に問う。

「それはわかつています。ですが少なくとも権にはならないでしょう。可哀想だがお前の生まれをの呪うがいい……。舞姫を引き立てる巫女になるだけでも十分ではないか」

一兵からは十分に出世してたことになるぞ、と迅兵衛は付け加えると、周りの天狗達に興味を無くした目をして、道場の入り口へと向かった。

「ああ……隊長。自分の身勝手な行動をお許してください。ですが舞姫になるのは貴方しかいないのです……」

膝を着いて、迅兵衛はその場に立っていた舞姫候補に言う。すると彼女は、迅兵衛に向かって思い切り足蹴りを放った。

「バカ者め！余計な事をしておつて！これではこの私、犬伏柊が命令した様ではないか！」

「いえ、これはあくまで自分の独断行動です。貴方の名は汚されません……。それに自分は人里の十手持ち、不落の松と一手交えたかった。それだけでございます」

蹴られてもなお、紳士的な態度を示し、迅兵衛は地面にこすりつけるように深く頭を下げる。柊は若干不快感を覚えつつも、まあ良いと言つて腹を立てた自分の心を落ち着かせた。そして迅兵衛をその場から立たせると、石階段を降りて、権と聡士郎の元へと向かう。

「私の部下が迷惑をかけたな……すまぬ。だが、迅兵衛の言う事も間違いないのではないのだ……。権よ、正々堂々と競い合いたかったが、誠に残念であった」

「そんな……私にはもつたいないお言葉です」

そうは言う権であるが、心の中は違った。

自らの身分から起きたこの騒動。それに巻き込まれた聡士郎は死にそうである。その原因を作った自分、そして犬伏柊を許すことはできなかつた。

だが、同時に疑問が湧いた。なぜ、自分は聡士郎の事について腹を立てているのだろうか。客人とはもう見てはいないが、自分を守つ

てくれる護衛として見ていた。自分の話を聞いてくれ、話しやすい相手。ただ、そう思っていた。それ故、こんなに苦しんでいる聡士郎をみても、仕方がないと割り切れるはずである。だがそれはどうしてもできず、納得もできなかった。

「…では私はそろそろ帰らせていただく。師範代様。明日もいつもの時間でよろしいですか？」

柊は椀から視線を外すと、師範代に向かって問う。師範代は若干眉を動かすと、「ああ、そうだ。問題なく明日も行おう」と言って、返事を返した。

「では。また明日に」

丁重に柊はその場の人物たちに頭を下げると、迅兵衛を連れてその場を後にした。椀はそれを、ただじつと、睨みながら見つめていた。

*

聡士郎は急いで、椀の家へと運ばれていった。

あれから椀は必死に師範代達に頭を下げ、自分の家までで良いので聡士郎を運んでほしいと、頼み込んだのだ。白狼天狗は言わずと仲間意識の強い種族なので、椀の必死の頼みを断ることはできず、仕方なく聡士郎を犬走家まで運ぶ事を承諾したのだった。

家へと運ばれた聡士郎の為に、椀は楓を使い医者を呼んだ。医者はすぐさま治療を行ったが、その容態を見て顔をしかめた。

傷は深く腸が外に出る寸前であり、非常に危険な状態であった。幸いにも止血作業の効果があり、出血多量で死ぬことは無かったが、傷からくる激しい熱と発作に聡士郎は襲われ、どちらにせよ危ない状態であったのだ。

医者は冷静に切り傷を縫ってそれを塞ぐと、いくつもの秘薬を調合した薬を聡士郎の切り傷に塗って新しく包帯を巻いた。そして、安静にするようにと椀に伝えた。峠は越えたが、後の事はこの男に掛かっていると医者は椀に伝え、家を出ていった。

「松木様…」

椀は聡士郎の寝る布団の横に座り、じつと顔を眺めていた。

自分の任を果たすために聡士郎は銀杏木迅兵衛と刃を交えた。こ

の権現村の五本指に入る剣士である迅兵衛に、人間如きが勝てるわけが無い。相当腕が立つとはいっても所詮は普通の人間。必ずその強さには限界があるのだろうと権は思った。

だが、頭では分かっている、何故か権は引つ掛かっていた。聡士郎の強さは単に剣を極めている強さではない。どちらかと言うと長い年月をかけて、悟りを開いているようである。だからこそ、負けた事が信じられなかった。

もつと、この人の事を知りたい。

権はふと、そう思った。

翌々考えてみれば、自分は聡士郎に都合の良い過去ばかり話している、聡士郎の事を何も知らなかった。目を覚ましたら、話してくれるだけの過去を聞きたい。権はそう思った。

それと同時に、権は不思議な感情も抱いていた。

本心では人間を好ましく思わなかったが、今は聡士郎を許せていた。

人間であるが、普通の人間とはどこか違う。そんな気がしていたのだ。

様々な思惑が権の中に渦巻き、権は聡士郎の手のひらを掴んだ。

「早く…目を覚ましてください…」

権は掌を強く握ると、深く天に、祈るだけであった。

靈魂修行

暗闇の中、聡士郎はただもがいていた。体にまとわりつく激しい炎。

これは痛み。迅兵衛に切られ、それが熱を帯びているのだ。

——まだまだ未熟だな。聡士郎よ。

唐突に声が聞こえた。その声は酷く枯れて、それでも落ち着きを感じる声であった。

——お主は何処までも未熟だ。

そんな事は無いと、聡士郎は大声で叫びたかった。だが、声が出ないのだ。胸部から腹部に伝わる痛みが、全身に広がり、声すらも出せないのだ。

——分かるぞ。お主はそうではないと言いたいのだろう。

薄々わかっていた。この声の主は、自分が良く知っている人物だ。絶対的な剣の達人。古来もつとも武に長けたと言っても過言ではない。自分の師匠。

「鞍馬様…か？」

絞り出すように、聡士郎はしゃがれ声で言う。

——儂の教えを間違った解釈で理解したお主を、解き放ってしまった。だが、お前にとつては間違いではないのだろう。自らの流派を開拓したのだからな。

だが。と、鞍馬は一つ間をあける。

——それは儂の剣とは程遠いものだ。

それは当たり前である。鞍馬から教わった「靈魂夢想流」を聡士郎は嫌っていた。だからこそ、守りの形のみを応用し「五輪書」を熟読する事で、鎧兜は必要なくとも傷一つ付かぬ護身流派である、不盾流を開いたのである。

長い魂の修行から、聡士郎は鞍馬の教えた靈魂夢想流に疑問を持った。魂を解き放ち、悪霊を切り伏せ、人をも切り伏せるその流派。それは今の幻想郷で、求められている流派とは違うと思いつたのだ。

しかし妖怪と戦う事を考えて、鞍馬の教えた靈魂夢想流は有効では

あつた。現に聡士郎は鞍馬の元を十五の時に離れ、妖怪退治の専門家として仕事を始めた。そして有無言わず、悪事を働いた妖怪を倒し、ただ慢心をしていた。

だが、とある人物と出会うことにより、それはまた大きく変わった。聡士郎にとつてその出会いは、鞍馬に剣を解かれた時と同様、自分の何かを変えたのだった。

——あの女の言っていたことが、お主の志となつたのか？

おそらくはそうであろう。たった少しの出会いであつたが、聡士郎の考えを変えた。

妖怪とは只切り伏せるだけでは駄目なのだ。切り伏せることだけでは、憎しみしか生まれない。そう彼女は聡士郎に言った。

過去の人里では、妖怪とそこに住む妖怪退治の専門家のいざこざが多々あつた。妖怪退治の専門家は自分の力を証明するため力のない妖怪を切り伏せ、それに怒りを覚えた妖怪の仲間がその専門家の子供を殺すなど、最悪な治安状況であつたのだ。

憎しみが憎しみを呼ぶ連鎖、これこそがまだ統率されていなかった人里の現状であつた。

だからこそ、十手持ちは彼女の思想を志して、共に活動を始めた。妖怪を成敗するだけでなく、横暴を働く妖怪退治の専門家も更生する。これが人里で求められたことだつたのだ。

その甲斐があつたのか、妖怪の賢者が人間を保守する考えを持ち、十手持ち達の努力もあつて治安の維持を確定することに成功をした。そして、確定してから暫く経つた後、新たな博麗の巫女が出現すると同時に彼らは仕事を失い、自分たちの役目が終わった事に気付くと、それぞれの持つ本業へと戻つていった。

——お主らが幻想郷を間違つた方向に進めた元凶であることを理解しておるのか？人と妖怪は本来合間みえる存在である。だからこそ儂の教えた剣は有効であつたのだぞ？

「ですが鞍馬様。それがしはそれでよかつたと思うのです。それがし達のような、もう古い時代は終わりを告げたのです…。貴方の孫も、そう思っているはずだ」

——…まあ良い。だがお主はその剣ゆえ、あの白鞘の天狗にも負けたのだ。儂の教えた流派であれば負けることは無かった。

恐らくそうだったのかもしれない。靈魂夢想流は攻撃的な流派であり、尚且つ防御にも優れている。もし靈魂夢想流を使えば、あのように中途半端な守りをすることは無かったのかもしれない。

だが、それはもう結果に過ぎない。くよくよして顧みても何一つ変わらないのだ。

自分は負けた。

たとえそれが神の悪戯であっても、負けたのだ。

——同じ二刀を使う流派。二天一流よりもはるかに弱い。奴も不服であろう、自らの流派を改悪されたのだ。

「それは…」

——そもそも、お主は目指す流派の特性をわかっていないから、何時まで経っても未熟なのだよ。

その言葉に、聡士郎は首を傾げる。

流派の特性をわかっていないとは、どういうことなのだろうか。自分が開祖である不盾流。故、その特性は全てわかっているはずである。だからこそ、鞍馬の言った意味が分からなかった。

——儂の流派は何であった？

「広い視野を持ち、迫りくる相手を無心で切り伏せる。三六〇度に緊張の線を張り、死角をも無くす…。さすればおのずと敵などいない」

——そうだ。だが、それは今の流派も同じである。可笑しくはないか？つまりお主は儂の流派をそっくりそのまま、映しているに過ぎないのだぞ？いや、改悪しておるな。お主の目指す流派は、儂とは違うのだろうか？ならばなぜ、真意まで同じにするのだ。

その言葉を聞いて聡士郎はハッと、閃いた。

剣の道は一つではない。

それなのになぜ真意まで一緒にしていたのか。不盾流は靈魂夢想流と決別した流派にするはずであったのに、何故真意は同じになってしまったのか。

——簡単な事だ。お前は流派を開く以前なのだよ。未熟者が開く流派など笑い話にすぎん。

「ならば…それがしの流派とは…いったい何なのですか!」

聡士郎は叫んだ。

すると、暗闇の中でもがく聡士郎の目の前に、ふらつと白い影が現れた。

顔には天狗の面をかぶっており、白い髪は後ろで結っている。聡士郎と同じく着流しに羽織を着た姿をしており、彼の隣には白玉の様な浮遊物が浮いていた。

この男こそが、かの有名な武将にも剣を教えたとされる大天狗。鞍馬天狗であった。

「…お久しゆう、ごさいます…」

聡士郎は体にのたうち回る痛みをこらえつつ、膝を着いて頭を下げた。

——儂の孫も、今は迷走をしているようだ。だが、聡士郎。お前は孫よりも上を行き、自分の流派に迷っている。

「…はい」

悔しさを押し殺して、聡士郎は頷いた。

鞍馬はそれを見て鼻で笑うと、唐突に刀を聡士郎に向かって振るった。

聡士郎は瞬時に反応して、暗闇の地を蹴ると後ろに後退する。しかし、鞍馬は追い打ちを掛け、続けざまに剣を振るった。

「鞍馬様!何をつー!」

——久しぶりの再会であろう?ここで今一度、機会をやる。

「機会…?まさか…」

——そうだ。お主が自分の流派の真意を突く。その機会を与えてやる。まずは、儂が相手をしてやる。

*

聡士郎の寝る布団の横で、椀はこくり、またこくりと頭を上下に動かしていた。

昨日の事件からすでに夜は開けて、朝の陽ざしが部屋に差し込んで

いる。権はそれまでずっと聡士郎の容態を見ていたのだ。そして今になって、疲れが彼女に押し寄せてうつらうつらとし始めたのだ。た。

「……っは!? いけない。眠ってしまったのは……」

権は自分に言い聞かせるように独り言をつぶやいた。眠っている聡士郎に視線を戻して、再び容態を観察する。

どうやら医師が行った治療の甲斐あって、聡士郎の顔色は良くなっていた。熱もすでに引きつつあって、全身から湧き上がる熱気は感じることがもう無いと言つてもいいだろう。

しかし、聡士郎の表情はあまり良くは無かった。何かうなされてるような、とても苦しそうな顔をしていたのだ。

「……悪夢でも見ているのでしょうか」

心配しながら、権は聡士郎の額に乗せている手拭いを取ると、彼女の隣にある水の張った檜の桶にそれ入れて再び湿らせる。そして軽く絞ると、再び額に乗せた。

それでも聡士郎の表情は和らぐことは無かった。むしろ動きが激しくなつて、胸に掌を乗せるとかきむしるように動かし、もう一つの腕は震えているが勢いよく、布団の外に出した。

「っ……」

無意識に、権は布団から出たその腕の掌を握った。

これでどうかなるわけではないだろうが、少しでも楽になつてくれる事を願つての行動であった。片手では足りないと思つたのか権は両手で握つて、ひたすら言葉を連なつた。

「心配ないですよ……怖くないですよ……私が着いています……」

聡士郎はどのような夢を見ているのか分からない。だが、人に手を握られる事は時に心強さを与え、安心させる効果がある。だからこそ、権はその手を優しく握り時に摩つた。

その後も権はうつらうつらとせず、懸命に聡士郎に付き添い、暫く時が経つた頃であった。玄関を叩く音と声が響いてきた。

「権、いますか? 楓くんでもいいですよー」

誰が聞いても、耳障りではなく心地よいと思えるその声の主は射命丸文であろう。

どうしたのだろうかと権は思い、立ち上がろうとする。だが、それよりも先に楓が玄関を開いたのか、ガララと音がして、下駄の軽い足音が聞こえた。

「楓くんありがとうございます。では入りますね」

「あ、勝手には言っちゃだめですって!」

困ったような楓の声もむなしく、文は強引に玄関から廊下上がったのかドタバタと足音が聞こえた。そして、この聡士郎の部屋の扉を開いた。

「権……」

「文さん……」

二人は少しの間お互いの表情を見つめ合い、文から先に目線を外すと権の隣に座った。

「松木さんの、お見舞いに来ました。彼、負けたそうですね」

「はい……。ですが相手はあの迅兵衛様です。さすがに人間では肩の荷が重かったのでしょうか」

本心ではないが、権はそれが当たり前であると口にした。

だが、文は再び権の顔を見て、顔をしかめる。

「肩の荷が重い?それは違うと思いますよ」

「えっ?」

「おそらくこの人は、迅兵衛にも勝てる実力を持っているはずですよ」

文はそう言うと、胸元のポケットから手帳を取り出し、それを開く。「私、少し気になったんですよ。貴方達白狼天狗の主である真神露草から信頼を得て、権の護衛となった……。普通、可笑しくは無いでしょうか?あの白狼天狗の主が人間を信頼したのですよ?」

言われてみれば、確かにそうであった。何故人間を、この松木聡士郎をわざわざ権現村に迎え入れたのだろうか。村の人々は受け入れたものが多かったのだが、白狼天狗の上層部は人間を差別する考えを持つ天狗が多いので、絶対に許さなかったはずなのだ。当然権も、その疑問は持っていた。

「何故・・・でしょうか？」

「気になった私は、いろいろと調べました。最初は直接聞こうと乗り込みましたが、貴方達白狼天狗の幹部たちからは当然何も教えてもらえませんでし、私達鴉天狗の幹部たちも、それは一緒でした」

「え、鴉天狗の方々も何か知っているのですか？」

「後になって、なるほどと、気づかされた感じですね」

「ここ権現村では当然ではあるが、鴉天狗も多く住んでいる。その為白狼天狗の幹部達が聡士郎を受け入れたとしても、鴉天狗の幹部たちが受け入れるとは到底考えにくく、ましてや犬猿の仲であるため、現在の与党と野党の様に反発する事は明らかであった。

「この人の過去。それは厄災と言われている『がしや髑髏の暴走』のから、ヒントを得ました」

がしや髑髏の暴走とは、幻想郷に起きた巨大な厄災の一つである。

しかし、幻想郷に住む住人達や、天狗と河童の様な古参である妖怪ですら知るものが多くはなく、公言に出ることはほぼ皆無と言っても良かった。

その理由として、上白沢家が関係しているのだが、その多くは謎に包まれており幻想郷の歴史を書き留めている「幻想郷縁起」にも記されていないかった。しかし稗田阿求による一説によると、妖怪の賢者が上白沢家の協力の元、意図的にこの事を無くしたのではないかと言われている。

「えっと・・・それはいつたい？」

「詳しく話すと話題がそれてしまうのでそれは流します。あの時何が起きたのかは残念ながら詳しくはわかりませんがしたからね」

少し悔しそうな顔をして、文は呟いた。

「さて・・・それでその厄災には、十手持ちが関係していたらしいのです」

「あ、なるほど。それで文さんは十手持ちに聞きに行ったと？」

「はい。わんこの癖に良い勘ですね」

文は権を茶化すが、表情はいたって真剣であった。どうやら悪意なく言ったようである。

「知っていると思いますが私は十手持ちのとある人物に手紙を渡すように言われています。だからこそ、接触するのは難しくありませんでした」

今頃になって、権は気が付いた。文が何故、あんなに気前よく聡士郎の頼みを呑んだのか。それはこの事、つまり幻想郷の謎のひとつである『がしや髑髏の暴走』を解き明かすために、あえてパイプを作ったのだろう。聡士郎と接触した時からすでにこの厄災と十手持ちの関係を知っていたのだ。

文は数少ない、『がしや髑髏』の厄災を知った人物、もとい天狗である。理由としては千年以上この幻想郷にいたので、彼女は鴉天狗の中でも地位が高いからである。

しかし管理職止まりであり、いわゆる軍隊で言う佐官に上がることはできない万年大尉の扱いであった。だが一兵からのたたき上げである彼女だからこそ、この厄災の事を知る権利があったのだろう。

「そして、その人に話を聞いたのですが、面白い事がわかりましてね」「面白い事ですか…?」

権は文の言葉を聞いて、思わず固唾をのんだ。

「はい。先代の巫女を殺したのは、松木聡士郎。おそらくこの人です」話しが急に飛んで理解できなかったのか、権は思わず耳を疑った。しかし文の顔は真剣その物であり、それは真実であると、権は悟った。「何度も言いますがこれは正確な情報ではないかもしれませんが。事実、十手持ち皆が被疑者であるらしく、この人だけで殺したとは言えないのです。残念ながらも殺したのは教えていただけなかったのですが、とどめを刺したのは、間違いないそうです」なるほどと、権は頷いた。

つまり聡士郎は、絶対的暴力を誇った先代の巫女を殺した一人であるのだ。それもとどめを刺したとあれば、その実力は計り知れなく高いと、誰もが思えるだろう。恐らくそのことを知っていた双方の上層部は、一致合意をしたのだ。

だが、権は疑問を持った。本当にそれだけなのだろうか、何かほかにも理由があるのではないだろうかと文に目線を促す。

すると、文はその権の意図を感じ取ったのか、首を振って大げさに手を上げた。

「これ以上はわかりませんでした。松木さんの過去も聞こうと思いましたが、それは本人に聞けと言われましてね……。ですが先代の巫女を殺したと言う実績は、確実に大きいと思います。だからこそ、実力は信頼に値する人物であると、白狼と鴉の幹部たちは思ったのでしよう」

残念そうに、文は呟いた。どうやら聡士郎個人の過去は、本人の了承が無い以上、流石に教えてもらえなかったようである。

「そうですか…」

「おそらくこの人が負けたのは、何かしらの理由があるかもしれませぬね」

その言葉を最後に、文はいつも通りの笑顔を作って権ににこにこ目線を向けた。

「時に権。貴方はこの人の事を好いているのですか？」

「えっ……！」

余りにも唐突に切り出す文に、権は思わず顔を真っ赤にしてたじろいってしまった。

「隠しても無駄ですよ。何でも松木さんに自分の過去の事を嬉しそうに話しているとか？恋愛に興味が無いのか媚を取らないとは思ってはいましたが、まさか人間に好意を抱くなんて……。権は物好きですねえ」

にやにやといやらしい笑顔を作って、文は権をからかった。これには権も黙ってはおれず、思わず文につかみかかる。

「そんなわけ……。無いです！ただ、その……。あの人とは話がしやすいだけでっ！」

権は文の顔を掴むと頬を引っぱり、攻撃をする。文はそれを辞めさせようと、権を押しして抵抗するが権は一向にやめようとしなかった。「ちよ、ちよつと待ってくださいって。あ、松木さんも嬉しそうに語っていましたよ。権が過去の事を話してくれて自分はうれしいんだーって」

「えっ?」

そのことを聞いた権は、思わず動きを止めた。自分ばかり話していたので迷惑ばかりかと思ってしまうのだが、どうやらそうではなかったようで、「そっか・・・よかった」と、自然と顔がゆるんでしまった。

「:やっぱり本当に好いているじゃないですか」

「そんなのじゃないですー!」

恥ずかしそうに権は赤らめた顔を隠す様に両手で顔を覆う、しかし尻尾がぶんぶんと振っており、隠しきれていなかった。

文はそんな権の事を優しく、慈愛の含んだ目で少しの間見ると、すぐに顔をしかめた。

「ですが権、あなたは本当の過去を語ってはいないでしょう?」

「っ・・・!?!」

恥ずかしそうにしていた権はその言葉により一気に冷めて、むしろ顔を蒼くした。

「ずるいですよね。この人は権の事を優しい白狼天狗だと思っ
ていますよ」

「それは・・・その・・・」

先程の表情とは打って変わり、権は辛いことを思い出すような顔をして茫然と文を見つめた。

文は権のその表情を見ると、その場から立ち上がって帰り支度を
する。

「もし、本当にその人の事を好いているのであれば、目を覚まし次第話してあげなさい。そうすればやっと対等になると思います。松木様
がもしあなたの過去を受け入れなければ、きっとその程度の人間だと言
う事です。それでは私は仕事に戻りますね」

厳しい口調で文は権に言うのと、ちようどお茶を入れてきた楓に別れ
を告げてそのまま家を出ていったのだった。

*

暗闇の中、白刃がぶつかり合い、火花が飛び散る。

すでに聡士郎は鞍馬に負けたのだが、鞍馬に変わって霊体化した数

人の武人や兵法家の英霊と戦っていた。

現在はその一人、一刀流の開祖と剣を交えていた。正式の名を聡士郎は知らなかったが、鞍馬には『弥五郎』と言われ、過去に聡士郎が修行した際、手合せをしたことがあった。

この『弥五郎』だけではない。今、この場にいる霊体化した数人の侍や兵法家などの武人達と、聡士郎は過去に剣を交えていたのだ。

これが、聡士郎が若くして悟りを開けた修行、『靈魂修行』である。自らの魂を肉体と一時的に別れさせる事により『時』と言う概念を無くすることができ、死と生の境目から作り出される空間の中で、過去に名を馳せた侍や兵法家の武人と戦うことにより、実力を叩き上げるのだ。

「どうした？ 蒼吉よ。儂の剣を弾くのに精いっぱいか？」

懸命に剣を弾く聡士郎を見て、弥五郎はニヤリと笑った。靈魂修行を行った聡士郎であったが、過去の武人や兵法家たちの足元にも及ばなかった。所詮は時間の概念を狂わせただけの付け焼刃であり、真の時間を積み重ねた過去の英霊たちに勝つことは、到底できない。体に武術を覚えさせる事はできても、いかに経験や場数を踏んだとしても、真の時間と共に悟りを開いている人の剣術家に勝つことは、まだ聡士郎にはできなかつた。

「がっ……」

聡士郎の腹部に弥五郎の放った神速のような速さの刀が、音も無く突き刺さった。

痛みは無い。手持ちの追風と衣川を聡士郎は投げ捨てると、弥五郎の突いた刀の刀身を握り、切り裂かれぬように押さえつけた。

しかし、弥五郎はゆっくりと刀を引くと、そのまま帯刀をした。あくまで死ぬことは無いこの靈魂修行の中で、もう勝負はついたと判断し、剣を治めたのである。

「ガッハハ。未熟だのう蒼吉よ。お主はまるで変わっておらんわい」

弥五郎は聡士郎の旧名をわざと使って、豪快に笑いながら言った。

聡士郎はその言葉に何も返す気が起きないのか、ただ地面に膝と両手を着き黙っている。それをつまらなそうに弥五郎は見ると、鼻で

笑って奥にいる鞍馬に視線を向けた。

「・・・聡士郎よ。何か掴むことはできたか？」

鞍馬は重い言葉で聡士郎に問う。

「…わかりませぬ。それがしの剣は未熟であることしか、わかりませぬ！」

奥歯をかみしめて、聡士郎は悔しがりながら言った。

結局、聡士郎の開いた不盾流は、数人の英霊たちに、一太刀も浴びさせることはできなかったのだ。

時に刀を軽く奪われ、時にその剣に軽く添えられる様に切られ、時に長物の刀に一刀両断され、終いには弥五郎に、一突きされてしまった。

この事から聡士郎は嫌と言うほど理解した。自らの開いたこの不盾流は、未完成であったのだ。鞍馬の元を離れてからの培ってきた技術、経験、そして時間。それらをすべて否定されて聡士郎は何も言えなかった。ただ未熟でしかなく、英霊達誰もが不盾流に苦戦をせず、軽く受け流されてしまう。不盾流を使い、これまで戦ってきた妖怪などこの剣術家たちからすれば、倒すのは造作なかっただろう。

しかし今更、霊魂夢想流に戻ろうとも思わない。あの流派に頼ることになれば、また失い、後悔をする。聡士郎はそう思っていた。

「聡士郎。お主はまだ、巨大な山の麓にいることをわかっているか？」

悩み葛藤する聡士郎を見て、鞍馬は重く、口を開いた。

「それは・・・？」

「儂らが過去に教えたのは、あくまでもその山を登る為の手段。お主はそこから独自の登り方を見つけ、麓に立っておるのだ。しかし、その登り方では何か間違っている事がある」

「つまり・・・それがしが開いた不盾流は未熟ではなく、間違っている」と？」

「そうだ。改めて言うが、お主の流派は守りの形だ。儂の使う霊魂夢想流とはまるで違う物に仕上がっておる。だが儂の様に剣を見切るのではなく、緊張の線を張るのではない。お主の流派は第五感までで止まっておるのだ」

そう言うのと鞍馬は、静かに瞳を閉じた。

「聡士郎よ、目を閉じてみるがいい」

言われた通り、聡士郎も瞳を閉じる。

そこは言わずと、光の入らない深い闇の世界が広がっていた。

「そこには、何が見える？」

暫くして鞍馬は口を開いた。

「何も見えません・・・」

「そうだ。だが、逆に考えてみる」

「逆・・・ですか？」

「無限。何も見えない事こそが無限であるのだ」

その言葉に聡士郎は「あっ」と言葉を洩らした。

「目から見える景色ではなく、心から見る物・・・そう、心眼を開くが良い。心の目から見ればいかに自分が小さいか、そしていかに相手も小さいかと分かるはずだ。その意味を理解すれば絶対的護身は完成するであろう」

目の前の物に捕らわれてしまつては何も見通すことはできない。たとえ紅葉の目付をとつても、認識することのできない死角は当然の様に存在する。だからこそ不盾流は完璧な防御になる事は出来なかつたのである。

「それだけではないぞ？自然の声に聞き耳を立てよ。自然とは優しいものだ。お主の在り方、そして様々な物を教えてくれる。その声を聴くのだ」

「つまり・・・第六感を極めよと？」

「そう捉えても構わんよ。虫の知らせとも言うからの」

鞍馬が言ったことは、すべて聡士郎の求めていた事ばかりであった。先ほどの葛藤がバカらしくなるほど、聡士郎の目指す流派の真意を鞍馬はいとも簡単に伝えたのである。

「ふふ・・・それがしは、やはりまだまだ未熟だ。あなた方にいつも気づかされる」

「これでまた一歩、山を登ることができたな」

鞍馬がそう言うと同時に、彼の姿が消え始めた。

「最後に、お主にもう一つの課題を与える」

「課題・・・ですか？」

「そうだ。お主の振るう剣は何だ？その答えは、儂らが教える事ではないからな」

「理由・・・」

「そうだ、その答えは死ぬまでに見つけるとよい。では、またどこかで会おうぞ」

そう言い残し、鞍馬は姿を消した。その後を追うように、残った英霊達も、姿を消し始めたのだった。

*

二日目の朝、権はふと目を覚ました。

まだ日も登っておらず、ほんの少しだけ周りが明るくなっていると感じる程度であろう。ともかく、相当朝早くであると権は思った。

寝てしまったのかと権は思い目元をこすった。昨日は文が帰ってからもずっと、寝ずに聡士郎の容態を確認していたのだ、そのため疲労がピークに達して、無意識のうちに気絶、つまり意識を失ったのだろう。

「あれ・・・？」

権がうつ伏せから身を起こすと、肩から何かが滑り落ちる。それは掛布団であった。

なるほど、寒さを感じないと思ったのはこれが原因であったのだ。

しかし自分は掛布団を出した覚えはない。つまりこの掛布団は。

「松木様・・・!?!」

朦朧としていた意識を瞬時に目覚めさせると、権は部屋のあたりを見渡した。しかし、人気の気配はなく、それどころか刀掛台に置いてあるはずの、二振りの刀すら無かった。

「えっ・・・えっ・・・?ど、どこに・・・?」

おどおどと権は再び周りを見てみると、庭の方から何やら音が聞こえた。

その音は風を切る音であった。リズムよく奏でられるその音は、間

違いなく人が何かを振るって奏でている音であり、自然の音ではない。

権は急いで聡士郎の部屋から出ると、廊下をつたい、庭へと出る。そこにいたのは、言わずと聡士郎であった。追風と衣川を交互に振るい、何事も無かったかのように、素振りをしていた。

「な・・・何をやっているんですか！まだ安静にしていなと・・・！」
縁側から素足で権は降りると、聡士郎の元に駆け寄る。すると、権の目の前に、追風の剣先が、ぴたりと止まった。

「ひゃあ!？」

「うむっ？」

いきなり刀を向けられたため思わず声を出す権に勘付いたのか、聡士郎は権に向けた追風を肩に担いだ。

「すまぬ、夢中になっていたわい」

「び、ビックリしましたあ・・・」

胸を両手押さえて、権は思わず息を付いた。

「おはよう、権」

「あっ・・・おはようございます・・・じゃなくて！」

聡士郎のペースに飲まれそうであった権は顔を左右に振って、自分のペースに戻した。

「絶対安静にしろって、医者は言っているんです！おとなしく寝ていてくださいー！」

権はそう言うのと聡士郎の背中を押して、家へ戻そうとする。

「むうう・・・。ワシはもう元気だ。ほれ！こんなにも元気だぞー！」
腕をぶんぶんと回して、聡士郎は万全であるとアピールをするが、権はそれでも背中を押した。

「そう言う問題じゃないんですよ！傷口が開いたらどうするんですかー！」

「ま、まあ待ってくれぬか」

そう言うのと聡士郎は、背中を押す権からひらりと身をかわして少しだけ距離を取った。

「ワシはまだ未熟だったのだ。お主の護衛として、そして剣術家とし

てだ。しかし今になって、ワシは自分に足りないものを掴んだ。だからこそ体を動かさないわけにはいかんだ」

真剣な表情で、聡士郎は権に言った。だが、権はそれを聞くとさらに不機嫌な顔つきになった。

「貴方は未熟じゃないです！だって…あんな…」

「あんな…?」

聡士郎が首をかしげて権の答えを待っていると、権は言いとどまり、一つ深呼吸をした。

「すいません、何でもないです。ともかく、早く家へ戻ってください！」

権はそう叫ぶと、聡士郎の言葉も聞かずに、家へと戻っていった。

渦巻く思惑

聡士郎が目を覚まし、椀が気合を入れて朝食を作っている時であった。

「椀、居るか!？」

その声と同時に、ドンドンと玄関を数回叩く音が聞こえた。

野太いその声の主は、恐らく春吉であろうか。

珍しい来客だと思いつつも、椀は台所を離れ玄関に向かうと、少しだけ戸を開いた。すると、予想通り春吉が腕を組んで立っていた。日が昇っても、山の朝はかなり冷える為、春吉は体を少し振るわせながら手を軽く上げる。

「おお、椀イ。すまねえな。実は日が昇りすぐの時、ある凶報が来たな……。なあ、ここで話すのも寒いしよ。中に入っても構わねえか?」

ただ事ではない顔をしている春吉を見て、椀はどうぞと家の中に入る。中に入ると春吉は椀の家を物珍しそうに見つつ、居間へと向かった。

二人はちゃぶ台の前に座ると、楓が気を聞かせて二人の前に湯呑を置いた。春吉は「すまんな」と軽く礼を言くと、一つ咳払いをした。

「うむ……。心して聞け。山道家が襲われたそうだ」

「えっ……」

余りにも唐突な報告により、思わず椀は目を見開いた。

「昨晚の事だ。山道家の一人娘、椿様が下衆に襲われたらしい。どうやら寝こみを襲われ、顔に大きな傷を負わせたそうだ。その下衆は置手紙を残すとすぐに消えたらしい。まるで誰も居なかったように、気配も臭いも残さずにだ」

「そ、それで椿様の容態は?」

椀の問いに春吉は唸ると、言いにくそうに口を開いた。

「命にはかかわらねえ傷だが、将来にはかかわる傷だ。つまり分かるな?」

「顔に傷を負ったことで、舞姫になる事ができませんね……」

「そう言うこつた。これで残すところ犬里家と林道家、あと犬伏家だけだ。しかしまずいことになったぞ」

深刻な顔つきで春吉が唸ると同時の事であつた。彼の後ろの扉が唐突に開いた。

何者かと春吉はあわただしく立ち上がり、ちやぶ台の横に置いていた槍に手を掛けた。しかし、その正体に春吉は目を丸くして、口をあぐりと開けた。

「げえ!? 唸士郎!? テメエ……き、傷はもういいのか?」

「げえとは何だ、げえとは……。まあ良い、まだ癒えてはおらぬが行動に支障はない。で、話は聞いたぞ春吉よ」

そう言うのと唸士郎は椀と春吉の隣に腰を掛けると、膝に肘を突いた。

「やはり、侵入者の仕業か?」

「あ、ああ……間違いねえ。山道家は嗅覚に優れた家系で、同田貫の使い手が多い。それを掻い潜るとなるとはやり、例の侵入者にちげえねえ」

「ふむ……そうか」

「まったくよお。これじゃあ俺ら衛兵隊のメンツが立たねえつてもんだ。どこを探しても下衆人もとい侵入者は居ねえし。ましてや名家、山道家が襲われたんだ。何をやってたのかと長官(かしら)にド叱られるつてもんだぜ」

「……御前らも大変だな」

「クソツタレ!」

侵入者を見つけられないやりきれなさから、思わず春吉は毒つく。彼は彼なりに自分の職に誇りを持っている様である。

「……春吉一つ思ったのだが」

そんな春吉を見て、唸士郎は不思議そうに口を開いた。

「なんでえ」

「なぜ、林道家。犬里家。犬伏家が残る事がまずいのだ? 舞姫になる物ならだれでもよいのではないのか?」

「……そ、そらあ……。林道家はまだしも、犬伏家と犬里家は嫌人

思考の家系。すなわち嫌人派なんだよ。人との関わりを一切持ちた
くないってこった。白狼天狗にはまだそういう輩がごまんとい
るんだが、今の真神露草様は親人思考でよ、何とか人との繋がり
を復活させようとしているんだが・・・」

「ちよつと待て、お主は嫌人思考ではないのか？」

「そうだったら、ここには来ねえよ。おめえの様な腕の立つ奴と刃を
交えれば、必然と嫌いじゃなくなるぜ。それにおめえがこの村に
来たこと、そして悔しいが俺を叩き伏せたことで、他の白狼天狗
達の間も変わってきた。人間にもまだ腕の立つ奴がいるってな」

「なるほど・・・上下関係か」

「おう。そう言うこった。俺達白狼天狗は人間を見下してはいるが、
腕の立つ奴にはそれなりの目で見える傾向があるんだよ。まあ、
鴉の野郎どもはどう思ってるか知らねえがな」

珍しくまじめな顔つきで語る春吉を見て、聡士郎はなんだか照れ
きくなった。

「むう、話は逸れたが・・・舞その物には、大した影響がない
のではな
いか？」

「それがあるんだよ。なあ。権」

権は急に話を振られて驚いたが、すぐにいつもの表情に戻った。

「ええ、大ありですね。実は白狼の舞とは、新たに方針を決める儀
式でもあるのです。現在は真神様が筆頭の親人的思考の方針で動
いている白狼天狗ですが、『嫌人派』にゆだねられると、それは
嫌人思考に変わってくるでしょう」

現在は露草を筆頭とした通称『穏健派』が、白狼天狗に親人
思考を広めていた。人間と話し合い、お互いの権利を主張し合
う事が出来る環境を作ることこそ、今後の天狗は存続できると
考えていた。つまり以前権が話したような、天狗と人間のある
べき姿を守つていこうと、これまで活動を行ってきたのである。

最近になり人間が設けることに成功した狩猟区域。里に下りて
新聞を販売する権利。そして山に新しく来た神との話し合い
により決まった参拝道も、すべては親人思考を持つ露草が進
めた事であったの

だ。

「なるほど、つまり嫌人派の白狼天狗が舞姫に選ばれば、必然と嫌人思考に移行すると言う事なのか・・・」

聡士郎は納得するように頷く。種族の繁栄だけではない事は薄々勘付いていたが、政権に関することであつたのは流石に驚いていた。

「そう言えば、剛牙の奴。穏健派がどうか言っていたな・・・。ともかく、露草はそれも避けたかつたと言う事か」

「はい、露草様は保守的な考えを重んじているのです。つまり今までの天狗とは、違う考えをお持ちなのですよ！」

何処か憧れたような口調で話す椀を見て、春吉は感心した顔をした。

「さて、それはいいとしてだ。そうなるとおそらく次に襲われるのは林道家か？親人思考なのだろうか？」

先程の話しに一区切りをつけて、聡士郎は違う話題を切り出した。「そういう訳ではねえな。どちらにも着かずだ。白狼天狗の在り方を

尊重はしているが、人と深い関わりは持つ必要は無いと考えている。だが、林道家は現在の在り方を気に入っているからな、おそらくはあぶねえ。林道家の娘、桜様が舞姫になれば穏健派の考えに流れるだろうから『親人思考の考えを存続せよ』と、お告げを言うだろうな」

「お告げ？・どういう事だ」

「あ？・そんなこともわかんねえのか？椀、お前教えてねえのかよ？」

驚いたような、呆れたような表情で春吉は口を尖らせると、椀は乾いた笑いをする。

「あはは・・・。その、そこまで詳しく教えろと言われていなかったもので」

「まあいいけどよ。いいか？白狼の舞は最後に『岩長姫』様を舞姫に降霊させて、お告げを聞くんだ。・・・と、言っても舞の権利を勝ち取つた派閥の幹部たちが書いたお告げを、舞姫は覚えてその場で言うんだよ」

「なるほど。つまり嫌人派が舞う資格を取れば、お告げは嫌人思考のお告げになるわけか」

「そう言う事だ。話を戻すが、だからあぶねえと言えばあぶねえ。しかし、過激派の連中は舞その物を妨害したいと考えているはずだ。だから、次に襲うのは何処かわからねえ」

お手上げだと言わんばかりに、春吉は大げさに肩をすくめる。どうやらあらかたの事は衛兵隊の中でも議論されていたようで、迂闊に動けないのが現状のようであった。

「そう言えば過激派集団とは何だ？嫌人派とは違うのか？」

ふと不思議に思った聡士郎が口を開くと、春吉はその件に触れるなと言いたげな、面倒臭そうな顔をした。

「あー。あいつらは元々、縞枯一派っていう、やくざ集団なんだよ」「なに？」

「嫌人思考を過激に考えすぎて、人を根本的に山から排除しようと考えている奴らだ。だが露草様が政権を勝ち取った時、一斉摘発されてな。この村から追放されたんだよ。しかし奴らは露草様を恨み、他に深い嫌人思考を持った天狗達も集めて根城を作り上げたってわけだ」「では・・・根本的な問題を作り上げたのは、露草本人だったと言う訳か・・・」

「そう言うわけだ。まあこの村にいる奴らは穏健派だろうが嫌人派だろうが、皆なんだかんと言つて山を守りたい考えを持っているからな、奴らとは根本的にちげえよ」

呆れたように春吉は言う、「あつ」と唐突に言葉を出して、懐に手を入れた。

「権。そう言えば露草様から直々に、書状が届いているぞ」

愚痴をこぼしながら、春吉は権に書状を渡した。

それを手に取った権は、丁寧に開封すると、その内容に思わず目を疑った。

「えっ・・・護衛を・・・解くつて・・・」

*

露草の手紙の内容はいかに綴る。

——犬走権よ。五体満足であるのに、稽古を行うことができないのは、やりきれない一心だろう。護衛である松木聡士郎が負傷した事に

については、私の見込み違いであったことを許してほしい。そこで特例で、お主を舞姫の稽古に復帰することを許し、松木聡士郎が負傷中の間は奴を一時的にお前の護衛から外すことにする。健闘を祈るぞ――と、書かれていた。

この事について、権は喜ばばよいのか、悲しめばよいのか分からなくなっていた。

確かに聡士郎を護衛から外すことで、舞姫の稽古に復帰することができるのは大変喜ばしい事である。

五体満足であるのに、護衛の落ち度、聡士郎の怪我だけで自分が稽古に出ることができないのは、普通に考えて納得できないだろう。だが、聡士郎とのつながりの一つである、『護衛と舞姫』の関係が崩れるのは、どうしても今の権にとっては複雑な気分であった。

「ワシを護衛から外すと……? そう書いてあったのか?」

「ええ……」

「ふむ……」

聡士郎はそんな権の困る顔を見て、腕を組むと目を瞑りうつむいた。自分と同じ考えなのだろうかと権は少しだけうれしく思ったが、聡士郎はすぐに、顔を上げた。

「そうか……ならばこの事を最大限に利用しようではないか」

「ふえ?」

ニヤリと笑う聡士郎を見て権は口をぽかんと開いた。

「権よ。改めて聞くがお主は親人思考なのか?」

「え……ええ、そうです。私は露草様の考えが、現在の天狗の考えでは適切だっと思っています。その為、親人思考ですね」

権は迷わず、当たり前前の様に言葉を返す。その答えに満足したのか、聡士郎は再びにやりとはにかみ、腕を組んだ。

「露草はこの事件を聞き、焦っておるのかもしれない。あれほどまで舞姫のもとを、護衛のもとを離れるなど言っておいて、今さら離れても良いなどと、おかしくは無いか?」

「あつ……」

言われてみればそうである。あれだけ強制をしておいて、今更護衛を解くなどどう考えてもおかしいのだ。

この時、聡士郎はこう考えていた。自分をわざわざこの権現村へと呼んだ事、権を護衛から離れるなど貼り付けにした事、そして権の身分が釣り合わないのに舞姫候補に選ばれた事も、すべては権と自分に視線を集めさせる為であつたのだろう。それにより嫌人派は他の穏健派所属の舞姫候補には注目視せず、名家的にも目の敵である権と嫌うべき人間である自分を、真つ先に消そうと思うはずであるのだ。

結果的にその結論は当たっていたと言える。犬伏家とつながりが深いと思われる刺客、銀杏木迅兵衛は権に資格が無いと言い張り、聡士郎と剣を交えたのだ。無論この場合聡士郎は勝利して、より一層穏健派の考えは正しいと証明しなければならなかったが、敗北することですらで裏目に出してしまった。嫌人派は穏健派の十手持ちと言う切り札がなくなつたとで、自由に動けると考えた。そして今回の事件は起こつたのだと考えられる。

そこで露草は五体満足である権を戻すことで、少しでも穏健派のいわゆる駒を作り出すことを行つたのだ。逆にそれほどもで、露草は焦っていると考えられる。

「ですが、何を利用するのです?」

「ワシは言われた通り、お前について行かぬ。こうすることでワシはまだ目を覚ましておらず、寝ていると考えるだろう。だが、ワシは権を隠密的に護衛する。こうすれば権を邪魔だと思つた嫌人派の奴らが襲つてきても、ワシは権を守ることができ、なおかつその侵入者を捉えられるとは思わんか?」

「待てよ。おめえ本当にそんなこと上手く行くと思つているのか? 奴は俺ら衛兵隊の包囲網を掻い潜り、気配すら感じる事が出来ねえんだぞ? それに、おめえは人間だ。臭いが違う。成功する確率はゼロにちけえよ。やめた方がいいな」

渋い顔をして春吉は聡士郎に言う。権もそれに同意なのか、申し訳なきように聡士郎を見ている。

「そんな事、わかつておるわい。だが、その匂いを消す方法があるとし

たらどうする？」

そんな二人を見ても、聡士郎は自信満々な表情をして食い下がらない。

「おめえバカか？出来るわけねえだろ。御前が白狼天狗にでもならねえ限りな」

斬られた高熱で頭がおかしくなったのかと思うほど、容易に考える聡士郎に春吉はいら立ちを覚え、少し強めの声で聡士郎に言い聞かせようとする。

しかし。

「ああ、そうだな。なら、なれば良い」

「何だと・・・？」

「そこで・・・お前に頼みがある。春吉」

*

椀が春吉と共に尖刃館に着くと、すでに舞姫候補達は集まっており他愛無い話をしてしている様子であった。彼女達はいつも集まりが早く、椀は対立している派閥同士であっても、そのことに關しては素直に關心を示していた。いくら考えは違っても白狼天狗であることに変わりはなく、見習いたいと思う事は不思議ではないだろう。

「ここへ来るのは久しぶりだぜ。センチたちは元気なんでしょうか」

春吉は懐かしむように尖刃館を見上げながら、言葉を洩らした。

門下生たちはここを卒業すると、仕事などの都合上ここに来る事はほとんどなかった。天来寺や中央街を見回리することが殆どである衛兵隊の春吉にとつては、哨戒隊や諜報隊よりもまったく言っていない程来る機会が無く、思わずなつかしく感じるのであったのだ。

「師範代達は皆元気ですよ。春吉も挨拶くらいしていったらどうですか？」

「なんつうか・・・俺はやんちゃだったからな・・・合わせる顔がねえや」

照れ臭そうに春吉は言うのと、他の舞姫たちが椀達に気がついたのか、集まってきた。

「あら!? 椀ちゃん! 護衛の容態はいかがですか? その方が新しい護

衛となられたのですか？」

林道家の一人娘である桜はいつもと変わらずふわふわとした感じで、不思議そうに権に問う。親友であったはずの椿が怪我をしたと言うのに、ずいぶんと暢気であると権はひそかに思った。

「いえ、彼はたまたま私に付き添って頂いただけです。護衛の方は、まだ眠っております」

「あらあらそうなのですか。あの方は頑丈そうですねえ」

「さて、権は護衛と共に行動せねばならぬと言われているのだろうか？何故来たのだ？」

二人の会話に割り込むように、犬里家の一人娘の犬里権は凜とした声で権に言い寄った。彼女は権同様、規則には厳しく堅物と呼ばれている。

権は疑われるのも癪に障るので、巾着袋から露草に渡された礼状を取り出し、それを権に堂々とした表情で見せた。

「これは露草様直々の手紙です。私も候補になる事を専属せよとの内容でした。文句は無いでしょうか？」

「・・・如何にも。だが・・・」

権が反論しようと口を開こうとしたその時であった。

「あらーそれはよかったではありませんか！共にまた鎬を削り合えませわね」

両手を合わせてふわふわとした口調で、桜は言う。それを見た権と権は調子が狂いどこか和んだ表情をしたが、一人だけ勝ち誇っているような表情をして、鼻で笑った。

「ふふ。首の皮一枚つながったと言う事か。権よ、また競い合えることはうれしいぞ」

「権様・・・。私も卑怯な事では屈指ませんから、絶対に」

敵意を込めた目で権は権を見る、それを鼻で笑い権はおどけたように手を上げた。

「誤解しないでほしいが・・・。迅兵衛が不落の松と剣を交えたのは、あくまでも奴個人のやった事だ。犬伏家の総意ではないぞ」

「・・・そうですか」

納得したそぶりを見せつつも、権は敵意を込めた目を崩さなかつた。

「ふん。どうせ誤解が解けぬ事はわかっている。精々一日分の遅れを取り戻す気持ちで稽古に励むのだな」

「言われなくても、そうするつもりです」

権が柵に言い返して暫く両者はにらみ合う。するとそれを遮るかのように尖刃館の扉が解放された。

「では、春吉。行ってきますね。松木様の事はお任せしますよ?」

「おう、任せとけ」

気軽に返事をする春吉を見て権は軽くお辞儀をすると、駆け足で尖刃館へと入っていった。

「さて・・・俺も行くか」

それを見送ると春吉は、聡士郎の頼みごとを果たすため、衛兵隊の奉行所へ向かっていった。

*

天来寺のすぐ近くにある奉行所が、白狼天狗が大半を占めている衛兵隊の本拠地である。

しかしこの奉行所はあくまでも名ばかりの物であり、武家時代の町奉行のように行政や司法などは行わない。警察組織として残ったものであり、さしずめ権現村警察署と言うべきであろうか。

春吉は奉行所の門番に軽く挨拶をすると、そのまま玄関へと入った。中は下衆の捜査に苦戦しているようで、妙にあわただしい。すると、何やら荷物を抱えた長身の衛兵と鉢合わせ、声を掛けてきた。以前聡士郎と春吉がいざこざを起こした際に、小柄の白狼天狗と一緒についできた男である。

「春吉さん。どうしました?今日は朝上がりだつて・・・」

「おう、ノツポか。その資料は・・・下衆の奴の情報か?何か掴んだのか?」

ノツポもとい、青桐薄は持った史料を「よいしょ」と呟き、抱えなおした。

「いやあ……まるつきり。奴の使う武装は小刀を使つとつた事くらいしか分からんですね。目撃情報もなければ臭いもほとんど感じない。相当な手練れですねえ。やっぱり」

「む、そうか。ところでノツポ。頼みがあるんだが」

ノツポは手に持っていた荷物を床に置いて聞き返した。

「はあ。頼みですか？」

「おう。実はな、衛兵隊の古着を探しているのだが。ここにあったよな？」

首をかしげるとノツポは思い出したように眩く。

「えーっと。ああ、確か倉庫に山ほどあったと思いますよ。もったいないとは思つとりましたが、何かに使うんですか？」

「使うから聞いているんだろ？数着、早く持つてこいや」

「いまからですか？」

「おう、そうだよ」

のんびりとした口調で言うノツポに若干のいら立ちを覚えつつ、春吉はせかした。だがノツポは荷物をちらちら見て、何やら気にしている様子である。どうやらまだ仕事が残っている様だった。

「ああ、わかったよ。先にそれを持って行ってからでいい。俺は衛兵詰所で待ってるから早くしろ」

「はあ。すいません」

頭に手を当て申し訳なきように頭を下げると、ノツポは駆け足で廊下を走っていった。

*

衛兵詰所で春吉は座ると、聡士郎に頼まれた頼みごとを思い返していた。

何故、着古した服などを欲しがるのであるのだろうか。それも数着である。天狗は美意識が？い。春吉も言わずと白狼天狗である為、その理由がまるで分らなかった。

しかし、現状は下衆を探す目星も無ければ、情報源も無い。その為聡士郎の思いついたらしい奇策に掛けるしかなかった。悔しい事ではあるが、愛すべき村を守りたいと言う意思がある春吉にとっては、

それは仕方ないと納得していた。

「まったく。もし上手く行かなかったら食ってやる。人肉を食うのは好きじゃねえがな！」

「何独り言を洩らしている。春吉よ」

春吉が一人で唸っていると、後ろから誰かから唐突に声を掛けられ、体をビクツと跳ねた。

「お、おかしら……」

そこに立っていたのは、屈強な体つきをした初老の白狼天狗であった。髪は白と言うより銀色に近いが、天然が入っているのかくると巻かれており、顔にはいくつかの傷が刻まれていた。太く上り坂の様に整った眉毛が特徴的で、キレる頭の持ち主である彼は、『銀狼の桔』と呼ばれていた。

「いえ、別に……何でもないです」

「おいおい？何でもない訳は無いだろ。おめえの事だ。下衆をどう捕まえようか案を立てておったのだろうか？」

「あ……いえ、はい。そうです」

恐縮しているのか先程まで胡坐をかいていたが、瞬時に正座に直し、背筋を伸ばしながら言う春吉を見て、桔は春吉の前に座った。

「ああ、楽にして構わんぞ」

「いえ、自分はこのままで」

「ん、そうか。それで、何故古着をノツポに持つてくるように頼んだのだ？」

余裕の笑みをこぼしながら、桔は春吉に問う。どうやら知られていたようである。もつとも、やましい事ではないのだが、春吉は何処か見透かされたような感覚に陥り、思わず頭を下げた。

「はっ……実は頼み事をされました」

「頼み事？誰にだ？」

「伏せておくと言う事は、できないでしょうか」

頭を下げつつ言う春吉を見て、桔は顎に手を置くと、唸った。

「……お主の最近の行動から察するに、穏健派の誰かか？」

一瞬ドキリとして春吉は体を震わせると、桔は「当たっておったか」

と愉快そうに笑った。

「儂は中立だが、どちらかと言えば親人思考だ。かまうこたねえだろ。ほれ、正直に話してくれぬか？」

「そうでしたな。ですが・・・恐れながら長官。貴方を本当に信頼してもよろしいでしょうか？」

「どう言う事だ？」

「はっ・・・この事は真神露草様を欺いているので・・・」

それを聞いた桔は、思わず顔をしかめた。まずかったかと春吉は冷や汗を掻いたが、桔は立ち上がり廊下を見渡して人がいないのを確認し、詰所の襖を閉じて春吉に詰め寄ると、「続けよ」と春吉に話を促した。

「・・・実は犬走椀の護衛。松木聡士郎は既に目を覚ましております。ですが奴のとある思惑によりこの事を伏せておいてほしいと言っていたのであります」

「思惑・・・？それが古着だと言うのか？」

「ははっ・・・さようでございます」

春吉の意見に対し、流石の桔も何故聡士郎が古着を所望したか分からない様子であった。だが、顎に添えていた手を解くと、今度は腕を組み低く唸った。

「何故だろうか…。だが、仮にも十手持ちだ。天狗をも欺く奇策を持っているのかもしれないな」

「それは・・・わかりませぬが」

「分かった。任せてみようではないか。儂は人を好かぬが、その十手持ちが持つ妙案に掛けてみようと思う。正直儂の娘を傷つけた下衆をとっ捕まえてさらし首にしても飽き足らぬが、現状何も掴めないからな」

冷静を繕っている桔であるが、体から迸る怒りを抑えられず、にじみ出ているのが春吉には分かった。そう、最初の被害者である犬童杏は、この犬童桔の一人娘であるのだ。

衛兵隊にそのことが素早く知れ渡ったのも、珍しく桔が怒りから大声で怒鳴っていた為でもあったのだ。

「さて、儂はまだ用がある。この事はくれぐれも内密にしておくから安心せい」

そう言う桔はおもむろに立ち上がり、詰所の襖を開くと、そのまま外へ出ていったのだった。

*

さて、すでに日が落ちて、権現村に夜が来た。中央街は相変わらず、鴉も白狼も酒を飲んでにぎわっており、何とも暢気な風景が広がっていた。

その中央村街をさらにまっすぐ行き、権現村の入り口をのはずれにいくつかの倉庫がある。

中にある物は祭りを行う際に使う神輿や飾り、さらにはその際に使用する、斧や鋸などが置いてあり、普段はだれも近づくことは無い。しかし、そこに向かう一つの陰があった。

第一哨戒隊副隊長、銀杏木迅兵衛である。

迅兵衛は一番奥にある倉庫の前に立つと、辺りを見渡して誰もいない事を確認した。そして扉を一定間隔に軽く叩いて合図を送ると、倉庫の中から小さく声が聞こえてきた。

「黒き者には？」

「牙があり」

扉に囁くように迅兵衛は言うのと、音も無く静かに扉が開いた。迅兵衛は再び辺りを見渡すと素早く、倉庫の中へと入ってゆく。

「着けられなかったですか？」

倉庫の中には黒装束を着た、白狼天狗の姿があった。黒狼派の一人、陰爪である。この男こそが現在、権現村の衛兵隊を騒がせている侵入者であった。

「私を警戒する奴は、この村ではおらんよ」

「そうですね」

陰爪はそう言うのと、手元に持っている蠟燭を床に置いて、胡坐をかいた。それに続くように迅兵衛もその場に胡坐をかく。

「さて……ここに来たと言う事は、何か事を起こすのに変更点があると言う事ですか？」

「いかにも、実はな・・・露草の奴が、犬走権を再び舞姫候補に戻すと
言い始めたのだ」

「なんと、大胆な事をしますな」

不気味な笑いを浮かべつつ陰爪は驚いた様に呟いた。

「正直、犬走家は権しか今はいない。義弟に楓と言う小童が居るが、奴
はそれ以前の問題だな」

「そうですね。ではやはり犬走家も？」

陰爪の言葉に頷くと、迅兵衛は懐から何やら紙を取り出した。その
紙にはいくつもの図が断面的に掛かれており、その図には小さく文字
が書かれていた。

「犬走家の間取りだ。不落の松はどうやらまだ目を覚ましていないら
しく、襲撃するなら今が好機であろうな」

「：確かにそうですが、道中で襲つてもよろしいでしょうか？」

珍しく意見に口を出す陰爪を見て、思わず迅兵衛は眉をひそめた。

「考えがあるのか？」

「もし、不落の松が起きていたら、計画が水の泡です。ですから人気の
ない場所に誘つて襲う方が良いかと」

「なるほど、念には念を・・・か。面白い」

その案に満足げに頷くと迅兵衛は瞳を瞑り、息を付いた。

「露草はちと、でしゃばりすぎておる。真神家はもともとこの山とは
違う白狼の種族。それが副統領になるのは、古くから住む名家たちも
良く思っておらぬ」

迅兵衛の言う通り、真神家はもともと妖怪の山に住む白狼ではな
かった。

本来、真神家が居た場所は外の世界にある王御岳と呼ばれた山であ
り、その中の御岳族と呼ばれる種族であったのだ。その為、この妖怪
の山に古くから住んでいる権現村の名家たちは、真神家が副統領にな
る事を反対したのである。

しかしこの山に住む大天狗の一人は、名家や権力に関係なく能力を
持っている聡明な天狗を選ぶと言い、当時外来族が多く貢献してい
た真神露草を副統領として新たに選んだのだ。

副統領になつた露草はこの権現村より良い村へとすべく、とある計画を立てた。これこそが、過去に権現村に住んでいたやくざ組織「縞枯一派」の一斉摘発である。

気性が荒く無頼者であり、人さらいなどの度重なる法度を犯していたにもかかわらず、見て見ぬ振りをされていて好き放題やっていた縞枯一派であつたが、露草はそれを許さず徹底的に処罰を行ったのだ。

そして暴かれた悪事の元。縞枯一派と、その関係を深く持っていた物すべてに罰を与えた。縞枯一派は問答無用で村から追放を受けたが、一派一同は露草を逆恨みして復讐を誓つたのである。そして山の北部に新たな根城を作り、これが、今の過激派集団となり、山を登る人々を積極的に襲うようになった理由である。

「我々縞枯一派は真神露草に追放された身。奴に復讐をできるのであれば喜んで受けましょう」

「うむ。事を起こす時はお前の判断に任せる。頼んだぞ」

「はっ。お安い御用で」

短く返事をする、陰爪は飛び上がって倉庫の屋根裏に上がって、外へ出ていった。

鎖鎌の陰爪

聡士郎が立案してからはや三日。侵入者も連続して事を起こすと尻尾を掴まれると判断し警戒しているのか、まったくと言っていいほど動きを見せなかった。

それからすでに日も傾き始め、黄昏時。

この時刻になると、哨戒任務に就いていた白狼天狗は、夜間任務を請け負ったものと変わり村へと帰ってくる。その為、今の時刻は、村に天狗が溢れかえるのだ。

仕事を終えた天狗は帰宅する以外にも、中央村に酒を飲みに来る者や、知人友人の家へと行き、そこで飲み交わすものも多々いる。

そもそも鴉天狗と違い、白狼天狗は自由時間が少なかつた。その為、仕事終わりの夜間でしか、羽を伸ばすことができないのである。特に各部署の新人達はこっぴどくしごかれるのだ。若い白狼天狗が衛兵隊にしょつ引かれる事が多い理由は、これが原因の一つでもあった。その為、酒を飲むと日頃の反動か、器物破損や大声で騒ぎ立てるなど様々な事を起こし、衛兵隊も毎晩手を焼いているのである。もつとも、衛兵隊にとってはそれが主な仕事となっているのではあるのだが。

さて、そんな天狗が溢れかえる夕時の中央村を、楓は息苦しそうに歩いていた。手提げ鞆には食料が詰まっており、それを行き交う人々から庇うようにしながら、前へと進んでいた。

作戦の為、聡士郎から「ワシが持っていた物を持ち歩いてこい」と楓にとって意味の分からない事を任されて、村を回る事になった。楓は嫌人思考ではあるのだが、師匠である権の為に仕方なくその案の飲むと、聡士郎の財布を渡されて、その任を果たすべく買い物へ出向く事にしたのだった。

「出来るだけ歩き回れって何なんだよ……。僕はただの雑用じゃないか」

ぶつぶつと文句をこぼしつつ、楓は『双葉庵』にたどり着くと長椅子へと座り、ひと息を付いた。楓のほかにも、相変らず多くの天狗達

が店の中にある席や、外の長椅子に座り、大変にぎわっている。双葉庵は昼ならず、夜も酒などを出すので人気であった。

座ってしばらくすると、土筆は楓に気づいたのか、注文を取ろうと声を掛けてきた。

「おや、楓ちゃんじゃないか。いらっしやい」

「どうもです。あと、『ちゃん』付けはやめてください」

「あつははーいいじゃん。まだボウズなんだからー」

呆れたように言う楓を見て、土筆は豪快に笑った。親子共々、気持ちの良い笑い方である。

「えーっと・・・土筆さん。お米余っていませんか？市で買えなかったので、できれば譲ってほしいです」

「ん？米かい？ちよつとオヤジに聞いてみないとわからないけど・・・おつかい？」

「はい。ですが・・・」

ふと、楓は悩んだ。

聡士郎達が立てた案を、土筆にも話すべきだろうか。皆、彼女とは親しい。それに彼女は風の噂を仕事の都合上よく耳にするらしく、衛兵隊の情報網より早く何か掴む可能性がある。そこでこの案を話したら、もつと作戦の幅が広がるのではないかと思ったのだ。

しかし、この件はあくまでも白狼の舞による政治問題である。直接関係の無い土筆まで巻き込むのは、身の危険であるではないのか。もし話して土筆の身に何かあったとすれば、それは間違いなく自分の責任になってしまう。それはなんとしても避けたかった。

楓はしばし黙り込み、悩みに悩んだ挙句。

「あつ・・・散歩でもあるんですよ」

「散歩・・・？楓ちゃん。そんな趣味があったんだ」

「ええ、最近始めた事なんですけど・・・」

作った笑いをして、楓はごまかした。この件は自分だけで判断することは難しく、下手な事をするのは不味いので、後に聡士郎しかり權に、相談したほうが良いと判断したのだ。

そんな楓を見て土筆は不思議そうに首をかしげると、同じく悩んだ

仕草をした。

「私も始めようかなあ……散歩。それかお忍びで里まで下りて、旨い物食べに行こうかなあ……」

土筆は人里にある食べ物数を数えるように、指を折りながらにやにや笑みを浮かべる。それを見た楓は思わず、暢気な人だと笑って返事をした。

「でも不思議だねえ……。人間つてのは自分勝手な奴ばかりだと思つてたけど。なんだかんだ言つて松木さんは権様の護衛を続けてる。いろんな奴がいるもんだね」

唐突に、土筆は聡士郎の名を出した。

「……僕は逃げだすと思つていました。アイツにとって理不尽な依頼だったのに……。どうしてだよ……普通自分の利益にならない事をやろうと思わないのが人間のはずなのに」

理解しがたいものを思い出すように楓が呟くと、土筆は「うーん」と唸り、思いついた様に口を開いた。

「たぶん、自分がやりたいと思つているからじゃない？」

「それだけ……？それだけの為に命を掛けているんですか？」

「あつはは！私にはわからないよ。それか権様の事を慕っているのかも」

「……」

正直この答えはわかつていたことでもある。楓は思い当たる節をいくつか頭に浮かべると、切ない顔つきになった。

結局のところ、楓は聡士郎を嫌う事に薄々限界を感じていた。最初のうちには大好きであった師匠であり姉の様な存在である権を護衛と言う名目により取られた事は、許せないと思つていた。隙をみて寝首を搔くことも考えていた程である。

しかし時が立つにつれ、権は聡士郎に対して態度を緩めて行つたし、聡士郎もまた権をどこか大切な物を見るような目で見てみると、楓は感じる事ができた。

そう、権は聡士郎を慕い始めている。理由が不明ではあるが、文が訪ねてきた時の話を楓は耳にして、確信したのだ。そして聡士郎も何

処となく思わせる素振りを見せていた。

二人は護衛から慕い合う関係へと、変わり始めていたのだ。なら、身内である自分はどうすればよいのだろうか。

結果は出ている。認めなければならぬのだ。気に入らない奴であるが根は悪い奴ではないし、なにより実力は自分よりはるかに上である。

そこで楓は改めて、聡士郎の出したこの案を成功させようと思った。侵入者に対してどのように有効であるか分からないが、精一杯やろうと、心の中で密かに決意した。二人を応援することが、身内である以前に自分が今、できる事であろう。

何処か吹っ切れたような顔を見ると楓は椅子から立ち上がった。

「そろそろ、僕は家に帰りたと思います。土筆さんありがとうございます」

「え？お米はいいの？」

不思議そうに言う土筆を見て、楓は顔が赤くなった。

「あつ・・・忘れてました・・・。恥ずかしいな。えつと、お願いします」

「あつははードジだねえー」

土筆は恥ずかしがる楓を見て、気持ちの良い笑いをした。

それからすぐに、店の中に入っていった土筆が戻ってきて、小さな麻袋を持ってきた。申し訳ない顔をしている土筆を見て、どうやら少しだけしか分けて貰えなかったのだろうと、楓はなんとなく感じた。

「ごめんよー。最近人里で物価が上がったらしく、これだけしかダメだって・・・」

「いえ、結構です。ありがとうございます」

むしろこちらが悪いと言わんばかりに、楓は頭を下げると懐から聡士郎の財布を取り出して、そこから金を取り出した。

「はい、ありがとね」

「こちらこそ。では本当に僕はこれでー」

楓は麻袋を縛るとそれを手提げ鞆に入れた。それから手を振って見送る土筆に軽く頭を下げると、双葉庵を後にした。

*

日が殆ど傾き、薄暗くなる道を権は一人で歩いていった。舞姫の稽古も、いよいよ大詰めである。一日の遅れは既に取り戻し、正式に舞姫候補として戻った権は少なからず緊張を胸に抱えていた。

明後日には舞姫候補が決まるのだ。

正直、自分が選ばれる事は無いだろう。遅れを取り戻したとしても、迅兵衛の言った通り、家系の問題で巫女にしかなる事は出来ない。そう、権は思っていた。自分が復帰したことも、穏健派の駒を増やすためであるので、本命は恐らく林道桜であるだろうと見越していた。だが、もしもの事を考えると、自分が舞姫となるかもしれないと淡い期待も、心の中にはある。だからこそ、微量ではあるが緊張しているのだ。

「しかし・・・本当に見張っているのでしょうか」
何気なく周りを見渡した権は、ひっそりと呟いた。

聡士郎は確かに自分を見張ると言っていたが、どうにも気配を感じることができなかつた。昨日も家に帰れば、既に聡士郎は自室で刀の手入れを行っていたのだ。

勿論、聡士郎が嘘を付いているとは思えない。現に今もこうして見張っているだろう。

だが、どうにもその仕組みが分からないのだ。春吉の持ってきた古着、楓に自分の所持品を持たせて村中を歩き回らせる。そして自分も、聡士郎のキセルを持ち歩くように言われていた。

実は立案した内容を、聡士郎は詳しく教えなかつたのだ。ただ、必要であることを権達にまかせて、自分は後に行動を開始すると言っていた。

つまり今も行動しているのか、正直分からないのである。せめて何かしらの沙汰くらい教えてくれれば良いのにと、権はため息を着く。

「あっ・・・楓」

俯いた顔を上げてふと正面を見ると、買い出しの帰りであろう楓が、重そうな荷物を抱えてゆつくりと歩いていった。姿相応の人の子と

比べれば圧倒的に力は強いが、まだまだ子供である。一生懸命バランスを取って歩いている姿を見ると、権はどこかほっこりとした気分になった。

「楓っ！」

「あつ師匠！」

荷物を抱えた状態でゆっくりと振り向いた楓は、権の姿を見てパツと表情が明るくなった。尻尾を元気よく振っている事から、一人で帰るのに心細かったのかもしれないと、権は思った。

「帰りですか？」

「はい！師匠も帰りで？」

「ええ。今日も疲れました・・・」

一つ息を付くと、権はやさしい口調で言った。

「お疲れ様です！僕はお米を思うように買えませんでした・・・」

「いえ、松木様の分があればいいですよ。私たちはあまり食べないですし」

「そうですね！あいつは大食いだから自重しろってんだ！」

プンスカと怒る楓を、権は慈愛に満ちた目で見ていた。血は繋がっていないとも、犬走家の養子であり、弟である楓は、権にとって可愛いものであるからだ。

「ふふっ。松木様はあまり食べていませんよ。普通の人ならもつと食べると思います。きっとあの人の、私達の手間をできるだけ省こうとしているのでしよう」

「えっ!?人間って食費が莫迦にならなさそうだ・・・」

「私たちはその分。お酒を飲みますので」

「あっ・・・そっかー」

納得したのか、ポンと拳で掌を叩くと楓は頷いた。

「さて、行きましようか」

「あ、はい！」

先程の思いも抜けて、楓と権の間には平和な空気が流れ始めていた。

二人は良い師弟関係である。師弟関係と言う物は様々であり、聡士

郎の様に厳しくされることもあれば、楓の様に徐々に成長していく事を主流とするものも居る。どちらにも正解や不正解は、無いのである。

それからしばらく、楓と椛は話しながら家へと向かっていった。

このまま何もなく、家へと帰れるだろう。それに明後日に控えた舞姫候補の発表。椛は今、何処か警戒心が抜け落ちていた。

日は完全に落ちて、いよいよ夜がやってくる。

まだ目も、暗闇に慣れていない。

そんな絶好の隙を、見逃すはずがなかった。

ふと、風を切ると共にジャラリと金属のこすれる音が聞こえた。そして同時に、何かベチリと言うような音が、横から響いた。

その一瞬の出来事に、椛は何が起きたのか分からなかった。横に居た楓は弾かれたように後頭部から思い切り倒れ、その場で動かなくなった。

「えっ…」

椛は楓の倒れた様子を凝視するように目を見開いた。抱えていた荷物は散乱し、楓は目をうつろに開いて倒れている。

「えっ…あっ…っへ…っ…?」

まだ現状を理解できないのか、椛はおどおどしていると、近くにそびえたっていた巨木から、ガサリと何かが落ちる音が聞こえた。

「…これで貴様一人だな」

そこには黒装束を着たその白狼天狗が立っていた。過激派集団、黒狼隊の陰爪である。

その姿を見て、椛はやっと、状況を理解した。

「過激派集団…黒狼隊!」

「そうだ。手前は鎖鎌の陰爪と申す」

椛の力なき問に答えると、陰爪は鎌と鎖を構えた。

そう、楓は鎖鎌による分銅の狙撃を受けたのだ。巨木の上、つまり高さを利用して、分銅はそのすさまじい威力をさらに上乘せしたのである。

「どうして…楓は…。楓は関係無いじゃないですか!」

叫ぶように権は言う、陰爪はそれを鼻で笑う。

「知った事か。そいつや衛兵隊の槍使いは、俺の嫌いな人間の臭いをまき散らしやがって…。不快にならぬものがどこに居る?」

「そんな…そんな事…」

ぎりりと、権は歯を食いしばり陰爪を睨み付けた。

「貴様もバカだな。護衛もつけず、夜道を歩くなど…貴様は舞姫候補ではないのかな…?」

「それは過激派の…!」

無意識から出た自分の言葉で、権の頭に嫌な予想が走った。この状況を作り出した根本的な理由を辿れば、おのずとこの件の黒幕が浮かび上がってきたのだ。

「そうか…迅兵衛様とお前は!」

「さあ、どうだろうな?」

行きついた権の考えを小ばかにするように低く陰爪は笑うと、「さて」と呟き表情を引き締め、鎖を回し始めた。

「今の貴様は丸腰だな…?」

「っツ…!」

舞姫の稽古からの帰りである権は、小刀しか持ち合わせておらず、ほぼ丸腰と言っても良い状態であった。もちろん、そのことを知ったうえで陰爪はあえて口にはしている。

つまり、事足りているのだ。小刀一本では、鎖鎌に太刀打ちできるわけが無い。それに権は武術を得意としている訳でもなく、いたって平均的であるため、勝てる可能性はほぼゼロだろう。

しかし、ここでやらなければ村を騒がす下衆を逃がすことになる。せめて一矢報いなければと、権は覚悟を決めた。

帯刀している小刀を抜き放つと、権は陰爪に向けて構える。

「む?、やる気か?」

「…やらなければ、天狗の未来は無い!」

集中して視線を向け、権は構える。

だが、陰爪はまったくと言っていいほど隙が無かった。体に張り巡らせている感覚と言う名の線が、にじみ出ているのだ。

この陰爪も、かつてはこの村で育ったものであるのに、これほど違うのかと権は自分に落胆した。

それに答えるかのように手足が震えだし、恐怖心が押し寄せてくる。

そんな権を見て陰爪は呆れたように、息を洩らした。

「舞姫候補などさっさと辞退して、巫女として踊ればよかつたものを……。つくづく貴様は莫迦者よ……。家で隠れておれば、怪我をすることも無いだろうに……」

見え透いた勝負に、陰爪は勝利を確信した。権も全身が震え、もはや戦いにならないだろう。

だが、ふと後方から声が聞こえた。

「お主も出てこなければ、死なずに済んだかもしれないぬな」

「むっ!？」

声を上げると同時に白刃が線を描くのを感じ、陰爪は地を蹴って上空へ飛ぶと、距離を取った。

しかし着地すると同時に、背中がぱっくりと開いていた。あと一歩遅ければ、体を真つ二つにされていたのかもしれない。

白刃を放った物の正体を突き止めようと、陰爪は正面を向く。すると、その正体に思わず目を見開いた。

「ふむ、避けるか」

そこに立っていたのは、ぼろぼろになった衛兵隊服を着た、聡士郎であった。

*

「何故……目を覚ましている!?!いや……それ以前にどうやって俺の鼻を掻い潜った!？」

陰爪は瞬時に鎖鎌を構えると、焦りを交えた声で聡士郎に問いただした。

「むう……。一度にそれだけ問われても困るぞ。まず、儂は三日前から目を覚ましていた。だがあえて伏せておいたのだ。貴様をおびき寄せる為にな。次に貴様の鼻を掻い潜ったのは、この服。そして、ワシの臭いをこの里にこびりつかせたためだ」

イヌ科の嗅覚は恐ろしく鋭い事はだれもが知っている事だろう。しかし、その嗅覚にも弱点があった。

たとえば警察犬は犯人の臭いをかぎ分け、居場所を探す際に使われる。しかし、犯人がいくつもの道を選択し、靴の下からくる匂いをこびりつかせば警察犬はその匂いに惑わされ、特定するのに時間が掛かってしまうのだ。それに加え靴底をポリ袋で覆えば、撒くことも可能であるという。他にも軍用犬は、川を使って逃げた敵兵を、追う事が出来ないと言った報告もある。

つまり、イヌ科の鼻は欺くことはできるのだ。

聡士郎は十手持ちの同僚である『笠間慶次』からその事を聞いており、実践したのである。自分の臭いがこびりついている物を権現村に歩き回らせ、さらには臭いがしみついている衛兵隊の古着を羽織ることによって、臭いをごまかしていたのだ。だからこそ、権も気付くことができなかったのである。

「まさかあの男の豆知識が役に立つときが来るとは……」

自らの手を握り開くのを見つめ淡々と答える聡士郎を睨み、陰爪は今の状況を考えていた。

結論から言うと、このまま逃げるべきなのだ。松木聡士郎が目覚ましていた事を、迅兵衛に伝えなければならぬ。そして、再び次の策を考えるのが得策なのだ。

だが陰爪は嫌人派や穏健派など関係なく、白狼天狗のプライドとして許すことができなかった。天狗は必ず事を起こすときに覚悟を決める。それ故、いまさら逃げるなど出来るわけが無かった。

「……クソ。慢心したのが仇になったわけか……。しかし、これ以上長々と話す気はない」

「それは、ワシも同じだ」

吐き捨てるように聡士郎は言うと、権に目をやって、楓を看病するように促した。権はその意図を感じ取ると楓を抱え、端へと行く。

もちろんその一瞬の隙を陰爪は好機と捉え、回していた鎖を横へと放つと鎌を動かし、軌道を変えた。

放たれた分銅は弧を描くように、聡士郎の蟀谷へと飛んでゆく。そ

の速度は正に高速である。

聡士郎は一瞬だけ反応が遅れたが、それを危なげに躲す。しかし、分銅の端が聡士郎の額をなめるようにかすり、軽く出血を引き起こした。

「むっ！」

「甘く見るなよ？俺とていくつもの修羅場を潜り抜けてきたのだ」

鎖を引きもどしながら、陰爪は言い放った。分銅が手元へ戻ると再びそれを素早く回転させ、何時でも放てるように姿勢を構えなおす。

鎖鎌の要となるものは、長さ十三尺（約四メートル）の長さの鎖から放たれるこの分銅だろう。回転させることによつて分銅の攻撃力は数段に上がり、放てば音速の分銅が相手の骨をへし折り、仕留めるのだ。人間の頭など、すさまじい分銅の威力であれば容易に粉碎することも可能である。

それだけではない。鎖鎌の真骨頂は、その鎖にもあるのだ。鎖で足を絡ませれば、そこから引き倒して接近し、鎌でとどめを刺す。またに刀に絡みつけば、満足に動けなくなるどころか、その勢いに負けてもぎ取られ、分銅が刀身に当たれば、簡単に折れてしまうだろう

「恐ろしい武器だ……軌道が読めぬ」

聡士郎は冷や汗を掻きつつ低く呟くと、追風を右手に持ち、左手で衣川を抜刀した。迅兵衛とはまた違う強者、本気を出さなければ死ぬ。だからこそ二刀を抜いたのだ。

しかし、構えはいつもの不盾流とは大きく異なった。追風を右手で掲げ、衣川を青眼へと構えたのだ。それはかの剣豪が使った構えと同じく、上段と中段における構えである。

「不盾に構えは必要なのではないのか？」

噂とは違う行動を見せた聡士郎を見て、陰爪は眉をひそめた。

「我が流派は二天一流の派生。それ故、元になった流派に従うまでよ」「ふん。まあ良い。所詮は人間の編み出した流派だ！」

陰爪は大声で叫ぶと同時に、鎖を下段に放った。

鎖は地を這うように聡士郎に向かって、高速に飛んでいく。それを陰爪は器用に操ると、分銅は地面で跳ねて、聡士郎の顔を狙った。

聡士郎はぐらりと、後方に倒れるようにしてそれを危なげに躲した。あと数センチ顔が前に出ていたら、鼻をへし折られていただろう。

分銅はそのまま宙を舞うと陰爪は鎖を引っ張り、それを回収する。そして再び回転させ、何時でも放てるように身を構えた。

「まだ万全ではない様だな」

「…」

「だが、それは願っても無い事だ。椀と共に貴様も仕留めることができろ！」

陰爪は今、高揚していた。

この勝負は勝てる。聡士郎はどうやら鎖鎌との戦いに慣れていない為、避ける事しかできないのだろう。こちらのペースに持ち込んで、確実にしとめなければならぬ。

陰爪はニヤリと笑うと、鎖を投げ飛ばし上空に浮遊させ、鎌を一気に振り下ろした。

伸び切った鎖はそのまま振り下ろした鎌に答えるかのごとく、風を切る音と共に、亜音速で聡士郎へと襲い掛かる。

聡士郎は若干身を屈めて追風を上空へ掲げると、それを防いだ。鎖はそのままの勢いで追風へと絡まると、カンツと軽い音がして、分銅が刀身へと当たった。

追風は絶対に折れぬ異刀。その性能に助けられた。普通は刀身に分銅が当たると、いとも簡単に折ってしまうのだ。

しかし、それを待っていたかのように陰爪は鎖を引っ張り、追風をもぎ取ろうとする。

そう簡単にはいかず、聡士郎は追風を脇へと座らせると踏みとどまった。そして暫く、ぎちぎちと鎖が鈍い音を立て、引き合いによる膠着が続く。

「人間如きが…なかなかの力を持っているな」

「伊達に剣を振っては…おらぬからな！」

「ふん。そうかい」

軽く陰爪は返事を返すと、ふと鎖を手放した。聡士郎は先程まで引

いていた力が自分の体に跳ね返り、思わず体勢を崩し前のめりとなる
と、陰爪は一気に距離を詰める。

「なっ!？」

「死ねえー!」

距離を詰めた陰爪は、素早く鎌を振り下ろした。鎌はまっすぐ聡士
郎の首元へと振り下ろされたが、聡士郎は強引に衣川を前にだして何
とか鎌を受け止めると、鏑迫り合いとなった。

「小癩なあー!」

陰爪は力任せで衣川に鎌を押しつけた。前のめりであり不安定な
体勢である聡士郎は、力のかけ具合で不利な状態になる。

だが聡士郎はその機会を逃さず、鎖が緩み自由になった追風の柄で
陰爪の溝内を殴りつけた。予想しない攻撃であった為かひるんだ陰
爪に追い打ちを掛けるように、蹴りを腹部に入れる。

「ぐおっ!」

声を立ててのけぞった陰爪に、続けざま追い打ちを掛け、追風を振
るった。しかし、陰爪は軽やかに後転をして躲すと、再び距離を開い
た。

「クソ!怪我人風情が粹がるなよ!」

距離を開くとすぐさま回転させた分銅を陰爪は放ち、聡士郎の左肩
へと直撃させた。幸いにも威力はそれほど乗ってはいないが、バキリ
と鈍い音が体に響き、聡士郎は目を見開く。

「聡士郎さんっ!？」

杖は痛々しい聡士郎を見て思わず叫んだ。

この時、初めて杖は聡士郎を下の名前で呼んだが、気にもしなかつ
た。

「ぐぐぐ…」

その声に答えるように、聡士郎は衣川を握り締めた。
ここで衣川を落としてしまったら、杖は心配するだろう。
だからこそ、涼しい顔を作り聡士郎は再び構えなおす。
気を保ち、自らに大事なと言いつつ。

「ほお、よく耐えられるな。肩は上がらぬと思ったが」

「こんなもの、痛くもかゆくもないわ」

聡士郎は何事も無かったかのように、涼しい声で言い放った。

だが、実際は非情にきわどい状態である。ぎりぎりど肩から体へ響く痛みの音が、その重大さを現しており、腕を中段の構えまで挙げるのにも相当な激痛が走っていた。

非情に厄介な武器である。距離を取られれば分銅の攻撃が繰り出され、接敵すれば鎌で斬り掛かる。防御型の武器ではないが、読みにくい攻撃に突出した武器である鎖鎌は戦い辛く、勝つことは非常に厳しいだろう。

「次は確実にしとめる。覚悟はいいか？」

陰爪は低く呟くと、鎖を再び高速に回転させる。ひゅんひゅんと風を切る音が耳に入り、聡士郎は思わずぞつとした。

そんな聡士郎にふと、何かが走った。

——鎖の動き、分銅の動きに捕らわれるから、難しいと判断してしまうのではないか？

先程から聡士郎はうねるように操られる鎖と、高速に飛んで行く分銅ばかりに集中していた。だが見切る事が出来ず、こうして苦戦を強いられていたのである。特別目も良くなければ、鎖の速度に追いつけるような速度も無い。自分は鞍馬や靈魂修行の際に武芸者と違う。あくまでただの、人間であるのだ。

ならば、どうすればよいのだろうか。

その答えはすでに出ている。自らの形にとらわれてはいけけない。

聡士郎は今こそ実践すべきだと、息を一つ吐いて覚悟を決めた。

「な・・・!?!」

陰爪は聡士郎の取った行動に目を疑った。

なんと瞳を閉じたのだ。

そのあまりにも無謀。いや、莫迦けた行為に、陰爪は心底呆れた表情をした。

勝てる見込みがなく、あきらめたのか。それとも、何かしらの策だろうか。ともかく、瞳をつぶれば鎖鎌に勝つことはできなまいと、陰爪は心の中で呟いた。

「…血迷いおったか。もう良い、ここで死ぬ」

陰爪は迷わず、聡士郎の額に目がけて思い切り鎖を放った。風を切つて音速の世界を、分銅は進んでいく。もはや肉眼では捉えることのできない速度である。額に当たれば、間違いなく頭蓋骨を破壊し、脳みそをぶちまける事になる。

だが。

——そこか。

聡士郎は紙一重で足を捌き、体を斜めに動かすとそれを避けたのだ。そして分銅とのすれ違いざまに、左手で持っていた衣川を振り下ろし、鎖を絡ませた。

——鎖を封じれば、もう怖い事はあるまい。

ゆつくりと衣川から手を離し、瞳を閉じたまま追風を両手で持ち替えると、聡士郎は陰爪に向かって地を蹴り一気に加速する。

「なっ!？」

陰爪が思わず発した言葉と同時に聡士郎は風を、いや音速の壁を切る速度で、袈裟切りを放った。

刹那。ガキインと金属がぶつかり合う音が周りに響いた。そして同時に赤い血しづきが、椀の顔に付着したのだった。

*

ドサリ。と、陰爪の肩から腕が地面に落ちた。切れた腕の切り口から先程まで通っていた赤い鮮血が地面を濡らし、血だまりができる。

「ば…莫迦な…鎌の刃ごと…俺の腕を切り捨てるとは…」

目をギラギラと進らせ陰爪は切られた肩を抑えつつ、途切れとぎれに口を開いた。

聡士郎の放った袈裟切りは鎌の刃を容易く絶ち、そのまま勢いが落ちずに陰爪の右肩をも絶つたのだ。切り口にまったくと言っていいほど美しく歪みない事から、まさに寸分たがわな一閃であったのだろう。

陰爪はおそらく、もう長くは生きられない。抑える掌の隙間から決壊したダムのように鮮血が溢れだしており、ひゅうひゅうと呼吸は荒い。

もって数分と言った所か。

「づうう…ぐつ…ぐおおおお…。ハッ…ハアハア…」

突如唸りだし、陰爪は表情をきつくしかめた。おそらく切られた際に出る脳内麻薬が切れはじめ、体全身に痛みが回ってきたのだろう。その痛々し陰爪の姿を見て、棍は思わず目を逸らした。同種族であるが故、目も当てられなかったのだろう。

一方、聡士郎は目を逸らさず、ただじっと、無表情で見ている。

「…身内を襲った事をワシは許さん。だがこのまま放っておくのは、貴様も辛いだろう」

「なっ!?…貴様…づつ…ここで楽にしてくれると言うのか…?」

「ワシが倒してきた妖怪たちは、たとえ下衆であっても楽にしてきた。恩を着せるわけではないが、その方が成仏してくれるとワシは思う」
苦しみに交えた心底驚いている表情を陰爪はすると、聡士郎の言葉を鼻で笑った。

「ふん…よせ…。俺が小さく見えるじゃねえか…。天狗は情に弱いんだよ」

もはや瞳も散漫とし、死ぬ寸前である陰爪は、唐突に口を開いた。

「最後の言葉だ…。迅兵衛様に気を付けるんだな…ぐつ…あの人は俺が死んでも…密かに計画を…続けるはずだっ」

「計画…?」

「詳しく…知らねえ…。へへっ…だがこれで、貴様には借りがなくなっただな」

「…あいわかった。鎖鎌の陰爪…あっぱれな男よ」

「そいつはどうも…」

陰爪が返事を返すのを聞くと、聡士郎は静かに追風を構えて横に振り、陰爪の首を跳ねた。

首はそのまま宙を舞い、地面に落ちた。その時の陰爪の顔は満足げな表情であった。

「陰爪よ…お主との戦い…意味のあった物だ。感謝するぞ」

先程のけ切りを思い出しつつ、聡士郎は追風に付着した鮮血を振り払うと、おもむろに帯刀した。

「そ、聡士郎さん！」

陰爪の仏に手を合わせていると、椀が名を読んで、聡士郎は振り向いた。そして悲しそうな表情をしている椀を見ると、居てもたつてもいられず、彼女の元に歩み寄る。

「大丈夫だったか！」

「それよりも…楓が…楓がッ！」

静かに眠る楓を見て、聡士郎は彼の息を確認する。幸いにも心臓は止まっておらず正常に動いている。どうやら命に別条はなさそうであつた。

「…大丈夫だ。生きている」

額の傷を見てみると、分銅はどうやら頭蓋骨を砕いておらず楓の額を割つただけであつた。犬童杏と言う天狗や山道家の舞姫の事例から、おそらく陰爪は、無駄な死人を出さずにいたのだろう。

「頭部の衝撃により気を失つたのだ。時期に目を覚ます」

「本当ですか…？」

月の光に照らされ、泣き出しそうな顔をしている椀を見ると。聡士郎は頬を若干赤くして顔を逸らした。不謹慎であるが、泣きながらの上目づかいはどうやら聡士郎にとって相当な威力であつたようだ。

「あつ…ああ、だから安心しろ」

ぎこちないが優しい声で聡士郎は言う、椀の肩を軽くぽんぽんと叩いた。すると椀は肩の叩いた掌を握って、頬を当てた。

「聡士郎さんに言われると…自然と安心できますね…」

「そうか…。そうなのか…？わっ…ワシも椀に頬ずりされると…そのだな…」

何か返事を返そうと思つたが、何も出てこない。聡士郎は今、緊張で頭が回らなかつた。

ほんの数秒であつたが、彼らにとって長い時間が過ぎた後、聡士郎は何処か覚悟を決めたような顔をして立ち上がると、衣川を拾い上げた。

「ワシの流派はもう不盾流とは呼べぬ」

「どうということですか？」

権は楓に寄り添って、意識が回復するのを待っていたようで、聡士郎の言葉に疑問を投げかけた。

「我が不盾流は盾が無くとも身を守る流派であった。だが、ワシはこの戦いを終えて一つ気づいたことができたのだ。ワシの剣はもう自身を守る剣ではない」

「えっと…つまりどういうことでしょう」

意味が分からず権は首をかしげると、聡士郎は振り向いて、権の瞳をまっすぐ見た。

「ワシの剣は…ワシの守りたいものを守る剣になったのだ」

「あっ……」

「ははっ…臭い言葉だ。ありきたりでもあるな。正直言っている自分も恥ずかしい。だがな、もうこの流派は不盾流ではないのだ。ワシの守る者は権だ。そのためには守りに徹しず、時には自ら攻撃する。二刀だけではなく、一刀も極める。そうだな…今日からこの流派を…」

ふと言葉を区切り、聡士郎は頭上に光り輝く月に衣川の剣先を向けると、再び口を開いた

「盾無流と名付けよう」

「盾無…ですか?」

「ああ、とある武将が着ていた鎧から取った名前だ。矢を弾き、剣を防ぎ、槍をも防いだと言われている。まさに鉄壁の鎧だ。そう、ワシは権の鎧だ。御前を守る為、ワシは全身全霊を掛ける」

聡士郎は権に笑いかけて言うと、衣川を帯刀したのだった。

白狼の舞 別離

年明けから一月半が経った。

冬もそろそろ終わりが見え始める頃合いである。雪は大粒の牡丹雪へと変わり、一層そのことを実感させていた。しかし、終わりだからと言って寒い事には変わらない。身を震わせながら春吉と聡士郎は尖刃館の玄関前にもたれ掛っていた。

「：侵入者の正体は、鎖鎌の陰爪だったわけか。なるほど・・・」

聡士郎の言葉に、春吉は納得したように頷いた。

「有名な奴だったのか？」

「有名と言うか：奴は元諜報隊所属の男なんだ。特異能力である『気配を薄くする程度の能力』を持っていた。それ故影は薄かったが、諜報隊の中ではかなりの強者だったらしい。諜報隊も勘付けなかったのには頷けるな」

なるほどと、聡士郎は唸った。

奴が見つからず村に潜伏できたことや正体を掴まれず事を起こせたのは、この能力の為であったのだ。本人の臭いや存在を薄くすることにより、正体をあやふやにして視認をしづらくする。まさに隠密に優れた能力であろう。

また、陰爪は権現村出身であったため、当然のごとく身を隠す場所をいくつか知っていた。それは神輿の倉庫であったり、とある店の縁の下であったり、さまざまである。

因みに陰爪の遺体は、その日の中に処理された。腕と首を切り落とされた遺体は衛兵が見た時にはすでに風化を辿っており、ほぼ骨だけになっていた。妖怪の遺体は、自然分解が異様なほど高いのである。それにより、妖怪の遺体はすぐに消えるのだ。

「時に聡士郎よ」

「なんだ？」

「おめえは結局、だれが選ばれると思う？」

そう。舞姫の決定がいよいよ今日、行われるのである。陰爪の強襲により明後日に控えていた発表であったが数日延長した為、権はもちろん、聡士郎や春吉を含む関係者すべてが、待ちくたびれていた。

前に既述したように、舞姫の練習期間内では尖刃館の中に男は入ることができず、聡士郎はこうして権が来るのを待っていた。春吉も非番であり、ちようど発表日時とかぶさったのでこうして付き添っていた。

聡士郎は仮に権が舞姫に選ばれなかったとしても、巫女の護衛もしなければならぬ。露草から渡された盟約書にそう記述してあったのだ。その為、こうして地面を温めるもとい壁を温めているのである。

聡士郎は春吉の問いに答えるが如く、おもむろに懷から紙巻煙草を取り出すと、火を付けた。

「わからんな。だが、穩健派の舞姫が選ばれることを祈るばかりだ」

「それはやはり、妖怪退治の専門家としてか？」

「まあそうだ。ワシとて無駄に争いたくはない。それにワシが剣を振るう大義は、親しいものを守る時のみだ。もちろん自分の身も守る時も使うが……」

肺から煙を吐いて、聡士郎は軽く笑う。

「うーむ、なるほど。まあ俺も同じ意見だがな」

春吉は同意を示すように頷くと、「そう言えば」と話題を変える。

「おめえ。護衛の任が終わったらどうするんだ？このまま人里に戻るのか？」

その問いに聡士郎は考え込む。

勿論、このまま権現村に居ることはできないだろう。約半年の間に十分馴染んだとはいえ、所詮は人間であり異端分子である。当然村から追い出される事となるだろう。

異論はなかった。それがこの世界、幻想郷の摂理だ。

人間は里の外で生きることが難しい。それは十分聡士郎もわかっている事である。

「ああ……おそらくな。そこでワシは改めて、十手を里の守護者である

上白沢慧音に返す。断られても、無理やり返すだろう。そして権力者に土地を借り、耕し、畑を作り、農民として生活をするさ」

もう、こうすることしかできないのだ。十手持ちである松木聡士郎は、もうこの幻想郷では必要とされていないのだ。過去の栄光を胸に秘めて、黙々と生活するための資金を稼ぐしかない。働いてもいらないのに十手持ちとして給料をタダ獲りする訳にもいかない。

「おめえ…それほどの腕を持つのに、剣を捨てるのか？」

「そうではない。だが、必要とされぬのに十手持ちとして突き通すのは、都合が良いのだ。それに剣の鍛錬は、農民になつたとしてもできる。かつて天下人が行つた刀狩り令はこの幻想郷にはない。なれば、いつでも剣を振れるのだ」

「…そうか」

少し幻滅した様に春吉は呟くと、一つ息を吐いた。

「人間は冷酷だな。必要の無いものは捨てるのか。過去にお前たち十手持ちがやった事は、大いに貢献され、賞賛に値するものばかりだろう？それなのによ…」

「…時代は変わる。ワシらがやってきたことは次の世代へつなげる事であった。だからこそ必要とされないのであれば、ワシらは引かねばならぬ」

これがこの権現村で生活し、聡士郎が考え抜いて出した答えであった。『老兵死せず、ただ去るのみ』である。

過去の自分たちの様に力で叩き伏せる退治ではなく、競技として妖怪を退治するスペルカードルール。競技であるが故、死ぬこともほとんどない。妖怪も人間も、あまつさえ昆虫ですら平等なルール。そんな素晴らしいルールを決めた博麗霊夢を恨むことは筋違いであるのだ。自分たちの求めた平和を実現した彼女は、むしろ賞賛に値する。

「…確かに新しい巫女になつてから穏健思考になつた天狗も少なくはない。あの決まりは祭りみてえなものだ。俺達男はあまり関係の無い話だが、天狗は祭り好きだ。お互いに楽しめる『退治』とは考えた物だと思うぞ」

「だから、変わったのだよ」

悟ったように言う聡士郎を見て、春吉は眉をひそめた。

「ならよ、おめえは変わらねえのか？」

「…？だから、農民になり生活すると言っただろう？」

「強がるなよ。たった半年の付き合いだが、俺には分かる。おまえ農民になりたくねえだろ？それは変わるのってことじゃねえ、逃げた。違うか？」

その通りであった。本当は農民など、やりたくないのだ。

だが、現実を受け入れなければならぬ。それが逃げでも、嫌な事であつても、間接的に役立つことである為、聡士郎は渋々農民になろうと思ひ立っていた。しかし春吉の言葉で、その決心が改めて揺らいだ。

「おめえが本当にやりてえ事はねえのか？このまま護衛を継続することか？それとも、十手持ちとして必要とされることか？」

「そんな事はどうでもよいのだ。…ワシを必要とする事をやりたい。だが…」

「なら、やればいいんじゃないか？」

「簡単に言うがな…」

春吉と聡士郎の話しがヒートアップする中。唐突に尖刃館の門が重くらしい、木のこすれる音と共に開いた。

そして直ぐに、見覚えのある顔が出てきた。白狼天狗副統領である真神露草ともう一人、嫌人派犬伏家の舞姫候補、犬伏柊だ。

「ど、どう言う事ですか！露草様！なぜ…なぜです！」

柊は露草の横を早足で歩いて、講義を申し立てているようであった。

「何故も何も、これは我々穩健派のみならず、嫌人派の幹部。そして大天狗様も含め決めた事だ。舞姫はもう決定した」

「しかし…これはあまりにも横暴です！穩健派の圧力で嫌人派を抑えたのではないのですか？」

その言葉が癪に障ったのか、露草は足を止めると思いきり柊の頬を叩いた。ピシヤリと濁いた音が周りに響き、柊は倒れる。

「小娘。お主が嫌人派の幹部の話を目にできる事も知っている。だ

が、何も不正なく、これは取り決めた事だ。文句があるなら、大天狗様に申し立ててみよ！」

その言葉に、柘は何も言えなくなり、黙り込んだ。露草は一瞬だけ聡士郎に目線を配ると、再び早足で尖刃館を後にしていった。

「何故だ…何故…。ぐうう！…おのれ。彼奴め、はかつたのか！」

柘は聡士郎と春吉を気にもせず叫ぶと、怒りを醸し出しながら、尖刃館を後にした。

「…何が起きたのだろうか？」

「さ、さあな…」

思わずあつけにとられてしまった聡士郎と春吉であったが、二人を我に戻すように、聞きなれた声が横から聞こえた。

「二人とも…」

その声を辿るように、二人は顔を向ける。そこに立っていたのは、おどおどとした表情をした、柘であった。

「柘…ど、どうであった？誰が舞姫になったのだ…？」

聡士郎の問いに、柘は一つ息を付いて自分を落ち着かせると、口を開いた。

「その…私が…私が舞姫に選ばれました！」

*

柘が舞姫に選ばれたことを祝うため閃牙殿から幹部たちも集い、尖刃館の手前で盛大な宴会が行われていた。

祝い事の多くは、この尖刃館の前で行われるのだ。尖刃館は様々な顔を持つ。神聖な道場ではあるのだが、村が大きくない為、集会所の役割も果たしているのだ。それに加え天来寺からそこまで離れておらず、上級官職の天狗達が集いやすい為、祝い事や祭りなどが行うのにも都合が良い立地であった。

宴会が始まるとにぎやかな演奏と共に酒と肴が振舞われ、天狗達は盛大に飲み始めた。

白狼天狗も鴉天狗も問わず、この宴は参加する。祭りが好きな天狗達にとっては外せないのだ。

彼らはいわずと酒豪である為、宴会が始まる夕方から深夜である丑

三つ時まで浴びる様に酒を飲みふけた。笑い声も上がり、時には喧嘩もあるが、それもこの宴の華であろうか。ともかく、夜通し宴は行われていた。

そんな中、権は舞姫業務の初めである挨拶回りを終えると、いったん舞姫の持ち場から抜け出し、聡士郎を探していた。

舞姫に選ばれると、宴会時に上級官職を持つ天狗達に挨拶をしなければならぬ。その為、丑三つ時まで事実上の軟禁をされていたのである。白狼天狗から鴉天狗を合わせ、合計三十人程の人物と接しなければならず、相当疲労感もたまっていた。

しかし、宴会が始まる前に聡士郎と話す約束をしていたため、こうして疲れを押し殺し宴会場の中を探していた。まさかこれだけ時間が掛かるとは思っていなかったのだ。

だが自分で約束を交わしておいて、それをほっぽり出すのは権の性格——人としてそれは許せなかった。

「いったいどうした…」

眉をひそめ、少しだけ不安げな声で権は呟いた。

ひよつとして帰ってしまったのではないだろうか、あれだけ長い間待たせてしまった為、しびれを切らしてしまったのかもしれない。そんな思いが権の中にあり、罪悪感と共に心寂しさを抱えていた。

厠かもしれないと権は思い立ち、尖刃館に隣接している雑木林を見た。尖刃館の中にある厠は宴中、上級官職の天狗しか使うことができない。その為こうして雑木林で用を足すものも多々いた。

権は舞姫装束を自分の持ち場で脱ぎ、いつもの恰好に戻ると、林の中へと入って行く。

そのまま少し歩くと、かすかに話し声が聞こえてきた。

聞き間違えるはずもない。聡士郎の声である。

権は表情を明るくし、声の方向へと歩いて行く、すると少し開けた場所で聡士郎は空を見上げて立っていた。

「あつ、そうじろ…!？」

権は開いた口を瞬時に閉じた。聡士郎の隣にはもう一人、見慣れた白狼天狗が立っていたのだ。月夜に照らされる長い白髪。堂々とし

たその立ち姿は、露草であった。

権は声を押し殺すと、木陰で二人を覗き込んだ。

*

「では、ワシはもう用済みと言う事なのか？」

聡士郎はトーンを落とし、落ち着いた声で露草に問う。

宴の際、聡士郎は権を待たため一人で飲んでいたが、露草に声を掛けられた。

その時の露草の顔は、とても言いにくそうな何かを秘めた顔をしていた。いつもの露草ではない事を聡士郎は悟ると、人気の無いこの雑木林の奥へ行くことを提案したのだ。

両者はしばし月を眺めていると、露草が唐突に口を開いた。

前置きなどは無かった。単刀直入に発せられた露草の言葉は、権の護衛から外すと言った内容であった。今回は意識を失った際の一時的な物ではなく、本当に護衛をその物を解任されたのだ。

それを聞いた聡士郎は、意外にも素直に受け止めていた。

いずれこうなるのではないかと、予想していた事であったからである。

しかし、一つ「何故だ？」と小さく言葉を洩らした。

その問いかけに露草は苦い表情をすると、その訳を話した。

大まかに言うと、露草がこれまでに起こしてきた無理強いのはわ寄せであった。それまで嫌々ながら露草の命を承諾してきた嫌人派は、ここぞとばかりに白狼鴉共に関係なく団結を果たし、『松木聡士郎を犬走権の護衛から外せば、舞姫に犬走権がなる事を承諾する』と申し出したのである。

露草率いる穏健派は多数決の結果、この案を呑むことにした。異端分子である聡士郎を外すだけで良く、デメリットが少ない——いや、穏健派としては何処も痛手が無かったのだ。穏健思考を持つ権が抜擢されるのであれば、断る理由が見つからなかった。

こうして権は、舞姫候補に選ばれた。最終決定権を持つ大天狗も、何も問題なくそれを了承した。

「…悪く言えば、そうなるな。明日には犬走家に使いが参る。白狼の

舞が行われるまで、閃牙殿に幽閉される事になるだろう」

聡士郎の問いに、露草は珍しく申し訳なさそうな表情をして顔を落とした。

「はっはは…そうか。ワシはここでも…」

薄く笑いながら、聡士郎は乾いた声で言った。

「しかし、御前には感謝をしている。侵入者の件でもそうだが…、権を守ろうと言う気持ちはきつとこの村に住む天狗すべてに伝わっただろう。人間にもこのような奴がいるとな…」

「そうか…初めからその為に…」

聡士郎は納得するように頷く。

天狗から見下されている人間であるのにもかかわらず、聡士郎はただ正直に、そして懸命に権を守ると言う任を果たしていた。それにより人を見る目を変えさせることで、中立思考を持つていた天狗達を穩健思考へと傾けることこそが、露草が聡士郎を呼んだ真の策略であったのだ。

その効力は大きかったと言える。まんまとその策略に、中立思考の天狗達は乗ったのだ。事実、舞姫候補輩出した中立思考の筆頭とも呼べる林道家は、聡士郎の行いを賞賛しており、穩健派のお告げを受けることに賛成していた。

「…で、どうすればよいのだ?」

必要とされぬなら、ここにもう用は無いだろう。そう言いたげな顔をして、聡士郎は大げさに肩をすくめた。

しかし、何故か露草は表情を緩めた。

「ああ…その事だが—」

そう、露草が返事を返そうとした時の事であった。

ガサリと、後方の草木が揺れた。二人は何者かと警戒しつつ、瞬時に振り返る。

「あっ…」

そこにいたのは、言わずと権である。ぽかんと間抜けた顔をしていた。

「も、権…今の話し聞いていたのか?」

露草は気まずそうに、椀に言う。すると椀は目元が熱くなり始め、涙をこぼし始めた。

「どういうことですか！ 聡士郎さんを外すって…どうしてですかっ！」
黙っていられず椀は涙交え、大声を張り上げた。

苦い顔をして露草は椀に説明をしようとする。しかし、聡士郎は露草の前に割り込み言葉を阻んだ。

「…椀、世話になったな」

「えっ…」

ゆつくりと冷静な口調で言う聡士郎に椀はカッとなった。

「そ、そんな！ 聡士郎さんはそれで良いのですか！」

声を荒げ、椀は叫ぶ。しかし聡士郎は強張った顔をして表情を崩さない。

「露草殿すらどうすることもできなかったのだ。ワシらがあがいても何も変わらん」

「そんなの…そんなこと…！ 納得できません！」

「納得できないのはワシも同じ。だが、ワシは依頼主の命に背くことはしない」

今までの付き合いは仕事上の為仕方が無かったと言いたげに、聡士郎は淡々と言う。だが、本当はそうでないことを椀はとうに知っていた。

「…明日には閃牙殿からの使いが来るそうだ。白狼の舞までの間、稽古に励め。…そしてワシだけではなく、誰もが見惚れる程の舞を踊って見せよ。約束だ…」

聡士郎は低く言う。椀に背中を向け、再び月を眺め始めた。その行為は、もう聞く耳は持たないと言った表れであった。

既にこの事を受け入れている聡士郎を見て、椀は何か熱いものが込み上げてきた。それは呆れからきているのか、悲しみから来ているのか、自分では分からない。

椀は俯くと来た道を戻るように、雑木林へと思い切り走っていった。

「いいのか？」

そんな権を見つめながら、露草は呟いた。

「……うしたほうが権も受け入れやすいだろう」

ずるずると護衛を解任することに反対しても意味は無い。

上下関係の厳しい天狗の社会で上から決められたことは絶対従わなければならない。覆すことができないのは、権も嫌と言うほどわかってはいるはずだ。

だが、聡士郎は薄々気が付いていた。自分の心の中の事、そして権の心の中も。

それだからこそ、こうして突き放すような態度を取り納得させるしかなかった。激薬ではあるが、効果も絶大であろう。

所詮、人と妖怪は結ばれる事は無い。あつたとしても、それは悲惨な結末を生む。両者の心が引けなくなるより前に、手を打たなければならなかった。

しかし、聡士郎の強く握り締めた拳から血が滴った事を露草は感づいていた。

「そうか……」

露草はただ、小さく呟いた。そして思い出したように言葉を繋げる。

「あー先程の話しの続きだが……お前にはまだやってもらいたいことがある」

「何……？」

少し驚いた顔で、聡士郎は振りかえった。てつきり明日にでも追いつ出されるのかと思っていたのだ。露草はそんな聡士郎の表情を見ていつもの調子に戻りニヤリと笑うと、腕を組んだ。

*

宴会も終わりを迎え、早朝。

いつもなら朝の鍛錬を行う時間である。ちょうど同じような時間に聡士郎も目を覚まし、一緒に走ることが日課になっていた。家に戻ると軽く朝食を済まし、そこから尖刃館へと向かう。

だが、それも今日からしばらくできない。いや、聡士郎が欠けて、もう二度とやることは無い。

権はいつもの服とは違う、礼装に着替えていた。楓も見送りの儀の為、礼装を着ており、どこか物々しい雰囲気であった。

夜通し宴会を行ったのにもかかわらず、今日もまた白狼の舞には欠かせない重要な見送りの義がある。一見、人間からすればハードスケジュールであろう。しかし天狗達は人と比べて体の作りがまるで違うのは言うまでもない。その為、何も支障は無かった。

「楓。家が片付き次第、土筆のどこに行きなさい。この紙を渡せばきっと受け入れてくれるでしょう」

しゃがみこむと、権は三つ折りにした手紙を楓へと渡した。

楓は手に取ると大事そうに懐へしまって、にっこりと笑顔を作った。

「師匠もお元気で！舞を楽しみにしています！きっと師匠が舞う姿は美しいんだろうなあ…」

その笑顔の額には、割れたような傷跡がある。

陰爪の奇襲によりできた傷だ。

あの後、楓は聡士郎に担がれ医者元まで運ばれ、縫われたのである。天狗は傷の治癒が早い、縫い跡により一生消えない傷が残ってしまった。

しかし本人は名誉の負傷と言って喜んでいた。そんな楓を見て権は胸が痛くなる。自分の所為で出来た傷であるからだ。

「…お世辞でもうれしいです。正直、私には似合わない役だと思えますが…」

「そんな事無いです！僕は断言できます！」

「ふふ…楓はやさしいですね」

権は楓に微笑みかけると立ち上がり、玄関へと向かっていく。

ふと、権は玄関で振り返った。少しの間家を空けるだけなのに、どこか寂しさが込み上げてくる。

「絶対…成功させないと」

その思いを押し殺すように権は呟いた。

あの後、宴会から抜け出して家へと帰ると、権はひたすら自室で涙を流していた。何故、聡士郎があんな事を言ったのか、そして何故、素

直に護衛から外される事を受け入れていたのか、ともかく涙を流し続けた。

そこから寝てしまったのか、早朝になると涙は枯れていた。冷静になった事で初めて、聡士郎の意図を薄々勘付くことができた。彼はわざと自分を突き放したのだと。

そして最後の言葉には聡士郎の権に対する思いが込められていた。自分だけではなく、他人も見惚れる程の舞。それはつまり、聡士郎は権に惚れている事を現していた。そして、その惚れた女はぐうの音も出ない程美しいのだと、皆に伝えたい。そんな意図があつたのだろう。

だからこそ、権の舞に対する思いは、一層強くなった。彼の残した思いに、答えなければならぬ。

その為にも、恥じぬ舞姫に。誰もが認め見惚れる舞に。そして彼に、自分の思いが伝わる舞を…。

権は心の中で復唱すると玄関を開け、使いの待つ外へと出ていった。

*

村全体の行事である「見送りの儀」が終わると、村にはいつも通りのんびりとした空気が漂っていた。天狗達は一斉に散らばり、それぞれの仕事へと戻っていく。今回の「見送りの義」は過去に比べ村の住人が増えた為、盛大な物となった。

権現村住宅地から天来寺へと続く一本道を天狗達が列を連なり歩いて行く。これが「見送りの儀」である。

村の住人達は、今日ばかりは店や任務を一時的にやめなければならず、村の総人口約千人が天来寺へ舞姫が入る様子を拝まなければならなかった。

舞姫の乗った籠が近くに見えると、白狼、鴉共に関係なく頭を下げなければならぬ。だが、保守的な考えを持つ天狗達にとってこれはごく当たり前の事であり、疑問を持つ者はだれ一人としていなかった。

その理由は、神を降霊させる身である為、無礼を働いては厄災が降

り注ぐと言われており、それを信じているからである。

「ふああ…やつと終わつたぜえ…」

春吉はあくびをしながら、仕事の疲れを癒すかのように、衛兵詰所で寝ころんでいた。先程まで衛兵隊は「見送りの儀」の警護をしており、精を出していたのだ。

嫌人派の幹部たちは椀が舞姫となる事を認めたとはいえ、一般的な嫌人派は良く思わないものが多い。それに過激派集団がまた何かをしでかすのではないかと桔は睨み、警護の任を買って出たのである。

それが幸いしたのか何事も無く、無事に舞姫は天来寺へと入っていった。天来寺所属の衛兵隊は何かしらの嫌味を言っただけだが、後悔は先に立たない。嚴重な警護する事にこしたことは無いのだ。

因みに衛兵隊は、この権現村に二つあった。一つは春吉や桔が所属する一般的な衛兵隊で、通称「村廻方」と呼ばれている。文字の如く村を見回り治安を維持し、何か異常がないかを調べる事が多い。尖刃館での修行で衛兵隊を目指す物は、ここに属することが多かった。

次に天来寺所属の衛兵隊である。彼らは名家出身——いわゆるエリートであり、幼少期から腕の立つ者が多く尖刃館の卒業生から稀に選抜される。それ故腕を買われ、天来寺の警護を任されるのだ。

その為、双方の衛兵隊は良く衝突していた。衝突と言っても口喧嘩程度ではあるが、度が過ぎると殴り合いが起きることがある。鴉天狗と白狼天狗が犬猿の仲であると同じように、双方も合間みえる存在であった。

さて、春吉は暫く横になり、日頃の疲れが体に來たのか瞼が落ち始めた頃であった。奉行所の出入り口が騒がしくなった。

何であろうかと春吉が半分寝ている頭で考えていると、縁側から誰かが走ってきたのかドタバタと音がした。

「春吉さん！」

勢いよく襖が開いたと思うと、春吉の後輩である繁縷柵。通称「チビ太」が、血相を抱えた顔をしていた。

「なんでい」

「いや…その…」

急に戸惑いはじめ、柵は目を泳がせる。それを見た春吉は睡眠を邪魔された怒りが込み上げ、怒鳴りつけた。

「手前エなめてんのか！用があるならまとめてから言いやがれ！ぶん殴るぞ！」

「は、はい！人間がこの奉行所訪ねてきてきました！」

柵は恐縮しながら、威勢よく春吉に要件を言う。

なるほど、だから言うのに戸惑っていたのか。春吉は理解した。人間と言う事は聡士郎であろうと思ひ立ち、柵を押しつけて、奉行所の玄関へと向かった。

玄関の前に着くと、予想した通り聡士郎が立っていた。春吉は少し強めの口調で、聡士郎に問う。

「おいっ聡士郎！なんか用でもあるのか？」

その声で春吉の存在に気が付いたのか、聡士郎は軽く手を上げた。

「おお、春吉。すまぬな」

「スマンじゃねえよ。権の護衛はどうしたンでい？それに、ここに来るとはよほどの事があるのか？」

春吉の問いに聡士郎は表情を曇らせて、腕を組んだ。

「…ワシは護衛を解任された」

「なっ…！おいおい、今度は本当に解任されたのか？」

流星に春吉も驚いたのか、目を見開いた。しかしすぐにニヤリと表情を歪める。

「…それで、さよならの挨拶でもしに来たのか？案外可愛いところもあるじゃねえか」

「気持ち悪いことを申すな。ワシは新たな任を与えられたからここにいるのだ」

嫌な物を見るような表情で聡士郎は春吉に言うと、玄関を見渡し、再び春吉に視線を戻した。

「ここに犬童桔と言う男が居ると思うのだが、その男に用があつてここに来たのだ」

*

それから聡士郎は春吉に案内されると、長官室へと案内された。

衛兵隊の長官は、奉行所で個別に部屋が与えられるのだが、桔は個別の部屋に居座る事を嫌い、村を出歩き見回りをすることが多い。その為、今では長官室兼、応接間の様な役割を果たしていた。

「失礼します、春吉です」

春吉が長官室の扉を叩くと「入れ」と言葉が扉越しから聞こえ、中へと入っていく。

幸いにも今回は見回りの儀があつた為、桔は見回りを行つていなかった。書類の整理を長官室でしていた様であり、タイミングが良かったようだ。

「むっ？春吉だけではなかったか。するとその男が」

顔を上げると桔は少し面食らつたような顔をして、まじまじと見つめた。

「十手持ちが一人、松木聡士郎と申す」

「うむ、噂は聴いているぞ、陰爪を倒したのだな。儂からも礼を言わせてくれ」

「それがしは任を果たしたまで、例を言われる筋合いは無いかと」

その言葉を聞いて桔は若干微妙な顔をしながら「そうか」と頷いた。

「さて、それがしがここに来た理由は他でもない。実は真神露草殿から書状を預かつているため、馳せ参じたのだ」

「む？露草様から？」

桔は眉をひそめると、聡士郎が懐から出した書状を手に取ると腕を振り、ばさりと書状を開いた。

「ふーむ…。お主はこれで良いのか？」

「…問題ない。むしろこの村に居られるのであれば、何でもよかつたのでな」

低く声を押し出すようにして聡士郎は答えた。その表情を桔は見るとしばし唸る。

「…そうか。では頼んだぞ」

「恐れながら、おかしら。何が書いてあつたので？」

話しに着いて行けないのか、春吉は二人に目を運びながら、説明を

求めた。桔は腕を組みその問いに対して重く口を開いた。
「露草様の命により、今日から松木聡士郎はこの奉行所で務める事と
なった」

信頼と代償

さて、衛兵隊に入隊することになった聡士郎は春吉と共に桔の後ろについて行き、壱ノ間に案内された。

壱ノ間は、春吉などの部下が仕事をする場所であつた。しかし仕事とは言っても村見回りである彼らはここ居ることは少なく、事件などの捜査本部として資料を探す際に使うのである。

今回は『見送りの儀』の護衛が終わつた直後であつたため、まだ回りに行っていないのか多くの衛兵が残つていた。昼休みの際に足を運ぶ事も多いのだが、今回は先ほどの疲れから羽を伸ばすかのよう
に、他愛のない会話に花を咲かせていた。

そんな会話を断ち切るように、桔は一つ咳払いをする。

「おめえら、まだ見回りに行つてねえのか？」

桔の言葉に、残つていた衛兵達は一斉に体をびくりとはねて話を辞めると、振り返つた。

「お、おかしらっ！…いい、今から行こうと思つていました！」

一人がひきつった笑いを浮かべながら、言い訳をする。それに続き、数人も苦い顔をしながら笑つた。

桔はそれを見ると額に手を当て、ため息をつく。

「はあ…おめえたちはよ…」

桔の呆れた態度を見て流石に動かなければと思つたのか、衛兵達はと次の仕事に戻る為にちらほらと立ちあがった。

しかし、それを静止させるように桔は言葉を続けた。

「まあこれはこれで、手間が省けたか」

「えっ、そりやあどう言う事で…」

最初に言い訳をした衛兵は、思わず首を傾げた。

「いやなに。新人が入つてきたのでな。紹介しようと思つていたのだ」

「えっ？新人ですか？」

不思議そうに顔を見合わせる衛兵達を見て、桔は部屋の中に入り長官用に用意されている座布団の上に座る。そしてそこから、襖の陰に

立っている聡士郎に「おい」と声を掛けた。

「失礼する」

聡士郎はそこから、ゆつくりと壱ノ間へと入った。すると、衛兵たちは目を見開き一気にざわついた。

「今日から白狼の舞までの間、衛兵隊に席を置くことになった十手持ちの松木聡士郎だ。皆、いろいろと教えてやれ」

あたかも普通に聡士郎を紹介した桔に、衛兵たちはさらにざわついた。

無理もない。そもそも今季の新人雇用はまだ先であり、何より聡士郎は人間である。いくら腕の立つ剣士と言えど、他種族の人物を衛兵隊に起用するのは、衛兵隊創立始まって以来の事であった。故に、驚きと疑問の声が衛兵達の中で渦巻く。

「ちよつと待ってくださいえ」

そんな中、壱ノ間の奥に陣取っていた厳つい表情の白狼天狗がふと声を出した。

「どうした？ 浅茅よ」

「ここはいつから、旅籠屋になったんでえ？」

浅茅と呼ばれた白狼天狗は、上司であるにもかかわらず、威圧した口調で呟く。

「なにい……？。てめえいつから儂にそのような口を叩けるようになったのだ？」

「気を悪くしたら謝りますぜ。が、どうにも納得できないんでさあ」

浅茅の言葉に桔は眉を顰め「なにがだ」と言葉を促した。

「その男は舞姫様の護衛として特例で人間から取り立てられたはず。それなのに何故、ここに来たのが気がいらねえんです。おそらく露草様に愛想つかされ、お情けでここに取り立てられたと思うのですが……。おい、違うか？ 十手持ちの旦那？」

浅茅は如何にも舐めきった口調で聡士郎に問いたです。それに合わせるかのようにほかの衛兵も表情を嫌味っぽく変えた。

なるほど、事情を知らぬ一般人にはそのように見えるのか。聡士郎は無意識に強く言い返した。

「確かに莫迦狗や莫迦鴉共にはそう見えるかもしれぬ、だが、露草殿からのお情けでここにいるわけでは無い」

「て、テメエ……。人間の分際で俺達を莫迦と言ったか！」

聡士郎の言葉に案の定、浅茅や他の気が強そうな衛兵達が身を乗り出し、食って掛かろうとした。だが、桔の鋭い視線を受け恐縮したのか、渋々その場に座った。その眼力はさすが衛兵隊長官であろうか。「まあ落ち着けおめえら。露草様からは書状を預かっておる。この者は偽りを申してはおらん。それにたとえ命であっても、儂が簡単に衛兵隊を雇用すると思うか？」

にやりと笑い桔が言うと、衛兵達も確かにと表情を緩めた。桔が雇用了と言う事はつまり、露草が渡した書状は相当な事情が書いてあったと考えることができるのだ。桔を良く知る衛兵である浅羽も、渋々納得した顔をする。

「うち……まあいい。じゃあ何のためにここにいるんदै？」

「何の為？……と言われても困るな。ワシは露草殿直々に命を承っている。それに、ワシの思惑と露草殿の思惑が一致したのでな。特例でここに配属された」

「思惑だあ？」

勘ぐる様に、浅茅は聡士郎を睨む。

「答えても良いが……。桔殿、その前に聞きたいことがあるがよろしいか？」

聡士郎は浅茅から視線を桔へと移した。桔は眉を顰め聡士郎を見る。

「なんだ？改まって」

「ここに、嫌人派はどれくらいいるのだ？」

「どうやら聡士郎の言いたいことが理解できたのか、桔は言葉を返す。

「うむ。安心しろ、嫌人派はここには居ねえ。そもそも俺達村回りの奴らは中立派や穏健派の一般家系の出が多い。対して天来寺配備の衛兵は基本名家出身ばかり。つまり嫌人派が多いんだよ。だから馬が合わねえ。もつとも、ここにも中立派嫌人思考寄りの者はいるぞ」

腕を組んで難しい顔をする浅茅の方を見て、桔は答えた。

「なるほど・・・そのような仕組みに・・・では、問題ないな」

聡士郎は桔の答えに頷くと、その場に座り込み、説明を始めた。

*

暫く聡士郎の思惑を聞きいていた衛兵達は、黙り込んでいた。

詳しく説明すると、陰爪を成敗した際に彼が残したあの言葉が関係する

『迅兵衛様に気を付けるんだな。あの人は俺が死んでも密かに計画を続けるはずだ』

つまり、迅兵衛は過激派集団と繋がっているのだ。それに加え黒狼隊の一員である陰爪を使ったと言う事は、彼は過激派集団の中でもそれなりの立場があるのだろう。

だが、陰爪が嘘を言った可能性も十分に考えられる。権現村を混乱させることが目的なのかもしれない。

しかし、聡士郎はそう思えなかった。

その事実をなぜ自分に伝えたのか。それが引つ掛かっていた。

自分は人間であり、この権現村内で発言力は無いに等しい。仮に天狗達の上層部へ申し立てたとしても、おそらくは戯言だと一蹴りされるのが落ちである。

だが何故あの時自分に、それも迅兵衛を名指しで口にしたのだろうか。

聡士郎はしばらく悩んだが、やがて結論に行きついた。

それは、陰爪が最後に出した情では無いだろうか。

天狗と言う生き物は他の妖怪にプライドが高いが、情にも厚い。陰爪はあの時情けをかけられ、このまま借りを作って死ねぬと思いい立ち、真実を白状することで借りを返したのだ。

もともと陰爪は一对一の戦いに関しては、心底卑怯な男では無いのだろう。彼は純粋に戦闘を楽しみたいだけであつたと、聡士郎は感じる事が出来た。

たとえ嫌人思考を持つ過激派集団であつても兵法を習得した者であれば、一戦交えることで自然と友情の様なものが出来るのは不思議

ではない。だからこそ、陰爪は真実を語ったのではないか。

何方にせよ、これは聡士郎の憶測でしかないが、それだけで片付けるのにはどうにも腑に落ちなかった。もし陰爪が言った事が本当であれば、放っておくと取り返しがつかない事になるのではないだろうか。下手をすれば、権現村を揺るがす事件——内乱を起こすことも考えられる。

そうなれば、現在の平穩を保っている権現村はパニックに陥る。それだけではなく、ほかの妖怪よりも若干数の多い天狗達の内乱は幻想郷すべてに飛び火する可能性があった。

「ふうむ・・・なるほど」

聡士郎の思惑を聞き黙り込む衛兵隊たちの中、最初に口を開いたのは桔であった。彼は面白いと深く頷いている。

「それがしの憶測ではあるが・・・。調べて見ない事には分からないのではないだろうか」

「確かに、迅兵衛殿の出世はいろいろと不思議な点がある事は皆知っている。儂らは御前よりもはるかにそれを見てきた」

衛兵たちは桔の言葉に合わせるかのように、次々と同意の声を出し始める。

「では早速、迅兵衛を縄に掛けようではないか。事が大きくなる前に」
聡士郎は立ちあがると桔に目を合わせた。

白狼の舞を成功させるためには、一刻も早く迅兵衛に縄を食わせなければならぬ。そして迅兵衛と剣を交えた事をも思い出すと不安が膨れ上がれ、聡士郎は居てもたつてもいられなくなっていた。

当然、桔も乗り気だろう。村の治安と平穩を守る事が衛兵隊の仕事だと、春吉は以前聡士郎に語っていた。彼は一度腐ったが、志はつねに持っていたのだと言う。つまり村周り衛兵は名を守ることでなく、正義を志す天狗達の集団であるだろう。

だが、聡士郎が予想していた言葉とは違うものが、桔から帰ってきた。

「いや、駄目だな」

桔は首を振りながら、低く呟いた。

「駄目？ どういう事だ？」

「確かに、お前の着目点は間違っていない。儂らはプライドも高く、情にもろい。故に陰爪がお前に伝えたのも、そこから来ているのだから」

「なれば今こそ・・・」

首を傾げ、聡士郎は桔に問う。しかし桔は頭を掻きながら呟いた。

「彼奴は・・・迅兵衛はな。珍しく一般家系出身の嫌人派だ。一家に伝わる流派があるが、名家とは程遠い物だった。しかし奴は不自然なくらい昇格を果たし、今では哨戒隊、第一小隊の副隊長まで上り詰めた。ちなみに第一小隊は嫌人派や穏健派は関係が無く、位の高くその中でも取り分け優秀な人材しか入れない。故に武力がすべてである天狗の世界で第一小隊の副隊長になると言う事は、幹部とまでは行かぬがそれよりは少し下くらいの位を持つことが出来る」

腕を組み直して桔は言葉を繋げる。

「・・・つまり、迅兵衛が怪しいからと言ったあいまいな理由で、儂らはそう安々と動くわけにはいけねえんだ。それによ、奴を慕う物は多くいるんだな、これが。奴は村民からすれば大出世を遂げたいいわば英雄。嫌う嫌わぬぬ以前に、奴は村民から多くの憧れを抱かれているんだよ」

「ここまで言えば分かるなど、桔は聡士郎を上目で見る。

「・・・迅兵衛がただ怪しいからと言って捜査に踏み切るのは、響感を買うと？」

「そう言う事だ。儂ら衛兵隊は村民からの信頼で成り立っておる。信頼が落ちれば、我々の居る意味は無くなるやもしれん。英雄視されている人物に探りを入れるのは、あまり村民に良い目で見られぬのだ」

同じ志を持っていると思っていたのを裏切られ、聡士郎は珍しく頭に血が上り思わず声を荒げた。

こいつらは腰抜け集団だったのか。

自分の名誉の為に村の平穏を考えず、動くことを躊躇う。つねに悪を追い続けていた聡士郎にとって、それは腰抜けとしか思えなかった。

「ふざけるな。それでも御前は村を守る者なのか。事は一刻を争う事かもしれぬのだぞ。村民の目など平穩の為なら仕方のない事ではないのか」

対して桔は、冷静に対応した。

「ふざけているのはおめえの方だよ、松木殿。いいか？ 儂らには儂らのやり方がある。それに、『しれぬ』だぞ。もし、御前の予想が外れてみよ。人間である御前は良いのかもしれないが、儂ら衛兵隊にとってこれは痛手だ。罪もねえ奴を調べるなんざ、節穴だと思われちまう。その責任を取ることをお前は出来るのか？」

睨み付けるように言う桔を見て、聡士郎は押し黙った。

自分は確かに人間で、逃げようと思えばいくらでも人里に逃げる事が出来る。だが、天狗である桔達にとつて、これは大きく痛手になるのだ。信頼されることで頼られる。もしそれが薄れば、治安が悪くなる一方だろう。

暫して目を開くと、聡士郎は帯刀していた衣川を床へと置いた。

「なれば……。ワシの憶測が間違っていたら、こいつで自らの腹を搔っ捌く！」

聡士郎は桔を、ギラギラとした目で見た。

「な、責任を取る為……。切腹をするつもりか？」

眉を顰め、桔は腕を組みながら言う。

「お主たちは動かなくても良い。ワシ一人で動く。十手持ちとしての命を、ここで掛けようではないか。もし憶測が外れたら、すべてワシの所為にすればよい。その後、さらし首にでもしろ。権現村を騒がせた反逆者としてだ」

桔はそんな聡士郎を見て、しばし黙った。そして数分の沈黙後、重く口を開いた。

「……。晒し首もか？」

「うむ。……ワシは一方的ではあるが、権に約束させた。誰もが見惚れる舞を踊れとな。故、権には何事も心配なく舞ってほしい。彼奴はワシの力不足で遅れを取ったが、必死でそれを取り戻した。その思い、その誠意を無碍にできぬ。もし捜査が無駄足だったとしても、権

が何一つ心配なく踊れるのならば、ワシは晒されても構わぬ」

聡士郎の言葉に、衛兵達はどよめいた。

首を晒されると言う事は、松木家、すなわち家系の顔に泥を塗ることになる。もつとも、聡士郎の松木と言う名字は鞍馬から授かった物であるが、それでも自分の師に泥を塗ると同じ事であった。

現代に生きる人々からすればそれほど思うだろうが、天狗達にとってこれは地獄よりも辛いことでもある。数百年の間笑いの種にされ続け、村八分は当たり前。落ちに落ち続け、それは次の代まで永遠と続くのだ。

聡士郎はそのことを知っていたが、あえて口にした。すなわち天狗達にとって真正正銘の覚悟を示したと同じ事である。

それほどの覚悟を聞き、再び黙る桔であったがすぐに口を開いた。「理解できぬな……。御前は舞姫様と出会い日が短い。それなのに御前はそれだけの覚悟をなぜ持てる？」

不思議そうに問う桔に、聡士郎はしばし黙った。しかし、今まで何処かにあつた羞恥心を完全に捨て、堂々と答えた。

「簡単な事だ。ワシは彼女と初めて出合ったところからその容姿に心を惹かれた。そう、一目惚れだった。そして護衛として付き合っただけのうち、ワシは完全に惚れ込んだ。愛は人を狂わせると言うが、後悔はしない」

その言葉に、桔は思わず目が点になった。そしてすぐに、戸惑い交じりの声を出す。

「な……。それだけか？それだけでお前は晒されても良いと言うか？」「うむ。そうだ」

何か問題でもあるのかと、聡士郎は涼しい顔で呟いた。

プライドを第一として考える事が多い天狗達にとって、この考えは気でも狂ったのかと思われる事である。だが、聡士郎はいたって正常。つまり、気の迷いや狂いではなく、本心なのだ。彼の瞳が、そう語っていた。

「ば……。莫迦な事を……。第一、天狗と人間は結ばれない。種族の壁、生の壁、そして世の壁。……。御前はそれをわかっているはずだ」

「うむ、だからどうした？そんなもの、壊しながら進めばよい。ワシは多くの壁を壊して進んできた。故、これくらいなんともないわ」

「・・・ふっ、ふははは！そうか」

桔は自然と可笑しくなってきた。大笑いをした。そして暫く聡士郎を見つめ、ふと桔は鼻で笑った。

「この、大莫迦者めが」

「なにっ・・・？」

にやりと口元を歪ませながら、桔はゆつくりと立ちあがると縁側へと行き、整えられた庭に目線を置いた。

「儂が中立思考ではある理由はな、人間のそんな所にあるんだよ。御前達人間は短い命を懸命に生きる義務がある。その生涯は花同様。愛でる物だとワシは思っている。しかし、その命をやれ大義などで腹を切り、その一生を簡単に終わらせる。それはつまり、蕾から花開く前に切り取ってしまうのと同じなのだ。そう、人は懸命に生きなければならん。自ら命を絶つことなどもつてのほかだ！」

威勢よく言う桔であったが、小さな声で「だが・・・」と付け加える

「愛ゆえにそこまでするとは、むしろ一周回って可憐に散るのかもしれないな。そんな莫迦者が居るからこそ、儂は人間が好きなのだ・・・」

桔は背を向けたまま俯き微笑むと、体を聡士郎に向けた。

「改めて聞く。その覚悟。偽りないな？」

桔の問いかけに、聡士郎はまっすぐ。

「当たり前だ」

と、頷いた。

「よし、ならばやってみろ」

「むっ・・・。いいのか？ワシ一人ならば被害も最小で済むぞ？」

以外にもあつさりと折れた桔に戸惑い、聡士郎は問う。

「うむ。そこまでの覚悟を持つてるんだ。無碍にはできねえよ。だが、こっちも一つ条件がある」

「条件だと？」

「うむ。条件は一つ。腹を切るな。おめえみてえな大莫迦野郎を殺す

のは持ったいねえからな。もう少し興じて見せろ。もし、その条件を呑めば儂ら村周り衛兵隊も大々的に動く。まあ正直な、儂も成功してほしいと思っっているんだ。舞姫さまは娘の上司だからな、全く知らねえってわけじゃねえんだ。それに、偶には強行捜査だつてしなきゃならねえ。儂は衛兵隊の古臭い規則をぶつ壊す為に、長官になったのだからな」

にやりを笑みを崩さず桔は言うのと、立ち上がり、衛兵達を見た。

それについて、衛兵達も立ち上がり、全員は姿勢を正す。

「おめえら。わかつたな？人間を正直嫌つてる者も居るかもしれねえが、長官命令だ。銀杏木迅兵衛を徹底的に洗うぞ！ほかの部隊にいる密偵にも連絡しろ！いいな！」

桔が言い切ると、衛兵隊全員は口をそろえ衛兵達は一步遅れて「おうっ」と掛け声を上げた。

この時聡士郎は、先程まで腰抜け共と思つていた自分の考えを恥じて情けない気持ちになった。

*

それからすぐに、衛兵隊は壱ノ間を捜査本部へと変えていった。

桔が出す指示を衛兵達はテキパキとこなしている。机を中央に置き、そこに大きな紙を広げ、長官室からは多くの史料が壱ノ間まで運び込まれ、物々しい雰囲気が始めた。それはまるで、戦国時代の本陣の様であろうか。

数人の衛兵は出払い、各部隊の史料を借りに行くものや、いつも通り見回りをするもの、嫌人派家系を見張る役目を命じられる者も居た。彼らは慣れた様子であり、行動も早かった。

その中で、聡士郎は独自に動くことを許可された。

聡士郎が単独で動くことにより、何やら企んでいると嫌人派たちに錯覚させるためである。衛兵隊に聡士郎が配属されたことを知らぬものが多い為、こうすることで聡士郎に目が行き、衛兵隊の動きを察知されにくくすることが出来ると、桔は考えたのだ。

加えて聡士郎はもう一人、協力者になると思われる人物に接触を試みた。

その人物とは、射命丸文である。

彼女が幻想郷内でもかなりの情報通であることは言う間でもなく、長くに渡り権現村に住んでいるため、風の噂をいち早く仕入れている可能性もある。他にも優秀な記者は権現村に居るのだが、現状は知り合いです。文に頼む方が良いと、聡士郎は判断した。

彼女は鴉天狗である為に、桔はあまり良い顔をしなかったが、今は少しでも情報が欲しい為、渋々納得した様子であった。

聡士郎は住宅街の中を歩き、何気なく射命丸家の前に立つと、数回扉を叩いて文を呼ぶ。

「おい文ー！いるか？」

返事は無く、暫く沈黙が続いた。

外出しているのだろうか？と聡士郎は思い、出直そうとすると、同時にドタバタと音を立てて文が玄関から出てきた。

「は、はいー？なんででしょうか？」

だらしなく着たワイシャツにボサボサの髪の毛、どうやら彼女は寝ていたようである。

聡士郎は目のやり場に困りつつ、少し目線を外して口を開いた。

「お、おう。起こしてしまったか？」

すると文は、大げさに手を振った。

「い、いえー。少し作業をしておりましたー」

「作業？ああ、記事を書いていたのか。すまぬ。まあそれはいいとしてだ……」

言葉を伸ばしつつ、うつむくと、暫く聡士郎は考え込んだ。

ここで話すのも良いが、どこに嫌人派が居るかわからない。もし、迅兵衛の事を探っていると知られれば、仕事がやりにくくなる。そうなれば間接的に、衛兵達の捜査にも支障が出るだろう。

あえて嫌人派を探っていると大きく公言することで、彼らの動きを制限することも考えたが、すぐにその考えを打ち消した。

今は組織で動いているため、桔達の決定も無しには行うことはできない。今までは自分一人で動いていた為に不便なことが多かったが、同時に融通が利かないこともあるのかと、聡士郎はふと思った。

「どうしました?」

不思議そうに見る文の視線に気づくと。聡士郎は顔を上げた。

「うむ、すまん。すこし上がっても構わぬか?」

まさか聡士郎からそんな言葉に出ると思わなかったのか、文は数回瞬きをした。

「えっ……えーっと。上がるって……この家ですか?」

「それ以外、何処に上がると言うのだ?」

首をかしげる聡士郎に、文はニヤリと口元を歪ませて軽口を叩いた。

「おおく?まさか家に入ってから私を襲うと考えているのですかあ? いやー私もそう簡単に襲われませんよー?」

「……つくづく面倒な奴だなお前は。そんなわけあるまい。それにワシはもう想い人がいるのだ」

呆れた表情で言う聡士郎だが、同時にしまったと顔がゆがんだ。

「えっ?想い人……ですか?」

「ああ、いや。忘れてくれぬか?今は……その……嘘だ」

自分でも気持ち悪いと思うほどひきつった笑いを浮かべ、聡士郎はごまかそうとする。

すると、文は以外にもその話題に突っ込まず、「そうですか」と納得したような声で呟いた。

「うむ。で、上がっても構わぬのか?」

「ちよつと家に上げるのは抵抗がありますね……。外では話しづらいことなのですか?」

「そうだな……。できれば個室が良い」

「では、良い場所がありますよ。あそこなら信頼できますね」

*

それからしばらくして歩き、中央街に入ると文は双葉庵の前で止まった。聡士郎は一瞬場所を間違えたのだろうかと思っただが、文はそのまま中へと入って行った。

聡士郎は双葉庵を見上げて疑問を持ちつつも、文に続いて店の中に入る。すると、予想していなかった人物が目に入った。

「か、楓か？」

なんと楓が、箒で床を掃いていたのだ。声をかけられて楓は聡士郎に気が付いたのか、目をぱちくりさせて驚いた表情をした。

「えっ…？聡士郎？」

「お主、どうしてここに？」

「それはこつちのセリフだよ。護衛を解任されたからてつきり人里に戻ったかと…」

「ワシは白狼の舞までの間、この村に滞在することを露草殿に許して頂いてな。しかし、お主はどうしてここに？」

不思議そうに聞く聡士郎に、近くで机を拭いていた土筆が補足をする。

「楓ちゃん。白狼の舞が終わるまでお邪魔させてほしいって、椀様に頼られちゃつてさ」

「なるほど…。それでここに」

楓にさみしい思いをさせたくない、椀なりに配慮したのだろう。彼女らしいと聡士郎は思った。

「そういえばここに文が来なかったか？」

ふと思いついたように聡士郎は話を変える。すると土筆が「あそこにいるよ」と、指をさした。どうやら土筆の父親と話をしている様子である。

「文」

聡士郎が声をかけると、文は振り返り、親指を人差し指で丸を作った。

「空いていました。さて、行きましようか」

「む？よく話が読めぬが」

「良い場所は、こここの二階なんですよ」

駆け引き

聡士郎は文に続くがまま、双葉庵の二階へと登った。

二階には穀物など、保存できる物が積み上げられている。

しかし不自然に、人が通れるような道があった。文はそこを通り、奥まで進んで行く。

聡士郎もそこを通ると、文は壁に手をかけていた。

「ん？何をしておるのだ？」

「まあ、見ててください」

得意げな顔をしながら文は、壁をぐいっと力強く押す。

すると壁が一回転して、文はその中に吸い込まれ、姿を消した。

「隠し扉か」

感心した聡士郎もまた、文に続いて壁をぐいっと押す。壁は再びまわり、聡士郎は転がるように隠し部屋へと入った。

「きゃっ！」

すると、唐突に文の短い悲鳴が聞こえた。何かと聡士郎は目を開くと、その理由がわかった。

文の肩をつかんでいたのだ。どうやら中に入るのが、早すぎたようである。

顔を赤くして恥ずかしがっている文を見て、思わず驚きで聡士郎は手を放し、先ほど回った壁へと手を付ける。

あえて言うが、物は心を持たない。まさに正直物というべきであろうか。壁はくるりと回転して、聡士郎は再び廊下へと投げ出された。それだけではない、勢い余って積み上げてある穀物にぶつかると、それが落ちてきて聡士郎の頭に命中した。袋は破れなかったが、頑丈である麻袋に加え中にある穀物の重量が、首へともろに来る。聡士郎はしばらく縮こまり悶絶した。

「だ、大丈夫か聡士郎？」

顔をあげると楓が珍しく、心配そうに聡士郎を見ていた。

流石にやかましく様子を見に来たのだろうかと思つた聡士郎は反省しつつ、咳払いをする。

「もちろんだ。伊達に鍛えてはおらん」

「こんなことのために鍛えてるのか？お前？」

呆れた顔をして楓は息をつく。聡士郎はしばらく黙った。

「楓、今暇か？」

それら数分立って、聡士郎は楓に声をかける。

「暇に見えるのか？」

「ああ、だから二階に来たのだろうか？」

少し口元をゆがめて聡士郎は言う、楓は牙を出して殴りかかってくる。だが、聡士郎に頭を押さえられ、それは届かない。

「まあ落着け、冗談を言っているわけではないのだ。お主も少し協力してほしい」

「はあ？協力だつて？」

「椀とお前を襲った黒幕、知りたくないか？」

聡士郎のその言葉に、楓は顔色を変えて反応する。やはり知りたいのだろう。

「ちよつと待ってくれ！」

跳ね返ったように、楓は二階から降りてゆく。

そしてすぐに上がってきて、許可を取ってきたと口にした。

「そうか、では入ろうか」

楓が頷くのを確認すると二人は隠し扉をくぐっていった。

「何してたんですかね？私の肩の感触、噛みしめていたのですか？」
にこやかにほほ笑みながら、隠し部屋に入った聡士郎に問いかける。表情と纏っている雰囲気異なっている事から、どうやら先ほどの件で怒っているようであり、聡士郎は急に居心地の悪さを覚えた。

「楓と話をしておったのだよ」

「はあ？楓くん？」

首をかしげ疑問を持つ文に答えるかの如く、聡士郎の後ろからひよっこりと楓が顔を出した。どうやら本当の事だったと、文はしぶしぶ頷く。もし楓がいなかったら何をされていたのだろうか聡士郎は身震いした。

「さて、それで聡士郎さん。秘密の話とはなんなのですか？」

先ほどの悪ふざけな雰囲気をすっぱりと切り捨て、仕事をする姿勢に文はなった。聡士郎も近くにあった煙管盆を寄せると、懐から紙巻き煙草を取り出して、話す姿勢になる。

すると、唐突に楓が嫌な顔をした。

「俺その匂い嫌いなんだよ」

「すまん。あいにく奉行所の壺之間は禁煙だったのだ。故に吸う機会なかった」

申し訳なさそうに言う聡士郎に、楓は食って掛かろうとするが、それより先に文が反応する。

「奉行所…壺之間…？と、いうことは聡士郎さん。あなた衛兵隊に？」
「うむ、そういうことだ。ワシは護衛解任後、露草様直々に声をかけて頂いてな。とっ…そういえば楓には先程、嘘を言ったな。まあ隠れ蓑のようなものだから勘弁してくれ」

苦笑いをしながら、聡士郎は煙を吹かす。

護衛を解任された聡士郎の隠れ蓑として用意された言い訳が、先ほど楓にも言った『白狼の舞を見届けることを許す』である。これはそもそも露草が最初に出した条件であり、嘘を言っているわけではないのだ。もつとも、露草ははなから聡士郎を只でこの村にいさせるわけもなく、次の条件として迅兵衛の話題振ったのだが。

要するに事実半分、嘘半分の事だからこそ、罪悪感なく言い訳ができるのだ。故に信憑性が増し、突き通るのである。

「確かにそれならば信じてしまいますね。と、言うか本当の事でもありますし」

文も面白いといわんばかりの顔をして、メモを取りながら頷いた。

「文、すまんがメモは取るな」

「えっ…あつ…そうですね。私としたことがついつい癖で…」

はっと気が付いた素振りを見せると、文はノートを閉じて胸ポケットにしまった。職業柄の癖はどうにも抜けないことがある。聡士郎は仕方がないなと心の中でつぶやいた。

「で、話を戻すがいいか？」

顔をあさつての方向に向けて二人にかからないように煙草の煙を吐くと、再び振り返り、文に面と向かっている。

「はい、どぞー」

「では…聞きたい事は他でもない。第一哨戒隊副隊長。銀杏木迅兵衛の悪事についてだ」

聡士郎の問いに、文は眉を潜ませた。

「迅兵衛さんですか？彼はわんころたちにとっては英雄。それはまたどうして」

また楓も、馬鹿にしたような顔をした。

「はあ？何言ってるんだ？迅兵衛さんはすごいんだぞー！」

両者は一般的な迅兵衛の評判らしい反応をする。が、文は少しだけ偽りを言っている。聡士郎は睨んだ。何せあの射命丸文だ。何かしらの情報を持っているはずだろう。

少しだけ聡士郎は悩むしぐさをしたが、すぐに口を開く。

「お前になら話すが、奴は過激派集団、それも黒狼隊を指示する発言力があると睨んでいる」

もはや楓など聡士郎の眼中にない。あくまでも直球で来る聡士郎に、文は思わず顔をしかめた。

「何か知っているな？」

「あやや、顔に出てましたか…」

わざとらしくしまったといった顔を見ると、ため息をついた。

「正直、私も心底落ちたくはないですからね。白狼天狗にもメンツがあると思いますし、本来ならば他言無用の事柄なのですが…」

「前ふりはよい。はよう話さんか」

ずいずい来る聡士郎に文も対抗意識が湧いたのか、逆に顔を近づけた。

それにより、思わず聡士郎は顔を引つ込めた。そして同時に、会話の主導権を取られたと後悔をする。

「確かに情報、持ってますよ。ですがそれなりの対価がないと…」

「等価交換という奴だな」

「そういうことです」

文が頷くのを聡士郎は確認すると、紙巻き煙草を吸いきって、煙管盆の中に叩き入れた。

「何がほしい？」

乗ったか。と、文もにやりと口元をゆがませる。楓はおろおろとしたして二人のやり取りを目で追うだけになった。

「そりゃあ、情報です。今、最も気になる情報を仕入れるのが私ですか」

「なるほど、目には目を、情報には情報を・・・か」

聡士郎は顔をしかめつつ、何かいい情報を持っていたかと、考え込む。すると、文が条件を出した。

「私がほしい情報は一つです」

「むっ？」

考え込むしぐさをやめて、聡士郎は文を見つめる。

「あの厄災についてです」

その言葉を聞いた一瞬。聡士郎の体がビクリとはね、目を見開いた。この時、聡士郎の纏う空気が張り詰めた。

楓は今まで見たことがないほど恐ろしい表情をした聡士郎を、見て自然と冷や汗が出た。

その冷や汗が滴ると、隠し部屋の空気が一変した。

「何故、その話を出した」

威圧した上目で、聡士郎は座ったまま、体を少しだけ前傾にした。

「それは決まっているじゃないですか。あの厄災。『がしやどくろの厄災』について私は調べていますからね。ここだけの話ですが」

「…知って得する事ではないぞ」

「でも知りたいのです。私はそれ以外の情報はいらないですね」

文は姿勢を伸ばして正座をしながら、にこやかな営業スマイルと共に堂々と答える。その姿勢は、まさに余裕の表情であろうか。

何か断る隙はないかと、聡士郎は文を紅葉の目付で見たが、どこにも隙はない。現状、彼女はつけこむ隙を与えない姿勢である。

「…誰のだ？俺か？北上のか？それとも他の奴か？」

「二人だけで結構です。おそらく迅兵衛さんの情報は、それくらいの

価値でしょう。で、本人がここにいるのであなたの情報がほしいですね。松木聡士郎さん？」

改まって、文は聡士郎を名字から名前まですらすらと言う。

聡士郎はしばらく考え込んだ。

思い出すと身の毛がよだち、腹立たしくなり、むなしくなり、虚無感に襲われる。迅兵衛との戦いの前に言われた時も聡士郎はこのような気分になっていた。

しばらくならみ合いが続いて数分後。聡士郎は懐から紙巻きたばこを取り出し、火をつけて一気に半分ほど吸い終わると、重く口を開いた。

「いいだろう。何が知りたい？」

「ふふふ…呑み込みが早くて助かります。そういうところ嫌いじゃないです」

文は勝ち誇った顔を見ると、メモ帳とペンを取り出した。聡士郎は話す姿勢を取った、故、文は勝利を確信した。

だが、一見何事もないこの自然に行った動作が、聡士郎の目を光らせた。

聡士郎は前傾姿勢から衣川を瞬時に抜き放ち、座ったまま逆袈裟切りで荒々しくメモ帳を切り裂いた。

この前傾姿勢には、意味があったのだ。迅兵衛も使っていた剣術、居合の抜刀の構えであった。

居合は前傾姿勢を取ると、引つかかることなく、威力を殺さず、抜刀ができる。

衣川は小太刀であるため文ごと切り裂くことはなかったが、もし追風であれば、立ち上がりそのまま逆袈裟切り後、流れに乗り連続して袈裟切りを決め込むことができただろう。

与えられた力ではなく鍛練からの応用が、武術の基本である。

メモ帳はきれいに真っ二つとなり、むなしく。パサリと畳に落ちると、同時に聡士郎は衣川を帯刀した。

この一瞬の出来事に、文は無意識に動きを止めていた。

「えっ…あっ…なっ!？」

今頃になって我に返ったのか、文は慌て始める。あまりに速度に、幻想郷最速である自分ですら反応できなかったのだ。

加えて、文が反応できなかったのも無理もないだろう。先ほど放った斬撃は、今まで陰で彼女が見てきた聡士郎の振り方とは、明らかに違っていたのだ。

「書き留めるのは無しだと……言わなかったか？」

「う、迂闊でした……。そうでしたね……」

対等だからこそ行える話術戦。だが、文はここで先ほど指摘されたことをもう一度行ってしまった。

つまり、それが文が起こした隙であったのだ。こうなれば謝るほかないのである。謝るとはすなわち、必然的にした手に出ることになる。加えて文は自然と畏怖してしまったことにより、会話に主導権は聡士郎へと戻った。

だが、あえて聡士郎は質問をされる体制を保ったままにした。すでに決着はついたのである。文は先ほど聞こうと思っていた質問とは別に、新たな疑問が浮かび上がってしまったのだ。

「あつ……その。今の流派はいつたいなんなのですか……？」

「む？それが質問か？」

先程の張りつめた雰囲気とは一変して、聡士郎はいつも通りの雰囲気に戻った。

文もそれにより緊張の糸が緩んだのか、ため息を漏らす。

「これは靈魂夢想流と言ってな……。ワシが嫌う、元々使用していた流派なのだ。そう、かの厄災時にもこの流派を使っていた」

「ま、待ってください！れ、靈魂夢想流って……!？」

それを聞き、文は思わず耳を疑った。それは文も知る、とある庭師が使っていた流派であったからだ。

聡士郎もさすがに脅かしすぎたかと苦笑いを見ると、加えて口を開いた。

「そうだな……これだけでは足りぬだろう？もう一つ、特別に教えてやる。ワシの師は鞍馬天狗。本名は……魂魄妖忌という」

それから文の気持ちが整理するまで、聡士郎たちは黙ったままであった。

先の居合により、話の熱が一時的に冷めてしまったこともある。だが、それほど聡士郎にとって厄災の事を勘ぐられるのは、嫌な事であった。

「ふう。では、次は私の番ですかね」

整理がついたのか、文は胸に手を当てて一つ息を吐くと、口を開いた。

「うむ、改めて言うが銀杏木迅兵衛の事だ。奴の悪事、何あったか？」
聡士郎も先ほどの暴力的な行為に若干の後ろめたさを感じつつ、文に聞く。

「はい。もともと、悪事と言いますかこれは彼の動機になると思うのですが」

「動機？ どういうことだ？」

眉をひそめて、聡士郎は聞き返した。

「そのままの意味ですね。彼の出生に関する事ですから」
「出生」

「はい。まず、この村には過去に縞枯一派という、あなた達人間という『やくざ者』の集団が居ました。ご存知でしたか？」

「ああ、その件は春吉から聞いておる。なんでも露草殿に一斉摘発され、村を追放された奴らだそうだな」

聡士郎は二度頷くと、文は「なら話が早いです」と相槌を打つ。

「あなた達やくざ者の集団には、必ずその集団を束ねる統領がいますよね？それは私たちも同じなのですが、あくまでそれは実質的。つまりおおよその統領？というのでしょうか。その集団の統領と断言できる者がいないのです」

なるほど、どちらかというところツキのようなものか、聡士郎は再び頷いて、理解したことを表す。

「で、これはあくまでも昔に聞いた話なのですが…一派の連中は口をそろえて『こいつが統領だ』と言える者がいたそうなのです」

「ほう、それは面白いな」

「その名も『抜刀の迅悟朗』」

なるほどと聡士郎は話の先を理解する。

『抜刀の迅悟朗』…。確かに迅兵衛の名前と言い、使う流派と言い、共通点がありそうではあるな。迅兵衛の親父か？」

すると文は、甘いですねと人差し指を振る。

「確かに、彼は共通点が多くありますね。ですが迅悟朗はすでに亡くなっているのです。それも、一斉摘発されるずっと前に」

「なんだと？」

「つまり、迅兵衛さんと『抜刀の迅悟朗』は、関わりが無いというわけです」

「すまん、ではこの話に迅兵衛と何の関わりがあるのだ？」

「ふふっ…話はまだ終わっていませんよ。せつかちさんですねえ？」

にやにやと口元をゆがませて、文はからかう。

『抜刀の迅悟朗』には、娘がいたんです」

ここまでいいですかと、文は聡士郎に目で問いかける。

聡士郎も大事ないと、無言で頷いた。

「その娘さんの名前は花梨。正当なる名を継いだことにより『抜刀の花梨』となります。誰もが振り向くほど美しかったそうですが、彼女はともやんちゃでしてね。一派の男たちと夜なよな遊んでいたそうです。その大半は体を交えるといった行為ですが」

おとなしく聞いていた楓が、その言葉を聞いた途端、何を想像したのかもじもじと体を動かし始めた。どうやら彼にはまだ早い話題らしい。

一方、聡士郎は何となく察しがついてきた。つまり迅兵衛は。

「その一派の男たち。誰かの子供というわけか」

「ご明察。そういうことです。つまり、孫に値します。もっとも、迅兵衛さんは彼らに育てられてはいないのですが…」

「育てられていない？迅兵衛は縞枯一派の一因ではなかったということか？」

聡士郎は口にすると同時に、はっと思いついた。

「そうか、そこで銀杏木家か」

「またまたご明察ですね。彼は銀杏木家に預けられたそうです。ですが強引に…。そう、置手紙を添えられて、縁側に置かれていたそうです。」

「強引に…置かれてか…」

ぼそりと聡士郎はつぶやくと、どこか遠い目をして小窓から空を眺めた。

「…で、銀杏木家は人が良い家計として有名でした。当時子供ができてなくて困っていた銀杏木家は迅兵衛さんを引き受けることにしたそうです。そしてわが子のように育てていました。私もそれは見たことがありません」

「迅兵衛は若い天狗なのか？」

「おそらく、権と同年代くらいでしょうね。それゆえ野心も強いはずですよ」

あの華奢さは若かったからなのかと聡士郎は思い返す。

しかし、それでも天狗の中で五本の指に入るほどの剣の使い手であり、地位も名誉も持っている。衛兵隊も捜査を渋るわけかと、聡士郎は改めて思った。それほどの逸材を潰すのはもったいない事なのだろう。

「話を戻しますが、迅兵衛さんはその後成長して行き、尖刃館の卒業を果たしました。ちなみに迅兵衛さん。幼名は「茅千代」と言います。このころはまだ可愛らしい小僧っこでしてね、純粋に正義感の強かった人物でした」

文は「ですが…」と表情を曇らす。

「卒業式の前日に何かがあったのか、迅兵衛さんの纏っていた空気が変わりました。どこか怪しい…そう、何かを秘めたような感じになっていました。当時私も式に出席したので覚えています。取材のためにですね。で、その時から銀杏木迅兵衛と名前を変えて、『嫌人思考』を叫ぶようになっていきました」

聡士郎は「うーむ」と息を吐く」

「その前日に、先の事を知ったのだろうな」

「はい。恐らくはそうでしょうね。さて、お話しできるのはこれくら

いです。後はどんどんと昇進していくだけですから」

「あいわかった。助かったぞ」

文の話を聞き終わると、聡士郎は三本目の煙草を取り出して、火をつけた。

「彼奴め…何を企んでいるのか知らぬが、露草殿に八つ当たりでもするつもりか」

難しい顔をして、聡士郎は呟く。

恐らく迅兵衛がやろうとしている事は、嫌人派のように穏健派から政権を奪い返す事ではなく、露草本人に泥を塗るつもりなのだろう。縞枯一派と自分が通じていた事を知って迅兵衛は親の意思を継ぎ、村から追い出されたと言う無念を晴らしたいのかもしれない。

白狼の舞を開催すると言い出したのは露草である。つまり、何かしらの策を講じて、舞を失敗させれば露草は失態を犯したことになる。そうすれば、大天狗などの上の立場は激怒して、真神家の取り潰しをするだろう。これが狙いなのだ。

「だが…本当にそれだけだろうか」

思わず口に出してしまったのか、文は「えっ？」と返事を返す。

「ああ、すまん。真神家を取り潰しにする事…。本当に迅兵衛の狙いはそれだけかと思つてな」

すると文はキョトンとして首をかしげた。

「取り潰し? いえ、我々天狗はそんなことしませんね」

「なに? では、何をするのだ?」

聞き返す聡士郎に、文は思わず苦笑いをする。

「あまり言いたくありませんが…取り潰し代わりになる事と言えば、一族すべての皆殺しですかね」

「なっ…み、皆殺しだと…!?!」

思わず声を出して、聡士郎は驚いた。

「はい、すべては大天狗様が決める事。もし露草様に不祥事があつた場合は、おそらくそれを執り行うのは嫌人派でしょう」

文の言葉に聡士郎は納得した。

つまり迅兵衛は、縞枯一派の恨みをぶつけるが如く、摘発を行った

露草だけでは飽き足らず、真神家すべてを滅ぼそうとするつもりなのだ。それにより初めて、奴らは満足をするのだろう。

露草には恩義がある。自分を椀の護衛として取り立ててくれなければ、椀と会うこともなかっただろう。それに嫌人派の意見により護衛を外されてもお、この権現村に居ることを彼女は許した。だからこそ、露草には感謝しきれない想いを持っていた。

「…絶対に止めねばな」

聡士郎はまた深く、決心を固めたのであった。

*

以前、椀と聡士郎が露草と出会う際に案内された板の間。そこで椀は白狼の舞への最終調整のため軟禁され、練習を重ねていた。

一見動きにくく見えるこの舞姫の正式なる衣装は舞姫用の装束であり、頭には天冠と呼ばれる装飾をつけて、金などの装飾が施された刀を帯刀している。

しかし椀はそれを物ともせず、すり足で床を滑りながら体を動かし、ゆつくりと両手を広げて大きさを表現する。手に持っている折枝は舞をより一層神聖に引き立て、見るも優雅に椀は舞っていた。

だがその間、椀はずっと聡士郎について考えていた。練習に集中しないといけないのに、それでも考えてしまう。想いを寄せるとはこういうことなのかと、椀は改めて痛感した。

そもそも何故、自分はこの人に惹かれたのだろうか。椀は理由をたどろうと思いついた。

結論から言うと、たぶん理由は無い。自然と惹かれたのだ。数百年生きてきた中で、天狗ではなく、人間に惹かれてしまった。それは不思議なことでも自分でもおかしいと思うし、同時に驚いてもいた。

「駄目ですね。集中できません」

椀は苦笑いをする、舞を途中でやめて板の間の端に座った。

「そういえばここで…あの人は護衛を任じられたんだっけ…」

椀は部屋を見渡しながら、つぶやいた。

あの衝撃的な事から、たった半年しかたっていないのにどこか懐かしく思える。あの時はさすがに疑問と困惑で取り乱していたが、聡士

郎は任を貫くと言って護衛をあつさりと受け入れた様子であった。逆に自分はそんな聡士郎が凄いと思ひ、同時に少しだけ悔しかった。そしてふてくされつつも家に帰ると、いつかは逃げ出すだろうと自らに言い聞かせ、権はひとまずということとで普通に接するようになった。だが、だんだんと接するといふ『演じ方』から、自然に受け入れるといった『本心からの行動』に代わっていき、今に至るのだ。

「私なら絶対に断るのに。人間の男の人は皆ああなのでしようか」
部屋の天井を眺めて、権は呟く。

「逆に…どうしてあの人は私なんかには惹かれたんだろう？」

明確な理由はわからない。自分よりも綺麗な白狼天狗に鴉天狗はごまんといふのにどうしてなのだろうか。

言わなくてもわかる。彼も自分と同じなのだろう。聞いてはいないけど、何となく察しが付いた。

ふと、権は中央の床を見る。

そこはかつて聡士郎が露草と対話する際に座っていた場所だった。襖から聞こえた声から察するに、あの時の聡士郎は恐怖と同時に誠意を示そうとしていた。

立ち上がり、権はそこへ再び腰を下ろす。そして手を当て、目を閉じた。

この舞を絶対に成功させて、里に戻った聡士郎に報告をしよう。自分は恥じぬ舞を踊れたと報告するのだ。そして願わくは、再び生活したい。そう思った。

恐らく無理だろう。だが、思うだけなら罪にはならない。その思いは権に元気を与えた。

権は立ち上がり、「よしっ」と意気込む。

すると、唐突に扉を叩く音が聞こえた。権は驚き、先ほどのつぶやきを聞かれたかもしれないと思うと、同時に少し恥ずかしくなり顔を赤らめた。

「誰でしようか？入ってきて構いませんよ」

浮かれた気分を引き締めると、権は返事をした。
すると。

「失礼いたします」

深くお辞儀をして入ってきたのは、華奢であり、特徴的な鍰のない木製の柄と鞘の刀を刺している男だった。一見女性と見間違えそうなほど、顔つきも整っている。

そう、この男は。

「じ、迅兵衛様!？」

「ご機嫌麗しゅうございます。舞姫様」

深々と頭を下げ、迅兵衛は敬意を表す。

「な、何用でしょうか…?」

この男は黒狼隊とつながっている可能性がある。権は陰爪に襲われた事を思い出すと、警戒しながら口を開いた。すると迅兵衛は優しい顔をして、語りかけるように話す。

「いえ、たまたま通りかかったもので、折角なのでお邪魔にならない程度に、挨拶をしたいと思っただけです。それと舞姫様。あなたは将来有望を約束された身。自分に敬語を使う必要はございません」

以前合った時よりは明らかに態度が違う。権は気味が悪くなつて、思わず一步後ずさりする。

「なにを…恐れているのですか?」

権の態度を読み取ったのか、迅兵衛は心配そうに権に問いかけた。「い、いえ。以前お会いした時よりもずいぶんと態度がお変わりになったので、少し驚いてしまつて…」

すると迅兵衛は思い出したようなしぐさをする、深々と頭を下げ、

「申し訳ございません。あのときの自分は十手持ちと戦いで気持ちが高ぶつておりまして…。それと我が主の前でもありましたゆえ…お許しください」

「そうですか…。しかし迅兵衛様、貴方は不満ではないのですか?」

迅兵衛の態度に疑問をぬぐえ切れない権はふと、口走った。

「…えっと、はて?不満とは?」

首をかしげて、迅兵衛は聞き返す。

「あなたの主、犬伏柊様が舞姫に取り立てられなかったことです。そ

れに穏健派である私が選ばれてしまった。ふつう、不満はあると思うのですが」

現在の迅兵衛がふるまっている態度は、どちらかというと親近感が湧くように見える。普通は派閥の違う人物が重要な役に取り立てられた場合、このように挨拶などしないだろう。実際、権は穏健派の間には挨拶されることはあっても、嫌人派には挨拶どころか露骨に嫌な顔をされることもある。ゆえに迅兵衛の行動にどうしても疑問を持たった。

どんな顔をするかと権は若干の期待をしていたが、迅兵衛はすっぱりと言い切った。

「不満はないです。露草様が決めたことなのです？たといえ嫌人派であつても上に逆らわないのが天狗の掟。幹部の皆様がどう思っているのかは知りませぬが、自分は謹んで受け入れております。ですから舞姫様。どうか素晴らしい舞を踊ってください。私は期待しておりますよ」

迅兵衛はこう、優しい顔をして言い放つ。権はさらに気味が悪くなった。

「では、これから私は打ち合わせがあるので失礼いたします。お邪魔をいたしました」

最後まで姿勢を低く見せた迅兵衛は、部屋を後にする。

行ったかと、権は若干一安心をして一つ息を吐く。

「あ、そういえば舞姫様」

何かを思い出したかのように、迅兵衛は立ち止まった。権は再び息がつまり、なんだろうかと、聞く耳を立てる。

「再び仕事に戻ったら、あなたは人を切るのですかな？」

「なっ!？」

「では、ごきげんよう」

最後にそう言い残すと、迅兵衛はそのまま長い廊下を歩いて行った。

「私は…私は…」

その場に崩れこみ、権は肩を震わせた。

過ちの記憶

時は遡ること数百年前。

外の世界では徳川幕府絶頂期の最中であり、幻想郷がまだ外の世界と遮断されていない頃である。

もつとも妖怪の山は、過去に富士の山と背比べをして勝ったとされる本来の八ヶ岳であり、幕府絶頂期の頃の山ではない。故にこの頃から現代に存在していなかった。

しかし外の世界と唯一続いている場所があり、そこから限りなく少ない世間の情報を仕入れていた。だからこそ未だに、この権現村には歴史的に見ると誤って伝わった制度が多く残っている。

当時の権現村は御嶽山から来た真神露草が政権を取ったことで徐々に穏健思考が広まって行き、平和な空気が流れていた。加えて、横暴を働いていた綺枯一派摘発からすでに年数は経っている。

そんな激動の時代が終わった頃、権は尖刃館を卒業した。

当時の彼女は幼く、まだまだあどけない顔つきをしていた。わかりやすく人間で例えるなら、中等学校を卒業した頃くらいであろうか。とは言うもあくまで顔つきだけであり、年齢は遥かに人間よりも上である。

この頃からすでに親はいなかった。権がまだ幼き頃、任務の最中に不幸な事故で死んでしまったのだ。しかし権は親の残した金をやり繰りしつつ懸命に生きて、一人で犬走家を支えようとしていた。

現代の人間が持つ常識と大きく異なり、天狗はこの歳からすでに成人の扱いを受ける。尖刃館を卒業すれば、成人であるのだ。故に権は一般的な天狗と変わりない訓練を哨戒隊に入ってから受け、みるみる成長していった。

犬走家存続のために生真面目に生きて行き、いつしか堅物となって権は柔軟な頭の使い方を忘れていった。任務に忠実に動く姿はまさに哨戒隊の見本のようなであったが、生真面目な性格である権は他の者と打ち解けることが無意識に苦手となっていった。

だからこそ、毎日権は仕事に明け暮れていた。

仕事もとい任務は自分を裏切らない。成功すれば必ず結果が出る。結果を出せば評価され、犬走家は安泰するのだ。

最近になって獲物を捕らえる目が優れて行き、侵入者を排除する効率が良くなり、結果もそれに付いていった。

そんな権は今日も、目を光らせていた。

木の枝を蹴り、次第に獲物への距離を詰めてゆく。

そして警告もなく、権は獲物の前に降り立った。がさりと音が響く。

「な、なんだ?！」

体格が良い獲物が声を出した。その声には驚きと困惑が混じっている。

「おまえ達。ここがどこかわかっているか?」

威圧した声で、権は獲物達に問う。すると獲物達はあたふたとし始めた。

獲物の数は十人ほど。おそらく人里で土木関係の仕事をしているだろう。重い物を持ち上げるために発達した筋肉を見れば、一目瞭然であった。

どうやら獲物達は、木々の伐採を行っていたようである。斧で切られた木々がいくつも倒れていた。他の木々に比べて比較的若い木を切っていたのか、年輪が少ないものが多い。

「ち、畜生!白狼天狗に見つかったか!おめえら逃げるぞ!」

獲物達は斧を投げ捨てて、一目散に麓までの道を下って行った。

逃げてゆく獲物達を権は冷え切った目で見ていた。

白狼天狗は逃げてゆく獲物を襲うことは、暗黙の規則で制限されていた。相手に恐怖心を植え付けることができれば、それで事足りるからである。一度恐怖を覚えた人間は学習し、無暗に近づこうとしないからだ。

しかし権には、そんな融通が利かなかった。

まず、最初に目を合わせたあの体格の良い獲物に向かって、権は走り出した。

いうまでもなく、白狼天狗は山を駆ける速度が人間よりも圧倒的に

早い。その速度はまさに韋駄天のようである。故、必死に逃げたい体格の良い獲物までの距離を縮めるのに、そう時間は掛からなかった。

「ひ、ひいいー」

追われる獲物は情けない悲鳴を上げつつ、無駄だとわかっているはずだが、足を止めない。

それが癪に障ったのか、棍は着衣に装備されている投擲用刃物を獲物の足元に投げた。

刃物はそのまま男のふくらはぎに突き刺さると、獲物は大きく転倒した。

「あがああ!?!」

獲物はそのまま地面を舐めるに滑って、動きを止めた。

「手こずらせてくれましたね…。さて、どうなるかわかっているか?」
追いついた棍は、うつぶせに倒れている獲物に威圧した声を出した。

獲物は振り返り、顔をゆがめた。その顔は地面に埋まっている石にぶつけたのか前歯が折れていた。

「ご、後生だあ…助けてくださせえ…お、お願いします。お願いします!」

震えながら言う獲物は、ひたすら頭を下げる。自尊心など捨て去って、頭を地面にこすりつけていた。

それを見た棍は、呆れたように一つため息を漏らした。

「おまえ達は自分の家に入ってきた害虫を、そのまま外に逃がすのか?」

「へっ?」

言っている意味が分からないのか、獲物は間抜けた顔をした。

「その害虫がたとえ害を及ぼさなかったとしても、未然に防ぐため、殺すはずだ」

殺すと言葉が出た時点で、獲物の顔が大きくゆがんだ。

それと同時に、獲物の頭が棍の振るった大剣で真つ二つに両断された。

「つまりおまえ達は、この山では害虫そのものだ」
屍となった獲物に、権は冷たく語りかけた。

*

それからというもの、権は残りの九人のうち八人を躊躇なく殺した。

後の一人である比較的若い獲物はすでに山を抜けており、深追いをしなかった。もつとも、木々を採りに来る人間たちに恐怖心を植え付ける為にはちようど良い選択であっただろう。

このように権は多大なる成果を残してゆき、哨戒隊の長官から仕事熱心で頼りにされ、絶賛されていた。

だが同時に、同僚からはより一層白い目で見られるようになった。結果こそすべてであると言った権の考えは、冷酷極まりなかったのだ。それ以前に、妬みの象徴でもあった。

権が配属されている第二哨戒小隊の同僚は、度々権の陰口をたたくようになり、従って権は徐々に孤立していった。

それでもなお、権は自分の考えを貫いていった。

仕方のないことだといえ、そうであろう。犬走家存続のためには結果を残さなければならぬのだ。辛いとは感じていたが、親の残した思いを受け継ぎ、考えを曲げなかった。

さて、仕事を第一と考えていた権であったが、彼女の考えを変えるような転機が訪れたのは、外の世界で徳川幕府が終わりを告げ、明治初期ごろに幻想郷が外の世界との繋がりを博麗大結界で遮断し、約数十年後のことであった。

この時の晩。権は夜勤であり、いつも通り哨戒をしていた。この時からすでに彼女は能力「千里先まで見通す程普の能力」が覚醒をし、若くして第二哨戒小隊の副隊長になっていた。

その能力により、青色の影——獲物が山に入ってくるのを捕捉した。

権は仲間知らせるべく遠吠えをすると、一目散にその獲物へと近づいて行った。

この時、権は若干の疑問を抱えていた。ここ数百年間、獲物が夜に

山に入ってくるのがなかったのだ。

この時の人間は夜の山がいかにも恐ろしいかを知っており、天狗以前に命の危険があるとして入ろうとはしなかったのである。事実、今でもその考えは人間の中で浸透している。

故、何故そのような莫迦けた行為をしたのか、疑問が浮かんだのだ。いつものように権は杖々を蹴りつづけ、徐々に距離を詰めてゆく。そしてその獲物の前に降り立ったのは、山の麓から少し上がったところであった。

ちょうどそこは開けた地であり、月明かりが杖に遮断されず、満点に照らしていた。

「その者、止まれ！」

権は大声で叫ぶと杖を思い切り蹴り、獲物の前に降り立った。

不思議な行動をしていた獲物の正体は、二人の男女であった。しかし、そこで新たな疑問を権は持った。

なんと、土木関係の職人でもなければ獵人でもない、ただの町人であったのだ。武器などは当然装備しておらず、女のほうは何かを抱えていた。

明らかにこれは、山に来る人間とは違う。権は思わず首を傾げた。すると、男のほうが女をかばうように後ろへやると、威勢よく声を出した。

「山の守人よ！どうか我々を見逃していただきたい！」

「・・・何を言っている。ここは聖域であるぞ。害虫が来るところではない」

権も負けずと、威圧した声で言う。すると、男はさらに威勢よく叫ぶ。

「それは重々承知の上！だが・・・情けをかけてほしい！」

「・・・何故だ？」

にらみつけるように、権は男女を見る。男女は顔を見合わせると、頷いて男が口を開いた。

「私たちは駆け落ちをして、里から逃げたのだ」

その言葉に権は思わず面を食らった。

「か、駆け落ちだど？故ここに？」

「そうだ。里では妖怪と人間の恋愛は受け入れられない。だからこそ、我々はここまで逃げてきたのだ」

「妖怪・・・？そうか、女は妖怪だったのか」

よく見ると、女の方は人間ではなかった。纏う空気がどこか妖艶じみていたのだ。しかし妖怪は権から見ると朱色に移るので、これはおかしいと思った。

すると女は権の視線に気づいたのか、男の隣に並んだ。

「私は・・・文車妖妃なのです。彼の持つとある手紙から、付喪神となりました」

文車妖妃とは、手紙に込められた思いが付喪神となった妖怪である。主には人間に害がないとされる妖怪であるが、捨てられたりした手紙などから生まれる文車妖妃は、鬼となって襲うといわれている。

おそらくこの場合の文車妖妃は、前者であろう。この時権は、危険度の高い妖怪は朱色ではなく、青色に移るのかと理解した。山には危険な妖怪しかいないため、今まで気が付かなかったのである。

「で、では・・・妖怪と人間の駆け落ちというのか?！」

権は思わず声をあげて驚いた。

この時の幻想郷では言うまでもなく、妖怪と人間は相嫌っていた。人里では特に妖怪嫌いが多く、新たに生まれた妖怪やそもそも害のない妖怪でさえ、妖怪退治の専門家がひたすら弾圧し、名声の為に殺す事が多々あった。

それを耳にしている天狗たちも「我々が人間を殺すのと同じように、人間も妖怪を殺すのだろう」と考え、疑問を持たなかった。

故、人間と妖怪が深くかわることなど考えられなかったのだ。これはきわめて稀なことである。

面を食らっている権の追い討ちをかけるがごとく、男は再び口を開いた。

「それにこの子を・・・我々は守りたいのだ。だからどうか！我々を見逃してほしい！」

女の抱えていたものは、どうやら赤子であったようだ。今は眠って

いるようであり、すこやかな寝顔が見え隠れした。

それを知った権は、さらに困惑した。

「子まで出来たというのか…?」

「恥ずかしながら、私たちは愛し合い子供を成したのだ」

「そ、そんな莫迦な話が…。人間と妖怪は殺しあう者同士のはずだ！それなのになぜ！」

「わからないのですか？我々…我々はこうして歩み寄れるのですよ！」

必死に訴える二人を見て、権は混乱し始める。

このまま逃がしてもよいのではないだろうか。ふと、情がよぎった。妖怪と人間が歩み寄れる事を証明した彼らは今後の幻想郷を変える大きな可能性ではないかと考えたのだ。

だが、その考えを正すかのように、遠吠えにより招集された部下の白狼天狗が叫んだ。

「権様！どうしたのですか！」

その部下は権の横に降り立つと、帯刀している刀を抜き放った。しかし、男たちは引き下がらず、一歩前に出た。

一目散に逃げると思っていたのか部下は少し戸惑いの色を顔に出すと、怒鳴りつけた

「貴様らあ！おとなしく里へ帰るがよい！」

「いや、帰るわけにはいかぬのだ！どうか我々を助けていただきたい！」

「このつ…。では仕方あるまいなっ！」

冷酷な声で部下は言うど、刀を振り上げて襲い掛かった。

「危ない！」

男は真つ先に飛び出し、文車妖妃をかばった。白刃は男の背中をかすめ、血飛び散る。

「ああっ…!?!」

文車妖妃が、声を上げる。同時に、権も心の中で叫んだ。

「うぐっ…ぐっ！」

苦しそうにもだえる男はそれでも立ち上がり文車妖妃の前で手を

広げた。

「彦助様！おやめください！」

「構わぬ！もし私を殺すのなら・・・それでよい。だが、せめて妻と子は見逃してくれ！」

鋭い眼光で権たちを見て、彦助と呼ばれた男は叫んだ。

これにはさすがに、部下も一歩足を引いた。今までこのような男を見るのは初めてであったからだ。

「も、権様・・・！いかがいたしますか？」

困惑しているのか、部下は思わず権に問う。しかしそれは権も同じ気持ちであり、むしろ部下に問いただしい気分であった。

「・・・やるしかないでしょう。里に帰る気がないのなら、やるしかないのです！」

権は首を振って情を捨て去ると、掛け声と共に男に向かって大剣を振りかざした。

男は震えながらも、目には光を宿し、権をにらみつけた。

「彦助さまあ！ダメです！」

しかしその刹那。文車妖妃が男を突き飛ばし、代わりに彼女の頭が斜めに切断された。

文車妖妃は彦助を突き飛ばしたそのままの勢いで地面に倒れると、無残に両断された頭部から脳が飛び散った。それと同時に、抱えられていた赤子が大声で泣き始める。

「あつ・・・ああああああ？」

突き飛ばされた彦助はすぐさま振り返ると、大声で泣き叫んだ。

「な、何故・・・。何故妖怪が人間をかばったの!？」

権は思わず素の声を上げると、大剣を手から滑り落として顔に両手をあてる。すると彦助が心底恨みの込めた恐ろしい顔で、権をにらみつけた。

「き、きさまあ！許さぬ！絶対に許さぬ！うおあああああ！」

男は言葉にならない叫びをあげつつ、立ち上がると懐から小刀を取

り出して、椀に襲い掛かった。しかし、部下が横に入ると、いとも簡単に彦助を胴から断った。

「あっ……」

彦助は上半身と下半身がそれぞれ別の方向に倒れて、数秒びくびくと手を動かすと二度と動かなくなった。

屍となった彦助の顔は涙で濡れていた。

「……お怪我は？」

安否を確かめつつ部下は刀に付着した血を振り払い、帯刀した。

「ああ、大事ないです。しかし……」

そこには無残に広がる男女の肉片が転がっていた。血の匂いが鼻を突き、今まで感じなかったほど、椀は嫌な気分になった。

「椀様、その……。この赤子はどう処分しましょうか？」

先ほどから泣き止まない赤子の声が山森に響いている。部下はどうやら殺す気はないらしく、近くまで寄り添っていた。

「所詮は赤子です。放っておけば死ぬでしょうね。ですが……」

この時初めて椀は人を殺すという罪悪感が湧き出たが、それがいつたい何なのか分からず、変な嫌悪感を覚えた。

*

この件の後、椀の仕事ぶりは著しく低下した。

もつとも、低下してと言ってもごく普通の哨戒隊員と同じくらいに落ち着いただけであり、同期や部下からは不思議がられた。だが、同時に仕事にがつつく事がなくなり落ち着いた椀に興味を示し始めていた。

故、度々声をかけられるようになり、いつの間にか彼女に対しての妬みは消えつつあった。

しかし、椀の仕事ぶりが低下したのは動機や部下との交流を求めたわけではないのは、言うまでもないだろう。あの時の男女についての疑問を消せずにしたのだ。

今まで妖怪と人間の在り方については一切の疑問を持たず、ひたす

ら与えられた任を果たしてきた。いや、与えられた任と言っても、どちらかというと過剰に頑張りすぎていたのだ。

つまり、これまでやってきた殺生はいわば、無益な殺生であったのではないか。そう、権は思うようになっていた。

それから、あの男女の件から半年がたち、紅葉散る秋の終わりを示す頃合いの時である。

今日の権は夜上がりであり、中央区のある行きつけの飲み屋で、酒を飲んでいた。

権は一人で酒を飲むことが多い。これは数百年前からずっと同じであり、むしろ他人に関与されず居心地が良かった。酒場の親父も口数が少なく、娘もそれは同じであった。

そのためか、ここはお忍びで上級階級の白狼、鴉の天狗が度々訪れ、密かに繁盛していた。

権はいつも通日も、店の端にある机で飲んでいた。上級階級の天狗たちは奥にある別室を主に使うため、店に入っすぐの席は使わないのだ。つまり哨戒隊就任後の当時から権はずっと通っている為、ここはいわば権の指定席のようなものである。

さて、権が酒を飲み始め、だいぶ酔いが回ってきた頃合いであった。

珍しく、この店に一人の客が入ってきた。その客を、権は見たことがあった。

「ここにいたのですか。権殿」

それは自分の上司である第二哨戒隊の隊長を務める、柳坂狼吉であった。

現在の彼は穩健派幹部の一人となっており、哨戒隊を引退している。自分の息子である柳坂狼助が第二哨戒小隊に所属した際に、まるで息子にバトンを手渡すかの如く、現役から去ったのである。その時に、権は隊長の座を譲られたのだ。

権が入ってきた狼吉をもの珍しそうに見ると、立ち上がり頭を下げた。

「ああ、どうかお気になさらずに。自分も今日は夜上がり。固くなるのは仕事の時のみにしましょう」

そういうと狼吉は、親父に酒を頼むと権の正面に座った。

「権殿。最近丸くなったようですね」

「えっ…。あつ、申し訳ありません。腑抜けているようで、恥ずかしい限りです」

申し訳なさそうに権は言うのと、狼吉は苦笑いをした。

「べつに攻めているわけではありませんよ。むしろ良くなったと思います」

「それはいったい？」

「最近、権殿は極力人を殺さなくなりましたね。それに致し方ないと判断した下衆人は、部下に任せているようで？」

実はあの男女の件からというもの、権は人を殺さなくなっていた。むしろ、人を避けるようになり、脅しばかりで済ましていたのだ。致し方ないと判断された下衆人は部下が殺すようになり、権の独断場ではなくなった。つまり手柄が行き滞るようになったのである。

「あなたの能力は、殺しのために発達した能力。ですがそれをあえて脅しに使う。自分はそれが大変良いことに転んだと思っていますよ」
「ですがっ…。我々妖怪の在り方では…」

殺しを行わなくなった権はその妖怪の在り方について、深く迷っていた。自分のやっていることは間違いではないだろうか。そう不安が押し寄せてきたのである。

「自分たちは妖怪。ですが、それを細かく分けると白狼天狗という種類です。つまり、種族によって妖怪は変わることができます」

狼吉は運ばれてきた酒に手を付けると、再びゆっくりとつぶやいた。

「白狼天狗は元来。山との共存をしてきました。故、新たに山と共存を試みようとする人間に、教える義務があるのです」

「それはごもつともですね」

同意する意思を示し権は頷いた。狼吉はそれを見て苦笑いをするのと、話をつなげる。

「…ずつと自分は、あなたを見てきました。就任してからずっとで

すね。当時のあなたは何かにあせっていたようで、本来の白狼天狗の在り方をわからずにいた。ですが自分は、あなたがいつか気づく日が来ると思い強く言わなかった。まあ正直、あなたは

長官からの信頼を得てしまつて意見を聞くことなど考えられませんでした」

首をかかげている樫が面白いのか、狼吉はすこし笑うと表情を改め、厳しい顔つきになると、言葉をつづけた。

「厳しいことを言うかもしれませんが、あなたは手柄にこだわり続け、いくつもの命を奪つていった。それは、我々が殺すべき存在の人間。下衆人と変わらないのですよ」

それを聞いた樫は、思わず机を叩き、身を乗り出した。

「なつ．．．!? 私は下衆人なんかではありません！ 白狼天狗としての義務を果たしてきただけです！」

「その義務は、誤りだったという事です。先ほど言った通り、我々は人間に教える義務がある。それは殺しとは程遠い物です」

「なんですつて．．．？」

「おそらく、尖刃館で教えてはいないのでしよう。ですが、我々白狼天狗は、あくまで人間との共存を示さなければならぬ。それは山の意思でもあり、石長姫様の意思でもあります。それに人間たちは、我々の示し方を理解して指定された木々を切つていたことを知つていましたか？」

「えっ．．．？」

「彼らは無闇に切つていたわけではなく、基本的に切るに値する木々を切つていたのですよ？」

それは初耳であった。樫はふと何が走る。

故にこれまで樫がやったことは、山そのものを荒れさせるために動いていたのと変わりなく、過剰に木々を切り自分の利益のみを欲し、森林の循環を阻害する下衆人たちと変わらない。そう、狼吉は言いたいのだろう。

山と天狗のことを第一に考えてきた樫にとってこの言葉は、あまりにも強烈であった。

つまり自分は、必要のない殺戮をしてきたのだ。それはある意味下衆人と言われても間違いはない。

衝撃の事実を知った権はこれまで行ってきた殺戮に、多大なる罪悪感を覚えた。最も嫌ってきた下衆人たちと変わらず、加えて心の奥底では見本となる白狼天狗であると思っていた自分に、激しい嫌悪感が押し寄せてきた。一気に酔いもさめ、顔は青白くなり、手足が震えだす。

「・・・無益の殺戮を行うのは、嫌人派の連中のみで良いです。あなたはいずれ、白狼天狗の星となる。ですから今は、ゆっくり休むと良いでしょう。それまでの間は自分の罪を認め、ひたすら我々白狼天狗の在り方について考えるべきだと思います」

そう言い残し、狼吉は懐から金を取り出して机の上に置くと、居酒屋を後にした。

こうして権は自分の過ちに気づき、長期休暇をとった。そして家中でひたすらに引きこもり、自分の罪をかみしめた。それがいわば心の傷となり、心的外傷——トラウマとなってしまうのだ。

しかしその後も権は立ち直ろうと、数々の白狼天狗についての史料を読んで過ちをただし、哨戒隊に復帰したのはそれから数十年後のことであった。

密告

さて、現代に戻り白狼の舞まであと二日と迫っていた。

町はすでにお祭り騒ぎで、天来寺の下町は大盛り上がりを見せている。出店などはもちろん繁盛し、村全体が華やかな雰囲気となっていた。

白狼の舞を含むこの三日間、こうして騒ぎ立てにぎやかである事で、日から頃守ってくれる神への感謝や、これからも天狗が繁栄するようにと願いを込めるといった思惑がある。さしずめ、祈願祭に近いだろう。

このようににぎやかである中、衛兵隊は頭を抱えていた。

理由は、迅兵衛の思惑についてである。

聡士郎が仕入れた文の情報は衛兵隊の原動力となった。

事実上の後輩であるにもかかわらず、聡士郎に先を越されたことに先任の衛兵達は対抗意識が燃えたのである。子供っぽくはあるが天狗は負けず嫌いでもあるため、意識を焚き付けるには十分な効果があった。桔はこれを狙っていた故、聡士郎が文と接触することを許したのだろう。

しかし、迅兵衛も警戒をしているのか、全くと言っていいほど尻尾を出さなかった。

巧妙な罠を張って密偵をすり抜け、聞き込みではまるで口裏を合わせるように指示されたのか、迅兵衛の怪しい動きを知っているものは全くと言っていいほどいなかった。これにはさすがの衛兵達も頭を抱え、数日が立って行く。

だが、密偵を含む衛兵隊達にも意地があった。桔は特例を出して金を惜しまず、今月分の予算を踏み倒し、懸命に捜査を行った。権現村にあるすべての店、さらには犬猿の仲である鴉天狗にまでも聞き込み、時には汚い金を使うこともあった。

その甲斐あってか、少量ではあるが次第に情報が集まって行き、迅兵衛は確実に悪事を企んでいることが浮彫となった。

しかし、その情報を集めるまでには時間が掛かり過ぎたのだ。

その為、桔は壱ノ間に衛兵達を急ぎよ呼び出すことにした。理由は一つ、これまでの結果を纏めるといった内容であった。

夕方ごろに伝令を受けた衛兵たちは仕事の切り上げ所を見つけ、ちらほらと壱ノ間へと集まっていった。しかし、今はいざこざも多々起きる祭りの最中である為、集まる人数は限られていた。

「集まったのは、これだけか？」

桔が自分の席へ着くと、衛兵隊員たちを見渡した。その数はいつもの半分ほどしかいなかったのである。

「皆、やはり祭りの警護にも忙しいようで・・・」

腕を組みつつ、浅葉は苦い顔をした。

「だが情報を持つものは、全員いるようだな」

桔の近くに座っている聡士郎は口を開いた。度々入ってくる小さな情報をすべて聡士郎は桔から聞いている為、だれが情報を伝えたのかそれなりに把握していたのだ。

「うむ、そうだな。では改めて話を纏めるか。おい、浅葉。まずおめえから話してみろ」

桔に話すように促され、浅葉は組んだ腕を解くと姿勢を正した。

「はい。自分は権現村内をひたすらに歩き回り聞き込みました。そんな中、気になる情報を突き止めましてな。村のはずれにある祭りの道具が仕舞われている倉庫で、山道家の舞姫候補が襲われた次の晩に、迅兵衛がその倉庫に入っていったと情報を仕入れることができました。そこで嗅ぎますとやはり、知っている臭いが残っております。おそらく消そうと試みてはいたのですが、自分の鼻はだまされませんぜ」

得意げな顔を見ると、浅葉は話をつづける。

「そこにあつた匂いの一つは下衆人、鎖鎌の陰爪のもの、そしてもう一つは言うまでもないでしょうが、銀杏木迅兵衛のものでした。迅兵衛のものはかなり巧妙に消されていましたが、自分はどうもあいつの匂いが嫌いだね。嫌いなにおいほど鼻に付く・・・ふん、わかつちまいましたわ」

もう一度得意げな顔をして浅葉は鼻で笑うと、話をやめた。

「まあ浅葉の鼻が利くことは皆も承知。これで、迅兵衛が過激派集団と通じていたことは明白となったな。彼奴め・・・許せん」

怒りを表しつつ桔は話を纏め、次の隊員に目をやる。

「では次に八木朗。おめえが話せ」

八木朗もとい、八木楼閣は背筋を正してたどたどしく口を開いた。

「は、はい。実は迅兵衛様・・・ああいや、银杏木迅兵衛は度々ある人物と密会をしている事を突き止めました。そのある人物とは、諜報隊長官である犬原源之助様です」

それを聞き、聡士郎は反応した。

犬原源之助はかつて桔と同期であった白狼天狗である。気の合う男であつたらしく、桔とは飲み仲間であつたと、以前桔から聞いていた。しかし、彼は尖刃館卒業時に諜報隊へとゆき、最近になり実力を認められ、長官の座に就いた。その後は桔と会うことがなくなつたという。

「なに？源之助とな？」

「そ、そのようです。内容は詳しく調べることができませんでしたが、なんでも人員を一人、迅兵衛に貸したと思われます。裏は以前から張り込んでいた密約場の待合茶屋「香優屋」の娘から小耳にはさんだと、密偵からは聞いております」

「なるほど、そういう事か」

興味深そうに、桔は頷いた。

諜報隊には、一癖も二癖もある人物が所属する。故に多彩な能力を持つものが多く、諜報活動にはもってこいの部隊であつた。

しかし、その内情は隠されており、どのような人物がいるかは把握できずにいた。しかも部隊の規約なのか、諜報隊員達は所属している事を公にしない。上級階級の天狗たちは諜報隊員を使用することが多い為その内情を知っているのだが、長官職を務める桔のような人物は、部隊そのものが違うために知る権利がなかった。

「しかしなぜ・・・迅兵衛は源之助と絡む機会があつたのだ？」

桔は首を傾げ、つぶやいた。

いくら迅兵衛が嫌人派の幹部付近であつたとしても、諜報隊を使う

ことは許されていないはずである。ましてや、源之助は桔と同じく中立思考であった為に嫌人派である迅兵衛を好ましく思っていないのだ。故に桔は理解ができなかった。

桔がうなつていると、唐突に春吉が口を開いた。

「おかしら、これは俺もなんですが：出会いによつて考えが変わるものではないでしょうか？俺も聡士郎と出会い、自分を見直そうと考えましたし」

「うむ、確かにその可能性も考えたが、やつは天狗らしい性格をしておつてな。頑固で保守的で柔軟な頭ではない。それにおそらくだが、長官になったからと言って権力に溺れる奴でもない。奴を鼻屑しているつもりはないが、何かしらの事情があるとしたか思えないな」

旧友である人物を疑うのはつらいことであろうと誰もが思ったのか、これ以上詮索しなかった。それ以前に時間がない以上、貸し出された諜報隊員が何の能力を持っているかが重要なことである。源之助の件は迅兵衛の思惑を防いだ後に、いくらでも理由を追求できるだろう。

しばらく沈黙が続くと、桔は口を開いて、次の報告はないかと促した。

「では、俺がします」

そういうと春吉は背筋を正して、立ち上がった。

「春吉？おめえ情報を掴んだのか？」

「ええ、これはほぼ偶然と言つていいことだと思いますが：私は嫌人派の幹部から。とある話を盗み聞きました」

「なに!?幹部からか！」

桔梗を含む衛兵隊員たちは一氣にどよめいた。

「はい、その・・・聡士郎の護衛解雇についてです」

「ワシの？迅兵衛と関係があることなのか？」

思わず聡士郎は首を傾げ、春吉を見た。

「おう。俺が聞いた話によりますと、聡士郎を護衛解任しろと幹部たちに促したのは、迅兵衛です」

「証拠はあるのか？何にでも奴のせいにする、話がややこしくなる

ぞ」

浅葉は立ち上がり春吉を指でさした。

「ありますって。確かに出来すぎているとは思いましたが、俺はその後、嫌人派幹部である犬里梅衛門様の一人娘、犬里榎様から話を聞くことができたのです」

「なに？榎殿から？」

「はい、榎様とは昔からの仲でしてね。同じ長物使い同士……と言っても向こうは薙刀ですがね。まあそれで何度か手合わせをしたことがありまして……。昔の馴染みで聞いたところ、確かにそのような事を言っていたと裏を取ることができました。榎様は不思議がついていたところを見ると、嫌人派全体の決定ではないようです。つまり、これは迅兵衛と幹部たちの独断であったと考えられます」

春吉の意外な人脈による手柄に、壱ノ間にいた誰もが思わず言葉を失った。そもそも春吉は言うまでないがサボりがちで暴力的であった為、聞き込みによる成功例がないといっても過言ではなかったからだ。聡士郎との出会いが、彼を変えたのだろうと、衛兵隊員たちは心の奥底で思った。

「しかし、そうなると別の疑問が出てくるな」

それは何故、聡士郎を外す必要があったのかだ。白狼の舞そのものを台無しにする為が狙いであるなら、わざわざそんな回りくどい事をしなくとも良いはずである。

「ワシがいることが、奴等にとって何か問題があったという事なのだろうか？」

「なるほど……。そうなると考えられるのは……」

桔は腕を組み唸り始めた。それに続き、他の隊員達も頭を抱える。

それと同時の事であった。奉行所の入り口から、門を叩く音が聞こえた。

「む？なんだ？」

「見てきます」

そういうと春吉は立ち上がり槍掛台から槍を片手に取ると、奉行所の玄関へと足を運んだ。

大方、小さいいざこざを止める為に衛兵隊の手を借りようと思ったのだろう。隊員達はそうにらんでいた。

そして聡士郎もまた、同じ思いであった。

「この一か月そういうことはなかったと思うが、多いのか？」

「今は祭りだからな。たまたま出払っている衛兵が見つからなきや、こうして本所までくるんだらう」

聡士郎の問いに、浅葉が答える。

それからすぐに、春吉が血相を抱えて戻ってきた。思わず何事かと、浅葉たちは立ち上がる。

「お、おかしらあ！」

「どうした。そんなに慌てて」

不思議そうに、桔は春吉に問う。すると春吉を退ける手が見えたと思うと、黒い羽織と笠をかぶった人影が出てきた。

そして笠を取ると、見たことある人物が出てきた。

「なっ……あなた様は！」

成熟した女性であり、髪は後ろで束ねて、きつい顔つきの白狼天狗。「衛兵隊の諸君、厄介になるぞ」

それは、犬伏家の一人娘。犬伏柗であった。

*

壺ノ間に張りつめた空気が広がった。

嫌人派幹部である犬伏家の一人娘、犬伏柗が何故この奉行所に来たのか。様々な思惑が壺ノ間を渦巻き、皆は柗をじっと見ていた。

また柗の方も、最初聡士郎がいると知り表情をゆがめたが、一番離れた場所で座ると目をつむり、黙りこくつたままである。そして一向に、口を開ける様子がなかった。

「……柗殿、どのようなようでここまで？」

しびれを切らしたのか、桔は探るような目で問う。柗はしばし黙っていたが、ついに口を開いた。

「お前たちが嫌人派……いや、迅兵衛を探っている事を知り、ここに来たのだ」

その言葉に、桔と聡士郎を含む衛兵隊員は戦慄が走った。

まさか、不審な動きをしていると反逆者に仕立て上げ、衛兵隊そのものを取り潰しにするつもりではないだろうか。

仮にも迅兵衛は第一哨戒隊の副隊長。その隊長である柊が身内を探られて、良い気分の訳がない。それ故に腹を立てれば、家系の権力により衛兵隊そのものを新規一新することも容易なことだろう。

「つまり・・・私たちを御役目御免と判断してここに来たど？」

険しい顔つきで、柊は柊を見た。

もしそうであれば、何か手荒な事をするに柊の表情から感じる事ができた。せめて白狼の舞の件が終わるまでは、御役目御免となるわけにはいかない。柊の思いを感じ取り、同意しているのか、隊員達も一気に覚悟を決めた顔になる。

しかし意外にも、柊は笑い始めた。

「はははっ！なんだおまえ達、御役目を降りたいのか？」

思いがけない反応を示した柊を見て、場の緊張感が若干ゆるんだ。加えて、柊は困惑した顔をする。

「・・・いや、まさか。という事は別件で？」

「迅兵衛の件についてゆえ、別件というわけではないぞ」

余裕な顔つきで、柊は腕を組む。

「ふふふっ・・・貴様ら、迅兵衛の企みを知りたくはないのか？」

「なっ、なんですど？」

心底驚いたように、柊は声を出した。

つまりこれは密告である。ましてや嫌人派幹部筆頭とも言われている犬伏家の一人娘が情報を流すのだ。驚かない方がおかしいだろう。

壱ノ間にいる柊以外のだれもが驚いている中、柊は声を張る。

「しかし！・・・条件がある」

「条件ですど？」

「うむ。彼奴を・・・迅兵衛を消してもらいたいのだ」

その言葉に再び戦慄が走った。

「か、仮にも彼奴は第一哨戒隊の副隊長・・・柊殿はそれで良いのですか？」

戸惑いを隠せない声で、桔は柊に問う。

これは密告件、正式なる成敗の依頼であったのだ。

しかし迅兵衛を殺すのであれば、それ相応の実力を持っていなければならぬ。現在の衛兵隊では迅兵衛と満足に戦える者はおそらくいないだろう。

ただ、一人を除いて。

「・・・構うことはないだろう。どうせ奴と剣を交えるのであれば、殺すつもりでいた」

口を開いたのは、聡士郎であった。その瞳の奥には何か燃え滾るものがある。

聡士郎の顔つきを見て面白いと感じたのか、柊はにやりと口を歪ませた。

「ふん、自身があるようだな。流石十手持ちか？」

「なに。ワシは感謝しておるよ、彼奴にな。だからこそ、礼を済ましておきたいだけだ」

切られた際の傷口に触れて、聡士郎は言った。

それを見て柊は満足したのか、再び口を開いた。

「さて、これで役者は揃っていることを把握した。話そうではないか、奴の思惑を・・・。まずどこまで知っているのか、教えてくれぬか？」
そういつて、柊は不敵な笑みを浮かべた。

*

衛兵隊員たちは先ほど出た話を大まかに纏め、柊に話した。

柊は目を瞑って一切口を出さずに聞いており、話が終わると同時に目を開いた。

「よく短期間でそこまで集めたものだ。だが、肝心な情報がいくつか抜けていたな」

素直に感心しているようではあるが、柊の表情からは余裕の笑みが消えていない。衛兵達はどこか見下された気分になり、苦い顔つきをした。

「さて、まずどこから話そうか」

「我々の集めた情報を最初から順に、話してはいかがですか？」

桔はそう促すと、柊は頷いた。

「ではまず、下衆人。鎖鎌の陰爪の件から話そう」

「なっ？あの件は終わったはずじゃ」

不思議そうに、春吉は声を上げる。すると柊は「まあ聞け」と言つて、話をつづける。

「鎖鎌の陰爪は侵入した過激派集団の一人にすぎない。故に、まだこの村には数十人の縞枯一派残党が侵入している。おかしいとは思わなかったのか？犬童杏の怪我は鎌ではなく、小太刀で付けられた物なのだぞ？鎌ではない」

それを聞き、衛兵達は思わず間拔けた声を出した。加えて聡士郎も思い出すように、首を傾げた。確かに、春吉は小太刀で臆を切られたといっていたのだ。

「確かに陰爪が小太刀で傷を負わしたと考えるのが妥当ではあろうが、お前たちの勘違いであつたな」

情けないと言わんばかりに、柊は首を振る。それを見た衛兵達は肩身が狭くなり、縮こまつた。

「という事はどこかに奴らの宿があるわけ？」

桔が問うと、柊は頷く。

「うむ。そういうことだ。それは言わずとわかるだろう？」

「・・・銀杏木家か」

顔を合わせている衛兵達の中、聡士郎は口を開いた。

「ほう、鋭いな。だが何故そう言い切れる？」

「簡単な話だ。奴は幼名から新たな名を貰った。その時からすでに、銀杏木家は奴の物だ。つまり、過激派集団の宿として使うにはちよつど良いだろう。やつは抜刀の迅五郎の孫・・・すなわち奴は、過激派集団の統領だからだ」

「ふふつ。ご明察だな。そう、奴は権現村大悪党の一人、抜刀の迅五郎の孫だ。もつとも私が知つたのはつい最近の事だがな」

少し話がそれたなど、柊は鼻で笑う。

「まず我々白狼天狗の殆どは、毎日村を出払うことになる。つまり、この村すべての人物の顔を覚えるのは割と時間が掛かる事はわかるだ

ろう？すなわち、奴等は一般人になりすまし、今もこうして白狼の舞まで潜伏しておるのだよ」

「こうしちやいれねえじゃねえか。おいおめえらー！」

居ても立つてもいられなくなったのか桔は声を張り上げて、衛兵達に準備するように促す。

しかし、柊は桔の袖を引っ張ると、それを静止させる。

「待て、まだ話は終わっていない。それにやつらは保険としているだけなのだ」

「保険・・・だど？」

桔の言葉に柊は頷くと、再び話をつづけた。

「ああ、迅兵衛は過激派集団とは別に動いている。それはお前たちも掴んでいるはずだ」

そう、迅兵衛はこここのところ、天来寺閃牙殿の中で寝泊まりをしているのである。公になっている理由は仕事の関係上によるものとされているが、それは明らかにおかしいことであった。

迅兵衛はあくまでも哨戒隊員。つまり天来寺に長期間居るような人物ではないのである。たとえば幹部並の待遇を受けていたとしても、右筆などの閃牙殿勤務が主となる者たちと比べれば、長居することは許されていないのだ。

「私は隊長として自分の職務を全うしない彼奴を許すことはできない。だからこそ私は独自で奴の動きを探った。そこで、お前たちが調べた諜報隊とかかわってくる」

「諜報隊と・・・？どういうことだ？」

「奴は諜報隊員、犬原賢狼を引き抜いたのだ。こやつは珍しく、妖術に長けた白狼天狗。つまり・・・」

柊が言い切る前に、桔は目を進らせ床を叩くと怒鳴りつけるように言った。

「うぬうおのれ！そういう事か！聡士郎の護衛解任をした理由は・・・権を狙っていたのか！」

それを聞き聡士郎も黙ってはいられず立ちあがると、癩癩を起こしたように桔梗の胸倉をつかんだ。

「おい！それはどういうことだ！権が狙われるとは……！説明しろ桔殿！」

桔も怒りをあらわにしている為、立ち上がり思い切り唖士郎を振りほどいた。

「奴の狙いは……『お告げ』のすり替えだ！迅兵衛は権に妖術をかけることで自分好みの『お告げ』に変えることが狙いだっただのだ。お主を解任した理由は、権と近づくことを妨害されぬためだったのだ！」

お告げは白狼の舞の中で最も重要であり、舞のトリである。それをたつた一人の白狼天狗ごときに変えられるなど、即刻打ち首かつ家系虐殺はどうあがいても免れない。それほど、天狗たちにとっては神聖なことであつたのだ。だからこそ桔だけではなく、衛兵達も少なからず怒りを覚えていた。

「くっ……こうしてはおれぬ！」

唖士郎は一目散に衛兵達を力任せに退かして、駆け足で壱ノ間から出ていった。

「おかしら！彼奴……まさか！」

青ざめた顔つきで浅葉は言うのと、桔は大声でそれを掻き消した。

「ほうっておけ！それよりもまず、儂らは過激派集団を御縄にかけるぞ！おめえら！早く準備しねえか！」

桔に叱咤され、衛兵たちは戸惑いながらも壱ノ間を出ていった。

しばらくして怒りが覚めて桔は冷静になると、残っていた柊に視線を向けた。

「柊殿……しかしなぜ密告を？」

すると柊は少しだけうつむいた。

「……私は舞姫としてこれまで多くの厳しい稽古にも耐えてきた。それも二分された穏健派と嫌人派を束ねようと、心の底では思っていたのだ。だが、所詮白狼の舞は醜い政治争いの延長にすぎない。私はそれを受け入れてまでも舞姫になりたかった。お父様嫌人派幹部が裏で密約していたことも知っていた……。だが、いざ舞姫が権となつた時に私は気づかされた。所詮お父様や迅兵衛は、私の事を道具としてしか思っていなかったのだ。だからいざ方針を変えると、私は不要

となり、舞姫になることはできなかつた……」

「その不満を抱え込み、密告したと？」

桔の鋭い問いに、柊は思わず自暴自虐な笑い方をする。

「ふふっ……まるで子供の仕返しのようなことかもしれない。だが、私は純粹に白狼天狗の平穩と繁榮を願っている。だからこそお前たちの噂を耳にしたとき、私は言わざるを得ないと思ったのだ」

「……協力を感謝します。貴女の働きで天狗は誤った道を踏み外す事を阻止できるかもしれません。ですが、この件が終わり次第、柊殿にも何かしらの沙汰がくるやもしれませぬ。できるだけ私も、口添えをしておきます」

桔はそういうと、ちょうど装備の完了した春吉を呼び、柊を犬伏家へ連れてゆくように命令したのだった。

*

閃牙殿の奥座敷にて柊は夕食が来るのを待っていた。

座敷の中は狭く、ただ静寂が続いていた。

閃牙殿職務の右筆たちは、白狼の舞までの間は早上がりであり、すでに閃牙殿にはいない。つまり現在閃牙殿の中は、柊の食事を運ぶ係りなど約数人しかいないのである。故に声など一切聞こえず、ほんの稀に、縁側を歩く際に鳴る木々のこすれる音が響くだけであった。

「しかし、遅いですね……」

柊は先に出された熱燗を口に運び、不満をこぼした。

熱燗が届いてから、三十分近くも待たされていたのだ。すでに熱燗ではなく、ぬるくなっている。

舞姫となったものは一日二食、食事を与えられる決まりとなっている。あまり食事をとらない天狗ではあるが、万全の体調を整えるためにこうして食事を与え、栄養を十分に取らせることが決まりとなっているのだ。柊は聡士郎と生活してゆくうちにそれが当たり前となり始めていたので、特に不思議なことではなかった。

流石の柊もおかしいと思ったのか、立ち上がりふすまを開けようとする。しかしそれと同時に、こちらに近づいてくる人の気配を感じた。

権は再び座りなおすと、ふすまが開くのを待った。

すると、ふすまが開くと同時に普段食事を運んでくるものとは違う男の顔が出てきた。権は思わず不審に思い、眉をひそめる。

「・・・あなたは？いつもの方はどうなさいました？」

「給仕係、西山惟草は夕方ごろに病であることが発覚致しまして・・・私はその代りです」

そういうと、男は座敷へ入り、権の前に食事を並べ始める。

「あつ、今日は春物の食材が多いですね。美味しそうです」

食器を見ると若筍の煮込みや鱈の塩焼きなど、さまざまなのが盛り付けてあった。旬なものだけあって、どれも食欲がそそると権は目を輝かせた。

男は食器を並べ終わると、すぐさま座敷から縁側へ出た。

「ごゆっくり」

そういうと、男はふすまをゆっくり閉めた。

「・・・つれない方ですね。惟草さんは、もっと語ってくださったのに」
給仕西山惟草は口が達者な男であり、いつも一人で舞の仕上げに励んでいる権を見て寂しいと感じていたのか、よく権に運んできた食べ物について語る男だった。権はそれをどこか楽しみにしており、しゃべり相手となる惟草に感謝をしていた。

「さて、いただきますか」

権は両手を合わせるとそのまま箸を持ち、見るも美しい動作で食事を口に運び始めた。

それから数分後、権が菜の花の辛し和えを口に入れた時であった。

「なんだろう、これ。不思議な味が・・・」

若干、口の中に広がる味と匂いに違和感を権は覚えた。

だが違和感を覚えるだけであって、権は何事もなくそれを飲み込んだ。このような味付けなのだろうと無意識に思ってしまった、それがどのようなものか、権は身をもって後悔をした。

そのまま飲み込んだ食材は食道を通ると、胃の中へと落ちる。すると、体に急激な衝撃が走った。権は吐き出そうとするが、体全体が痺れはじめ、思うように動かなくなつた。

「っ!?これっ・・・まさか!」

次第に体が痙攣を起こし始め、箸を手元から落とした。そして眩暈と吐き気、さらには呼吸が苦しくなると座っている事すら辛くなり、そのまま畳に倒れた。

「ど・・・毒・・・?」

痙攣が収まらず、次第に意識が遠のいてゆく。何故、あの時違和感を感じ飲み込んでしまったのか、権は自分を責めたくなった。自分は舞姫であるのに、いつ何時も注意を張らなければならないのに、最終的に権は自分が情けなくなつた。

権が異常反応に苦しみながら悶えていると、唐突にふすまが開いた。

そこに立つ人影は二つ。一人は先ほど食事を運んできた男、そしてもう一人は。

「じ、迅・・・兵衛・・・様・・・!」

「やっつと、口にしたか」

迅兵衛はにやりと笑いそういうと、倒れている権の方に向かう。

「人里で獵師が使うものだ。八意永琳から独自にこの男・・・犬原賢狼が仕入れた。朝鮮朝顔と毒芹を混ぜた特製毒薬・・・。無臭であり、即効性の高い効果をもっている」

これはあくまで狩猟用の毒餌に仕込むものであるが、その効果は絶大であり危険な薬品として獵師の間では使用されていた。製作者である八意永琳も腕が立ち信頼できない者には渡すことはないとも言われており、悪用されることを恐れたのだ。

ちなみに朝鮮朝顔の毒性は主に麻酔と痙攣を起こす。江戸時代では手術用の麻酔としても使用され、また世間に名を知らしめた某真理教は催眠薬としても使用していた経緯を持っている。次に毒芹だがこれは非常に危険な毒とされ、神経麻痺や眩暈。嘔吐。意識障害を引き起こし、毒草三兄弟の一つとして有名である。

天狗は妖怪である為、毒に多少の対抗を持っている為その効果は薄い。だが、迅兵衛達の目的を果たすためには、十分すぎた。

「案ずるな、死にはしない。殺してしまつては元も子もないからな」

「な、何をなさる・・・おつもりで・・・?」

意識を懸命に保ち、権は迅兵衛を力なく見た。

迅兵衛は権の目の前に座ると、不敵に笑った。

「お前の過去を松木聡士郎に話したら、彼奴は何を思うのだろうか」

「なっ・・・そ、それ・・・はっ!」

唐突にそのような事を言われ、権は戸惑った。ろれつが回らない口で懸命に言葉をつなげると、震える腕で権は体を起こそうとする。

すると、迅兵衛は権の髪を掴むと引っぱり、自分の顔に近づけた。

「私は知っているぞ、お前は奴に過去をまだ話していないのだろうか? 強情な女だ。嫌われたくないため、自分を守るか」

違うといたいのか、権は首を振る。迅兵衛はそれが癪に障ったのか、そのまま乱暴に権を投げ飛ばす。

「ふん、何をいさら。どれだけの人をお前は殺したのだ? 大量虐殺をしてなお、お前はあの男を共にしたいというのか? 笑い話にもならぬわ! 受け入れられるわけなからう」

過去の心的外傷をえぐられ、権は次第に涙が出てきた。

もしこの事を知られれば、聡士郎は自分に幻滅してしまうのではないか。そうなったら、一気に自分が嫌われてしまうのではないか。思えば思うほど無性に怖くなり、切なくなり、体に過去の罪に対する後悔と嫌悪感が巡り駆けた。

そして次第に、権の瞳から生気が失って行った。毒が完全に体を回り、うつろな瞳となり、意識が完全に途絶えたのだ。

「そろそろか、では犬原殿。任せますぞ」

迅兵衛はそういうと権の後ろに回り、背骨を思いきり膝で押して喝を入れた。

目を覚ましてもおお、権は茫然としていた。もはや抗う気力もないのか、口を開けて呆けている。

「では、始めますかな」

不気味な笑みを浮かべ、犬原賢狼は妖術を唱え始めた。

*

それからしばらくして権は妖術に掛けられると再び意識を失い、迅

兵衛に舞姫用の部屋まで運ばれていった。

時刻は日を跨ぎ、月明かりが閃牙殿を照らしている。

すでに閃牙殿は迅兵衛と賢狼しかおらず、静寂が辺りを包んでいた。

「これから、どうなさるおつもりで？」

賢狼はにやにやとした笑みを崩さず、迅兵衛に問う。

「・・・時に犬原殿、確認であるが椀に掛けた催眠は、白狼の舞まで持つのだろうか？」

唐突に不思議なことを問う迅兵衛に、賢狼は首を傾げた。打ち合わせの際に教えているため、それほど心配なのだろうかと賢狼は理解する。

「ええ。大丈夫です。あの催眠は時限式でありまして：それ以外では解けないようになっております」

「という事は万が一、犬原殿が死んでしまったら解術されてしまうのか？」

迅兵衛は賢狼に背を向けると、疑問を投げかけた。

「いえ、そんなことはありません。私はそれまで身をひそめますので、どうかご安心を・・・」

不敵に賢狼は笑うと軽く頭を下げ、そそくさと振り返り、その場を去ろうとした。

その刹那だった。

白刃がきらめいたと思うと、賢狼の首から頭がすっぱりと飛んでいった。

「えっ」

何が起きたのか分からず、賢狼は驚いた顔つきのまま、間拔けた声を出すと絶命した。

「・・・身をひそめたところで、所詮はばれてしまう可能性がある、なれば、こうするほかあるまい」

迅兵衛は以前持っていた白鞘ではなく、通常の刀とは違い少し長めの刀「迅雷丸」を帯刀すると、一つ息をついた。

「あとは・・・奴だけだ」

そういうと、迅兵衛は縁側を歩いて行った。

決着

木造の扉を静かに開くと、聡士郎は閃牙殿の中へと入っていった。月明かりも満足に入らず薄暗い中、一度来た際の記憶を頼りに廊下を歩いてゆく。

天来寺正面門は直属の衛兵が目を光らしている為、閃牙殿の近くまで行くとその壁をまるで忍びの如く上り、中へ入ったのだ。壁の上にある有刺鉄線により多少の傷を負ったが、衛兵隊正装を着ている為、部分的に保護されるので大した負傷はなく、それに加え高ぶる気持を身に孕んだ聡士郎にとっては蚊に刺された程度にしか感じなかった。

閃牙殿の中は思った以上に静かであり、聡士郎は違和感を覚えていた。

確かに真夜中ではあるが、見回りすらいないとはどういうことなのだろうか。ここは言わずと白狼天狗本拠地でもあり、自分のような侵入者が入ってきたらどうするつもりなのか。それに、かすかな血の臭いを感じていた。

だが、そんなことはどうでも良い。今は椀の安否を確かめる必要が、最優先事項である。聡士郎は最悪の事を考えると無性に血が騒ぎ立て、それを懸命に抑えていた。

それから椀が軟禁されている部屋を探しつつ、聡士郎は手あたり次第に部屋の襖や障子を開けてゆく。だが、あるのは長机だけであり、時には右筆が忘れたであろう筆転がっている。聡士郎は次第に苛立ちを感じた。

しばらく廊下を歩いていると、聡士郎は中庭に出た。

この閃牙殿は珍しく、御殿であるのに縁側に囲まれるように、その中央には中庭がある。そもそも、御殿と言うものは身分の高い者が住む屋敷であり、ここは人が住む気配がしない。つまりは名だけの物であるのだ。

奥には、かつて自分が露草に護衛を命じられた時の部屋がある。

もしやあそこかと、聡士郎は思いたった。

空を見上げると、満点の月が中庭を照らしていた。今宵はどうやら満月であったようだ。聡士郎は権を想い無我夢中で天来寺まで来たゆえ、気が付かなかったのである。しかし空には所々雲がある事から、すべての星が見えるというわけではなかった。

風に流される雲により、一瞬月が隠れた。それにより光は遮られ、暗闇となる。

「……来たか。松木聡士郎よ」

その時、ふと聡士郎の立つ縁側の向こうから、自分を呼ぶ声が聞こえてきた。

「……銀杏木迅兵衛。ワシが来ることをわかっておったか」

「いや、そろそろ来るだろうと私の持つ勘が働いたのだ」

雲が月を過ぎると、次第に向こう側にいる迅兵衛の姿が現れてゆく。体には返り血が飛んでおり、すぐさま穏やかではない空気が漂う。

「誰を切った？」

身構えつつ、聡士郎は低く言葉を出して問う。

「…… 諜報隊員の犬原賢狼をだ。奴は役目を終えたため、殺した」

「衛兵隊員である故、お役目の為に聞く。お主の目的は……なんだ」
迅兵衛は聡士郎の着衣している服を見ると鼻で笑う。

「一方的に質問をしてくるな。……まあ良い。冥土の土産にすべてを語ってやる。どうせお前を殺すつもりでいた。実を言うとな、お前を殺さなければおちおち眠ることができないのだよ」

一つ息を吸って迅兵衛は間をあけると、口を開いた。

「私の目的は一つ。天狗を……いや、妖怪を再びあるべき姿に戻すことだ」

思いがけない答えに、聡士郎は緊張感を解かず、驚いた。

「な……お主の私欲の為ではないのか？ 縞枯一派を復興させることでは……」

「どこからそんな、くだらぬ情報を仕入れたのだ？」

失笑して、迅兵衛は聡士郎を見た。

「確かに私はかつてそれを望み、成し遂げようとした。だが、今はもう

そんなことはどうでもよいのだ。この危機を知ってしまえばそうもなる。故に村に残した一派の連中は所詮おとりにすぎず、嫌人派すらも私の思惑を果たすための道具にすぎぬのだよ」

それを聞き、聡士郎は思わず困惑した。祖父と母が残した仲間、自分が所属している派閥すらも、この男は切り捨てるつもりだったのだ。それほどまでに、この男は冷酷であるのか。

「…貴様もわかるはずだ。いまの母なる地、この幻想郷は腐敗しきっている。人は妖怪を恐れなくなりつつあるのだぞ？そればかりか、妖怪と人間は共に歩もうとしているのだ。まったく、たわけた話だ。人と妖怪は相交えぬ存在。相殺しあう仲なのだ。それを曖昧にしたのは、現博麗の巫女、博麗霊夢が定めた規約『スペルカードルール』。そして、基盤と作り上げた先代の所為でもある。だから私は…神の宣託である『お告げ』を頼るほかないと思った。少なくとも我々白狼天狗はお告げの方針で動く。故に我々が残虐非道となれば、他の不服を持っていく妖怪も同調するだろう。そうすれば規約など無視して、再び双方の関係が修復されるのだ！」

思わず聡士郎は、迅兵衛の考えに同調してしまった。

もともと自分はその双方の関係により、生き方が成り立っていた。それに、迅兵衛の絶対的保守思考は、本来人と妖怪のあるべき姿である。時に恐れ、時に認め、それが歴史が証明してきた結果である。

加えて、聡士郎の職を追われたのは言うまでもなく『スペルカードルール』が定められたからであった。当時定められたこの規約を聡士郎は受け入れられず苦しんだのだ。

そして何より、聡士郎が最も苦しんだ理由は『先代から彼女を見守ると約束したが、彼女が自ら十手持ちを切り捨てるようなことした』である。

だからこそ、聡士郎はこの『スペルカードルール』に不満を持っており、迅兵衛の考えに少なからず同調してしまったのだ。もし迅兵衛の思惑が通れば、ずっと信じてきた剣を振る事に迷いはなくなり、純粹に十手持ちとして仕事を全うして死ぬことができるのかもしれない。

「確かに、お主の言いたいことはわかるのだ……。だがワシはそれを受け入れた。ワシらのような古い考えを持つ生き物は、時代という波に乗れぬ。しかし乗らなければ生きてはいけぬのだ」

今となつてはこれで良いのかもしれない。

同調したとは言え、聡士郎の心はすでに固まっていた。

このルールが定められなければ自分にはおらず、むしろ迅兵衛が望むように春吉と。文と。桔と。楓と。そして権と、殺しあう仲になつていたかもしれないのだ。だがそんなこと、できるわけがない。

かつて先代が聡士郎に教えた事、それは『共存』だった。当時の聡士郎はその意味を理解できなかったが、今でこそ、その教えは身に染みて理解していた。ゆえに不満を持ったとしても自らに言い聞かし、納得することができたのだ。

おそらく、迅兵衛は心底悪いやつではなかったのだろう。妖怪の在り方を自分なりに危惧し、解決策を練った。だが、人の巡り会わせにより彼の考えは歪み、意固地になり、今に至るのだ。もし先代との出会いがなければ、自分もこうなつていたのかもしれないと聡士郎は切なくなつた。

「やはりお前とは、理解し合えぬようだな……」

迅兵衛はゆつくりと首を振ると、身構え、柄に手をかけた。

「……迅兵衛よ、何故受け入れない。お前こそその思いがあるのならば、有益に天狗を導けるはずであろう。この大莫迦者めが！」

「言いたい事は……。それだけか？」

「……うむ。銀杏木甚兵衛よ、お前は今後の幻想郷の障害となる故、ここで成敗いたす。覚悟しろ！」

二刀を抜き放ち、聡士郎は中庭に降りた。そして迅兵衛も、柄に手をかけ身構えたまま降り立った。

*

両者は力なく、地に立っていた。

切り合いは、始まつてすらいない。むしろ二人とも一切動いてはいなかった。

武に携わっていない人間が見れば、おそらくこう思う。なんて静かなる空気なのだろうと。

しかし、常に両者は線を取り合っている。

以前戦った時よりも、二人の物腰はゆったりとしている。言わずと殺気は出していない。これが切り合う者同士の鬨ぎ合いなのだろうか。

だが、これこそが武の理である。心に常余裕を持たなければ勝つことなどできないのだ。荒れた心や過剰に慢心するのは、絶対的な力を持つていたとしても殺し合いの世界では長くは生きられない。言語道断である。

両者の距離は、絶妙と言わざる得ないほど徐々縮まって行く。

聡士郎の構えは以前と同じくぶらりと両腕を下げており、迅兵衛もまた、以前と同じである。

唯一違う点と言えば、聡士郎が両目を閉じている事であろうか。

鎖鎌の陰爪と剣を交えた際、確実に聡士郎は何かを掴んでいた。

それは心眼。霊魂修行を再び行い、最も身に着けなければならぬと言われた彼の目指す心理である。

風の音。虫の声。波立ち石に当る小池の水。そして迅兵衛の息遣いや鼓動すらも聞こえていた。

お前はすべて見えている。聡士郎はそう心に言い聞かせ、自らに余裕を作っていた。故に、物腰柔らかく、無駄に力まず、どっしりと構えることができているのだ。

—どうした、迅兵衛よ。困惑しているのか。

心の中で、聡士郎はつぶやいた。迅兵衛の動きはどこかきこちないと感じたのだ。

その予想は当たっていた。だが、迅兵衛は困惑しているわけではなく、先ほどの会話で高ぶる気持ちを抑えられずにいたのだ。

とは言うもの、やはり白狼天狗の剣豪。迅兵衛から感じ取れる思いは、聡士郎の持つ余裕の雰囲気さえも、押し返していた。これが、人の理と白狼天狗の理の違いであろうか。

二人が踏み込めば届く距離まで近づくのに、数分が立った。

そして、ついに動き出す。

迅兵衛が歩むほんの一瞬の隙を見逃さず、聡士郎は左足を蹴ると大きく踏み込みこむと右手の追風を振りかぶり、体を傾け袈裟切りを放った。

それを迅兵衛は、身をひるがえして避けた。しかし聡士郎は左手の衣川も袈裟切りを行い、追撃を行う。白刃きらめき、迅兵衛へと刃が向かう。

キインと、鈍い音が響いた。迅兵衛は鯉口を切り迅雷丸を半身抜いてそれを受けたのだ。衣川は小太刀である故、威力が乗らない。刀を使い受けるのは、妥当な判断であろう。

それともう一つ、迅兵衛はまるで滑らすように、それを流したのである。

受け太刀は非常に高度な技術を持っていなければ、行うことが難しい。刀とは言わずともろく、まず刃で受けるなどもつてのほかである。もし刃で受ければいとも簡単に刃はこぼれ、鈍と化すのは想像できるだろう。つまり迅兵衛は迅雷丸の峰で衣川の鎬を使い、滑らすように受けたのだ。

衣川は古刀と呼ばれる部類であり新刀に比べれば段違いなほど固くはあるのだが、それでも衣川は大きく傷んだ。刃がこぼれなかっただけましであろうが、聡士郎の体には痛みが走った。おそらく衝撃が、体にはじき帰ってきたのだろう。

迅兵衛は衣川を受け切るとそのまま地を蹴り後ろへ下がる。しかし、聡士郎は追撃せず、その地でとどまった。深追いをすれば、おそらくは居合で両断されると見越したからだ。

現に迅兵衛は着地と同時に居合体勢に入っていたため、読みは当たっていたといえる。

―みえているとは言え・・・やはり居合はやりにくいわい。

次に、聡士郎は追風を上段に構えると、衣川を迅兵衛に向け構えた。攻と防を兼ね備えた構えである。

迅兵衛はそれを見ると、顔を一瞬ゆがめた。おそらく厄介であると迅兵衛は思ったのだろう。

両者共々偏屈な剣技である故、やはり思いは一緒であった。

「妖術は、使わんのか？」

ふと、聡士郎は口を開いた。以前の迅兵衛は距離を開けると妖術を使ったが、その素振りを見せてはおらず、思わず聞いたのである。

すると、迅兵衛は身構えたまま答える。

「今のお前に使えば、不利になる」

「そうか」

聡士郎が小さくつぶやくと同時に、迅兵衛は地を蹴って迅雷丸の鯉口を切った。

抜刀時に起きるわずかに起きる風を肌で感じると同時に、聡士郎は追風を振り下ろし、迅雷丸をはじき落そうとした。

だが、それは誤りであった。

迅兵衛はそのまま体をずらして、振られた追風をいなすと切り替えし、振りかぶった。

聡士郎は咄嗟の判断で、背中をぶつける為に両足を蹴り、迅兵衛に突進した。迅兵衛は振り下ろす状態から懐に入れられ、踏みとどまった。

「ぐおっ、小癩なー」

驚いたのか、迅兵衛は思わず声を上げた。

それからほんの数時、密着状態で間が空く。

聡士郎は追風の柄で思い切り迅兵衛の横腹を殴った。いくら腹筋を鍛えようと、わずかに尖っている追風の柄で殴られれば激痛が走るだろう。

だがその刹那、迅兵衛は体を動かし、それを避けた。わずかに空間が開くと、迅兵衛は刀の元で切りかかる。

それを聡士郎は追風で弾き飛ばすと、再び二人に間が空いた。

追風は絶対に折れず、刃もこぼれない。故に聡士郎は思わず追風の刃ではじいたが、大した支障にはならなかった。

「お主・・・銀杏木流抜刀術ではない技を使っているのか？」

通常に刀を振るった迅兵衛に聡士郎は違和感を覚えていた。

かつて聡士郎が戦った際に、銀杏木流抜刀術は精神を一撃に乗せる

劍技であることを、聡士郎は把握していた。

だが、今回はまるで違う。基礎は抜刀術であるようだが、切り替えしの技が圧倒的に確立されている。つまり、銀杏木流抜刀術ではないのだ。

「・・・貴様も不盾流ではないだろう。つまり私もそういう事だ。縞枯流劍術・・・これが私の使う真の流派。もつとも、公で使うことはできまいがな」

「やはり受け継いでいたというわけか。墮落した天狗の流派を・・・」
「ふん、ぬかせっ！」

迅兵衛は叫ぶと、腰にさしていた鞘を左手で抜いて、それを聡士郎に向け構えた。よく見ると、その柄は部分的に鉄で覆われており、鈍器としてみる事ができた。

「その鞘・・・そういうことか」

「この迅雷丸。かつて叔父上が使っていた物・・・縞枯一派の真髓を教えてやる！」

そういうと、迅兵衛は鞘で殴りかかった。柄は迅兵衛の剛腕で風を切り、びゅおんと音が響き、聡士郎へと向かう。

それを聡士郎は容易く避けるが、瞬時に右手の迅雷丸が聡士郎に襲い掛かった。

荒々しい振りではあるが、思わず聡士郎を困惑させた。

—二刀も使えるのか、こやつは!?

迅雷丸を追風ではじくが、間髪なく鞘が襲ってくる。思わず鞘も追風で撃ち落とすが、迅雷丸が逆袈裟切りで聡士郎の腹部を狙う。

—まるで・・・昔のワシのようだ・・・。

劍と鞘を避けつつ、聡士郎は自分と重ねていた。

過去に聡士郎が使っていた靈魂夢想流は、二刀と一刀を使い分ける劍術であった。だが聡士郎は靈魂夢想流その物の劍術と理を嫌い、一つに絞り込むことを前提に考え、不盾流を開いた。しかしそれも間違いであり、逆に双方を自然に使う事こそが、自分の求めていた道理であることに気が付いた。故に現在の盾無流は、双方に問わられなくなり、全身にゆとりを持つことで心眼を開く事ができたのである。

今の迅兵衛は、自分が靈魂夢想流を使っていた際に大きく似ていた。居合から二刀まで使い分ける事こそ、この劍の理なのだろう。

そのことに気が付くと縞枯流劍術に対する嫌悪感を抱いてしまい、唃士郎は張っていた意識を一瞬跡切れさせた。

それを迅兵衛は見逃さなかった。

刹那、唃士郎は身をたじろいだ。咄嗟に顔を引つ込めたが、何か熱いものを感じたのだ。

―切られた・・・か！

鼻の頭から深く切り込まれた跡が唃士郎の顔に刻まれ、そこからは鮮血が流れだした。

まるで追いかけるかの如く、迅雷丸の劍先が唃士郎の顔を舐めるように切ったのである。いわゆる追い切りというべきであろうか。

「左目はもう使えまい。もつとも、今のお前には不要だろうがつ！」

迅兵衛は勝負に出たのか、力強く精密に刀と鞘を振る。

しばらく唃士郎は豪快かつ繊細なその振りを避けつづけ、時にはいなした。

だが頭は動いても、体には限界がある。故、次第に手首がしびれはじめ、唃士郎は次第に振る気力が失われつつあった。

ここで気の線を緩めてしまえば間違いなく命はない。唃士郎は肉体の危険信号を無視し続け、迅兵衛の攻撃を懸命にいなし続けた。

そしてついに、唃士郎の持つ追風が迅雷丸によって弾き飛ばされた。即座に唃士郎は距離を取ろうとするが、それではあまりにも遅すぎる。意思のある行動こそ、武術においては大幅な遅れをとつてしまうのだ。故に、肉体にしみ込ませた無意識による行動を唃士郎は願うしかなかった。

「終わりだー！」

それでも勝ちを確信して、迅兵衛は鞘を唃士郎の頭上に向け振り下ろした。剛腕による威力の鞘を頭で受ければ頭蓋骨は砕かれ、脳まで潰すだろう。

このまま死ねば、楽かもしれない。

他種族である天狗達に、自分は肩入れしすぎた。そもそも自分は人

間であり、こんなことをやる意味はないのだ。

だがそれでも、聡士郎の眼は光を失ってはいなかった。

—お前の理は、間違っているのだ！

汚れた剣技に、守る思いを込めた盾無流が負けるわけにはいかない。聡士郎はただそれだけを胸に、無心で衣川を両手で持ち直して体を逸らし、鞘をいなした。

そして、迅兵衛の左腕を削ぐように切りつけた。骨までは小太刀である故に断てぬが、肉を落とすには十分すぎる威力であった。

驚きにより勢い余ったのか、迅兵衛は体勢を崩した。そして同時に、聡士郎と距離を取る。

「ぐおお・・・ぬかったか」

うめき声のような声で、迅兵衛はつぶやいた。強烈な痛みが腕から体へと伝わり、鮮血は腕からあふれ出している。

おそらく治療しなければ長くはもたないだろう。

だが、迅兵衛は鞘を落とさず、大きく息を吐くと体勢を立て直し、聡士郎へと向かい立った。

その歪んだ顔から察するに、妖怪の道を信じ執念のみで動いているようだった。それはもはや天狗ではなく、鬼のような厳めしい顔つきである。

—まだやるか・・・！

聡士郎は飛ばされた追風を拾い上げて、再び二刀を上下に構えた。

また、迅兵衛も大きく息を吸うと、迅雷丸と鞘を構え、両者ののらみ合いが始まった。

二人の気を煽るかのように強い風が吹くと、双方は同時に、覚悟を決めた。

同時に足を少し動かし、いつでも飛び込めるように身構える。そして両者ともに硬直した。

これが、最後の一手になる。

先に仕掛けたのは、迅兵衛であった。聡士郎もさすがに疲れが体に来ており、その息遣いの粗さから、隙を見出したのだ。

高ぶらせた意思を剣に乗せ、抑えきれずに放出した爆大な殺意が、

聡士郎に襲い掛かった。

「くっ、奴の体力は底なしか！」

聡士郎も迅兵衛の足並みに合わせ、前に出た。

しかし。それは明らかに遅い。先を取られ、体力的にもはや限界であった。これが、天狗と人間の根本的な差であるのかと、聡士郎は奥底で妬んだ。

だが、その瞬間だった。

「むおっ!？」

上りゆく太陽の光が直接、迅兵衛の目に入ったのだ。それにより思わず、迅兵衛は攻めに迷いを作った。

いつしか長き夜は終わりを迎え、朝になったのである。気が付けば周りが薄く明るくなっている事から、剣戟からすでに三時間程度は経っていた。

天が作り出したその隙を、聡士郎は見逃さなかった。

「覚悟っ！」

それは心の声だったのか、口から出た叫びなのかは分からなかった。聡士郎は思いきり追風を振るい、右袈裟切りで迅兵衛の体を深く切りつけた。

奇しくもその切り傷は、かつて聡士郎に迅兵衛が刻んだ傷と同じものであった。

「うぐっ……」

腸が飛び出して、よたよたと流れるまま、迅兵衛は後ろへ歩んだ。

「て……天は、私を……見捨てたか……」

とぎれとぎれに迅兵衛は言うのと、どきりと中庭に倒れた。そして動かなくなった。

聡士郎は鮮血飛び散り、腸をぶちまけている迅兵衛を見下ろすと、つぶやいた。

「迅兵衛よ、お前は天を……いや神を侮辱したのだ。石長姫は、お前に天罰を下したのだよ」

そういうと聡士郎は追風に付着した血を振るい飛ばし、閃牙殿の奥を見た。

権はおそらく、この先にいるのだろう。迅兵衛の言葉を思い出すとおそらく、権は催眠をかけられている。故、護衛を解任されてもなお、聡士郎は守れなかった事に対して罪悪感がこみ上げてきた。

もう少し早く気が付いていれば、ひどい目に合わなかったのかもしれない。どのようにして洗脳されたのかは不明であるが、おそらく迅兵衛は手荒なことをしたのだろうと、容易に想像がついた。そう思うと自分はなんと情けなく口だけであると、聡士郎は悔いた。権を守る事こそが、いま剣を振るう理由ではなかったのか、彼女を守るために、盾無流を開いたのではないのか。

「くっ……権……！」

聡士郎は情けなさを噛みしめると、衣川と追風を帯刀し、そのまま走り出そうとした。

だが、その刹那。聡士郎は背中に強烈な違和感を覚えた。

「かっ……な、なんだと……？」

その無機質な違和感は、水月からへその間から突き出していた。

「ぐっ……天は……神は私を見捨てたとしても……貴様は……ここでっ！うぐっ……」

後ろから聞こえた声は、倒したはずの迅兵衛であった。削がれていない右腕で迅雷丸を持ち、聡士郎を突き刺したのだ。

いや、厳密に言えば死んでいなかった。腸が出ていたとしても、即死というわけではない。つまり迅兵衛は一矢報いようと執念により、途絶えた意識を取り戻したのだ。

迅兵衛は最後、にやりと満足げに笑うと力なく迅雷丸を手放し、仰向けに倒れた。そして、二度と動かなくなった。

「ぐぐぐっ……さ、最後のさいごに……慢心をしたか……ごほっ……」
血液がのど元まで来て、思わず聡士郎は吐血をした。

しかし懸命に動き、権が軟禁されていると思われる部屋にたどり着こうと、縁側を上る。

死ぬ前にもう一度、権の顔を見たい。聡士郎は一つ、歩みを進める。願わくはもう一度、彼女に触れてあげたい。また一つ、前へと歩む。この胸の思いを、はつきりと伝えてやりたい。力強く、もう一步を

踏み出す。

だがそれを阻止するように、徐々にから力が抜けて行き、意識が遠のいてゆく。

四歩目を踏み出そうとすると、聡士郎は足を踏み外し、横向きへと倒れた。必死に起き上がろうとするが、もはやその力すら残っていない。

「……もみ……じ……」

やがて聡士郎の意識は途切れたのであった。

*

どこまでも漆黒の色が続く中、聡士郎はふと目が覚めた。

あたりを見渡しても、闇が永遠と続いている。そこで聡士郎は困惑する心を落ち着かせようと、胡坐をかいた。

そして、これが冥府かと聡士郎は納得した。

ここには自分しかおらず、暗闇に押しつぶされそうになり、虚しさと寂しさが精神的に追い詰め、虚無感に陥る。

だが、それと同時に聡士郎はある事を思い出していた。

それはかつて自分が五歳の頃、鞍馬と出会い、初めて靈魂修行を行った際の事である。

あの時まだ幼子であった聡士郎が行った靈魂修行は、この虚無感にも耐えうる精神と同時に、魂の完全なる離体を行うための修行であった。理由は幼き頃故に分からなかったが、今となっては肝を据わらせるための下準備のようなものだったと、聡士郎は理解している。

もつとも、そんなことを思うにも死んでしまった以上、それはすべて無駄となる。これまでどれだけの命を奪ってきたかと思い返せば、自分は間違いなく天国には行けず地獄へ行く事となるだろう。そして罪をすべて返済した後、輪廻転生をして松木聡士郎とは違う生物として生まれるのだ。

仏教の事は疎かった聡士郎であるが、このような考えが人里では一般常識であった。

そう思うと、これまでの記憶や経験がすべて失われる。修行により何百年間も体感し、多くの経験を積んできたが、それがすべて失われ

ると思うと無念のみが、全体を駆け巡るのである。

あらゆる感情に左右される中、聡士郎を笑う声が聞こえてきた。

「聡士郎よ、何を恐れておるのだ？」

その嗚れ声は、聞き間違えるはずもない。振り返るとそこには、鞍馬天狗こと魂魄妖忌が愉快そうに立っていた。

「鞍馬様？なぜこのようなところに？」

純粹に疑問を投げかける聡士郎を、鞍馬はさらに笑い飛ばした。

「どこもなにも、ここは靈魂修行の場ぞ？」

「なっ、それがしは死んだのですぞ？」

あの時、確実に自分は死んだはずである。

水月と臍の間を迅雷丸で一突きされたのだ。普通の人間であれば死は免れない。仮に生きていたとしても、すぐに事切れるだろう。

聡士郎が困惑している姿を見て、妖忌はにやにやと笑い、口を開いた。

「お前は昔から烏頭だのう。かつてお主に教えたことを忘れたのか？魂と肉体の離別。これこそが、靈魂修行の理だろうに」

「それは重々承知……。しかし死んでしまった以上、魂は冥府へと送られるとも言っていたのではありませぬか」

「確かにそうとも言った。だが、儂はどうであろうか？この通り生きておるぞ？」

その言葉に、聡士郎は押し黙った。

確かに、魂魄妖忌はこうして長らく生きている。生きているといっても半分は魂であるが、それでも肉体は普通に血が通い、体温もある。食事をとらなければ腹も減るし、水分を取らなければのども乾く。つまり、ほぼ生きていっているといっても過言ではない。

聡士郎が押し黙っていると、妖忌は言葉を続けた。

「儂はな、とある想い人を守るため、こうして半人半霊の身となった。儂はこの歳の体になるまでにどうにかして、その想い人を守るために修行を積み、悟りを開こうとした。そしてたどり着いたのが……靈魂修行であつたのだ」

妖忌は一つ息をつくくと、黙り込む聡士郎を見て再び話をつづける。

「魂には時の概念は存在しないと儂が教えた故、お主も重々承知であろう。当時の儂はそこに気が付いて、生き残る確率を見出した。それは魂であるにもかかわらず、肉体を持つ事であったのだ。即是、死とは尊く、近き物であり。死神にも目をつけられず生の理をも無視できるのだ」

「つまり・・・肉体が死すとも魂が生きていれば、それがしは再び・・・？」

「輪廻転生から逸脱するには、悟りを開くほかあるまい。だが、我々はあくまでも劍豪。故に仙人たちとは違う方法で、我々は悟りを開く必要がある。それが魂と肉体の離別。故に儂は、長きにわたる生を受けることができたのだよ」

「ではっ！どのようにあなたのような・・・半人半霊の身となれるのですか！教えて頂きたい！」

妖忌の言葉に、聡士郎は立ち上がり、言い寄った。

すると、妖忌はため息をついた。

「だから、お主は鳥頭なのだ」

「・・・な。何を？」

「既にお主は、その身となっているのだぞ？」

その言葉に目を見開き、聡士郎は自分の体を見た。しかし、それは全く変わらず、普段通りの自分の姿である。

「既にその身となっているお前は、どのようにして現世へ戻るか。それを考えるのだな」

そういうと妖忌は聡士郎の前から姿を消したのだった。

*

過激派集団を縄に掛けた後に、桔は聡士郎と迅兵衛の末路を知ると、露草へ嫌人派の企みを報告した。

それを聞くと、露草はすぐさま対策するようにと命を出した。いわく露草は迅兵衛が何かしらの悪事の為に動いていたことは知っていたらしく、ひそかに準備を進めていたというのだ。

真っ先に行われた事は権の催眠の件であり、専門の妖術師に術を解かれ、正気を取り戻した。先に記述していた二種の毒物は記憶障害の

作用もあるため、記憶があいまいであった権はすぐさま医師に治療を施された。幸いにも大事には至らなかったが、そもそも天狗には一時の効果しかない毒を盛られた故に、その心配はなかったといえる。

次に、迅兵衛に手を貸したと思われる人物は幹部や長官など関係なく、即座に縄をかけられた。彼らは意外にも潔く縄をかけられ、中には既に命を絶っている者もいた。おそらく迅兵衛の存在がなくなつた今、頼れるものがいなくなった為であろう。

縄をかけられた中には当然犬伏家も含まれていたが、終による密告により、ひどいお沙汰は受けなかった。終は犬伏家の顔に泥を塗つた為、家から勘当されたが、彼女は犬伏家その物を胸の内嫌っていた故に、生々していたという。

また、嫌人派幹部の処罰は内密に処理され、公にされることはなかった。しかし家系の名に傷をつけたことは変わらなく、挽回の為か悪事に関わつた者たちは態度を一変させ、仕事に励むこととなった。思考は変えてはいないが、それでも働きぶりは一遍したという。

このように舞の裏では多くの暗躍が渦巻いていたが、そのすべては露草の賢明なる働きで公にすることはなく、闇に葬られることとなった。もつとも、これこそ公にすれば村を混乱に招き入れる故、得策であったと言えよう。

さて、先の件はすべて舞の前日に行われた事であった為、日にちを改めたいと言いたいところではあるが、舞には決められた日にちのみしか行えない掟があり、それはできなかった。

そこで露草は権の身と失敗を案じ、掟を破り何とか先延ばしにしよう、頭を抱えることとなった。舞姫を万全な調子にしなければ舞で失敗した時の代償は大きく、舞そのものを冒瀆した罪で、最悪権は死刑となる可能性があったのだ。

しかし、舞を踊る張本人の権が、先延ばしにすることを拒否した。露草は権に無理はするなど指摘をしたが、権は露草に直接意見をしに来てそれを否定したため、その覚悟に負けたのだった。

そして、ついに迎えた白狼の舞翌日。

過去の舞に比べてより多くの見物客に見守られる中、椀は舞う事となった。

見物客の中には新たに山の神の一員となった守矢の神々に加え、多くの大妖怪も出席をした。理由の一つとして過去の山にはいなかった大妖怪達が、外の世界で居場所をなくし山に移住したためこの五百年間で激増したからである。故に天狗たちは今後の関係を温厚にすべく、招待したのであった。

加えて、天狗全ての統領である「天魔」も、出席をしていた。

天魔とはまさに天狗の大統領と呼ぶのにふさわしく、白狼や鴉共々の統領でさえ、気軽に謁見できない存在であった。そもそも格種族を管理する大天狗でさえ、出会えば即座にひれ伏す事しかできず、まさに根本的な天狗社会の頂点に立つ存在である。

過去に行われてきた舞の内容は、大天狗の中でもさらに選りすぐりの人材が天魔へと口頭で伝えると決まっていた。天魔の存在は、下端の天狗達が謁見する事は極めて無礼なこととされており、いわば、かの將軍のような扱いを受けていたのだ。

しかし、今回の行われる白狼の舞はどういうわけか、天魔が席を設け直接見ると決まり、上級官職の天狗達では大騒ぎとなった。これは、種族始まって以来の事であり、天魔の存在を内密にすべく、鴉天狗達への報道規制が行われた。

故に恐縮すること強いられていたすべての天狗達であったが、天魔の計らいにより今日だけ騒ぐ事を許されると、舞は華やかに行われる事となった。天魔曰く、「折角の祭りを騒がないとは何が祭りか」と、本人すらも楽しみたい様子であったのだ。

こうして白狼の舞は大々的に行われ、終わりを告げることとなった。

お告げの内容は言うまでもなく、『引き続き穏健に人と接しよ』であり、白狼たちはそのお告げに従う事となったのだった。

*

それから、半年が経った。

巷では大地震が度々起きる異変が起こり、それを解決すべく博麗の巫女が山を登ったことが、話題となっていた。

いわく、異変の首謀者は大地震を起こしたことにより博麗神社を倒壊させた為、巫女の逆鱗に触れたという。そして行く先の妖怪や人間に聞きまわり、山のさらに上である天界へと足を運んだのだ。

巫女であれば、人間とは変わらない。そこで偶然、記事を求めて山を飛んでいた射命丸文が応戦したという。

結果は敗北であった。軽い怪我で済んだと言われているが、天狗達の中では大きな話題となっていた。彼女はペンが武器である鴉天狗ではあるが、文武両道である。すなわち腕が立つので、白狼天狗達からは一目置かれ、鴉天狗達にとっては憧れと妬みの象徴であった。故に人間である巫女に体術で敗北したことは、大きな衝撃を及ぼしたのだった。

さて、そんな話題が渦巻く中、権はいつも通り哨戒任務から帰ると、夕食を作っていた。

白狼の舞が終わってから、権は特に変わりなく生活を送っていた。舞姫になったことで彼女は高い地位を持つ事ができるのだが、権はそれを拒み、普通の白狼天狗としての生活を望んだのである。もともと、元舞姫と云うだけあって権現村に住む白狼天狗達は権を特別視するようになり、迅兵衛に代わる新たな白狼天狗の星となっていた。過去に柳坂狼吉が言ったことは真になったのである。

ちなみに楓は現在、尖刃館で泊まり込みの訓練を行っており、いよいよ卒業へ向けての準備を行っていた。故に今は権しか家にはおらず、どこか寂しさがこみ上げていた。

その思いを胸に、しばらく権が料理をしていると唐突に扉を叩く音が聞こえてきた。

権は扉に鍵を閉めていることを思い立つと、割烹着を脱ぎ、そのままの足で玄関へと向かった。

「今開けますー！」

そういつて権は開錠し扉を開くと、とある男が入ってきた。

慎重は権より高く、歳は三十代半ばくらいの顔つき。白髪は後ろで

結っているが、頭頂は沿っていない。ところどころの縁に紅葉の刺繍が入った白い羽織を着ており、何よりも目立つのは、刀傷を負っている左目だろう。

「ただいま帰った。ん？匂いからして、夕食はできているようだな」
そのとある男とは、人里の十手持ち、松木聡士郎であった。

迅兵衛に不意打ちを食らい、死をさまよった聡士郎ではあったが、何とか一命を取りとめたのである。とは言うもの、その体は死んでいると言つてよかつた。

何故なら、体温が普通の人間よりも遥かに低いからである。

その理由は聡士郎が人ならざるもの、半人半霊の身となったからであつた。

聡士郎は靈魂修行を受けたことで、その身となる資格を幼少期から無意識に得ていた。いや、鞍馬が今後を見越して仕込んでいたのだ。死を覚悟していた聡士郎であつたが、靈魂修行の場で鞍馬に諭され、気付かされたのである。そして再び生を受け生きながらえるべく、半人半霊の身となる事を選んだのだつた。

何故、鞍馬がこのような事を仕組んだのか理由は不明ではある。しかし、こうして半人半霊の身となれた聡士郎は普通の人間よりも治療能力が高くなり、人間では致命傷である内傷を治療する事ができた。

そして運ばれたと思われる医務室で聡士郎は目覚めると、その場を把握し、外傷の治療を行った。布を丸めてそれを噛むと、自ら迅雷丸を抜き取り、近くにあつた包帯を力いっぱい巻いて傷口をふさいだ。

肉体の致命的外傷により起きる衝撃は当然、精神に響く。つまり精神が弱れば魂も弱り、半人半霊の身となれば命に係わる事なのだ。故に、早急な治療が必要であつた。聡士郎が死人と間違えられて医務室に運ばれたのは、まさに幸運であつただろう。

こうして聡士郎は、半人半霊の身として新たな再出発を遂げたのである。人間を辞めることは抵抗があつたが、それでも生きる道を選んだのである。

加えて、あの事件を解決したことが大いに湛えられ、聡士郎は衛兵隊として村に滞在することを許されていた。聡士郎が人間ではなく

なつた為に新規嫌人派幹部たちは強く言うことができず、露草は押し通す事に成功したのである。

「どこに行つていたのですか？非番であるのに、桔様に御呼び出されたのですか？」

今日、聡士郎は珍しく非番であつた。

衛兵隊に戻つた聡士郎は隊員たちに改めて迎え入れると、下積みが必要だと下端のように使役しており、休みを取れる時間がこれまでなかつた。隊員たちは実力では上である聡士郎に先輩風を吹かしたく、こうしてイビリを行つたのである。

この事を聡士郎は仕方ないと認識しており、文句を言わず仕事に励んでいた。確かに功績を上げたとしても、自分は元人間であり、この先妖怪の社会に同調して行くのであれば、少しでも早く慣れる必要があつた。

そして、半年が経つた今日、その励みを少しだけ返上すべく、休みを取ることができたのだつた。

「いや、人里まで少しな。しかしこの体になつても、これほどの時間が掛かつてしまつたわい」

「人里まで？十手持ちとして、何か要件が有つたのですか？」

首を傾げて権は問うと、聡士郎は草鞋を脱ぎつつ、苦そうな顔をした。

「うむ……。いやな、ケリを付けに行つたのだよ」

「ケリですか？」

再び権が問うと、聡士郎は「少し居間で待つてくれぬか？」と言い、自室へ入つていった。

そしてしばらくすると、着流し姿で聡士郎は居間へと入つてきた。寝間着と部屋着兼用の着流しである故に、おそらくもう外出することはないのだろうと権は理解した。

「すまん、またせたな。うむ、それでケリとはな、ワシの持つ最後の重みを、上白沢殿に返上してきたのだ」

「返上？えっ……。まさか聡士郎さん」

権は聡士郎の言つた意味を理解すると、心底驚いたような顔つきを

した。

そう、つまりは十手持ちの証である十手を、里の守護者である上白沢慧音に返上したのである。

人ならざる者である半人半霊となった聡士郎は、代わりに十手を持つ資格を失った。それだけではなく、妖怪退治の専門家さえも必然的に退く事となったのだ。

そこで聡士郎は十手を返上しに、上白沢家へと向かった。半人半霊となった聡士郎を見て、慧音は驚きと呆れを含んだ表情をし、聡士郎に対して、そこまでしてお前は十手を捨てたのかと、軽蔑をした目でにらんだ。

しかし聡士郎は事情を話すと、慧音はしぶしぶ納得をして、正式に十手持ちとしての引退を許すことになった。慧音の本心はおそらく、また一人消えてしまうのかと、寂しい思いなのだろうと聡士郎は理解していたが、あえて口に出さず無言で、十手を慧音の下に差し出したのだった。

「・・・どうしてですか？」

権はその理由を問いただしたが、聡士郎が出す答えをうすうす感づいていた。

「お主はあの夜、ワシに過去を語った。そして同時に、思いを打ち明けてくれたであろう？」

先日の満月に権は決心を固め、月見酒の際に聡士郎へ過去を語った。自分がいかに残虐であったか、いかに慢心をしていたか、思わず苦しくもなり涙が出たが、すべてを語った。

そしてすべての過去を語った後に、権はそれでも受け入れてくれるかと、聡士郎に対する想いを打ち明けたのだ。

権が想いを打ち明けてからしばらく間が空くと、ただ一つ、聡士郎は「そうか」とつぶやいた。その夜に聡士郎が口を開いたのは先ほどの一言のみであり、聡士郎は就寝しに行った。

この時、権は純粹に嫌われたと悟った。迅兵衛がかつて言ったように、それは当り前であろうと理解していた。

しかし、聡士郎はその後何事もなかったかのように、今日まで権

と接していた。故に、いつか返事をしてくれると思い、権はただを待つ事のみを考え、これまで聡士郎と同じく接していた。

「ワシはあの時、打ち明けたお主の想いに答えることはできなかった。そうであろう？ワシの本業は妖怪退治の専門家だった。お主の過去を受け入れることはできても、想いに対しての返事をする資格などなかったのだ」

「そんな、資格なんてどうでも・・・よかったじゃないですか」

顔を落とし、権はつぶやいた。なぜそこまでする必要があるのでらうか、返事を返す事に、何の準備が必要であるのか、権は口で説明を求めたが、頭の中では理解できていた。

「いやな、お主は良くてもワシは許せなかった。だからこうして十手を返上したのだ。ははっ・・・待たせて本当に済まなかった。だが、今なら返事を返すことができる」

覚悟を決めた聡士郎は、目を閉じた。その顔つきは切なげであり、何かと別れを告げているのだろうか、権は感じた。

そして少しの間が開くと、聡士郎は瞳を開いた。

「あの時打ち明けたお前の想いは、ワシも同じく持っていた。だから、改めて言わせてもらう。権よ、ワシと夫婦になってくれぬか？そして両者共に過去を受け入れ合い、この世を生きてゆこうぞ」

真剣な顔つきを言う聡士郎に権は思わず頬を染め、涙腺が熱くなった。

そして、返事を待つ聡士郎をまっすぐと見つめると、権はゆっくりと頭を下げた。

「その返事、確かにお受けいたします。松木聡士郎様、どうかこの私めを、御支えしてくださいませ。そして時には、私が貴方様を御支えして行きます。ですからこれからも末永く、不束者である私めを宜しくお願いいたします」

照れくさそうに二人は顔を上げると、顔を近づけて夫婦の契である接吻を交わしたのだった。

番外編 贈物・上

じりじりと太陽が照りつけ、大地は熱気を孕んでいる。季節は夏。今年一番と思われるほどの暑さが幻想郷を覆い、里の住人たちは苦しんでいた。

それは妖怪の山でも同じであり、天狗達の村である「権現村」も例外ではなかった。

任を請け負っている天狗たち以外は殆ど家から出ず、天来寺へとまっすぐ繋がる中央街ですら、人影は少なかった。

しかし、そんな中を歩む、二つの影があった。

一人は人間を辞め半人半霊となり、天狗を名乗ることを許された男、松木聡士郎。もう一人はガタイが良く、顔に多々傷がある白狼天狗、竹峰春吉であった。彼らの所属する村廻り衛兵隊。通称衛兵隊村廻方による任を受け、この中央通りを名の通り、見廻っていた。

とは言うもの、春吉は任よりも懸命に暑さと戦っていた。彼は厳つい顔を更に歪めており、これでは治安を守る側どころか、治安を乱すゴロツキの様に見えるだろう。

対して聡士郎は、割と涼しい顔をしていた。

先にも記述した通り、聡士郎は半分が霊体である。故に、生きている者より体が気温に左右されないのだ。もともと温度そのものは感じる為、何処にいても適温というわけではないのだが、それでも並みの人間よりは温度に鈍かった。

「くそっ……今頃長官や夜間見廻りの待機者は冷たい麦茶でも飲んでるんだらうなっ！」

春吉は天へと叫ぶごとく、大空へと悪態を付いた。

「我慢せんか、春吉。私等はまだ救われている方であろう。住宅通りの見廻りを任されている楼閣や杉原殿に比べれば、天国ではないか」

権現村の村廻りは聡士郎達が行っている中央通り付近を始め、住

宅通り付近、天来寺付近へそれぞれ二人が振り分けられる。そこで一ヶ月間見廻りを行うと、それぞれ別の場所へと再び振り分けられるのだ。

そして、三ヶ所の中でもっとも退屈な見廻り場が、聡士郎が名を挙げた八木楼閣と杉原鋼牙が見廻りを行っている住宅通りであった。理由としては、茶店などの休憩所が一つもなく、名の通りただ家が連なっているだけだからである。春吉や聡士郎の様に知り合いや家族がいるならまだしも、どことも繋がりのないごく一般的な村廻衛兵であれば、退屈極まりないのである。

さらに、住宅通りは多くの家が立ち並ぶため木々が少ない。つまりは木陰が少ない故、夏場は地獄の様な場所であろう。

「まあそうだけだよ・・・暑いのに変わりねえんだ！」

春吉はまるで子供のように大声を出し、返事を返す。

「そんな事、お主に言われなくともわかっておるわい。ほれ、もう少しで双葉庵に着くのだ。それまではもっと気を引き締めんかっ！」

聡士郎は前屈みに歩いている春吉の背中をバンバンと叩くと、叱咤した。それに対し春吉は一時的に姿勢を正すが、歩くことにみるみる顔を落とし、元の前屈みに戻っていく。

「まったく・・・ほれ、あと少しだ！」

呆れたように聡士郎は呟くと、再度春吉の背中を叩いたのだった。

??

さて、それから二人はしばらく歩くと、馴染みの店である双葉庵へと到着した。

何時もは繁盛している双葉庵であったが、今日は暑さに準じたのか、何時に無く客数は少ない。故に退屈だったのか、双葉庵の看板娘である双葉土筆は店の座席で座り、暇そうな顔をしていた。

「おう。客が来たぞ、おサボり娘」

暖簾をくぐった春吉が、ぼけっとしている土筆へと声を掛けた。すると土筆は春吉に目を向け、嫌そうな顔をする。

「うわ・・・汗臭い奴が来た」

「なんだとてめえ！」

悪口を言われて怒りを吐いた春吉には目をくれず、土筆は後から入ってきた聡士郎へ愛嬌ある笑顔を向ける。

「あ、いらっしやいませ聡士郎様！ 暑い中、よくお越しくさいますた！」

「ああ・・・しかし何時も言っているが、聡士郎で構わんのだがな。そう言われると・・・こう、背中が痒くなるのだ」

「いやーそれはできませんよ。犬走家に婿入りしたんですからね！ 敬意を示すのは当たり前だって、あたい何時も言ってるじゃないですか！」

土筆の言う通り、聡士郎は「松木」の性を改め、「犬走」の性となっていた。

今年の夏、聡士郎は犬走家へと正式に婿入りすることで、権と夫婦になったのだ。

何故婿となる必要があったのか。それは、犬走家そのものは名家と言えども大きくはなかったのだが権が舞姫となり、その名声が言わずと上がつてしまった為である。故に犬走家は舞姫となった由緒ある家系となり、その名を権は捨てる事が出来なくなったのだ。つまり、夫婦となる為にはどうしても、聡士郎を婿として招き入れなければならなかった。

自分の師から与えられた名を捨てる事となった聡士郎であったが、彼はこの事を難なく受け入れた。むしろ、それで済むのであれば、喜んで引き受けると言ったのである。

しかし、師から与えられた名をそうやすやすと捨てた訳ではないのは、容易に想像がつくだろう。つまり、聡士郎は師よりも権と一緒にする事を優先したのである。

こうして二人は近所の住人や親しい友を家へと集め、祝言を挙げたのだった。双方が所属する隊の長官から祝詞を吟じられ、村に伝わる民謡を歌い、刀の鯉口を新郎新婦が切り、誓いの言葉を重ね合うと、再び刀を鞘に戻し、鍔打を立てた。

因みに、この祝言は現代人が思い描くだろう「結婚式」の様な大それたものではなく、ましてや式場で行うものではなかった。そもそも

権現村では式場で行うと言う概念は存在せず、主に自宅で錨打を立て、それを見た近隣住民や知人の同意があればこそ、初めて夫婦と決まるのである。この形式は過去の日本で一般的に行われた祝言と若干違うが、基本的には同じ形式であった。

「あ、何時もの座席で良いですか？お冷取ってきますので！」

そう言う土筆は、元氣よく台所へと入っていった。

二人はいつも使っている座席へどしりと座ると、聡士郎は帯刀していた追風と衣川を外し、春吉は手槍を隣の椅子へと立てかけた。

「ちっ……聡士郎にはいい顔しやがって。たまには愛想よくしてくれっつんだ」

左手で頬杖をつき、先ほどの聡士郎と土筆のやり取りを思い出しながら、春吉は悪態をつく。

それを見て、聡士郎は笑いをこぼした。

「ははっ、お主達は本当に仲が良いな。いつか夫婦となる日は近いのかもしれない」

「おいおい、ばっか言うんじゃねえよ。誰があんなじゃじゃ馬を妻に取るっつんだ」

くだらないと吐き捨てるように、春吉は呆れた笑いを浮かべた。対して聡士郎は苦笑いを作ると、懐から紙巻煙草を取り出した。

「しかしまあ、ワシはお似合いだと思うがな。元氣な子が生まれそうではないか」

「どうせ小生意気なガキが生まれるんだろうよ。それか、親父似の頑固者じゃねえの？」

「ふふっ、それは自分の事を言っているのか？」

春吉は自分の口走った事が自らにも当てはまる事に気づくと、聡士郎から視線をそらし「けっ」とつぶやいた。

この動作は、春吉の照れ隠しである。もともと本人は気がついていないようではあるのだが、聡士郎は春吉と同じくして任を行う事が多い為、気づいていた。

「何の話をしているんだい？」

春吉が視線を逸らした先に、丁度土筆が御盆にお冷を入れて、台所

から出てきた。彼女はそのまま聡士郎達の席まで歩み、ゆっくりと二人の前へお冷を置く。

「あ、そういや聡士郎」

土筆が二人にお冷を置いた直後、春吉はふと何かを思い立ったのか、視線を戻した。

「なんだ」

煙草に火をつけて煙を肺に入れると、聡士郎はその煙を吐きながら、春吉へ目をやった。

「もうすぐお前達、一周年を迎えるんじゃないか？」

「ん。ああ、そうなるな。だからどうした？」

「いやよ、何か贈るのか？」

春吉の言葉に、聡士郎は一時動きを止めた。そして少々危機感を覚えた顔で、煙草を灰皿へと押し付ける。

「な・・・贈るものなのか？普通？」

「あつたりめえだ！ 何いってんだよ！ 普通は贈るもんだ。クソつまらねえ俺と一緒にあってありがとうだとか、気を利かせて贈るもんだだよ！」

「そうですねよ！ 椀様だって、きつとお待ちになっっている筈です。あたい達女は贈物が大好きですから！」

大声で春吉と土筆に指摘され、聡士郎は「なるほど」と納得するように頷いた。春吉はそれを見るとどしりと椅子にもたれかかれ、腕を組む。

「そもそもよお。おめえら新婚夫婦だつてのに、全くもってこう・・・それが感じられねえんだよな。正直なところ、冷めてる様にしか見えねえ。本当に慕いあつてんのか？」

呆れたように言う春吉に対し、聡士郎は顔をしかめる。

「当たり前だろう。なにもべたべたし合うのが慕いあつてるとは言わんぞ」

「ま、そうなんだけどよ。普通新婚夫婦つてのは体を絡め合ったりして、愛を確かめ合うもんなんだぜ？ お前らはそれが無いと言うか・・・お互い理解しあつてるのはわかるんだが、まるで爺さん婆さ

んみてえつつうのか・・・」

「それで良いではないか。ワシらはお互い支え合い、立て合う事を誓った。故にお主が思い描いているような愛とは違うのだ」

「うーん。いやそれでもよ、つまらなくねえか？ だっておめえ、子もまだじゃねえか」

呆れている表情を崩さずに言った春吉であったが、言うと同時に「あつ」と理解したように顔を歪めた。

「いや、すまねえ。その身じゃ難しいか」

「気持ち悪いな、気にするでない。権はそれでも尚、ワシを受け入れた。故にそれだけでも、ワシの想いは満たされておるのだ」

聡士郎が呟いてからしばし無言が続いたが、唐突に聡士郎が苦笑いを作った。

「まあ、実を言うとな。もしワシが人の身であったとしても、子は出来なかったかもしれぬ」

「え？ どうしてですか？」

近くの椅子を引いて土筆は座ると、不思議そうに問いかけた。

「なんでだよ。まさか種族間の違いとか言うんじやねえだろうな」

春吉も解せないのか、首を傾げて言う。聡士郎はそんな二人を見て苦い顔を崩さず、二本目の煙草に火を付けた。

「うーむ。土筆がいる故にあえて伏せた言葉を使うが・・・一つ無いのだ」

「は？ なにが一つねえんだ？」

腕を組み直し、春吉は顔をしかめる。土筆も意味がわからないのか、首をかしげた。

「いやだからな、春吉。一つだ。普通ワシらは、二つ持ち合わせておるはずだろう？」

何が言いたいのかわからないのか春吉はしかめた顔を崩さず、明後日の方向を向いて考える仕草を取った。そして直ぐに、青ざめた表情となった。

「え、おめえそれマジなのか？」

春吉は股をもじもじと動かしながら、引きつった笑いをする。

「うむ。マジもなにも、大マジだ。ワシが若き頃、先代の巫女と……」
「ちよ……おめえふざげんな！ なにをそんな痛々しいこと唐突に暴露しやがるんだ！ おめえやつぱり頭おかしいよな！ なあ！」
「ちよつと春吉うるさい！ で、何が無いんですか？ 勿体振らず教えてくださいよお〜」

幸いにも土筆はまだまだ理解していないのか、聡士郎と春吉をきよろきよろ見て、答えを求める。もつとも、言えるはずもないのだが。

「おめえは知らなくていいんだよ！ てか知るな！ おい、親父！ あんたも土筆に吹き込むんじゃねえぞ！」

「ちよつと親父は関係ないじゃない！ って、親父もどうしたんだい！ なんてそんな顔してるの!?!」

どうやら厨房にいる土筆の親父にも聞こえていたのか、何時もの無愛想面を若干歪めて、青ざめている。無理もないだろう。男であれば、誰もがそうなるはずである。

それから暫く春吉と土筆の喚き合いが続いたが、熱りがさめると春吉は椅子に座りなおし、一つ息をついた。

「ふう……まあともかく、何か渡してやれ。おめえら夫婦が特殊なのはわかるが、普通は贈るもんだ」

「むう……そうか。何か探してみるかな」

聡士郎はそう言うのと立ち上がり「そろそろ再行くか」と、刀を腰に帯刀し始める。

椅子に立てかけてる手槍を手に取と、春吉も「そうだな」と、銀子を机の上に置き、立ち上がった。

??

既に日が落ちて、権現村に夜が来た。

今日昼時の熱さ故なのか、いつも以上に中央通りは賑わいを見せていた。おそらく休暇であった天狗達は家から出ずに、暇を持て余していたのだろう。

さて、そんな賑わいを見せている中央通りを横切り住宅通りへと向い、聡士郎は自宅へと帰った。

「ただいま戻った」

玄関を開けてながら聡士郎が言うと、奥から割烹着姿の権が小走り
で出迎えた。

「お帰りなさいませ。お務めご苦労様です」

「お、権の方が早かったか」

「はい。買い物に出向いてたので私の方が後かと思っていました
が・・・」

予想外でしたと権は言う、刀を外した聡士郎からそれを受け取
る。そして玄関を上がり自室へ向かう聡士郎へと着いていった。

部屋に入ると権は聡士郎の着替えを手伝う為、着流しを箆笥から
出した。次に聡士郎が脱いだ衛兵隊用羽織を手に取り、それを綺麗に
畳む。

「今日は少々遅かったですね。どうされたのですか?」

「うむ。奉行所へ戻った後、楼閣と杉原殿に愚痴を漏らされていて
な。それを聞いていたら、何時の間にか時が過ぎた」

「ああ、あの二人は住宅通り見廻りでしたね。今日は暑かったので、
その為です?」

「そういうことだ。彼奴ら、変わってほしいなどと抜かしおってな。
お務め故、我慢しなければならんとは思わんか?」

権は聡士郎に着流しを手渡すと、少し首をかしげて考え込む仕草を
した。

「うーん。その通りだと思えますけど、やはり同情してしまいま
すよね。私達哨戒隊は木陰を使って哨戒をして良いと許可を出しま
したが、衛兵隊はそんな融通、効かないですし・・・」

哨戒隊の指揮系統は、それぞれの哨戒隊長が持っている。村を離れ
ての任であり現場の判断を優先する為、長官の指示がなくても臨機応
変に動き、状況に応じて対応しなければならぬのだ。故に今回権が
行った指示も、特に問題は無かった。

対して衛兵隊は長官の指示が絶対であり、それに従わなければなら
なかった。村内である為にそれは仕方のないとはいえ、やはり融通が
きかないことも多く、士気が高いとは言え、こうした隊員達の小さな

愚痴も少くはなかつた。

もつとも、事件に依じて現場の判断を優先することもあり、取り分け融通が効かない訳ではない。ちゃんとした理由が存在し、筋が通つていけば、現場の判断による身勝手な行動も、許される。つまり今回の文句は自己による気持ちの問題である為、桔に交渉しても有無言わず承認されるわけがなく、故に楼閣たちは愚痴をこぼすほかなかつたのである。

「ところで今日はどうしますか？既に夕食も出来ていますし、お風呂も一番風呂ですよ」

「うーむ、そうだな。メシを先に頂くことにしよう。腹の虫が騒いでしょうがないからな」

腹を摩りながら聡士郎は呟くと、それを見た椀はころころと笑つた。

「ふふつ、わかりました。では温め直しますのでその間、居間でくつろいでいてください」

椀はそう言うと、ぱたぱたと台所へと向かつていった。

それに続くように聡士郎も居間へ向かうと、縁側で煙草盆を置き、煙管に葉を詰める。

煙管に火をつけ暫く煙を楽しんでいると、それに勝るほどの良い香りが漂ってきた。

「お待ちせしました」

椀の声に聡士郎は振り返ると、長机には食事が広がっていた。鰻の蒲焼に茄子の梅しそ和え、白米は艶やかに立っており、汁物は鰻の内臓を吸い物であった。

「おおー！これは旨そうだ」

思わずよだれが出そうになる聡士郎はそれをぐつと堪え、煙管をカツリと煙草盆に叩きつけ灰を落とす。そして懐へ煙管を仕舞うと、一目散に食前の前へ向かった。

「この鰻と茄子はどうしたのだ？」

まるで子供のように眼を輝かせて言う聡士郎に、椀は得意げな表情をして、説明を始めた。

「茄子はにとりさんから頂いたものです。任の帰宅途中にとりさんの家へと寄りまして、その時に頂きました。あとその鰻は、中央通りの店で買ったものです。夏ですし、性をつけなければならぬでしょう？　ですから、少々奮発しました」

「なるほど。ああ、ではいただきます」

冷めてはせつかくの料理が不味くなると言わんばかりに、聡士郎は早速料理に箸をつけた。鰻の身を箸で切りそれをぱくりと口に入ると、脂の乗った鰻が口の中で蕩けて広がり、それが甘辛のタレと絡むことで、何とも言えない旨さになる。

「美味いー」

空腹は最高の調味料と言うが、聡士郎は思わず声をあげると箸に勢いが乗り、あつという間に白米と鰻を平らげた。

「ふふ、良かったです。茄子の方は如何でしょうか？」

「では、こちらもいただくとするかな」

この茄子の和え物は、椀の手作りであった。白狼の舞の際に知り合った天来寺専属板前である西山惟草から、稀に料理を教わるようになり、作れる料理が増えたのだ。

理由は言うまでもなく聡士郎の為であるが、椀の友人である河城にとりから「料理のできない女性は嫌われるよ」と冗談を言われ、それを本気にしてしまい危機感を覚えたのが動機である。それから惟草に頼み込み、努力に励んでいた。

「これもまた絶品！　良い塩梅とはまさにこれだなー」

結果的に今ではこうして聡士郎の笑顔を見ることができ、椀はその度に努力が報われたと実感していた。そして同時に、今度はどんな料理を作ってあげようかと、再び努力に励む意欲も湧き上がってくるのだ。

「ふう。ぐ馳走様でした」

それから聡士郎は気持ちの良い食べっぷりを見せると箸を置き、手を合わせた。

「はい。お粗末様でした」

椀は微笑みながら言うど盆に食器を乗せて、流台へと向かってい

く。

「なあ、権よ」

「はい？ 何ででしょうか？」

唐突に声をかけられて、権は流台から振り返った。その透き通った瞳に若干聡士郎は若干照れた様な表情をすると、頬を掻く。

「いやな・・・その・・・。何か欲しいものは無いかと気になってな」
「ええ？ いきなりどうしたんですか？」

困ったように権は微笑み返すと、食器を洗いながら考え始める。

「そうですね・・・最近包丁の切れ味が悪くなってきたけど・・・ああ、でもそれは研ぎ師に頼めば良いですし・・・」

「いや、別に家庭用品ではなくても良いぞ。なにかこう・・・個人的に欲しいものだ」

「個人的・・・にですか？」

食器を拭きながら権は理解するように頷くと、「うーん」呟きながら再び考え始める。

それからしばらく経つと、権は「特に無いですかね」と申し訳なさそうに答えたのだった。

??

さて、日を跨いで翌日の朝が来た。

いつも通りの時間に聡士郎と権は目をさますと、日課である走り込みを行い、木剣での打ち合いを行った。眠った体を起こすにはちやうど良い運動量である為に、非番であれば毎日欠かさずこの鍛錬を行っている。

最近は苦手な朝を克服すべく、義弟である楓も参加するようになっていた。以前の楓は朝起きるのも辛そうであったが、今ではすつきりと目がさめるようになり、同時に聡士郎と剣を交えることで、少なからず腕も上達していった。楓も遂に道場の卒業過程を受けているため、志を持つようになったのだろう。

三人は鍛錬を終えて朝食を取ると一緒に家を発ち、それぞれの場所へと向かっていく。聡士郎は中央通りを跨ぎ、奉行所へと足を運んだ。

「おう。今日も暑くなりそうだな」

奉行所の中へ入ると聡士郎は衛兵達が集まる壺ノ間へと向かい、軽く挨拶を交わした。既に数人の衛兵が中におり、皆それぞれ挨拶を交わす。

「あ、聡士郎さん。おはようございます!」

その中でも一際大きく声を出し、八木楼閣は頭を下げた。楼閣は衛兵達との話を切り上げると立ち上がり、聡士郎の前へと向かう。

「昨日は申し訳ございませんでした。わざわざ愚痴を聞いていただき
て」

「いやなに、気にする事はない。辛い任務故、気持ちもわかるのだ。だが昨日も言うた様に、任には励めよ」

聡士郎は楼閣の肩を叩くと、部屋の端へと座る。楼閣はどうやら迷惑ではなかったのかと気になっていたのか、ほっと胸をなで下ろしていた。

「ところで春吉はまだ来ておらんのか?」

何時もならそろそろ春吉が顔を出している頃なのだが、今日は珍しく姿が見えなかった。すると、部屋の片隅で本を読んでいた鋼牙が言葉を返した。

「彼奴は昨日。浅芽殿と飲み歩いてたぞ」

「ああ、なるほど。彼奴は酒癖が悪いからな、浅芽殿も大変であつたらう」

「だらうな。私と楼閣も犬走殿に愚痴を漏らした後、飲みに行ったのだが・・・浅芽達を見かけた際には、既に春吉は出来上がっていた」
鋼牙の説明に聡士郎は何となく情景を想像すると、苦笑いをした。
「しかし春吉さんに何か用だったんですか?」

何時もなら春吉が来たか来ないかを気にするような聡士郎ではな
い為、不思議だったのか楼閣は問う。その問いに聡士郎は腕を組み教
えるかどうかを唸ったが、口を開いた。

「いやな、ワシと権が夫婦となり早一年。感謝の意を込め、贈物をしよ
うと思っておるのだ」

「おお!それは良いですな!何を渡すんです?」

意外にも楼閣の絶賛に加え、鋼牙も頷きながら賛同をする。

「これは確かに良い案。もし私にもお力添えできることがあれば、言ってくだされ」

良心的な対応をした二人を、聡士郎は見直した。てつきり茶化されるかと思っていたからである。

「いやまあワシが思い立った訳ではないのだが、言われてみればなるほどと納得してな。ともかくこの点に関してあまり声を出さんでくれ。こう・・・恥ずかしいからな」

聡士郎は小さな声で言ううと、鋼牙と楼閣は承諾の意思表示をすべく、こくこくと頷く。

「あ、なるほど。春吉さんの入れ知恵ですか。それで探していたと」

「その通りだ。どうもワシはこう言う事に疎くてな・・・」

「はて・・・？犬走殿は人との恋はしなかつたのですかな？」

不思議そうに鋼牙が問うと、聡士郎は顔を歪ませて、苦笑いを作った。

「十手持ち時代。ワシは全くもつて女子に人気が無かつた・・・。いや、まあ御勤め故に嫁を取らなかつたのだが、虚勢を張っている様にしか取られなくてな。妖怪とデキているなどと馬鹿けた噂もたつた程だ」

「いやあ、でも今は誠になっているじゃないですか」

「むう・・・まあそうではあるが」

ニヤニヤと口元を歪ませて言う楼閣の意見に、聡士郎は頷く。

「あつ、ところで犬走殿。椀様の贈物は何を渡すおつもりで？」

唐突に思いついたのか、鋼牙は聡士郎に問う。すると聡士郎は首をかしげ、難しい顔をした。

「いや実を言うとな・・・。まだ決まっておらんのだ」

「え！ 決まってるないんですか!？」

声を張り上げて驚いた楼閣に、鋼牙は軽く横つ腹をど突いた。

「これ！ 声大きい！・・・では椀様が欲しい物を贈るのはどうでしょうか？」

「それが昨日、何となく問うてみたのだ。しかし、『何も欲しいものは無い』と言うてな。困り果てておるのだ」

「あれ？　そこまで聞いたのなら春吉さんに聞く意味ないじゃないですか？」

楼閣の指摘に、聡士郎は「まあそうだな」と返答を返す。

「ではお主達に問うが。椀が贈られて喜びそうな物、何がある？」

その問いに楼閣と鋼牙は暫し考え込んだが、鋼牙は申し訳無さそうに首を振った。

「正直な話。私は椀様とあまり関わりを持っていない故、あの方が喜びそうな物はとんと思いつきません」

「女ですから花とか甘味が無難でしょうか？　不快にはならないでしょうし」

「八木郎。犬走殿は椀様が心底喜ぶものを送りたいのだ。故にそれではつまらんだろう？」

「なるほど、でしたらやはり、聡士郎さんが一番知っているんじゃないですか？　夫婦なんですし」

二人の話が止まらずにいると、なんだなんだと他の衛兵たちも集まってきた。どうやら二人の言い合いが目立ったらしく、気になったらしい。

「お主らはなんだかんだで隠す気がないのか・・・まあ良いか」

結果的に他の衛兵たちに知られ、聡士郎は呆れながら言う。すると、それと同時に一人の男が入ってきた。

「御前達。朝から元気だな」

「お、長官！」

楼閣の言葉で皆は気が付いたのか、一斉に桔へと頭を下げる。

「うむ。で、なんの話をおったのだ？」

桔は一つ頷くと、皆に問う。聡士郎はもう隠す意味は無いかと一つ息を吐き、桔へ事情を話した。

「ふむ、なるほど。椀が好きなものか」

そう呟くと桔は壱ノ間の上座に座り、考え込む。

「あ、彼奴は確か将棋の強者だったな。好きなものってたら、これくらいしか思いつかん」

「そうでしたね！　天狗の中で右に出るものはいないって言われてま

すし！」

大声を張り上げて楼閣が同意すると、他の衛兵たちもそういえばと騒ついた。

権が持つ将棋に対しての情熱は、その道ではかなり有名である。過去による休暇の際にたまたま始めたのがきっかけであったが、戦略の深さと先の読み合いに面白みを感じ、武と同様に将棋にも打ち込むようになったのだ。それからは心の傷も癒え、権は休暇から復帰すると同僚や友人、さらには名家の主人と幾たびも指し、今では大天狗にも認められるほどにまで強く成長した。加えて最近では腕に覚えのある天狗以外の妖怪にまで対戦を申し込まれるようになり、その度に幻想郷での将棋界で名を知らしめるようになっていた。

もちろん、聡士郎もその事に関して知らない訳が無かった。聡士郎も十手持ち達と度々将棋を指しておりそこそ腕が立つのだが、所詮は人間。いざ権と指したところ、まるで月とスッポン並みの実力の違いにより、大敗を喫していた。

聡士郎はあまりにもぼこぼこであった為にすっかりと将棋の事を忘れており、なるほどと思いつき返す様に呟く。すると、桔は大きく笑いを上げた。

「はっはは！ まあその線で行くのもいいと思うが、権はどんなものでも贈られれば喜ぶと思うがな。贈物つてのは物が重要な訳じゃねえ。感謝や敬愛。つまりは気持ちを贈るもんなんだ。だからおめえが権のことを想って贈るのなら、権も嫌な筈はねえと思うぞ」

そう言うのと桔話を切り上げる為に、ぱんぱんと手を叩く。
「おし、そろそろ時間だ。おめえら勤めに励むめよ」

桔の号令により衛兵達は声を上げると、そろそろと壱ノ間から出て行く。聡士郎もそれに続いて部屋から出ようとする、桔が声をかけ、近寄ってきた。

「待て待て、聡士郎。おめえは今日非番だ」

「はて？ 恐れながら、今日ではなかった筈ですが」

真面目な表情で言う聡士郎に桔は苦笑いを作ると、後頭部を搔いた。

「春吉は珍しく食い物に当たったらしくてな。こればかりはどうも天狗も人間も関係無くつれえもんだ。だから代役を立て、休ませた。だからおめえも今日は休みだ」

「いや、しかしながら・・・」

「まあまあ、偶には羽を伸ばさせてんだ。此処のところおめえと春吉はずっと働き詰めだしよ、気にすんじやねえ」

そう言う桔は聡士郎の肩を叩き、縁側を歩いて行ったのだった。

贈物・下

桔から休暇を言い渡された聡士郎は、取り敢えず何をしようかと悩みつつ、自宅へと帰った。

家へ帰ると衛兵隊用羽織から地味な長着と袴に着替え、流し台の近くに置いてある水瓶から湯飲みに水を注ぎ、飲み干した。そして家中を、きよろきよろと見渡し、一つ考えを思い浮かべる。

—そうか。椀の部屋に、何か名案が浮かぶものがあるやもしれぬ。今回改めて、椀が好きなものは将棋だという事が分かった。だが、椀は将棋以外にも趣味持っているかもしれない。そこで、椀の部屋へ入ることで何か発見があるかもしれないと、聡士郎は考えたのだ。

思い立ったが吉日。聡士郎はよっこいせと立ち上がると、廊下を歩み、椀の部屋の前まで足を運んだ。

しかし、実のところ、聡士郎は椀の部屋へと入ったことがなかった。夫婦になったとはいえ、多忙である二人は家にとどまることは少なく、仮に二人が話し合う場所は、主に居間と決まっている。故に初めて妻の部屋へ入るといふ緊張感から、聡士郎は目の前にある木の扉が、まるで開かずの間の扉と勘違いするほど大きく、固く見えた。そもそも、勝手に入るだけでも気が引けてしまい、要するに夫婦にも超えてはならない境界線だつてあるのだ。

しばらく扉を眺めていた聡士郎であったが、これでは椀を喜ばすことができないだろうと考えなおし、意を決すると重くらしい扉をゆつくりと開いた。

椀の部屋の中は真面目な性格上予想通りというべきか、散らかってはおらず小奇麗であった。箆筒に鏡、書物などが立てかけてある机に、シワなく畳まれた布団。ごくごく至って普通の、部屋というべきであろう。

そんな部屋の中を彩る数少ないものとして、箆筒の上に小さな刀掛けの様な台に二本の横笛が飾っており、部屋の片隅には将棋盤が置かれてあった。

聡士郎はとりあえず一回り櫛の部屋を眺めたあと、その将棋盤へと足を運び、手前でしゃがみこむとまじまじと見つめた。

将棋盤は所々すり減っており、良い言い方をすれば年季が入っているというべきであるが、それでもだいたい朽ちている。ヤニは剥げ落ち、マス目も擦れて、はつきりしていない。これを見ただけでも、櫛は相当将棋に打ち込んでいたことが理解できるだろう。

―やはり、これだな。

聡士郎は駒の入った木箱を開け、古びた駒を手に取りつつ、心のかでつぶやいた。

自分の気持ちを込めた物。つまり、自分で作れるものが良いだろう。となればすでに答えは出ており、後は材料と作り方を覚えれば良い。

明確な答えが見えた聡士郎は立ち上がると、ゆっくりと部屋の扉を閉め玄関へ向かい、草鞋を履いたのだった。

*

聡士郎は一度権現村から出ると、とある場所へと向かうことにした。

獣道から参拝道へ出てそこから麓まで下ると、麓には透き通った水が流れ落ちる玄武の沢がある。此処には多くの河童が住み、自然と人工物が織りなす独特の景観が広がっていた。

聡士郎は低い崖から川辺へと降り立つと、川岸に沿って登っていった。所々で河童たちが不思議そうに見ていると思いつつ、聡士郎はただ目的の地へと向かっていく。

暫く歩くと、大きな滝が見えてきた。使い方のよくわからない物が散乱しているが、不法投棄では無い。つまり、誰かが住んでいることは何となくわかるだろう。

聡士郎は辺りを見渡すと、大きく息を吸い、口を開いた。

「河城にとり！居たら返事をして頂きたい！」

玄武の沢に聡士郎の声が響き渡ると、暫くして滝壺付近の水が盛り上がり、しぶきを上げて何かが顔を出した。

「おや、珍しい客人だね？」

その正体は言わずと、河童である河城にとりであった。先程の声を聞き、水底にある住処から出てきたようだ。

「うむ、久しいな」

「椀の祝言以来だねえ。うまくやっているかい？」

水面で質問するにとりに、聡士郎は頷きながら言う。

「大事な。昨日は手料理を振舞ってくれた。とても美味であったぞ？」

「へえ、そうか。知ってるかい？椀はあなたの為に頑張って練習してるんだ。見た感じ、あなたが満足そうだから、椀も努力が報われてるんだねえ」

にとりは納得するように笑顔で言うと、川岸へと上がってきた。特殊な素材で出来ているらしい服の水を絞りつつ、聡士郎を見る。

「で、何か用なのかい？あいにく椀はここにはいないよ？」

「分かっておる。今頃椀は任で忙しいだろう。今回ここへ訪ねたのは、紛れもなくお主に用があつてのことだ」

その言葉にとりは一瞬動きが止まると、不思議そうな顔をした。

「え？あたし？」

「うむ。いやな、お主に頼みごとがあるのだ」

「へえー。あんたがこのあたしに頼みごとなんて、本当に珍しい事があつたもんだ。てつきりあんたとあたしは住む世界が違う人かと思つてたからさ」

にかつと子どもっぽく笑い、にとりは言う。口からそうは言うものの、内心は嬉しいようであった。

しかし、聡士郎はにとりの意味深な発言に首をかしげる。

「住む世界が違うとはどう言う事だ？お主が水の中に生きているからという事か？」

「いやいや、そんな当たり前の事を言っているんじゃないよ。あんたは剣に。あたしは機械に。そういう事を言っているんだ」

なるほどそういう事かと、聡士郎は納得し苦い顔となった。

「まあ、ワシはどうもカラクリという物は好きにはなれんが・・・利用する価値は断然あると思つておる。友にも、カラクリ・・・もとい銃

に長けている奴もおつてな。以前そこはかたなく説明を受け、まるで意味がわからなかったが・・・便利だということには分かった」

「へえ、あんたの友人面白いやつだね。この御時世に銃に興味を持つなんて・・・どんな奴だい？」

どうやらにとりはその友人に興味を持ったようで、目を輝かせて聡士郎に問う。しかし、聡士郎は顔を歪め、腕を組んだ。

「ワシと同じくしてこの世界を愛している男だ。とは言うもの、ワシはかれこれ一年半も里に顔を出してはおらんからな。今彼奴がどうしておるか知らん。安否の手紙をやりとりしている十手持ちが一人、北上直政からもとんと話は出ておらん故、もしや奴は何かしらの任により現在は連絡が取れぬやもしれぬ」

聡士郎の言葉に引っかけたのか、にとりは首をかしげた。

「え、任？つまり彼も十手持ちなのかい？」

「まあな。彼奴は十手術を学んではおらん故、十手は飾りに過ぎぬ。だが、力の証明である十手を持つだけの力は、十分に持っている。ワシは剣技の扱いに長けておつたが、奴もまた、銃の扱いに長けている奴であつた」

ほへえと感心しているにとりであつたが、本題を思い出したかのか「あ」と、言葉を漏らす。

「ごめんごめん、話が逸れちゃつたね。で、頼みつてなにさ？やっぱり何かしらの機械かい？」

「いや、そうではない。お主のその技術の一つ、伝授して頂きたい」

「え？機械を作るってこと？それとも尻子玉を・・・」

「違うわい。木材加工の技をだ。出来なくはないだろう？」

そつちねと、にとりは内心つまらなそうな顔を見ると、一つ頷いた。「分かつた。確かに出来なくはないからね。どうせ家を建てるとかそういう話ではないんだろう？」

「うむ。見た感じ簡単な物であるからな」

「ふむふむ。で、その物とは？」

腕を組みにとりは相槌を打ち、何処か意味深に口元をにやりと口元歪ませた。

「将棋盤とその駒だ。簡単であろう?」

その言葉にとりは、納得した反面、不思議そうな顔になる。

「あーそういう事ね。でもなんでさ?犬走家に将棋の一式はあるはずだろう?」

思わず不思議そうな表情で、にとりは問う。

にとりと権の付き合いはそれなりに長く、将棋を指す友でもある。普段は権がわざわざここまで足を運び指すので、にとりは犬走家までわざわざ行く事はないのだが、そんな権が将棋一式を持っていないとは思わず、疑問が浮かんだのだろう。

「うーむ。・・・これはくれぐれも内密にして欲しいのだが、よろしいか?」

その件に関して聡士郎は唸ると、事情を話すべくあらかじめにとりに釘を刺した。もともと、衛兵隊達には大半知られてしまった為に隠し通す意味は無いのかも知れないが、照れ隠し故の言葉であった。

にとりはそれを聞くと子供っぽくやんちゃな笑みを作り、親指を突き立てた。

「安心しな!河童は口が固いんだ!ナイショ話なら、漏らさないよ!」

河童は鬼や天狗と同じく、嘘や騙す事を嫌う。彼らは自尊心が高く、惨めな行為を嫌うからだ。勿論それすらも利用する利口な天狗もいるのだが、ごく稀である。

「そうか。あいわかった。では実を言うとな・・・」

聡士郎はにとりの言葉を信じると、贈物についての大まかな概要を説明したのであった。

?

暫く聡士郎は、にとりに贈物の事について話した。

話せば話す分だけ気恥ずかしい気分になったが、にとりはそれを嫌な顔をせず、むしろ微笑ましいような目で見ながら聞いており、聡士郎はさらに恥ずかしくなった。

しかし、全ての話を聡士郎はし終わると、にとりは頷く反面、微妙な表情となっていた。

「ふーんなるほどね」

にとりの表情は一向に変わらず、なんとも言えない表情を繕ったままである。聡士郎は何かおかしな事を言ったであろうかと不安な気持ちになる。

「どうであろうか？ 権も喜んでくれるとは思うのだが」

「うーん」

唸り声を上げると、にとりは再び表情を変え、呆れた様子で口を開いた。

「なあ・・・一応聞くけどさ、あんたって本当に剣のみにしか打ち込んでいなかったわけ？」

「いかにも。あ、多少子供をあやした事はあるな。だが、殆どは剣のみであつたな」

なぜそんな事を聞くのだろうかと戸惑いつつも、聡士郎は返事を返す。だが、それを聞いたにとりは、さらにため息をついた。

「だろうね・・・。まあ権はあんたから貰って喜ぶとは思うよ。将棋一式。でもさ、本当に女性がそれを贈られて喜ぶと思うわけ？」

さも違うよねと言いたげなにとりであるが、聡士郎はいまいちピンとこなかった。

権は将棋に打ち込んでおり、要するにそれに見合うものを送れば喜んでくれるのではないだろうか。ひどく傷んだ将棋盤であつたゆえに、内心いい思いもしていないはずであるが、おそらくは金銭的にも遠慮しているのだろうと思つていたので。つまり、聡士郎に女心を分かれというのは無理であつた。

「いや、それは分からぬが・・・将棋にあれだけ熱を注いでおるしな」「もー！ あんたはわかつてないなあ！」

そして案の定、女心に対して無頓着である聡士郎にしびれを切らしたのか、にとりは急に大声を出した。聡士郎は唐突に叫んだにとりに、思わず驚く。

「権は良い子だから、それでも凄く喜ぶとは思うよ！ だけどき、女性らしい物の方がきつと喜ぶんだよ！ 知ってるだろう？ あの子は家柄とか使命感とかで、お洒落とか全く興味を持たんかったんだよ！ だから化粧道具とかも最低限の物しか持つてないし、恥ずかしがり屋だから

女性らしい粧し物をしないんだ！そんな権に将棋一式って、もう少し気を利かせたらどうだい！」

指を差し熱弁するにとりに、聡士郎は困り果てた。気を利かせたつもりで将棋という案が出たのだが、それを否定されてしまうと何が良いのかわからなくなる。いわゆるセンスというものに自信のない聡士郎にとって、権が心底喜びそうな粧し道具など、とんと思いつかなかったからだ。

にとりは呆氣に取られていた聡士郎に気づくと、恥ずかしそうに一つ咳払いをした。

「ま、まあ。あたしはあくまでも他人だよ。あんたが本当に権の事を考えて将棋一式でいいと思うなら、それで良いと思う。けど、権は妻となつて記念すべき一年目なんだし、もつと意味合いが深い物をあげた方が言いと思うんだ。それにあんたが渡した粧し物なら、権も喜んで着けると思うしさ」

そう言われて初めて、聡士郎は納得するように頷いた。「確かに粧した権も見てみたいな。それにワシが贈つたものであるならば、尚嬉しいかもしれない」

自分の上げたものを大切にし、肌身離さず持っているのは、贈つた者にとつては喜ばしい事であるだろう。そう考えると聡士郎は、次第に将棋盤よりも粧し物の方が良いと感じてきた。

「では、何を贈れば良いのだろうか？」

ともかく何か良い案を貰おうと、聡士郎はにとりへと聞いてみる。これまで聡士郎は粧し物などまるで興味もなく、触れたことすら指で数える程度であつたのだ。

そもそも男が粧し物に興味を示す事は可笑しいが、贈物としては無難である。特に、惚れた女に贈る物は、特別な感情を込めるだろう。聡士郎は権と出逢うまでそのような事はなかつた為、あまりにも無知であつた。つまり、如何しても人に頼ってしまうのだ。

そして案の定、にとりは呆れた顔をして、溜息をついた。

「それを考えるのが、夫の勤めじゃないのかよ。それにあたしが案を出しちやったら、あんたは結果的にそれでいいとか思いそうだしね」

そういうと、にとりは「まあがんばれ」と言い残し、滝壺へと飛び込んで行ってしまった。

聡士郎はそれを見送ると、再び腕を組んで考え込み、来た道に戻ったのだった。

*

さて、権現村へと戻った聡士郎であったが、自宅へは戻らず、中央通りを歩いていった。

既に日は落ち始め、走り回る子供の影は大きくなり、村内を朱色に染める。居酒屋を営む者は暖簾を上げると灯籠に火をつけ、夜の業務へと準備をし始めていた。

「いつみても、趣を感じる村だ」

近代化をし始めている人里は、次第にこのような風景が消えつつある。もちろんまったくくないという訳ではないのだが、建物や身に着けている物がハイカラ化し始めているのは、否めないことである。その分権現村は、いまだ土と木のおいを感じることでできる古き良き風景を残しているため、聡士郎にとっては何処か懐かしさを感じることができた。

しばらく聡士郎はそんな権現村の趣を楽しみつつ歩いていると、横目でふと、とある看板が目に入った。力強く崩された字で「蜻蛉堂」と書かれてあり、入り口の端には数多くの装飾品が置いてあった。

「蜻蛉堂…そうか。権現村にも装飾品を売る店があったのか」

聡士郎が言うとおおり、権現村にも装飾品を売る店は数件あった。ここ蜻蛉堂は中央通りから少し離れた位置にあり、おしろいや装飾品と一緒に置いているはない。つまり装飾品専門店であり、ゆえにこの店を利用する客は、それなりに通な女天狗ばかりであった。

また、基本的に女性向けの装飾品ばかりを売っているこの蜻蛉堂は、男の天狗が利用することなどまず無いと言っても良かった。そもそも天狗には生物学的性を重視しており、男は男らしく、また女は女らしく振舞わなければならない。つまり男性が粧し物に興味を持つなど、その手の職を生業にしている者以外は、非常に恥ずかしいこと

であるのだ。ちなみに天狗で言う女らしさは人間と大きく違い、気高く誇りを重視し、可憐に生きることである。

もちろん、聡士郎はそのことを知っているが、椀へ渡す贈り物の案が湧き上がるのではないかと思ひ立つた。もともと人間である聡士郎は、そんな天狗の常識など気にもしない。目的はただ椀に喜んで欲しいだけであり、最高の贈り物を彼女に渡したい。それだけを考えていた。

ゆえに聡士郎は迷うことなく中央通りを左にそれると、そのまま蜻蛉堂へと入って行った。店の中は黄昏時であるため薄暗く見通しが悪いが、わずかに入る夕暮れの日差しに、装飾品がきらびやかに輝いている。

「いらっしやい」

物珍しそうに聡士郎は装飾品を見渡していると、どこからか女性の声が聞こえてきた。

「ん、どこにおるのだ？」

声の主を辿ろうと聡士郎は奥の方を見渡すが、人影はなかった——かに見えたが、奥へと続く扉の隣にある階段から、細身の鴉天狗が降りてきた。おそらく上で何かしらの作業をやっていたところ、客が来たことに感付き、降りてきたのだろう。

「お主が店主か？」

「へえ。あたいが店主です。名は御田秀美」

遜った言い方であるが、その声付きは間違いなく店主の風格を現している。聡士郎は腕を組むと、納得したように御田秀美と名乗った人物を見定めた。

一見、華奢のように見える体つきであるが、灰色の薄い生地 of 服からは筋肉のふくらみが見える。つまりは根っからの職人体系であり、繊細差を必要とする体つきとなったのだ。

また店主も、聡士郎を一回り見ると、どこか納得したように頷いた。

「ああ、あなたですか。噂はよく耳にしております」

「む、ワシは噂されるようなことをした覚えはないのだが」

不思議そうに言う聡士郎が面白かったのか、店主は失笑すると、近

くにある座布団へと腰かけた。

「ふふっ。自覚が無いんですかい？ 貴方は人間。しばらくは噂されとおもいやす」

「ま、そうか」

二人はそういうと、笑い声をこぼす。

「それで、何の用ですかい？ この店はご覧のとおり、装飾品や彫刻品を兼ね備えている店。貴方のようなお侍さんが来るようなところではないはず。冷やかしですかい？」

煙管盆に手をかけた秀美は、火をつけて煙管を吹かす準備をしつつ擲揄した。無理もない、聡士郎は男であり、客とは思えないだろう。

「まあ、そうなってしまふかもしれぬな。すこし探し物があって、ここへ参った」

そのことを踏まえ、聡士郎はあえて冷やかしについて否定をしなかった。確かに、まだここで買うと決まったわけではないからだ。

しかし秀美は聡士郎の悩みについて興味を持ったのか、煙を吸引し、吐きながら言う。

「へえ、ひよつとすると女子の為ですかい？ あんたは天狗たちに好かれそうだからねえ」

「うーむ。それこそお主の間違いだと思ふが……。まあ女子ではなく、妻だ。何か良い案が浮かばぬかと、この店に立ち寄った」

「はは、なるほどねえ。つてことは舞姫様への贈り物かい」

再び吸引した煙を吹かし秀美はけたけたと笑うと、煙草盆にバチリと煙管を叩き付け、灰を落とした。

「ま、大したもんはないでしょうが、見てくだせえ。あたいが作ったもんしかないけどね」

「ふむ、手作りと言う奴か」

笑いながら言う秀美に言葉を返すと、聡士郎は木棚に置いてある商品を何気なく手に取り、まじまじと見つめ始めた。

一つは一般的に見かけるであろう、硝子や翡翠などを着けた弾簪。金属製のビラを飾りにつけたチリカンや、平たい円状の飾りがついた平打簪など様々ある。他にも植物を象った根付や、後ろに細かく彫刻

が施された手鏡などがあり、どれも天狗好みに工夫がされて、品ぞろえは豊富であった。値段は少々高めに設定してあるが、手作りであれば仕方のないことであろう。

「どれも良い出来だ。師は親父か？」

感心した様子で、物珍しそうに見る聡士郎は思わず問う。天狗がどのように職人業を行うのは、家系的理由があるからだ。

だが聡士郎の予想は外れ、秀美は笑みを作りながら首を横に振った。

「いいや。あたいの師は、人間でさあ」

「なに、人間？」

「ええ、そうです」

驚いた表情をしている聡士郎が面白いのか、秀美は煙管に葉を詰めながら、話を続ける。

「あたいは人間の下で、修行を積んだのでさあ。人里に住んでいた、飾り職人の秀吉爺さんをご存じで？」

「いや、すまん。ワシは職人連中とかかわりはない。唯一あるのは、加治屋の岩男くらいだ」

「そうですかい」

秀美は聡士郎の言葉にそっけなく返事をすると、煙管に火をつけた。鼻につく煙草独特の良い香りが、店の中に充満する。

しばらく間が開いたあと、秀美は煙を吐いてつぶやくように語りだした。

「秀吉じいさんは、御田秀吉という人里の飾り職人でさあ。なんでも爺さんの先祖は外の世界にある江戸と言う大きな町に、住んでいたと聞きます」

「江戸」

驚いた表情を浮かべ、聡士郎は復唱する。

江戸とは言わずと、外の世界で最も栄えていた街といっても過言ではない。数百年前に外の世界を統治していた「將軍」と呼ばれる人物が住む街でもあり、多くの人間が住んでいたのだという。現在は名が変わっているというが、そのあたりの事は詳しく知らなかった。

「へえ、そうです。厳しく頑固な方でしたが、あたいはあの人のおかげで助けられた」

「しかし、人間の師か……。お主もなかなか、物好きだな」

そこまで深い意味を込めずつぶやいた聡士郎であったが、その言葉に秀美は顔をしかめた。

「…物好きだろうと、あたいはあの人の魂を受け継ぎました。たとえ人間から技を伝授されたとしても、あたいの作る品はちやちな品ではないことを、人間であるあなたには、わかっていただきてえ」

力強く、そして憤りを込めて言う秀美に、聡士郎は自分の発言を悔いた。確かに天狗が人間のもので修業を積むなど、本来考えにくいことである。つまり彼女は何かしら原因でその秀吉と呼ばれる人物に弟子入りし、今に至るのだろう。加えて天狗でありながら、秀吉と呼ばれる男の魂を継いだと言えるのは、その男がそれだけ彼女に自分の魂を注いだことも理解できる。

「…分かった。いらぬことを言ったな」

「いいんでさあ。天狗はもちろん、誰もがきつと思うことです。それでも、わかっていただけなら、あたいは満足なんですわ」

へへっと笑みをこぼして言う秀美をじっと見て、聡士郎は一つ考えが浮かび上がった。

—この者ならば、自分の求める答えを導いてくれるやもしれぬ。

「なんですかい？そんなに見つめられちゃうと、照れますよ」

困ったような表情をする秀美に、聡士郎は「ああ、すまぬ」と詫びを入れる。無意識に、彼女を見つめていたようで、若干恥ずかしさがこみ上げてきたのだ。

それからしばらく視線を逸らしていた聡士郎であったが、意を決すると再び彼女を見つめ、口を開いた。

「…秀美殿。お主の腕を見込み、相談したいことがあるのだが」

「へえ。なんですかい？」

笑顔を作り気前よく言葉を返した秀美に、聡士郎は事情を話したのだった。

*

数日後、ついにその日がやってきた。

とは言うもの、あくまでも二人にとつての特別な日であり、ごく普通の天狗たちには関係がないことである。故に聡士郎と権の二人は、何時もどおり朝の鍛錬を行い、朝食を取り、仕事へと向かった。そして。

「今日のお酒を持ってきましたよ」

権は台所から、これまた何時もどおり酒を運んでくると、縁側で月を眺め愛でている聡士郎へと声を掛けた。

その声に聡士郎は振り返り、差し出された御猪口を受け取った。そして、隣へと座った権から、酒を酌まれる。

お猪口に酌まれた酒を聡士郎はくいつと一気に飲むと、息を漏らし、て両手を後ろへと付けた。権はそれを見て、微笑む。

「いつ見ても、ここから見る月は美しい」

ここ犬走家から見ることのできる月は、満点に光を照らす。月の光は朝昼に指す太陽の日差しのような激しいものではなく、優しく包み込まれるような光であり、二人にとつて心地よいものであった。

また、聡士郎にとつて最も月夜が好きといえる理由としては。

「そうですね…。お父様やお母様がまだ生きていた頃…私がまだ幼い頃にも、ここから見るお月様が大好きでした」

聡士郎と同じく、月を仰いでいる権は、懐かしむようにつぶやいた。月光に照らされた権の白髪は、取り込むように優しい光をまとっており、まるで白金のようであろうか。その輝きは権を一層可憐に引き立てるのだ。また日に焼けてもなお白さを保ち続ける犬走家特有らしい肌の色は、更にしなやかさを倍増させ、見るものすべてを魅了し、取り混んでしまうであろう。

そう。月夜はまさしく、権のこのような姿を独り占めすることができるのだ。故に聡士郎は、月夜が内心待ち遠しく思っていた。

「ああ、そうか。今日で、この月を見て一年を迎えるのか」

今なら言えると、聡士郎は何気なくつぶやいた。

いくら武に長けている聡士郎出会っても、キザなセリフを言えるような人間ではないことは、十分わかるであろう。何事も、聡士郎は機会を見図る。

「そうですよ。今日で、一年を迎えました。ふふっ、忘れているかと思いました」

優しく、まるで聖母の様な笑顔を作る椀に、聡士郎は顔を赤らめ、たまらず顔を逸らしてしまう。

「ふ、ふん。ワシだってそこまで無頓着な男ではないわい」

「ええ？そうでしょうか？」

「ぬう、こやつめ！酷いではないか」

焦るように言う聡士郎に、椀は続けてころころと笑う。

それからしばらく間が開くと、聡士郎はおもむろに立ち上がった。

「あれ？もうお休みですか？」

少々残念そうに言う椀に、聡士郎は首を振った。

「いや、違う」

そう言い残すと、聡士郎は自室へと向かう。そして、直ぐに木箱を抱え、縁側へと戻ってくる。

不思議そうに木箱を眺める椀の目線を感じつつ、聡士郎は近くの箆筒から煙草盆を取り出して、縁側へと座った。

「それは？」

懐から煙管と取り出して葉を詰めている聡士郎に、椀は声を掛けた。目線は木箱にあるようで、どうやら気になるらしい。

聡士郎はうまく葉を詰めれず、とりあえず煙草盆に煙管を立てかけると、改まって背筋を伸ばして姿勢を直す。

「…今年で一年。そう、一年だ。故にワシは、感謝を伝えなければならぬと心に決めておった」

「そ、そんな感謝なんて…感謝する方は私で…」

「いやいや。感謝する方はワシであろう。そもそも椀がいなければ、ワシは死んでいたのだからな」

決死の一撃を迅兵衛叩きこまれたあの日。確かに聡士郎は死んでもおかしくはなかっただろう。たとえ靈魂修業を受けていて半

人半霊に慣れたとしても、生に執着する意識がなければ、死んでしま
う。つまりこの世で再び生を勝ち取ることできた理由は、まさに権
のおかげとも言えるのだ。

だからこそ、その感謝の意味も込めての贈物をする必要があったの
である。

しかし、権はまだ食い下がれない思いがあった。

「私だって、あなたに感謝しなければならないことは山ほど…山ほど
あるんです！ですからっ！」

そう言う権も懐から、紫色に染められた布に包まれた何かを取り
出した。おそらくその丁重に包まれているものは、聡士郎に贈る物な
のだろう。

「私も、貴方に感謝しなければなりません。舞姫などやりたくな
かった私の決意を固めていただけただけなこと…。私の過去をすべて受
け止めてくれたことも…。そうすべてっ！すべてを私は！」

身を乗り出して熱くなり始めた権に、聡士郎は静止させるように平
手を向けた。

「…お主もワシも、どうやら感謝すべき事は山ほどあるのだな。それ
はよくわかった。だが、まずワシからでも構わぬか？…男を立たせて
欲しい」

権は聡士郎の頼みにししぶ承諾すると、冷静になるように深呼吸
をして、元の場所へと座り直した。

「では、権よ。感謝の意を込めて、これをお主に贈る」

そう言うと、聡士郎は木箱を権の前へとすべらせるように置く。

権は木箱を見つめて少し間を開けると、おもむろに手を伸ばし、木
箱を開いた。

「えっ…これ」

消えてしまいそうな声で、箱の中身を見た権はつぶやいた。

箱の中身は、笛であった。しつとりとした黒鉄に、所々に金の筋で
かたどられた紅葉が装飾されている。種類は囃子に使う篠笛であり、
大きさは一尺三寸ほど。通常の篠笛と比べ、小さい部類に入るだろ
う。また手荷物と、木製のような軽いものではなく、適度な重みを感じ

じることができ。つまり、鉄笛であった。

なぜ笛を贈ったのだろうか。権は疑問を含んだ表情で聡士郎を見ると、聡士郎は苦い笑いをこぼした。

「ワシが贈ると決めたとき。本当にお主に何を送ればよいのか迷いに迷った。多くの人々から案を貰い、時に将棋盤であったり、時に粧し物にしようかとも思った。だが、それだけでは何かが足りぬ。そう思ったのだ。そんな時、ワシの頭に一つの考えが浮かんだのだ」

静かに頷く権を見て、聡士郎は話を進める。

「…それは、お主自身を魅せるものが、良いのではないだろうかとな。それも、様々な角度から見てだ」

「様々な…角度ですか？」

意味が把握できないのか、権は不思議そうに首を傾げる。聡士郎はそんな権を見ると、補足をした。

「うむ。一つは、身に付けている時。いわゆる一種の粧し物にもなり、凝った装飾が施されているのはそれが理由だ。その笛は小さい篠笛であるゆえに、持ち運んでも嵩張らぬはずで、ワシが身に付けていた十手よりもずっと短いからな。」

二つ目は、その笛自体の真価を發揮するとき。すなわち、笛を奏でる際だ。何を贈ろうと迷っていた際、正直に言うがお主の部屋にこっそり入ってな。その際、箆笥の上に普通の篠笛を見つけた。その時はどうとも思わなかったのだが、後に先に述べた思いを浮かべる際の鍵となってくれた。

そして最後に、戦う際。鉄笛は武器となることは、お主もわかっているはずだ。あくまで咄嗟の判断に使うものであるが、十手と同じく十分に武器となる。もしワシがお主の近くにおらず、ましてや武器を持っていない場合。最後の手段として身を守る強い味方となってくれる…。ワシはそう信じている」

すべてを語りきった聡士郎は一つ咳払いをすると、どうであろうかと心配そうに権を見た。

おそらくこの結論を出すまでに聡士郎は様々な苦悩があったのだろうと、権は容易に想像がついた。ただ女性に贈れば喜ばれるだろう

と思われる花や簪でもなければ、自分の趣味であり熱意を注いでいる将棋関連のものでもなく、様々な観点から考えた贈物。それだけに予想できず、椀はどう表現すれば良いのか少々迷った。

だが、きつと聡士郎はうまく返すことなど求めていないだろう。ただ、自分の心にある気持ちそのものを表に出せば、喜んでくれる。椀はそう思うと、微笑みを浮かべた。

「嬉しいです、本当に…。岩長様に誓って言えるほど、私の心は満たされています。これだけ考えて頂いて…私、やっぱり貴方と一緒にいることができてよかったです…。本当に、本当に感謝したいです…」

椀は瞳を閉じて、胸に手を当てながら言った。

その言葉が本心であることを聡士郎は察すると、椀を思わず抱きしめたくなった。だが、それを抑え、グツと意識をとどめる。

まだ椀の番が、終わっていないからだ。

椀はしばらく聡士郎の想いに浸っていたのか、目を閉じて黙っていたが、眼を開くと同時に口を開いた。

「では、私の番ですね」

そう言うと椀は、懐から取り出した何を包んだ布をゆつくりと広げて行き、徐々にその正体を明らかにしていった。その手つきは丁寧で、細い指先に聡士郎は思わず見惚れてしまう。

包まれた布の中にあつたものは、金箔が散りばめられた漆塗りの扇子であった。大きさは扇子にしては少々大きい八寸ほどであるが、それ以外は至って普通である。

しかし、聡士郎は手に取ると、驚きの声を上げた。

「これは…鉄扇か？」

ずしりとまでは行かないが、適度に重さを感じ、鉄特有の質感を感じる。扇を広げていくと、扇部には黒地の和紙に赤と黄色の紅葉が風に舞うように描かれており、その風を思わせるように波打つような金箔が散りばめられている。また、扇子を形成している中骨も鉄であることから、それなりの強度を誇っていた。

「私も、実は同じようなことを考えていました。貴方に感謝の思いを込めて、何を贈ればよいのだろうと。そして考えた結果、この鉄扇で

した。立派な武器となりますし、涼むこともできる。そして何より、私自身を表したその『紅葉』を、ずっと持っていて欲しい…。そう思
い、鉄扇にしました」

紅葉が描かれている理由は、たとえ自身は離れていても、心は聡士郎と離れることのない、いわゆる夫婦としての絆を表すためであった。それだけに権は扇子に込めた思いの強さを感じ、聡士郎は大事そうに鉄扇を眺める。

「私からは、以上です。その…お気に召したでしょうか…？」

心配そうに言う権を見て、ついに我慢できなくなった聡士郎は、権をそっと抱きしめた。

「当たり前ではないか。お主の想いも、しかと伝わっておる。…ありがとう」

言葉をつまらせず、すらりと本心を語れた聡士郎は自分に驚きつつも、権の匂いを感じる。そして権も聡士郎の匂いを感じ、同じく抱きしめ合ったのだった。